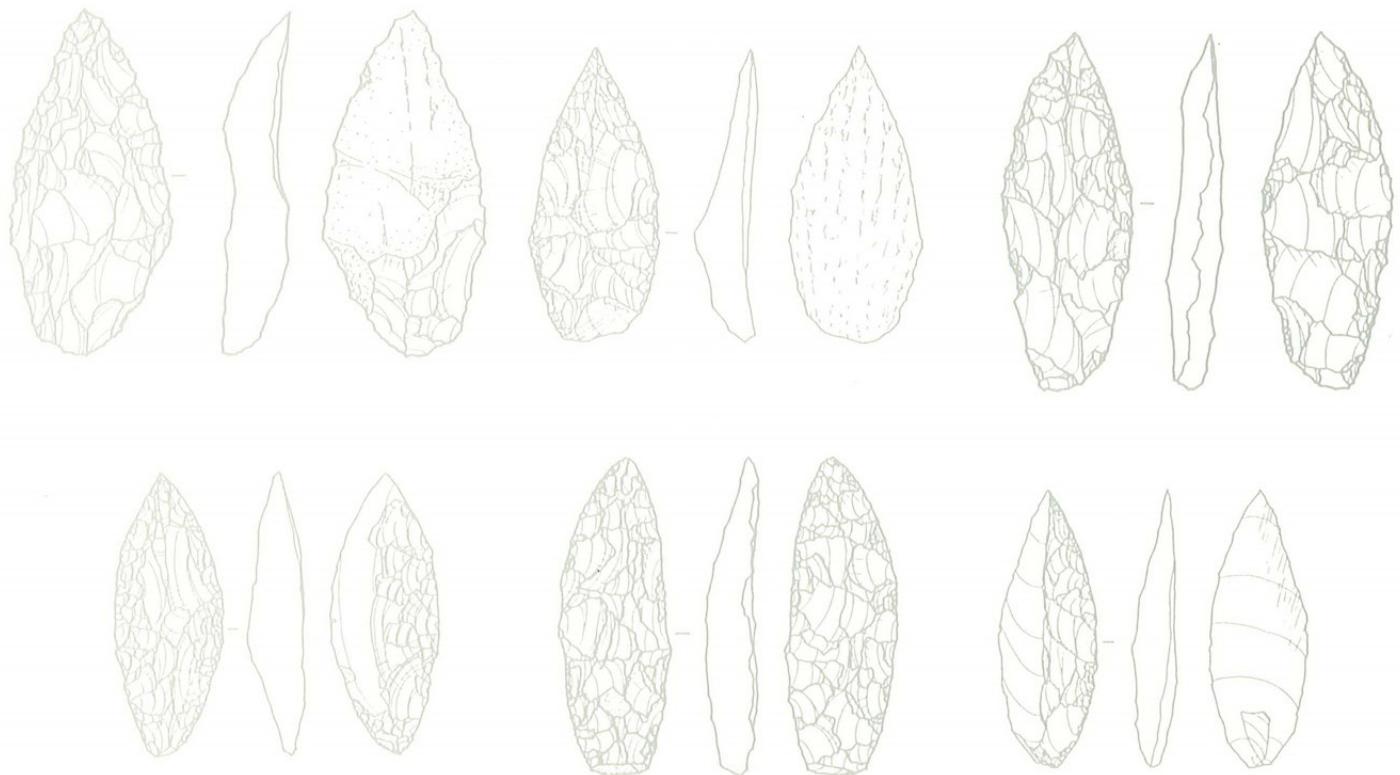




鷹山遺跡群Ⅱ



1991 長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団

黒耀石原産地遺跡

鷹山遺跡群 II

——1989年度の鷹山I遺跡S地点の発掘調査報告書——

長野県長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団
(1991年7月)

序 文

鷹山遺跡群は、町の先覚のお一人である児玉司農武翁の発見以来、日本を代表する黒耀石原産地遺跡群として、広く日本考古学界から注目されつづけています。昨年刊行した『鷹山遺跡群Ⅰ』で明らかのように、鷹山地区の一帯には、黒耀石の産地で知られる星糞峠の眼下、先土器時代の11の遺跡と5つの散布地が、鷹山川流域のかつての湿地を取り囲むように残されています。その遺跡と散布地は、ほぼ同じ時期に残されたもので、どこもが石器を多量に製作した痕跡をとどめています。鷹山遺跡群は、実に一万年以上も昔に石器を大量に生産し各地へと供給した、歴史的な意味をもつムラの跡であったのです。

その地表下に静かに眠る私たちの町の最古のムラと同じ場所に、現在もまた集落が営まれています。この集落も、標高1300mをこす高冷地という厳しい環境を克服しながら、終戦直後に一歩一歩土地を切り開いてきたという、開拓の歴史をもっています。この過去と現在の歴史をふまえて、いま私たちは未来に向けて、鷹山遺跡群の保存・活用をはかりながら、町の活性化のための鷹山地区の地域づくりを真剣に構想しています。

そのような新しい町づくりをすすめるなかで、このたび住宅の新築にともない、第Ⅰ遺跡の一部を緊急に調査する必要性が生じました。私たちは、第Ⅰ遺跡が鷹山遺跡群の中心遺跡であるという重要性に鑑み、その保存をはかるため、宅造予定地の変更をふくむ、あらゆる方策を探りました。そして、熟慮した結果、第Ⅰ遺跡から、石器を生産したムラの一部を実際に掘り起こし、それを面前に広がる旧湿地とともに、鷹山遺跡群全体を整備・保存するための糧としたいとの方針をかため、調査の実施計画をたてました。

幸い、長野県教育委員会、明治大学考古学研究室をはじめとする皆様のご理解とご指導をえて、この宅地造成にともなう調査は順調におこなわれ、日本でも例のない石器生産遺跡の実態をとらえることができました。

ここに、これらの調査結果の報告書『鷹山遺跡群Ⅱ』がなるに当たって、戸沢充則、安蒜政雄先生をはじめ、明治大学考古学研究室の院生、学生と卒業生の諸氏、そして種々ご指導とご援助を賜った文化庁記念物課、長野県教育委員会文化課、さらに調査にご協力いただいた研究者や地元鷹山地区の皆さんに、心からの感謝の意を表します。

今後は、この報告書にもられた研究の成果を生かして、私たちの町の最古のムラであり日本有数の石器生産遺跡群でもある、鷹山遺跡遺跡群の学術的価値をさらに高め、伴せて地域の発展により一層の努力を重ねるものであります。

1991年7月

長野県長門町町長 北澤 貞利

鷹山遺跡群調査参加者

1989年度の鷹山Ⅰ遺跡S地点の発掘調査

安蒜政雄（調査団長）戸沢充則（顧問）小菅将夫（調査主任）
矢島国雄 勅使河原彰 氏家敏之 萩谷千明 浦志真孝 菊池信吾 谷 和隆
諸星良一 島田和高 高倉 純 大竹幸恵

1990年度の鷹山Ⅰ遺跡W地点の発掘調査

戸沢充則（調査団長）萩谷千明（調査主任）
氏家敏之 島田和高 高倉 純 大竹幸恵

事務局担当

中原定吉 藤田欣治 関 喜男 原田恵召 竹重節子 大竹幸恵（以上長門町
教育委員会）

調査指導

岡村道雄（文化庁）児玉卓文（長野県教育委員会）大竹憲昭（長野県埋蔵文化
財センター）須藤隆司（佐久市教育委員会）堤 隆（御代田町教育委員会）
高見俊樹（諏訪市教育委員会）中村由克（野尻湖博物館）宮坂 清（下諏訪町
教育委員会）長野県考古学会旧石器部会

調査補助

大西由太郎 大西三代子 加藤久衛 河合すず 黒沢きよ 児玉 修
高橋兼太郎 龍野博文 吉畑三郎

遺跡名の略称と変更等について

- (1) 鷹山遺跡群では現在までに11個所の遺跡の存在が明らかとなっている。その個々の遺
跡の正式名称は「鷹山遺跡群第Ⅰ遺跡」……「鷹山遺跡群第XI遺跡」であるが、本報
告書では「鷹山Ⅰ遺跡」という略称を用いて記述をおこなった。
- (2) すでに発表した『鷹山遺跡群Ⅰ』で、「第Ⅰ遺跡第1ブロック」の名称で報告した、
1984年度の発掘区（および若干のその周辺区域）については、「鷹山Ⅰ遺跡M地点」と
呼称を変更した。それとともに先の報告で「鷹山Ⅰ型刃器技法」と仮称した技術上の用
語も、「鷹山M型刃器技法」と改称した。
- (3) 第Ⅳ章は原則的に執筆者個人の記述を尊重したため、各節の用語や内容に多少の相違
がある。

鷹山遺跡群 II

目 次

序 文

I 鷹山遺跡群と鷹山 I 遺跡 S 地点の調査

- 1 鷹山遺跡群の特徴 (5)
- 2 鷹山 I 遺跡 S 地点の調査と研究の目標 (8)
- 3 発掘調査と研究の経過およびその方法 (10)

II 鷹山 I 遺跡 S 地点の発掘調査の成果

- 1 S 地点の位置と文化層 (14)
- 2 S 地点の出土石器群とその特徴 (21)
- 3 S 地点における遺物の分布と遺跡の構成 (43)
- 4 縄文時代以降の遺構 (50)
- 5 鷹山 I 遺跡 W 地点の調査 (52)

III 鷹山 I 遺跡 S 地点における石器製作技術

- 1 石器製作技術にかかわる資料 (56)
- 2 槍先形尖頭器の製作工程と技術的特徴 (75)
- 3 S 地点の石器製作技術体系 (91)

IV 鷹山遺跡群における黒耀石製石器の生産とその背景

- 1 鷹山 I 遺跡 M 地点と S 地点の石器生産 (102)
- 2 鷹山 I 遺跡 S 地点の槍先形尖頭器群の位置 (109)
- 3 鷹山 I 遺跡 S 地点の石器群と槍先形尖頭器の発生をめぐって (114)
- 4 黒耀石原産地の遺跡群の性格 (118)
- 5 鷹山遺跡群とその周辺をめぐる課題 (127)

- 引用参考文献 (130)
- 英文要旨 (132)



写真1 鷹山I遺跡の位置

I 鷹山遺跡群と鷹山Ⅰ遺跡S地点の調査

1 鷹山遺跡群の特徴

鷹山遺跡群の発見と調査

長野県小県郡長門町鷹山。北を高松山と虫倉山の急崖、南側を大笠山の緩斜面でかこまれた、鷹山川両岸の一帯には、幅約500m、長さ約1.5kmにわたって、盆地状の平坦な地形がひろがる。その高松山と虫倉山の鞍部には、黒耀石の原産地で知られる星糞峠がある。

1955年、この鷹山の一角から、児玉司農武氏によって、先土器時代の遺跡が発見された。これを契機として、黒耀石原産地の直下、大量に石器を出土する遺跡が群在している、鷹山遺跡群についての調査と研究の第一歩が踏みだされたのである。いま今日までの、その後の調査と研究の歩みをふりかえってみると、前後2つの段階に分かれる。

前半は、尖石考古館を中心として、1960年代におこなわれた調査と研究の段階である。この段階では、ナイフ形石器・槍先形尖頭器・細石器が、どんな組み合せでどの地層から出土するのかに、大きな関心がはらわれた。当時の学界の動向とも軌を一にした、個々の遺跡に視点をすえた、示準石器を中心とする編年研究の段階である。

だが、鷹山遺跡群には、果して、いくつの遺跡があるのか。また、各遺跡の規模と性格は、みな同じか。さらに、石器製作の原料となった黒耀石は、いったい、どこから採取されたのか。多くの課題が残った。

1980年代の半ば、鷹山遺跡群についての調査と研究は、後半の段階にはいる。すなわち、遺跡のまとまりを、歴史的な景観とともに、群としてとらえようとする、新しい視点にたった調査と研究の開始である。

その出発点となったのが、1986年と翌1987年におこなわれた、詳細な遺跡群の分布調査であった。われわれは、①遺跡の分布と範囲の確認、②黒耀石の産出地と採取地の確定、③古地形の復原という、3つの目的をかけて、この分布調査を実施した。その結果、鷹山遺跡群の全体像を解明するうえで不可欠な、以下のような基礎資料をえることができたのである（鷹山遺跡群調査団 1989）。

黒耀石の産状と古地形

鷹山地区にひろがる盆地状の地形は、どのような経緯で形成されたのか。地質調査によると、鷹山川両岸の地層の堆積は、きわめて対照的な特徴を示している。

まず、緩斜面が広がる大笠山側では、ローム層の堆積が厚いのに比べ、星糞峠側では、急傾斜のためローム層の堆積は薄い。つぎに、ローム層下の礫層は、大笠山側が、徐々におし流された流下堆積物と考えられるのに対し、星糞峠側は、急速に崩落した崖錐性堆積物とみられる。

一方、鷹山川が流れる低地の一帯は、今日でも湿り気をおび、かつては湿地であった。この湿地は、虫倉山側の山体の崩落が鷹山川を堰き止めてできたとみられ、中心部で、長さ700m、幅200mの大きさをもつ。

ところで、黒耀石については、これまで星糞峠とその周辺に散布する、質の悪い原石の存在が知られていたにすぎない。われわれは、分布調査をとおして、さらに新しい知見をえたとともに、鷹山地区における黒耀石の産出と分布に、3つの異なる在り方を確認することができた。

一つは、星糞峠の一円に分布する黒耀石で、ズ

りと呼ばれる小礫を主体とするもの。この一群は、星糞峠にとどまらず、幅数百mの帶となって、鷹山川にまでつづき、一部は対岸にもおよぶ。もう一つは、星糞峠に点々とする浅いくぼみにぎっしりと埋れた、破碎されたような状態の黒耀石の一
群である。ズリとは異なり、礫化せず、鮮明な割
れ口をもつ。そして、いま一つは、湿地帯を中心
に、鷹山川の河床礫層およびその下位の粘土層中
にみとめられる、良質な黒耀石の礫塊である。拳
大を主として、掌大や人頭大のものがある。

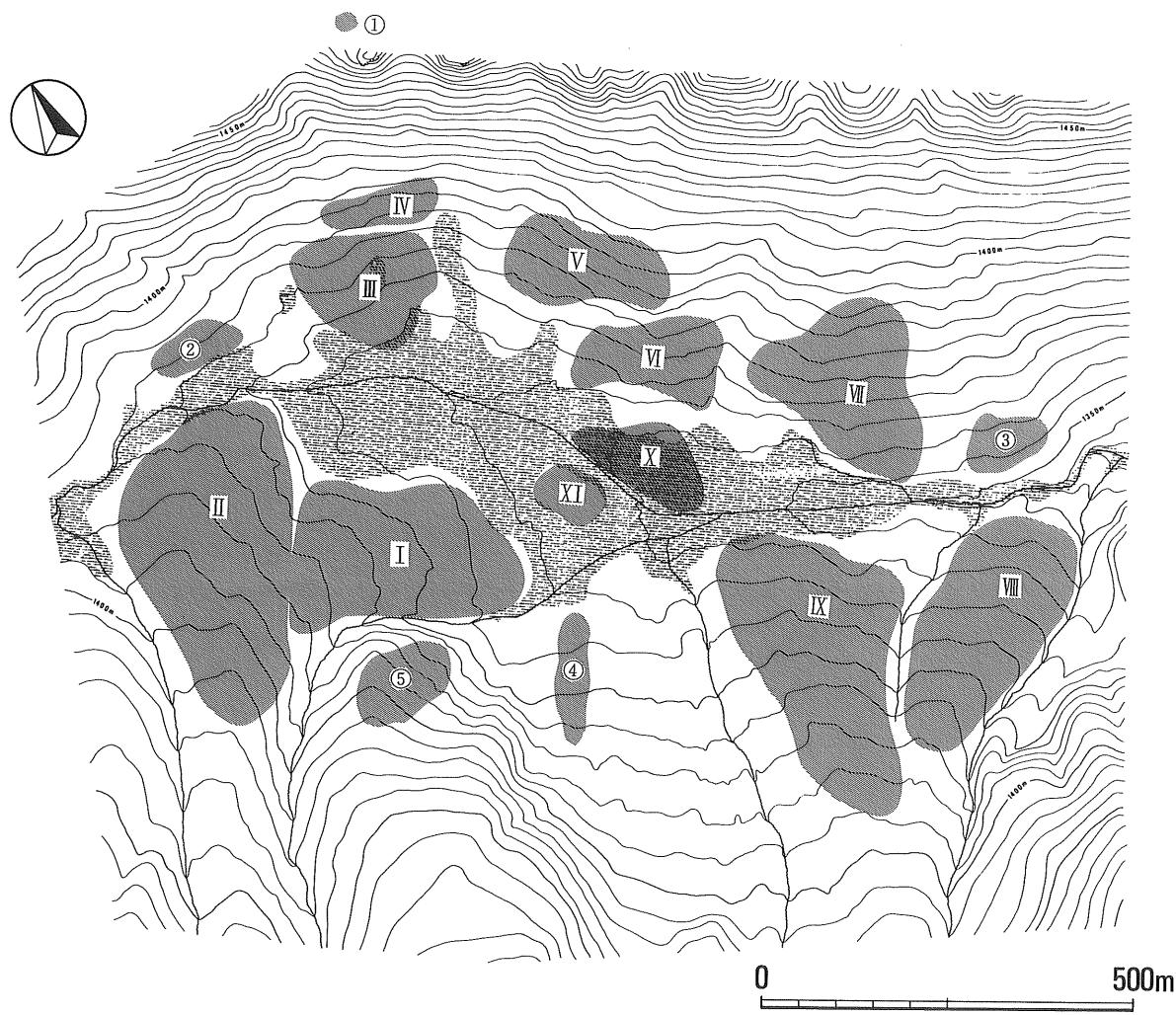
以上のような黒耀石の産状から、石器の原材は、
星糞峠における岩脈からの切り出しと、湿地周辺
の地層中からの礫塊の採取という、2つの方法で
入手されていたものと推定された。すなわち、星
糞峠に点々とする浅いくぼみは、石器原材の採掘
址であり、いわゆるズリは、その採掘にともなう

碎片が、低地へと流下したとみられるのである。
一方、湿地に礫塊となって存在する黒耀石の原鉱
は、いまのところ特定されておらず、星糞峠をふ
くみ、ひろく高松山から虫倉山にかけての山体の
いざれかに存在するものと想定されている。

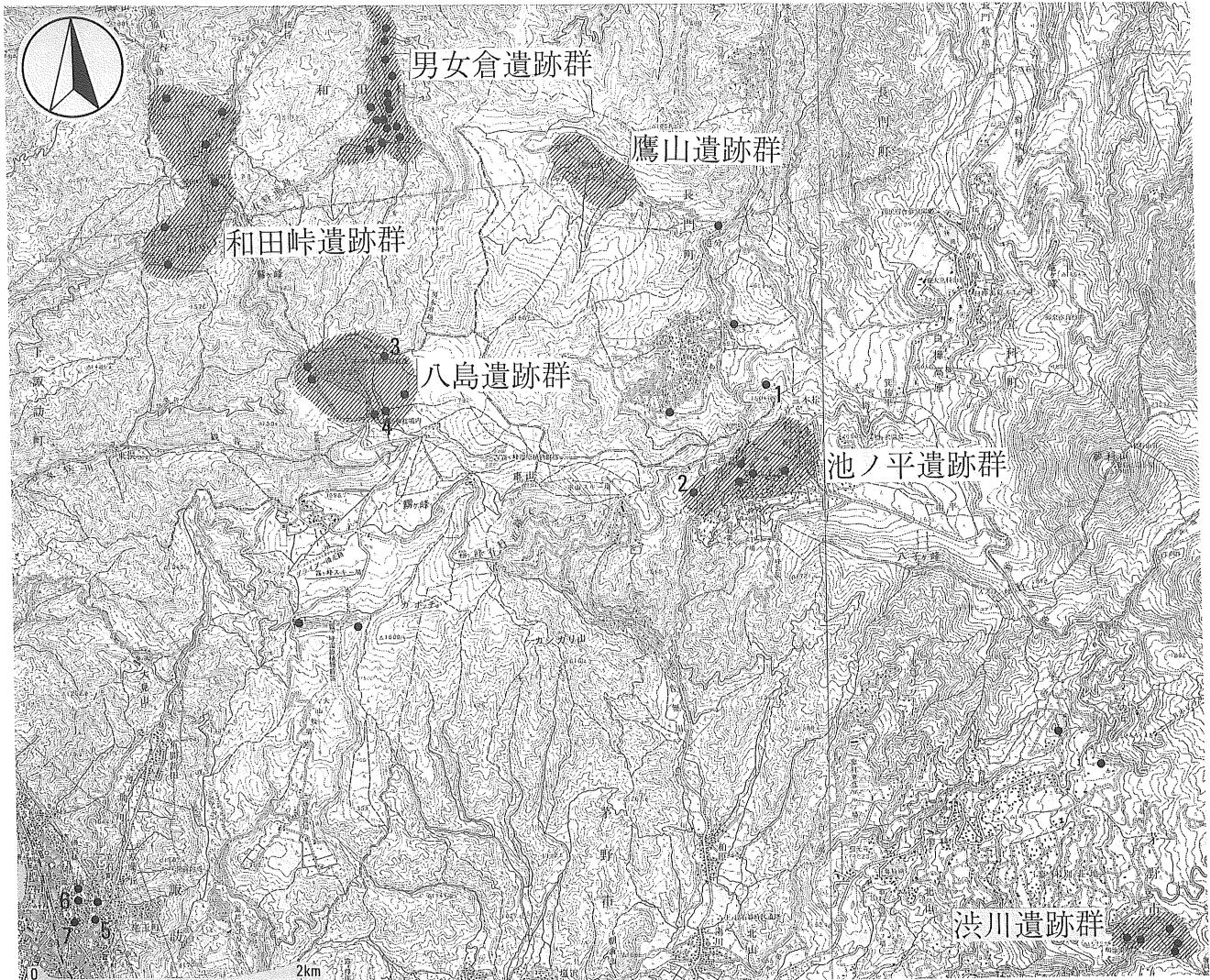
鷹山遺跡群の構成

われわれは、1986・1987の両年にわたった遺跡
の詳細な分布調査によって、鷹山地区のどこに遺
物があり、どこに遺物がないかを、はっきりと区
別することができた。すなわち、遺物は鷹山川右
岸の大 笹 山側に7か所、左岸の星糞峠側の山頂の
1か所をふくむ9か所に、まとまりをもって分布
している（第1図）。

こうした計16か所の遺物の分布状況は、しかし、
どこもみな同じではなく、明確な粗密の相違がみ



第1図 鷹山遺跡群の遺跡区分



第2図 鷹山遺跡群と周辺の遺跡

られた。遺物が分布する範囲内に、とくに密集する部分をもたず散在する場所と、中心となる集中部がみとめられる場所とである。前者を「散布地」、後者を「地点」というかたちで整理した。また、地点と地点とは、尾根や沢で区切られる台地上で、いくつもが近接し、全体で1か所の遺物分布域を形成していることも明らかになった。

われわれは、埼玉県砂川遺跡の調査と研究をとおして、3つ前後のブロックがかたちづくるユニットが複数集まって遺跡がかたちづくられるという、遺跡の構造をとらえることができた。さらに、神奈川県月見野遺跡群と長野県矢出川遺跡群の調査と研究からは、こうした構造をもつ遺跡が、河川の流域一帯にいくつも群集し、総体として遺跡群を構成することも学んだ。

鷹山地区の地点は、視覚上、ブロックと共にした遺物の分布状況を示している。そこで地点が集まる場所を、「遺跡」というかたちで区分することとした。そのようにして、遺物が分布する16か所の場所を、11遺跡（第Ⅰ遺跡～第Ⅺ遺跡）・5散布地（①～⑤）に区別するにいたった。

さて、先土器時代の昔にもどって、鷹山地区を概観すると、星糞峠の山頂部には、黒耀石の原鉱があり、湿地一帯には、黒耀石の礫塊が存在する。この湿地をとりかこんで、11か所の遺跡がある。それら11遺跡をさらにとりかこむように、5か所の散布地がめぐっている。

ここに、これまでその実態が必ずしもはっきりとしてはいなかった、黒耀石原産地遺跡群の一つ、鷹山遺跡群の輪郭がとらえられてくる（第2

図)。いま、鷹山遺跡群を構成する遺跡の一つ一つについて、われわれは鷹山遺跡群第Ⅰ遺跡(以下、鷹山Ⅰ遺跡と略記)における2つの地点の発

掘調査をとおして、個々の遺跡の構造を具体的に知る、一つの手掛かりをえようとしている。

2 鷹山Ⅰ遺跡S地点の調査と研究の目標

鷹山Ⅰ遺跡の地点とブロック

鷹山川をはさんで、対岸に星糞峠を真正面に臨む鷹山Ⅰ遺跡は、遺跡群の中で最も広範囲に湿地と面した、低平な台地上に立地している。その台地は、南側を渓流、西側を一段と高い台地で区画され、東西約300m、南北約200mの広さをもつ(第3図)。

いうまでもなく、当遺跡は、児玉司農武氏の発見にはじまり、尖石考古館の数次におよぶ発掘がおこなわれるなど、鷹山遺跡群が世に知られる端緒ともなって、学史上で大きな役割りを果してきた。さらに加え、同遺跡はそうした経緯をへて、遺跡群中で随一の量をほこる多数のナイフ形石器と槍先形尖頭器それに細石核が発見・発掘された場所もある。と同時に、われわれの分布調査でも地点が集中する度合いが一番たかい場所であり、その意味では、鷹山Ⅰ遺跡を鷹山遺跡群における中核的な遺跡と呼んでもよい。

さて、鷹山Ⅰ遺跡には、10か所をこえる地点がある。現地表面にこうした分布をみせる遺物は、表土(Ⅰ層)以下、黒褐色土(Ⅱ層)、ソフトローム(上半部黄褐色:Ⅲa層、下半部黄褐色:Ⅲb層)、ハードローム(Ⅳ層)とつづく地層の中で、いったいどんな状況にあるのだろうか。果して、ブロックはあるのか。

1984年、われわれは、遺跡西半部の中央に位置し、地表面の広範囲に遺物が分布するM地点(明治大学発掘地点の略称)の発掘をおこなった。その結果、長径20m、短径10mにも達する巨大なブロックが掘り出された。ここに、黒耀石原産地遺跡に残されたブロックが、初めて完全なかたちで

その姿を現わしたのである(鷹山遺跡群調査団1989)。

こうして、地表面の遺物の分布状態と寸分たがわずに重なり合わないまでも、ローム層中に、地点のひろがりとほぼ相似した状態で、遺物が包含されていることが確認されたのである。となれば、鷹山Ⅰ遺跡にみとめられる多くの地点のそれぞれに、ブロックが存在したと予想することが可能となる。

ブロックと石器群

以上のように、これまでの調査をとおして、いま鷹山Ⅰ遺跡には、M地点以外にも、ブロックの存在が確実視されるにいたった。となると、鷹山Ⅰ遺跡に残されたとみられる一群のブロックは、互いにどのような関係をもったものかという分析が急がれる。

M地点のブロック(報告書『鷹山遺跡群Ⅰ』では「第Ⅰ遺跡第1ブロック」の呼称をもちいたが、今後は「M地点」と改称する)からは、原石1、残核107、刃器336、剝片2427、碎片3399、ナイフ形石器2、揉錐器1、削器1、敲石1、磨石2の、合せて6272点が発掘された。その遺物の出土量からも明らかのように、このブロックが石器の大量生産と深く係りをもったことは疑いのないところである。分析の結果、このブロックは「鷹山Ⅰ型刃器技法」(以下、「鷹山M型刃器技法」と改称)による、刃器の製作址であることがわかった。

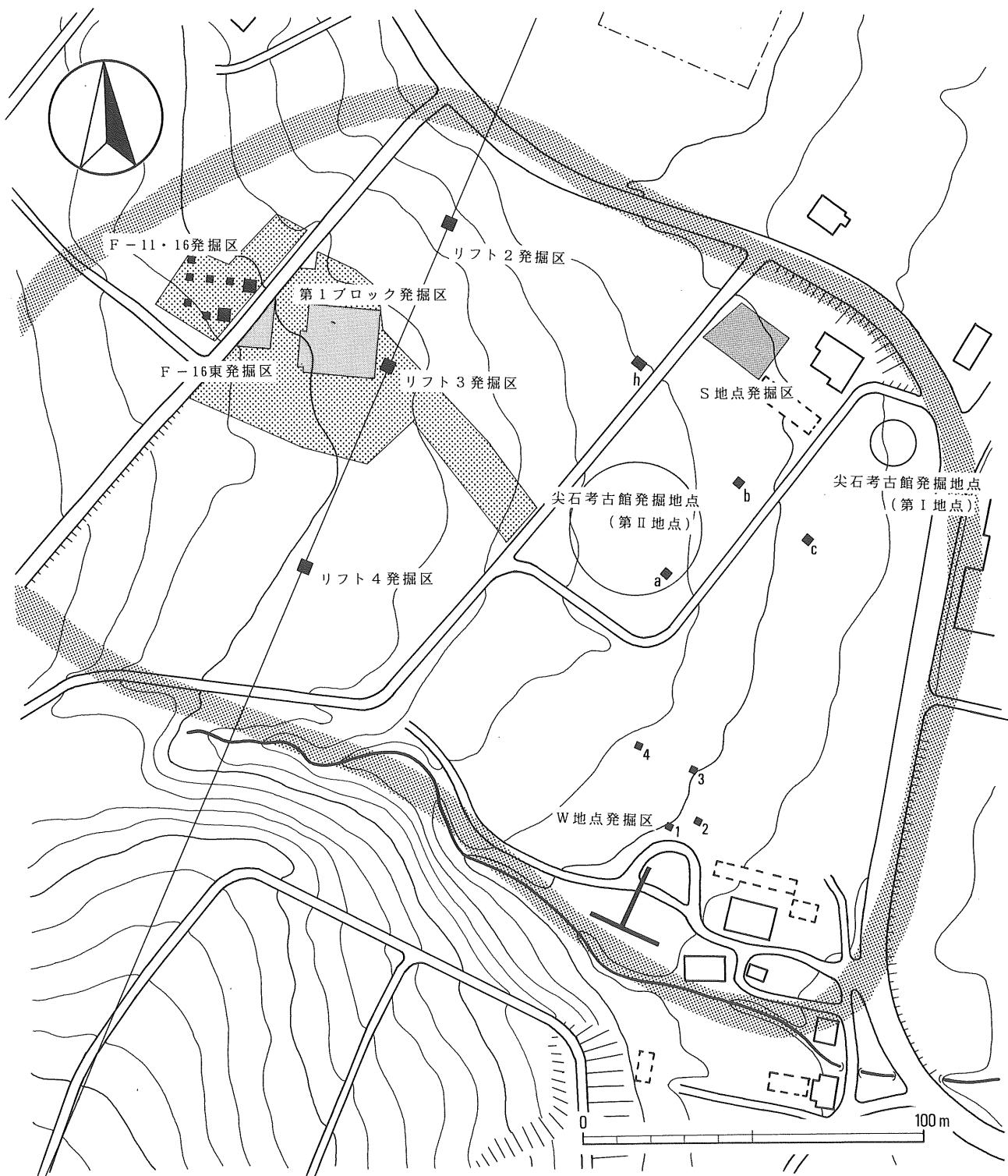
だが、尖石考古館の発掘した2つの地点からは、M地点とは異なり、多数のナイフ形石器と槍先形尖頭器それに細石器が検出されている(宮坂英次・宮坂虎次 1966、中村龍雄 1987)。一方、

われわれが分布調査の一環として発掘した試掘区hからは、ナイフ形石器が集中して出土した。

こうした事実は、鷹山Ⅰ遺跡に残されたブロックが、みな同じ性格をおびていたものではないことを示唆している。果して、刃器以外に槍先形尖頭器やナイフ形石器あるいは細石器を、それぞれ大量に製作したブロックが存在したのだろうか。

仮に、互いに異なった種類の石器を量産したブロックが残されていたとすると、鷹山Ⅰ遺跡は想像を絶する石器の大量生産遺跡であったことになる。では、鷹山遺跡群を構成する他の遺跡も、また同様であったのだろうか。

まさに、黒耀石原産地遺跡の構造、さらには黒耀石原産地遺跡群の実態をひもとく手掛かりが、



第3図 鷹山Ⅰ遺跡の地形と調査区（図中、第1ブロック発掘区はM地点と改称）

鷹山Ⅰ遺跡に秘められているのである。

鷹山Ⅰ遺跡S地点の調査と目的

そのような認識をもつにいたったさなかの1989年、住宅新築にともない、鷹山Ⅰ遺跡の一角を緊急に調査しなければならない事態が生じた。われわれは、鷹山Ⅰ遺跡の重要性に鑑み、宅造計画の見直しをふくむ、様々な対応策を検討した。そして、鷹山Ⅰ遺跡および面前に自然の景観を残す湿地の保存のための具体策を早急に講じるという前提のもと、宅造予定地の発掘調査をおこなうこととした。

宅造予定地は、春原（すのはら）幸晴氏の所有地で、遺跡の北東部、湿地に面する一角に位置す

る。春原氏のイニシャルをとって、S地点と名づけた区域の広さは約300m²。分布調査によれば、同地点は遺物の散布密度が相対的に低い個所にあたっていた。しかし、一帯は耕作用の盛り土で厚く覆われていることから、調査の進行には万全を期することとした。

まず、本調査に先立ち、試掘区を設け、S地点の性格を探った。各試掘区の遺物の出土状態は、同地点にもまた、巨大なブロックの存在を予想させるに十分なものであった。そこで、われわれは、このブロックを完全な形で摘出することを最大の目的にかけ、S地点の全面発掘を実施するにいたったのである。

3 発掘調査と研究の経過およびその方法

発掘調査の実施

これまで述べてきたように、1986・1987両年の分布調査は、鷹山川の両岸を中心とした、鷹山地区のほぼ全域に、先土器時代の遺跡が密集している事実を明らかにした。実に、黒耀石原産地の直下に、11か所の遺跡と5か所の散布地が、点々と湿地をとりかこんでいるのである。ここに、日本で最初に、黒耀石原産地遺跡群がその輪郭を現わしたのである。

しかし、一歩研究をすすめて、鷹山遺跡群を歴史的に位置づけていくためには、一つ一つの遺跡の正確な範囲、それに各遺跡の構造、さらに遺跡群の成立した背景を、長期的な展望のもとで、計画的に調査する必要がある。と同時に、ここに遺跡群を出現させた、黒耀石がおりなす環境を解明し復元しなければならない。そのためには、遺跡群の保護と整備が必要とされることはいうまでもない。

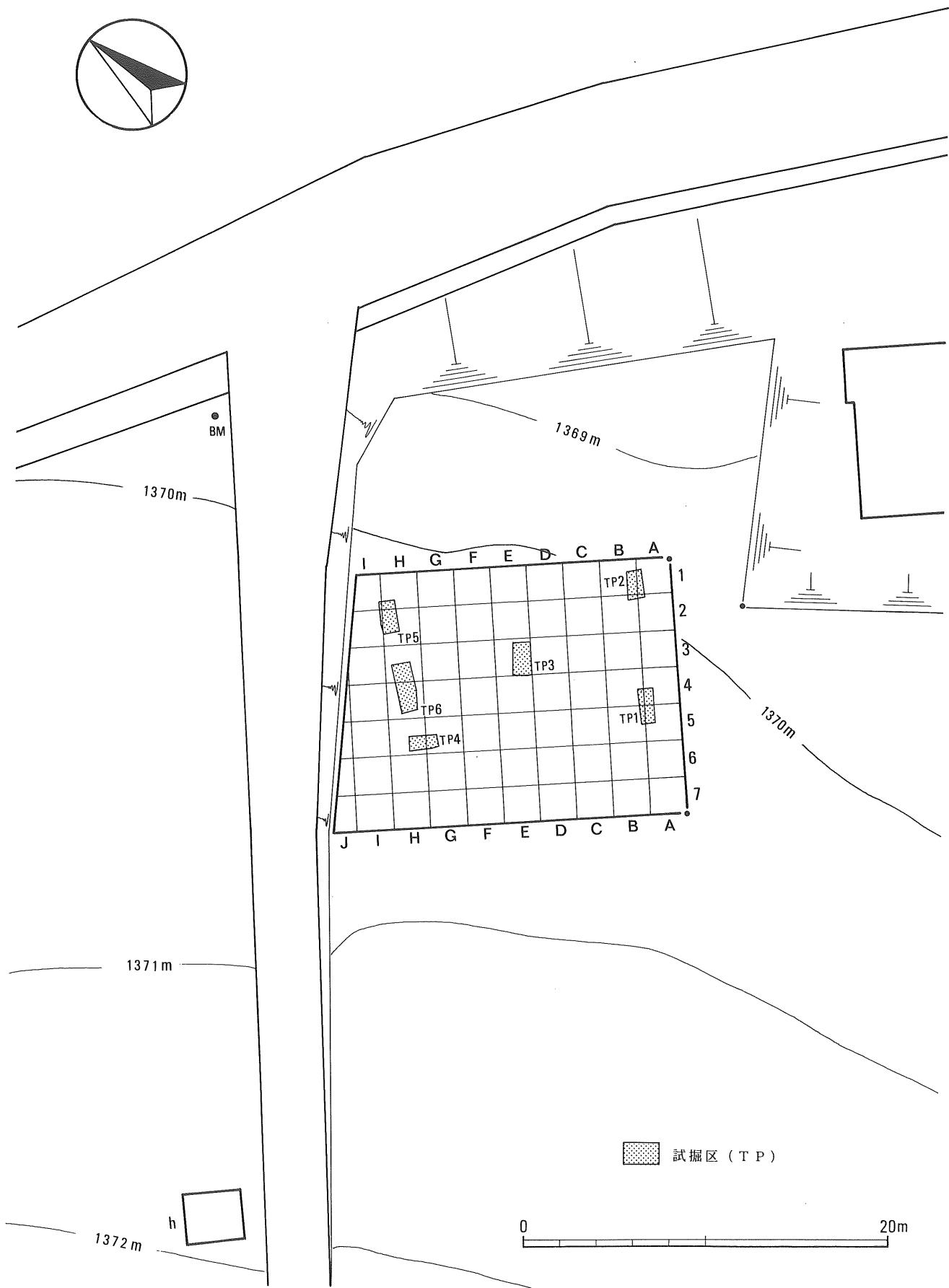
われわれは、鷹山Ⅰ遺跡を、以上のような分布調査にはじまる一連の継続する調査と研究の起点

と考えている。鷹山Ⅰ遺跡からは、すでに、刃器の製作址であるM地点の巨大なブロックが検出されている。また、同遺跡には、M地点と同様な規模のさらにいくつかのブロックの存在も予想されている。すなわち、繰り返し述べるが、鷹山Ⅰ遺跡の分析こそが、黒耀石原産地遺跡群を構成する個々の遺跡の基本的な在り方をとらえる、その重要な指針をもたらすものと考えられるのである。

この鷹山Ⅰ遺跡に、1989年、宅造を伴う緊急調査の必要が生じた。われわれは、この調査を、将来実施されるであろう、鷹山遺跡群についての長期的な研究の第一歩と認識し、具体的な調査計画をたてて、下記のような発掘を実施した。

まず、1989年8月10日から12日まで、S地点に6か所の小発掘区（1×2m）を設けて試掘調査をおこなった（第4図）。地層の堆積状態および遺物の遺存状態の確認を目的とした調査である。

ついで、同年、8月28日から、S地点一帯（17×14m）に、2×2mのグリッドを設定し、全面発掘を開始した。調査は地元の人々の理解と協力、さらに文化庁、長野県教育委員会および町当局ま



第4図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の発掘調査（グリッドと試掘区）

た長野県考古学会旧石器研究部会の支援のもと、後述するような経過をふんで、9月25日に無事終了した。

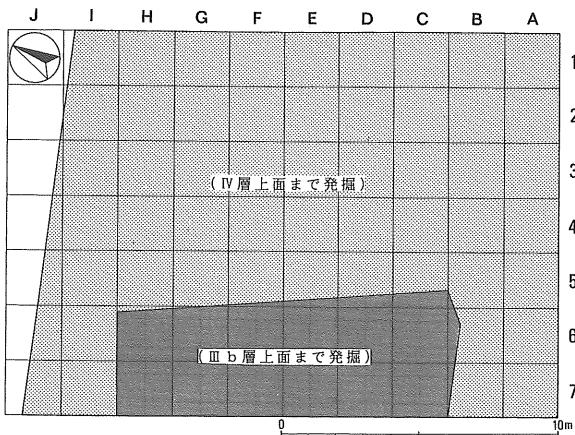
発掘調査の経過

S地点は、鷹山Ⅰ遺跡をのせる台地の縁辺部に位置し、湿地と間近に接する緩斜面上にある。台地中央部のM地点のような平坦面に乏しいその一帯は、分布調査によれば、遺物が比較的散漫な場所にあたっていた。当初、われわれは、そうした台地縁辺部という立地や、分布調査の結果からみて、当該地区は鷹山Ⅰ遺跡の中心部からはやや距離をおいでいるのではないかという懸念も抱いていた。

ところが、この予測は試掘調査の段階で大きくくつがえされた。6か所に設けた試掘区のいずれからも、遺物の出土をみたのである。しかも、そのⅡ層から出土しはじめ、Ⅲa層でピークをむかえ、Ⅲb層では激減する遺物は、M地点のブロックに勝るとも劣らない、大きなひろがりもつことは確実と思われた。

そのうえ、こうした遺物のひろがりのなかに、試掘区2ではナイフ形石器、また試掘区3では槍先形尖頭器とその調整剝片、さらに試掘区5では残核という、特定の石器がある場所に集中する傾向もとらえられた。いったいS地点にはどんなブロックが残されているのか。

こうした疑問を解き明かすべく、なによりもま



第5図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の発掘終了時の層位深度

ずブロックの完全発掘を目的に、本調査に移行した。そして、発掘がすすむにつれ調査区全域にひろがりをもつ、巨大なブロックが姿をみせはじめた。それは、原石1569、残核684、刃器522、剝片4148、碎片10162、ナイフ形石器44、槍先形尖頭器235、彫器4、搔器11、削器18、揉錐器5、二次加工のある剝片118の、計17520点の石器群をもつ、径12mのブロックであった。

このS地点のブロックは、第Ⅱ章以下に詳しく述べられているように、M地点のそれとは明らかに異なった石器の製作址である。さらに加えて、S地点のブロックには大きな特徴がある。第一に、ブロック全体が、Ⅲa層の下部に敷きつめられたかのように堆積する礫の直上に残されている点である。それは、あたかも湿地に接し、水はけの悪い場所に構築された住居の床面であったかのような状況を呈している。また、S地点のブロックには、鷹山遺跡群における最初の発見例となった、礫群も残されている。

すなわち、S地点のブロックは、そこで石器が量産されたばかりではなく、居住に必要な施設と設備をそなえていた可能性も大きい。それを明らかにするため、ブロックの下の礫を掘り下げて、すべての調査を完了した（第5図）。

発掘資料の整理と

黒耀石原産地遺跡研究会

以上のように、S地点からは、M地点とはまた異なる、未知のブロックが掘り出されたのである。この発掘された一連の資料を、どう整理し分析すべきか。

われわれは、1990年の4月、プロジェクトチーム・黒耀石原産地遺跡研究会を結成し、まず、S地点から発掘された、総数17520点にのぼる石器群の整理にとりかかった。こうしてはじまった黒耀石原産地遺跡研究会には、直接S地点の発掘に携わったスタッフのほか、先土器時代に関心をいだく明治大学考古学博物館友の会の会員も加わっ

て、約1年間にわたり積極的に活動した。

定例の勉強会では、整理作業の進行にともない、つぎつぎに生まれてくる、素朴で本質的な疑問と対峙した。その多くは、鷹山遺跡群がかかえる課題と直結する難問ばかりであつた。こうした数々の難問に直面しながら、われわれは、遺跡と石器群を分析するための新たな視点と方法をさぐる努力をつづけてきたのである。

こうしたかたちの活動の積み重ねが、第Ⅱ章以下に記述するような、資料の分析結果とその記述を生んだことはいうまでもない。

鷹山Ⅰ遺跡M地点の発掘にはじまった、鷹山遺跡群の構成と成り立ちを解明するための研究は、今回必ずしも画期的な成果をあげたとはいがたい。しかし、今後の研究にむけての着実な第一歩を踏みだしたと確信している。



写真2 鷹山Ⅰ遺跡の遠景（県道分岐点の右上、星糞峠より）

II 鷹山Ⅰ遺跡S地点の発掘調査の成果

1 S地点の位置と文化層

S地点の位置

既述したように、鷹山Ⅰ遺跡は鷹山遺跡群全体の中で、その位置からいっても、また出土する石器群や、それらをふくめた遺跡全体の様相からいっても、遺跡群の中核をなす遺跡である。

遺跡は大笠山の山裾に当るゆるやかな台地上に立地するが、その台地は西側（鷹山Ⅱ遺跡のある台地）と南側（大笠山から続く尾根状の台地）はやや高い台地で、そのふところに抱かれるような傾斜のゆるい平らな台地をなす。北側と東側は鷹山川が作った旧湿地帯に直面する。なお南側のやや高い台地との間には、浅い谷をつくる溪流が流れ、鷹山Ⅰ遺跡のある台地には、その溪流による扇状地状の堆積作用があったものと想定される。

分布調査や過去の発掘調査などから確認することのできる遺跡のひろがりは、東西約300m、南北約200m弱に達し、先土器時代の遺跡としてはかなり規模の大きな部類に属する。

今回発掘調査の対象となったS地点は、鷹山Ⅰ遺跡のる台地が旧湿地部にやや張り出すようになった台地の末端部に近く、一部が台地から旧湿地部にむけて落ちかかる斜面部にかかっている。海拔標高は約1370m、現在の鷹山川の水面との比高差は約3mである。

鷹山Ⅰ遺跡では、これまでにも何回かの発掘調査が行われているが、第3図にはそれら過去の発掘地点と今回報告するS地点およびW地点の位置関係を示してある。

1964年から1968年にかけて鷹山Ⅰ遺跡の発掘を行った尖石考古館の発掘地点（旧称「第Ⅰ地点」）は、S地点の東南約40mに位置し、比高差も約2

mほど低く、S地点よりはいっそう旧湿地に直面した立地である。そしてここからはナイフ形石器、槍先形尖頭器、細石器などを主とする多様な石器が出土し、鷹山遺跡群全体、あるいは鷹山Ⅰ遺跡の他の地点にくらべて相対的に、石器製作跡というよりは、生活跡的な印象を与える遺跡の性格があるものと想定される。

一方、1984年にスキー場建設に関連して発掘調査を実施したM地点は、S地点の西方約100mの位置にある。そこは台地のより中央部に当たる平坦面となり、比高もS地点とくらべ約10mも高い。このM地点の発掘では、全長23cmを数える柱状の大形刃器石核の存在に表徴されるような、多量の刃器や石核が出土し、それに反してナイフ形石器12点を最多として、完成された石器の数はごく僅かで、明らかに黒耀石を原石とする刃器製作址であることが明らかにされている。そして今回報告するS地点で主体をなす槍先形尖頭器は皆無であった。

以上のように、S地点はこれまでの主要な発掘地点の中間の位置を占め、台地端の旧湿地に面する立地であること、従来の表面採集資料や周辺の試掘区の所見などから、鷹山Ⅰ遺跡の中でも、よ



写真3 鷹山Ⅰ遺跡S地点の発掘調査

り生活跡的な空間であろうというのが、発掘開始以前の予測であった。

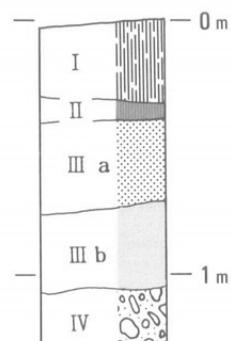
S 地点の土層の堆積と区分

S 地点の土層の層位は、鷹山遺跡群のうち大笠山側山麓にある諸遺跡において観察された基本土層と同じである（第 6 図）。

I 層：表土。耕作土で、全面的に客土による盛土がみられ、ローム粒子などが混入する。

II 層：褐色土。表土の腐植土層とローム層の漸移層である。やや粘性をおび、比較的しまりはよい。下面は III 層に漸移的に変化する。層厚は約 10~15 cm である。

III 層：ローム層。いわゆるソフトローム層に相当する。層厚は全体に 50~70 cm で、安定した堆積状態を示す。色調のちがいや層のしまり具合などから a・b の 2 層に区分される。



第 6 図 鷹山 I 遺跡 S 地点の土層断面図

(III a 層)：黄褐色のローム層で、III b 層よりはしまりが悪い。層厚は 30~40 cm。

(III b 層)：やや赤味を帯びる橙褐色のローム層。粘性に富む。層厚は 20~30 cm。なお、調査区の東側にあたる A 1 グリッドから C 1 グリッドにかけての部分とその周辺では、III b 層の堆積はみられなかった。



第 7 図 鷹山 I 遺跡 S 地点の地形

IV層：灰白色あるいは淡緑色のハードローム層で、III層から漸移的に変化する。腐食した粗粒の安山岩礫を多量にふくみ、下部ほど礫は大きくなる。このIV層の下は礫層がつらなり、ほとんど発掘は不可能である。

各層の堆積はほぼ平均してみられるが、発掘区の西側には微地形的な浅い谷があり、その部分に向けて各層厚はやや大きくなる。

また発掘区の南西端の部分では、第III層の中位ほどまで達する攪乱（削平跡）が、かなり広い範囲にわたってみられた。

S 地点の微地形

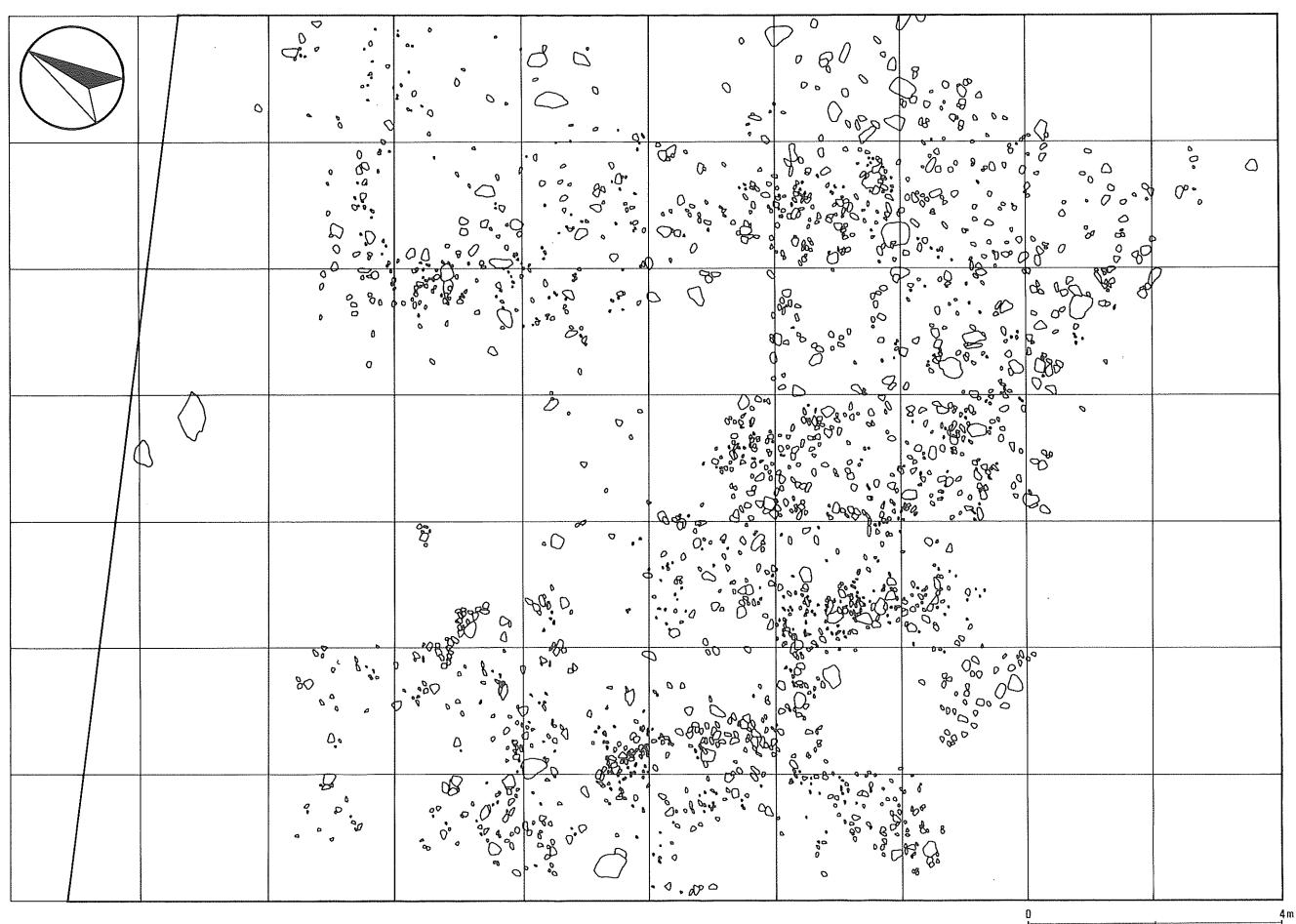
第7図は、S地点発掘区のIV層上面における微地形の状況を示した図であるが、調査区の南側ほど高く、北側ほど低いようすは第I遺跡が立地する台地の傾斜に沿っており、その最高部と最底部

との比高差は約1.6mを測る。

調査区の微地形は、調査区の南端にあたるA7グリッドとその周辺部およびJ7グリッドに至る部分においては等高線の間隔がほぼ均等で、調査区域内では最も地形が平坦で安定しているといえよう。

その一方で、調査区の西側G4グリッドからI1グリッドにかけての部分と、調査区の東側B2グリッドからA1グリッドにかけての部分とにおいては、浅い谷状の地形がみられることがわかる。それと同時にこの2つの谷状の地形に挟まれた部分においては小さな尾根状の地形を形成している。

そして遺物の主要な分布区域は、この尾根状の部分に集中してみられ、こうした微地形的な立地条件が、S地点の生活空間を生みだしたものと推測される。



第8図 鷹山I遺跡S地点III b層上面の礫のひろがり

遺跡内に分布する礫

S地点の発掘区内には、Ⅲa層の中部から下部にかけて、多量の石器・石片・石核や原石とともに、人頭大から拳大の礫が、面的なひろがりをもって検出された。なかにはひとかえもあるような大形の礫もみられた（第8図）。

それらの礫はⅣ層およびそれ以下の礫層中にふくまれる、表面の腐食した安山岩礫と同質のもので、円礫・角礫（ないしは亜角礫）からなる。

礫は発掘区内にまんべんなく分布するわけではなく、石器等の分布集中部と同じく、微地形上の尾根の部分に主にみられる。

礫の分布状態については、複数の礫が重なり合うように密集したところもあれば、まばらに分布しているところもあり、規則的な配列状態を示しているような事実は認められない。しかし礫が部分的に全くみられない空白部も何か所かある。しかしそうした部分もふくめて、石器等の出土状態との関連性や、特別な遺構であるらしい形跡は観察できなかった。

こうした礫の集中する状態は、先に発掘調査したM地点ではほとんど認められていないが、これはM地点が比較的安定した土層の堆積状態を示す台地の平坦面に立地するためだろうか。

それに反して尖石考古館発掘地点（第I地点）では、「安山岩礫が集積存在し、その周辺から原石・石核が集中出土した」という所見が報告されている（宮坂・児玉 1966）。



写真4 鷹山I遺跡S地点に散布する礫

礫群

S地点の発掘区の南隅に近く、地形的に比高差が最も高い位置から、3基の礫群が発見された（第9図）。

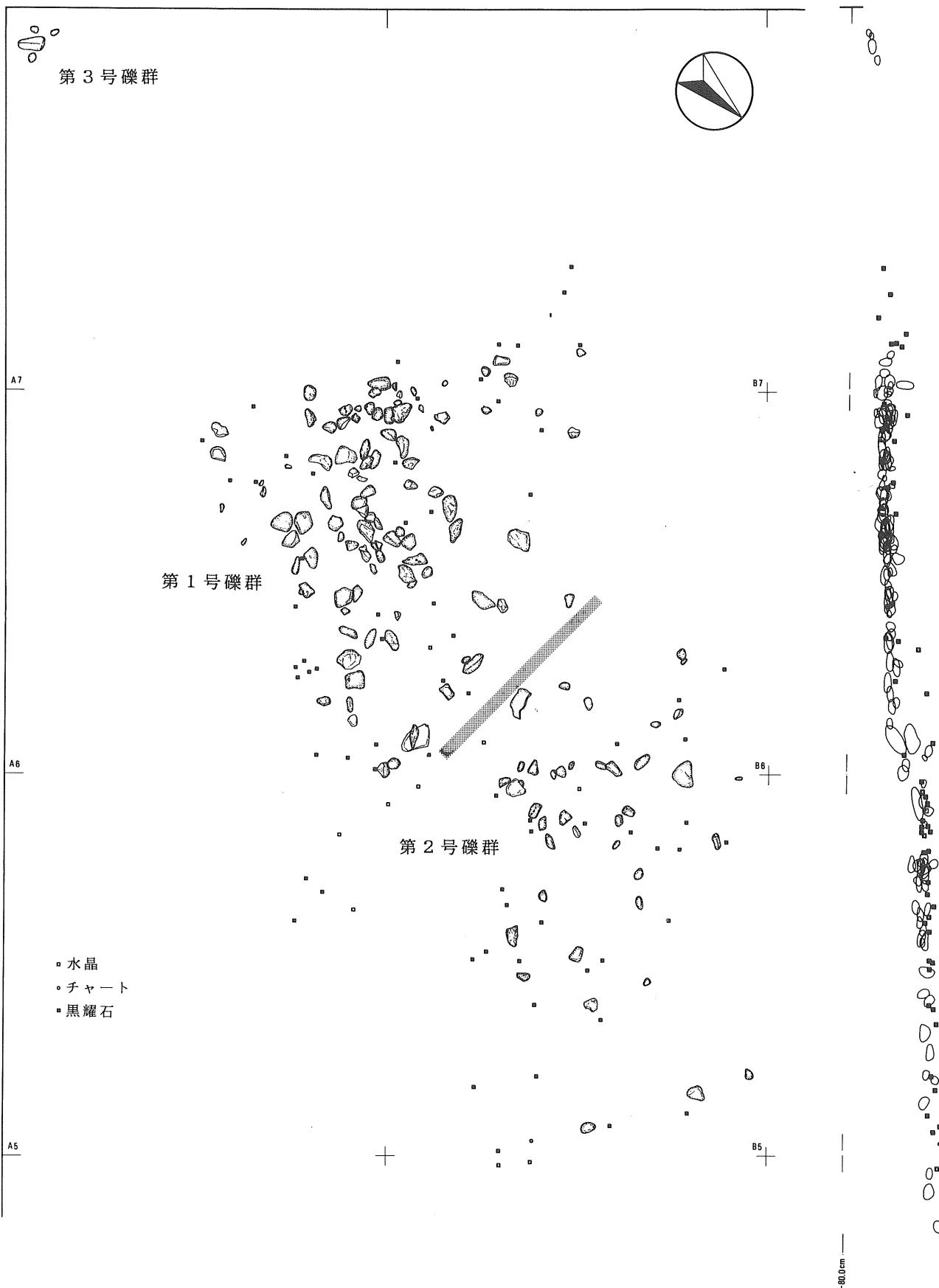
第1号礫群 A6・A7・B6・B7の4つのグリッドにまたがって発見された。直径約1.5mの範囲に、103点の加熱による赤化現象のみられる礫から構成されている。礫の破損はほとんどみられず、他の2つの礫群にくらべて、最も礫の数も多く、密集状態もよかった。ただし水道管の敷設によって、一部が破壊されていた。

第2号礫群 B5・B6グリッドに発見された第2号礫群は、第1号礫群とは位置の上ではきわめて近接しているが、検出した層位のレベルは、第1号礫群より約10~15cm低い。礫群相互の層位的重複関係はみられないが、第2号礫群と同一面上には原石や石核の集中部6が近接しており、両礫群の層位差は生活面が2枚あったことを想定させる。

第2号礫群は41点の礫が、直径約2mの範囲に散漫に分布するもので、周辺部から炭化物粒子や熱を受けた黒耀石片などが検出された。すべての礫には熱による赤化が認められる。

第3号礫群 A7グリッドの南隅から、赤化した4点の礫がまとまって検出された。調査区域外の外側に広がる礫群の一部とみられ、その規模は第1号礫群と同様なものと推測される。遺存する層位も第1号礫群と同一平面上である。

以上の3つの礫群が発見された層位は、いずれもⅢa層の中部から下部にかけてであり、この層位は前項で説明した発掘区内のほぼ全面にひろがる礫の集中分布の層位と一致している。しかし3つの礫群の間には層位的なレベル差があり、第1・3号礫群は第2号礫群より10~15cmほど高位にあることは記述した通りである。このこととS地点から出土する多量の遺物の出土状態の関係などについては次項で説明する。



第9図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の礫群



写真5 鷹山Ⅰ遺跡S地点の礫群
(手前：第2号礫群，奥
：第1号礫群)



写真6 鷹山Ⅰ遺跡S地点
の第1号礫群



写真7 鷹山Ⅰ遺跡S地点
の第2号礫群

S 地点の遺物出土状態

S 地点およびその周辺区域からは、これまでにもきわめて多量の遺物が表面採集されている。これらはいうまでもなく、耕作等によって原位置をはなれて地表に浮上したものである。

S 地点の発掘の結果、表土（耕作土）に当たる I 層からも多数の石器・石片等が出土した。その分布状況は発掘区全面にわたって、ほとんどむらなくドットを記録できるものであった。

しかし土層があまり搅乱のない II 層（褐色土層）下の出土遺物の分布には、その密度の濃淡が明らかで、とくに III a 層の下底部に出土数が顕著に多い原石や石核については、数か所の集中分布地点のあることがわかった。それらの詳細については後節で説明するが、ここでは S 地点の石器群の層位および分布上の出土状態を、全体として観察しておきたい。

前述の通り、I 層の表土中にもかなり多くの遺物の検出をみる。とくにより下層の出土遺物にくらべて、小さくて軽い剝片・碎片などが目立つて多い。これらの資料は原位置をはなれたものなので、ごく一部の石器等をのぞいて本報告書の分析対象からは除外した。出土総数は約3000点をかぞえる。

II 層（褐色土層）は表土の腐植土層とローム層の漸移層であると、一般的には説明される。そして信州ローム層についての地質学者の見解によれば、その土層の母材は火山灰層を主体としたもので、上層の腐植土からの汚染によって黒色化し、褐色土として識別されるものであるともいわれる。そのためか S 地点の基本層位でも III a 層の上面への変移はきわめて漸移的で区別が明瞭ではない。

このようなローム層の最上部層とともにとらえられる褐色土層（II 層）中からも、S 地点では約2000 点の遺物を検出した。写真13は II 層から III a 層の上面にかけてを掘り終った段階の、平面的な遺物分布状態を示した情景である。きわめて多くの遺

物が出土したことと、多少とも遺物分布の上で集中区域がわかってきた状態を知ることができよう。

III a 層の遺物出土状況はその上半では II 層とあまり変わらないが、III a 層中部から下部にかけて出土数は増し、同層下部でピークに達する。

前述したように、S 地点では III a 層の中部から下部にかけて、面的な広がりをもつ礫の集中分布がみられる。III a 層の下部に最も出土数の多い遺物は、III b 層にいたるとその数は激減し、IV 層ではもはや全く遺物は検出できない。そして礫が最も集中分布する微地形上の尾根に当たる部分では、礫をはずした下からはほとんど遺物は発見されない。

以上のような観察の結果から、S 地点の先土器時代人の生活面は、礫が集中的に分布していた面、すなわち III 層下部であったとすることができる。そうだとすると、自然礫の集中であろうと推定した大小の安山岩礫の性格、あるいはそれが群集する状態と人々の生活との関わりが改めて注意されねばならない。それらのことについては後節で石器等の分布上の特徴をとらえた上で、改めて触れることにしよう。

ところで S 地点からは 3 基の礫群が発見されている。いうまでもなく礫群の遺存する下底面は生活面を認定する重要な指標である。前述のように、S 地点の 3 基の礫群の基底面は、第 1 ・ 第 3 号と第 2 号礫群の間に 10 cm 余のレベル差がある。それが層位差としてとらえられる可能性もある。すなわち礫群の層位関係でみるとかぎり、S 地点では最低 2 時期にまたがる生活面が存在しているということである。

その場合、問題の一つは、S 地点出土の約 2 万点を越える多量の資料を層位的に区分できるかどうかということである。いろいろな検討と議論の結果、それらをあえて区分する必要もないし、また実際に不可能だということになった。その理由は、廃棄したとも遺棄したともいえる礫群の機能や性格に関連して、多くの遺跡で礫群がひんぱん

に重複していても、文化層としてとらえられる面は区別ができない例が多いこと。また先述した石器群の層位的・分布上の出土状態からしても、そこに生活面を区分できるような根拠もなく、その必要性も認識されないことなどである。

このようにして、少なくともⅢa層を中心にして

て検出した、表土出土品をのぞくS地点の石器群は、すべて一連の生活行動および石器生産過程の資料として理解できるし、その行動の連續性の中で、複数の礫群がひんぱんに作りかえられ、遺存したものと考えるのである。

2 S 地点出土石器群とその特徴

石器群の組成

S 地点発掘区において、Ⅱ層上面から第Ⅲ層までで検出した資料の総数は17520点であり、その内訳は、未成品・完成品を含めた槍先形尖頭器235点（うち未成品189点・完成品46点）、ナイフ形石器44点、搔器11点、削器18点、彫器4点、揉錐器5点、二次加工痕のある剝片118点、剝片4670（内、刃器状のもの522）点、石核684点、原石1569点、碎片10162点を数えた。

この石器群の中で特筆される事項としては、約300m²の狭い発掘区域の中から、235点の数にのぼる槍先形尖頭器が出土したことや、2253点にものぼる膨大な数の石核や原石が出土していることで、この様に未成品を含めた特定の器種の石器が数量的に偏った状態で出土したり、あるいは石核・原石など石器の材料となるものが数量的にかなり膨大な数に及んで出土しているといったことは、黒耀石原産地直下の遺跡の特徴をそのまま反映しているようで興味深い。

以下、S 地点から発見された石器群を紹介するが、第Ⅲ章で槍先形尖頭器を中心とした石器製作技術に関する細かな分析の結果が記述されるので、ここでは、各器種別の個々の石器についてその型式学的な特徴の観察を主に行い、併せて石器群全体の組成の特徴などにふれたい。

なお、上記の理由で多量に存在する原石・石核・剝片などの紹介も第Ⅲ章において行われる。

槍先形尖頭器

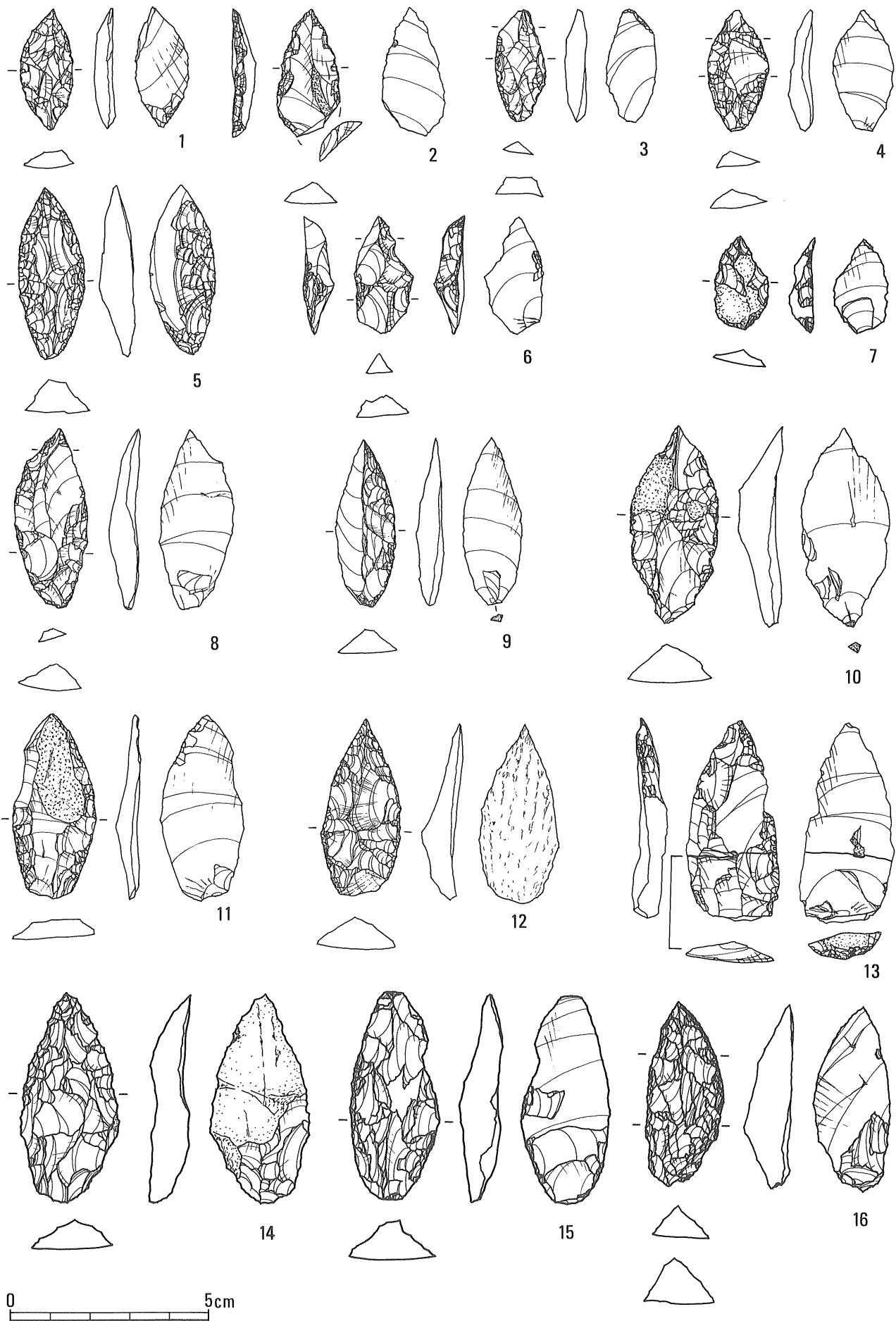
鷹山Ⅰ遺跡S 地点からは総数235点の槍先形尖頭器が出土した。この数はナイフ形石器44点を含むS 地点出土の定形的な石器全体の74%を占め、S 地点における主体的な石器であるという評価が許される。

しかも235点のうち完成品は46点にすぎないのに、未成品が189点と圧倒的な数を示し、他の多くの石核や剝片等の分析結果をもふまえて、S 地点が黒耀石原産地遺跡における、槍先形尖頭器の製作址としての性格を示唆する。

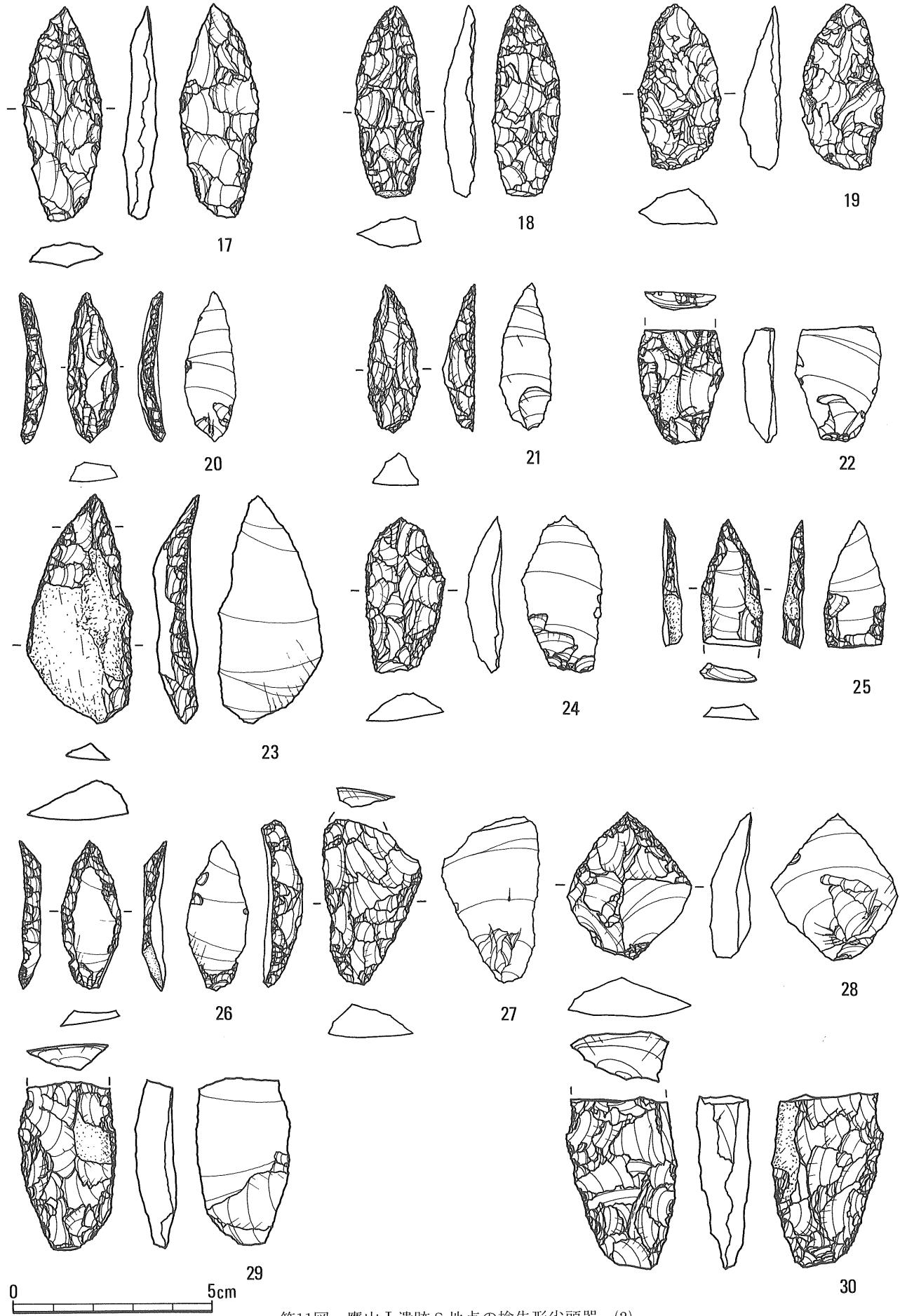
こうした槍先形尖頭器の製作技術や形態をもとにした、S 地点の槍先形尖頭器の分類は後章で行われるので、ここでは便宜上石器の大きさによって、小（全長3cm前後）・中（4～5cm）・大（5cm以上）にわけて、主として完成品（一部未完成品を含む）の全資料について、個別に記述をしておきたい。

なお完成品の槍先形尖頭器の抽出は、平坦剝離による器体調整が行われ、かつ先端部や周辺部に細かい調整加工をほどこして、一定の形状をそなえたものという基準によっている。

槍先形尖頭器・小（第10図1～4・6・7）3cm前後にまとまる小形の槍先形尖頭器の一群である。それぞれ長幅比が3：1から2：1の間にあるいはわゆる木葉形を呈し、幅広のものは認められない。左右非対称形を呈するもの（3・6・7）があるが、それらは周縁部に素材の縁辺を残



第10図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器 (1)



第11図 鷹山I遺跡S地点の槍先形尖頭器 (2)

していることと関係があると思われる。いずれも石器の最大幅は胴部中央部分に位置しているが、2は基部付近に位置している。素材には剥片が用いられているが、打面部を先端部に設定しているもの（1）と基部に設定しているもの（2～4・6・7）の両者がみられる。調整加工に関しては、器体全体を覆うような調整加工は認められず、いずれも器体の中央部分には素材面が残されている。

槍先形尖頭器・中（第10図5・8～第11図28）4cmから5cmにかけてまとまる中形品で、長幅比も3：1から2：1の間にまとまるいわゆる木葉形の槍先形尖頭器の一群であるが、形状や調整加工についていくつかのバラエティーが認められる。以下においては、形状の観察を中心にして記述を進めていきたい。

5・8～10は、左右対称形で基部はいくらか丸みを有するものの尖鋭に作り出されている一群である。4cmから5cmにかけての長さにまとまり、木葉形を呈し、石器の最大幅は胴部中央に位置している。

5は横長剥片を素材に用いて、表面側全体及び裏面側の一部に調整加工が施され、裏面側の調整加工によって素材の剥片の打瘤部が除去されている。

8は縦長剥片を素材に用いて表面側に調整加工が施されているが、先端部においては左側縁にのみ調整加工を施し右側縁には素材の縁辺部を残しているため、一見ナイフ形石器のように見えるが、その全体的形状や調整加工の特徴から槍先形尖頭器として器種判別した。

9は表面側の右側縁にのみ調整加工が施されていて、左側縁にはそのまま素材面が残されているため、比較的に形状の整った縦長剥片を素材に用いたことがうかがえる。素材の形状が整っていれば、素材面を大きく残している場合でも未調整加工のまま完成品として作り上げられたことが分かる。

10は縦長剥片を素材にして表面側に調整加工が

施されたものである。左側縁には部分的に自然面を残存させている。

11～19・22は、基部が平坦あるいは丸みを帯びる形状を呈する槍先形尖頭器の一群である。左右対称形を呈するもの（11～15・17～19・22）と、一方の側縁に対して相対する側縁の方がやや強い湾曲を示し左右非対称形を呈しているもの（16・19）とがある。いずれも長さは4cmから5cmにかけてまとまり、長幅比は3：1から2：1の間にある。基部の形状を見てみると、その平坦な形状によって一辺を画するようなもの（11～13）と、自然面や素材の縁辺部などを残して平坦なあるいは丸みを帯びる形状を呈しているもの（14～19・22）とがある。

11は縦長剥片を素材に用いて打面部を基部に位置させ、周縁部に調整加工を施して概形を整えているが、左側縁の先端部にはそのまま素材の縁辺が残存している。

12は表面側に調整加工が施されているが、裏面側には平坦な自然面が残されていて、原石をそのまま直接的に素材として用いたことがうかがえる。

13は縦長剥片を素材に用いて器体の周縁部に平坦な調整加工が施されたものであるが、素材の縁辺が部分的に残存しているところに、未成品的な要素が認められる。

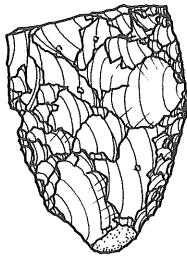
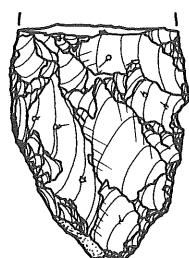
14は表面側及び裏面側基部に調整加工が施されているが、裏面側には自然面が残されていることから原石を直接的に素材に用いたと考えられる。

15は剥片を素材にして、表面側及び裏面側基部に調整加工が施されている。

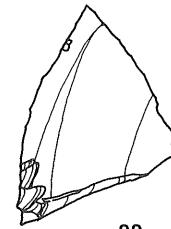
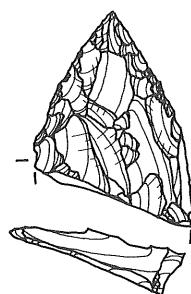
16は表面側及び裏面側基部に調整加工が施されているものであるが、素材は比較的に厚手で幅広の剥片を用いたと考えられる。

17～19は両面に調整加工が施されているために用いられた素材は明らかではない。しかし、18の基部に自然面が残存していることから考えて、原石から直接作り出されていったものであろう。

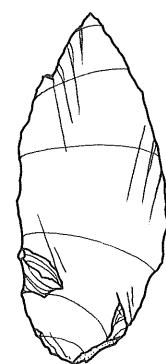
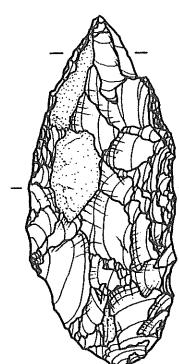
22は上半部を欠損しているが、剥片素材の片面



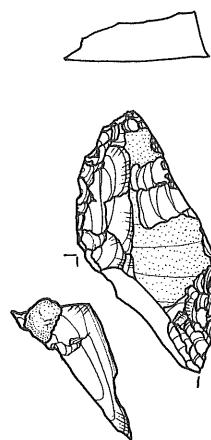
31



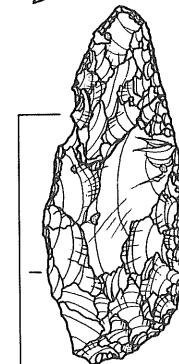
32



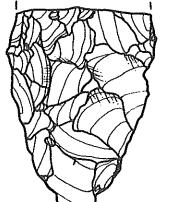
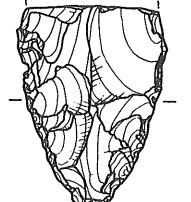
33



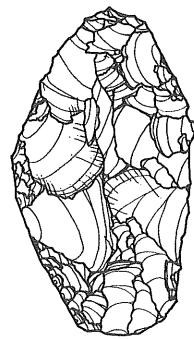
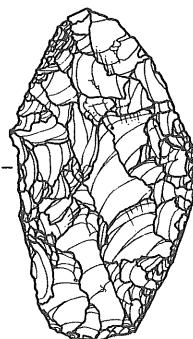
34



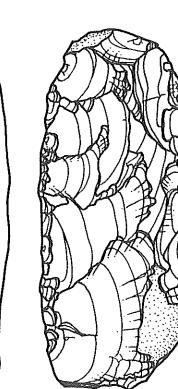
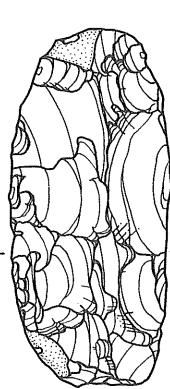
35



36



37



38

0

5cm

第12図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器 (3)

調整加工の槍先形尖頭器である。

20・21は鋭い先端部と丸みを帯びる基部を持ち、細身で左右対称形の槍先形尖頭器である。どちらも剥片を素材に用い、器体の周縁部に調整加工を施して中央部分には素材面を残している。21は石核と接合する。

23は剥片を素材にして表面側の周縁部に調整加工が施されているものであるが、左側縁の基部に素材の縁辺部をそのまま残存させているため、胴部中央よりも下半部に張り出しが認められる形状になっている。表面側全体を自然面でおおうような剥片が素材として用いられたと考えられる。

24は剥片素材で表面側及び裏面側基部に調整加工が施されているが、右側縁にやや張り出しが認められるものである。

25・26は、縦長剥片を素材とし器体の周縁部に調整加工が施されている。尖鋭な先端部と丸みを帯びる基部を有する。どちらも周縁調整加工の部類に入ろうが、裏面側にも部分的に調整加工が施されている。

27は、剥片を素材にして表面側に平坦な調整加工が認められるが、右側縁に有肩状の張り出しが明瞭に看取できる。透明度の低い白乳色の黒耀石が用いられている。

28は、剥片を素材に用いて器体の上半部に平坦な調整加工が施されているものであるが、長幅比が1:1のほぼ正四角形を呈する特徴的な形状を有する槍先形尖頭器である。素材である剥片の打面部は残置されている。多分に未成品的な要素を有しているが、器体の上半部は細かい調整加工によって整えられているため、図示して検討を加えた。

槍先形尖頭器・大（第11図29～第13図44）6cm前後から8cmくらいの大きさのものが大部分を占める。これらの尖頭器を記述の便宜上、平面形が左右対称形のものと、左右非対称形のものにわけて説明する。

対称形の一群（第11図29・30、第12図31～38、

第13図43）：ほぼ左右対称形を呈し、両面あるいは片面に調整加工が施されていて、横断面形は凸レンズ形かD字形を呈し、厚さは薄手である槍先形尖頭器である。本群にまとめた槍先形尖頭器のなかで、縁辺部まで細かい調整加工を施し完成品と考えられる資料は、欠損品によってその多数が占められており、完形品として残っている資料は多分に未成品的な要素を有していると考えられる。まず欠損品から見ていく。

29～31は上半部を欠損していて、いずれも復元すると6cm以上の長さを有すると思われる槍先形尖頭器である。

29・30はいずれも幅が2.5cm前後で側縁が直線的であるのに対して、31は前者よりも幅広でその側縁は緩やかに基部から胴部へと弧状を描いている。

29は剥片素材で片面調整加工の部類に入る槍先形尖頭器であるが、その裏面側の基部にも調整加工は施されている。

32・34は下半部を欠損している槍先形尖頭器であるが、復元すると6cm前後の長さを呈するものである。

32は剥片を素材にしてそれを横位に用いているが、その右側縁には主剥離面を切る関係にある折断面があることから、素材である剥片はその端部に折断が加えられた後に、表面側に平坦な調整加工がほどこされたと考えられる。

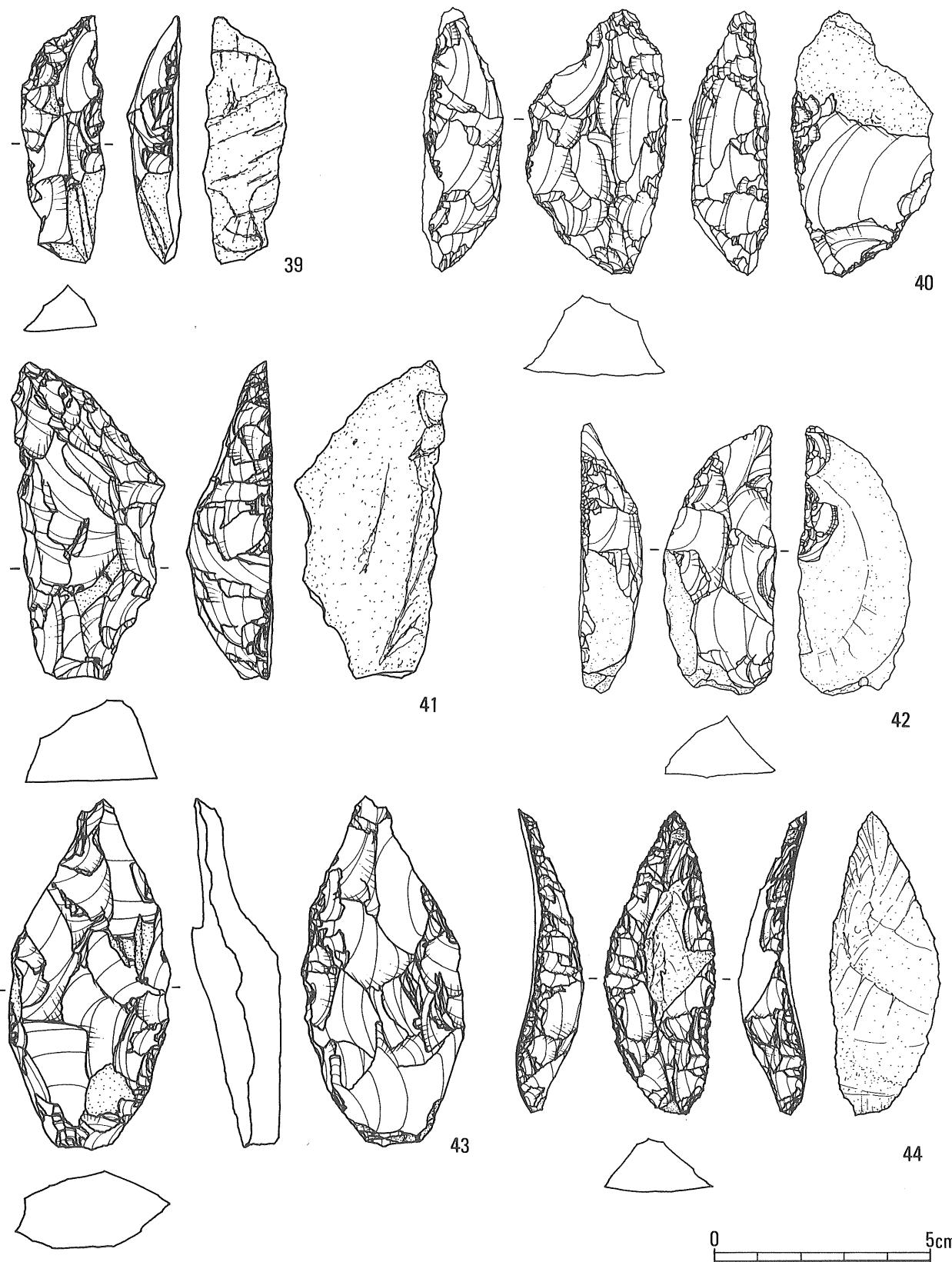
34は両面に調整加工が施されている槍先形尖頭器である。

33・35・43は完形品である。それぞれの資料の形態の差異は顕著であるが、いずれも完成品であるとするのには問題があろう。

33は剥片素材の片面調整加工の槍先形尖頭器であるが、器体に強い反りを有する資料である。

35は両面調整加工の槍先形尖頭器であり、左右対称形を呈し石器の最大幅はその下半部に位置する。

33・43ともに右側縁に先端部からの剥離痕が観



第13図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器 (4)

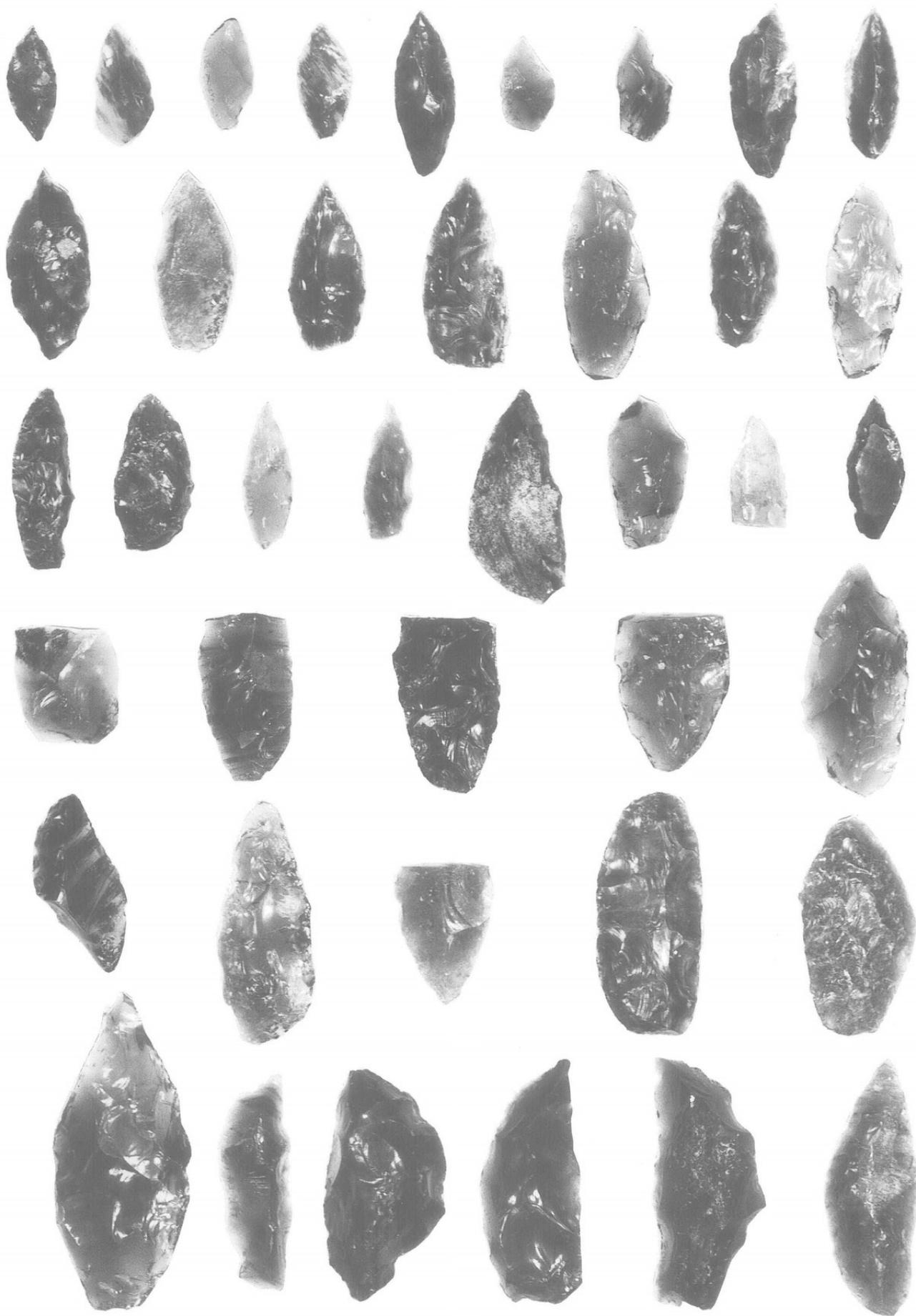


写真8 鷹山Ⅰ遺跡S地点出土の槍先形尖頭器

察できるが、どちらも他の剥離痕に切られていて最終的な剥離痕ではない。

37・38は周縁部には比較的に細かい調整加工が施されているものの、先端部はまだ作り出されていない未成品である。

非対称形の一群（第13図39～42・44）：上記の左右対称形をなす一群に比較して、厚手で、横断面形は三角形か台形に近い。平面形も一方の側縁は直線的であるのに対して、相対する側縁は湾曲し左右非対称形を呈するという特徴を有している。素材に原石を直接的に用いて、片面に調整加工が施されている槍先形尖頭器であるが、調整加工に関して見てみると、周縁部全体にわたって細かい調整加工が施されているものと、部分的にのみ施されているものとがあり、後者は素材を整形した段階の資料であると考えられる。

個々の形状を見ていくと、一方の側縁が先端部において強い湾曲を示すもの（39・42）と、一方の側縁全体が強い湾曲を示すもの（40・44）と、有肩状の張り出しが見られるもの（41）とがあり、いずれも左右非対称形を呈している。40・42では裏面側にも調整加工が施されている。44は表面側の胴部に自然面を部分的に残しているものの、周縁部全体にわたって細かい調整加工が施され形状が整えられている。

槍先形尖頭器・大とした石器は、完成品の点数がわずかであり、その実態が必ずしも明らかではないが、薄手で左右対称形のものと、厚手で左右非対称形のものとがあることを、以上の記述によって指摘した。

S地点の槍先形尖頭器群の特徴 鷹山Ⅰ遺跡S地点で、最も出土数の多い石器は槍先形尖頭器であった。そして第Ⅲ章で詳細に分析・記述されるように、S地点はその槍先形尖頭器の石器製作を行った場所でもあった。そのためこの報告書では、槍先形尖頭器の分類やその位置づけなどは、石器製作技術の検討結果にもとづいて論じられる。

したがってここでは細かい形態や型式の上での

分類を避け、個々の石器についての記録を中心に記述をおこなってきた。

その範囲で、いまS地点出土の槍先形尖頭器群を、他の遺跡の石器群と比較するならば、細部はおくとしても全体としては、鷹山遺跡群と同様に黒耀石原産地遺跡、ないしは黒耀石原産地に極めて近い遺跡として性格づけられる、八島遺跡および男女倉遺跡J地点の石器群と、最も近似した様相をもっているということができる。

これら3遺跡はいずれも、多量の黒耀石製の槍先形尖頭器を多出（多産）し、それらは小形または中形で、比較的粗雑な石器が多く、とくに黒耀石原産地遺跡ならではの、原石素材の石器を共通に、かつ顕著にふくんでいる。

こうした鷹山Ⅰ遺跡S地点・男女倉遺跡J地点・八島遺跡に共通する槍先形尖頭器を、この地域以外のたとえば関東地方のそれと直ちに対比することはむずかしいが、小形で片面・周辺調整の尖頭器の存在などを指標とするならば、研究史上でもしばしば八島遺跡の槍先形尖頭器と比較された群馬県武井Ⅱ遺跡などが、直ちに想起されよう。

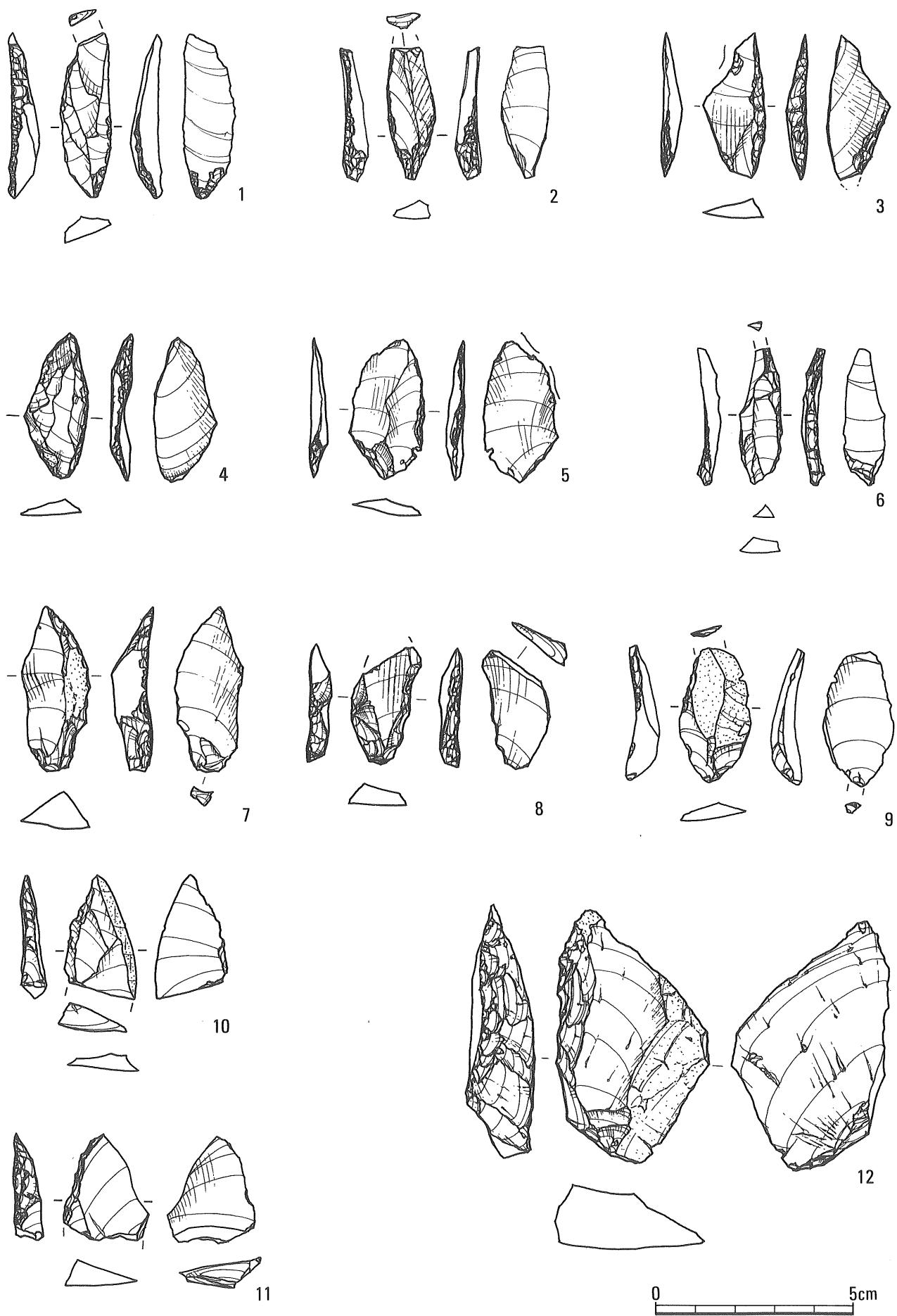
しかしいずれにしても、鷹山Ⅰ遺跡S地点をふくめた黒耀石原産地遺跡の石器群が石器製作の場の資料であるという特殊性と、石器の型式学上の普遍性との相関関係を、今後さらに方法論的に追究する必要があると考えられる。

ナイフ形石器

ナイフ形石器は44点出土した。素材及びその用い方、調整加工の施される部位、全体の形状等の検討をもとに、ナイフ形石器を5つに分類し記述をすすめていくことにする。

I類（第14図1～9）縦長剝片を素材に用いて、器体の背縁部及び刃部側基部の二側縁に調整加工を施しているものである。これらのナイフ形石器を構成する素材・調整加工・形状の要素を個別に見ていく。

素材について見てみると、どのナイフ形石器も



第14図 鷹山I遺跡S地点のナイフ形石器 (1)

共通して薄手の縦長剝片を素材にしているが、7では厚手の縦長剝片が用いられている。素材の打面部の位置については、先端部に位置させているもの（1・3・4・6）と、基部に位置させているもの（2・5・7～9）の両者が見られ、後者のなかには素材である剝片の打面部を残しているものが認められる。両者のナイフ形石器にはそれぞれ素材の軸が石器の主軸に対して左右に傾いているものが含まれている。

次に調整加工に関して見てみると、裏面側から表面側へ調整加工を施すという共通点が認められるものの、1・3においては裏面側の基部に調整加工が施されており、また6においては裏面側の調整加工や先端部及び基部において表面側から裏面側へむかって調整加工を施すいわゆる対向調整が認められる。4では刃部側の先端部にも微細ではあるが調整加工が施されている。

形状を見てみると、1・2・6は全体的に細身で柳葉形状を呈し基部・先端部ともに先鋒であるのに対して、3は切出形状を呈するもの、5・6は比較的に幅を有し基部・先端部ともに丸みを帯びるものである。7は基部が平坦な形状を呈するナイフ形石器である。形状と関連して刃部の位置を見てみると、右刃のもの（1・2・8・9）と左刃（3～7）との両者が見られる。

II類（第14図10～第15図19） 縦長剝片を素材に用いて素材の打面部を基部に設定し、器体の一側縁に調整加工を施しているナイフ形石器の一群である。

いずれも薄手の縦長剝片を素材に用いているが、12では厚手のものが用いられている。13は、表面側から裏面側に調整加工を施すいわゆる対向調整が認められるものである。なお、13の刃部側には表裏にわたって細かい剝離痕が見られる。19の基部側においては部分的に両側縁に調整加工を施している。どのナイフ形石器も打面部を基部に設定して素材を用いているが、頭部調整によるものか打面部を残置させていないものもある。

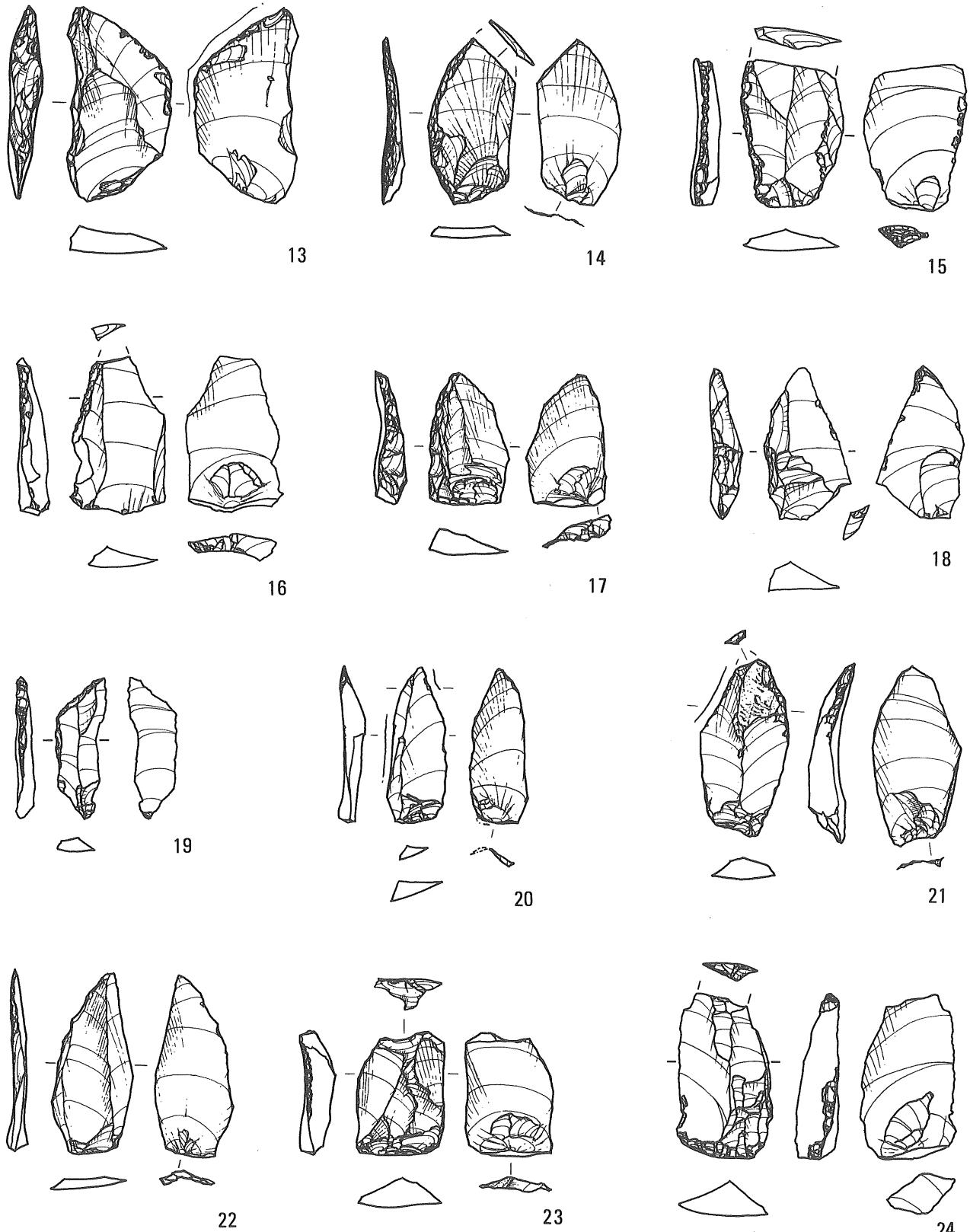
形状の特徴としては、平坦な基部とやや鋭い先端部を有することが指摘できるが、調整加工によって作り出された背縁部が直線的であるもの（13・15～17）とそうでないものとがある。長さを見てみると、12以外は3cm前後にまとまっており、12とそれ以外のナイフ形石器との差異は顕著に看取することができる。本類のナイフ形石器は、いずれも刃部を右刃に位置させていることが特徴の一つとして指摘できようか。

III類（第15図20～24） 縦長剝片を素材に用いて、先端部の一端に調整加工を施しているナイフ形石器の一群である。

打面部が広く末端部がいくらか細まるような形状を呈する縦長剝片を素材に用いて、基部に打面部を位置させている。素材の剝片には頭部調整が顕著であるため、打面部を部分的にしか残置させていないものも見られる。調整加工は概して細かいものが施されているが、23・24では素材を断ち切るような調整加工が見られる。また、23では左側縁に、24では右側縁に連続的な調整加工が施されている。20・21の縁辺部の一部には不連続で微細な剝離痕が観察され、刃部における使用痕として考えられる。基部はいずれも平坦な形状を呈しているが、先端部は鋭いもの（20～22）と平坦なもの（23・24）とがある。

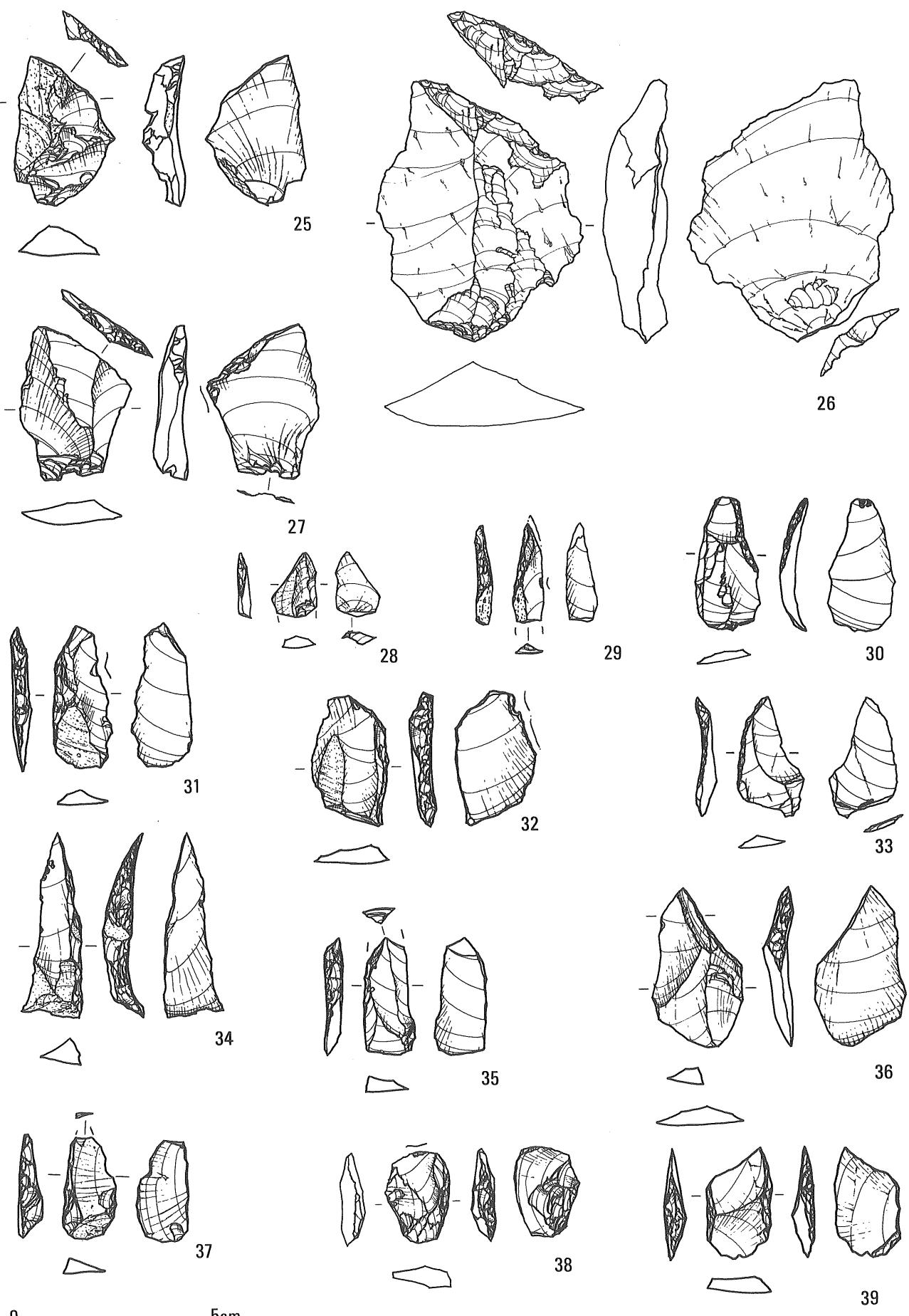
IV類（第16図25～36） 縦長剝片を素材に用いて、素材である縦長剝片の一端を断ち切るように調整加工が施されているナイフ形石器の一群である。

調整加工に関して見てみると、石器の主軸に対してほぼ平行する一側縁に調整加工を施しているもの（29～35）と、斜めに調整加工を施しているもの（25～28・36）とがある。前者は細身のものが多く、後者は幅広のものが多く、両者それぞれに形状・大きさ・素材の用い方にまとまりが看取できる。裏面側から調整加工が施されているものが多いが、27・31・34は表面側からも調整加工が施されている。



0 5cm

第15図 鷹山I遺跡S地点のナイフ形石器 (2)



第16図 虎山Ⅰ遺跡S地点のナイフ形石器 (3)

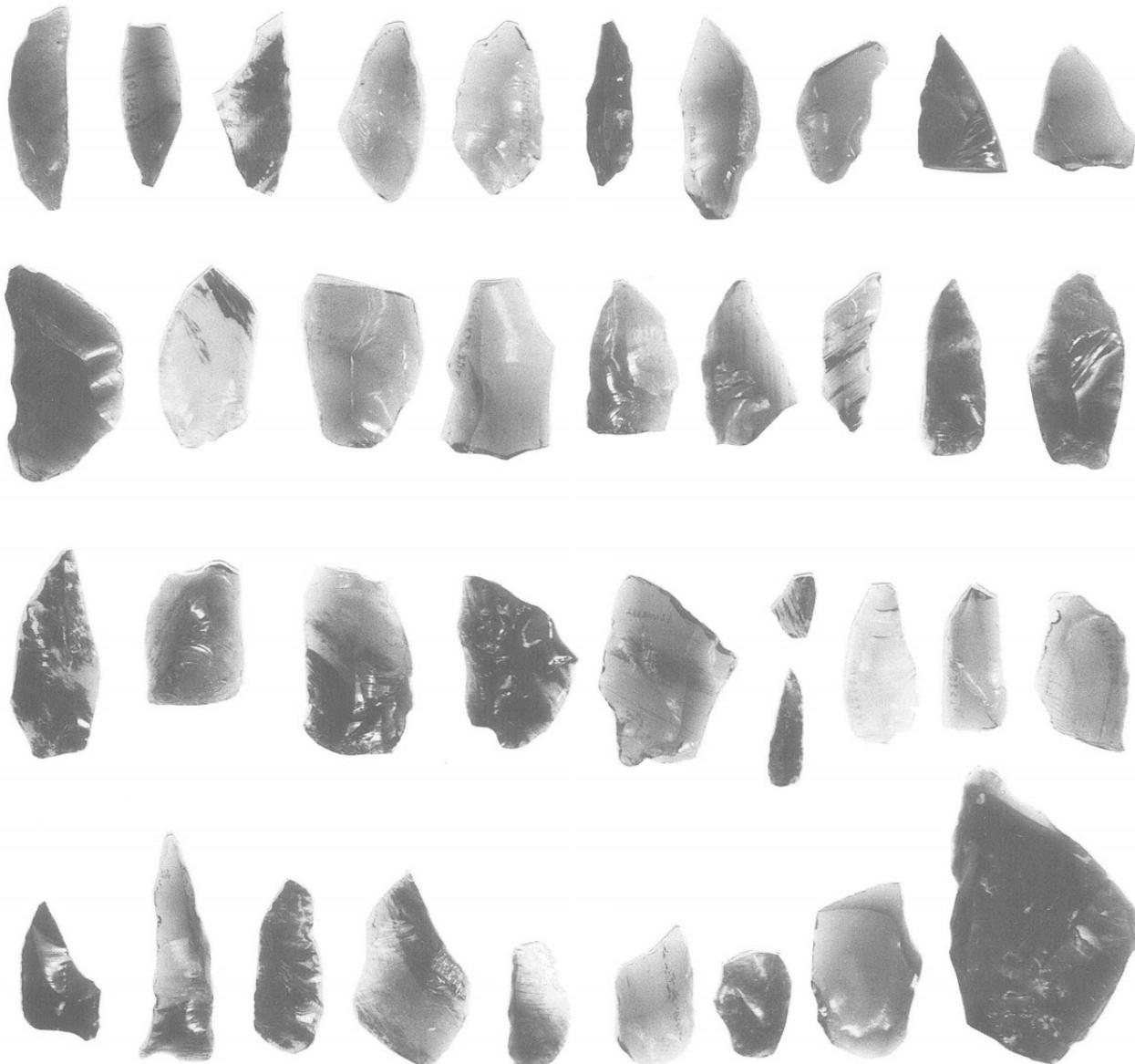


写真9 鷹山I遺跡S地点出土のナイフ形石器

用いられている素材を観察してみると、両側縁が平行せず表面側には自然面が残っているような、不定形な形状を呈する縦長剝片を素材にしている。この点ではこれまで述べてきたナイフ形石器とは、その素材の特徴を異にしている。素材の剝片の打面部を基部に設定してその末端部に調整加工を施しているもの（25～28）と、打面部に調整加工を施しているもの（29～36）とがあり、後者においては素材の剝片の末端部をそのまま石器の基部として残していることが認められる。

V類（第16図37～39） 剥片を横位に用いて、素材である剥片の打面部及びその末端部に調整加工を施し、剥片の両側縁がそれぞれ石器の刃部及

び基部として利用されているものである。

38は、右側縁では裏面側から表面側へ急斜な調整加工を施しているが、左側縁では裏面側に平坦な調整加工を施し、打瘤部を除去していることを特徴としている。刃部には微細な剝離痕が観察される。38・39はともに台形状を呈している。37は、表面側に自然面を残す剥片を素材に用いて、その打面部及び末端部に調整加工が施されているが、石器の先端部はやや先鋒な形状を呈すると思われる。

S地点のナイフ形石器群の特徴 以上、鷹山I遺跡S地点出土のナイフ形石器は5つに分類できることを述べてきた。では、本遺跡のナイフ形石

器がもつ特徴についていくつか触れていくたい。

I類のナイフ形石器は、二側縁に調整加工が施されている茂呂型ナイフ形石器であるが、その特徴としては小形であること、形状にいくつかのバラエティーがあること、などが指摘できる。先端部・基部ともに尖鋭である典型的な茂呂型ナイフ形石器に対して、本遺跡のナイフ形石器は基部に丸みをもつものが主体となっている。一点だけではあるが切出形状を呈しているものもある。

II～IV類のナイフ形石器は、一側縁加工や部分加工とされるものであるが、点数的に安定して組成している。それぞれ、刀器と呼ばれるような定形的な素材は用いられてはいない。

そして、数点の組成ではあるが台形状を呈するV類が存在している。中部高地でも槍先形尖頭器を伴う石器群においては、まだその類例があまり知られていないだけに注目されよう。

本遺跡で出土したナイフ形石器の特徴をいくつか指摘してきたが、それらはながい期間にわたって製作されてきたナイフ形石器の変遷のなかでも、その最終末の段階としてとらえられてきたものの特徴と共通する部分が多い。細かい編年的分析に關しては第IV章においておこなわれるが、本遺跡のナイフ形石器の検出によって、中部高地においてこの段階のナイフ形石器の実態がいくつかの点において明らかにされたと考えられる。

搔器（第17図1～第18図12）

1は縦長寸詰まりの分厚い剝片を素材としている。刃部調整は入念に行われている。

2は分厚い縦長剝片を素材としており、素材の尾部末端に簡単な刃部加工を施している。

3は寸詰まりで分厚い剝片を素材としている。刃部加工は粗雑で鋸歯状の抉りをもっている。

4は分厚い横長剝片を素材としており、素材となった剝片の右側縁の縁辺部に刃部加工を行っている。

5・6は器種中で分厚い剝片を素材としている。

刃部加工は素材の尾部末端に粗雑な調整剝離を行っている。

7は横長剝片を素材としたもので、素材の尾部末端に微細な調整剝離を施して刃部加工としている。この石器の刃部の稜は摩滅が著しく、搔器として非常に利用されていたことを示唆している。

8は縦長で分厚い剝片を素材としている。刃部加工は素材の頭部に行われ、これによって素材の打面は取り除かれている。刃部加工は粗雑でそろっていない。

9は板状の礫を素材としている。刃部加工は素材の一端に行われているが、粗雑な調整によって刃はそろっていない。

10～12はいずれも親指大の小形の一群で、石核が素材となっている。刃部加工は粗雑である。

1～12の搔器はいずれも黒耀石を石材としている。

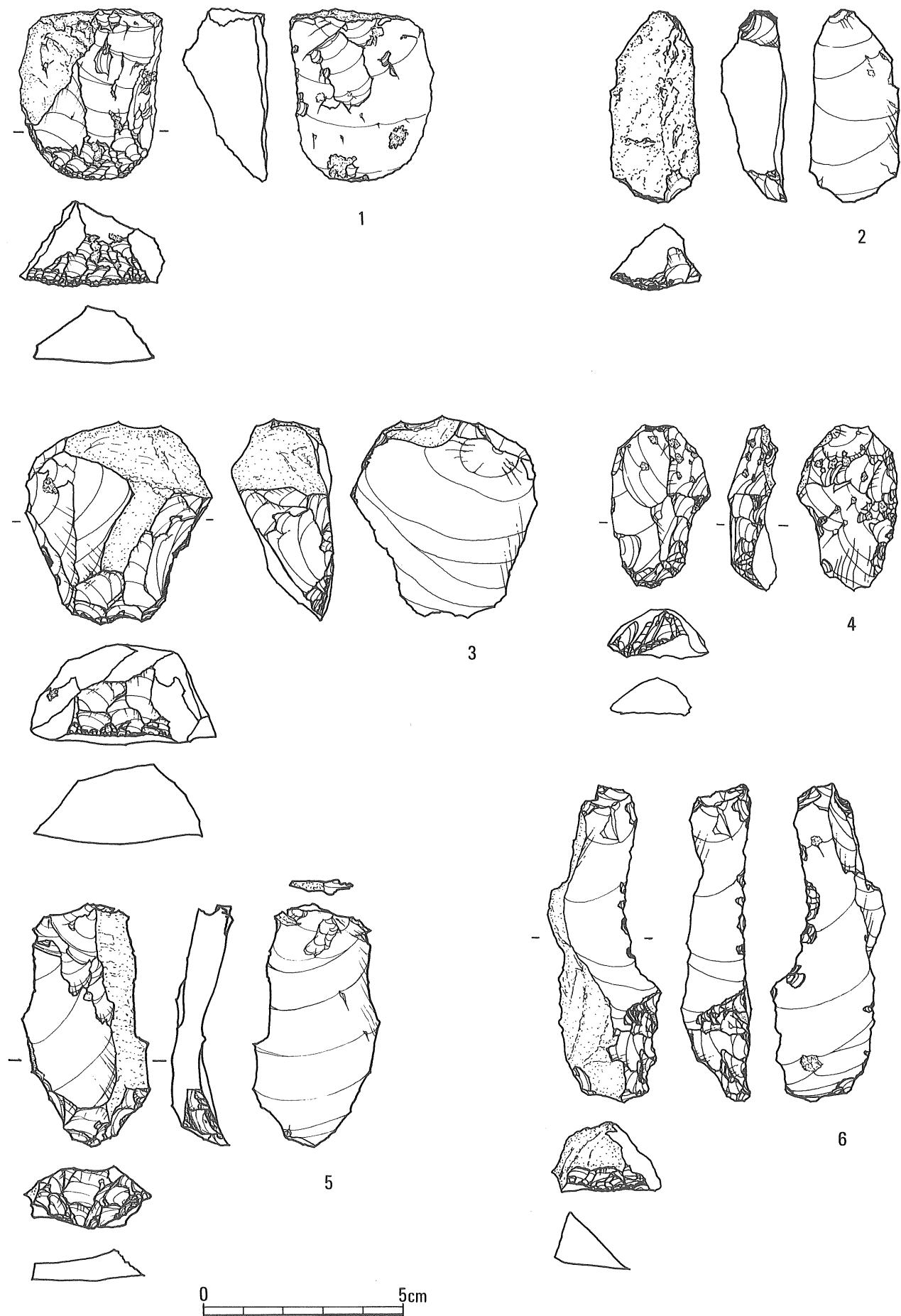
削器（第19図1～第20図11）

1は粘板岩の縦長の剝片を素材とした大形の削器である。素材に対する二次調整は、素材となつた剝片の右側縁部に微細な刃部加工を施して刃としている。なお、1以外の削器はすべて黒耀石を石材としている。

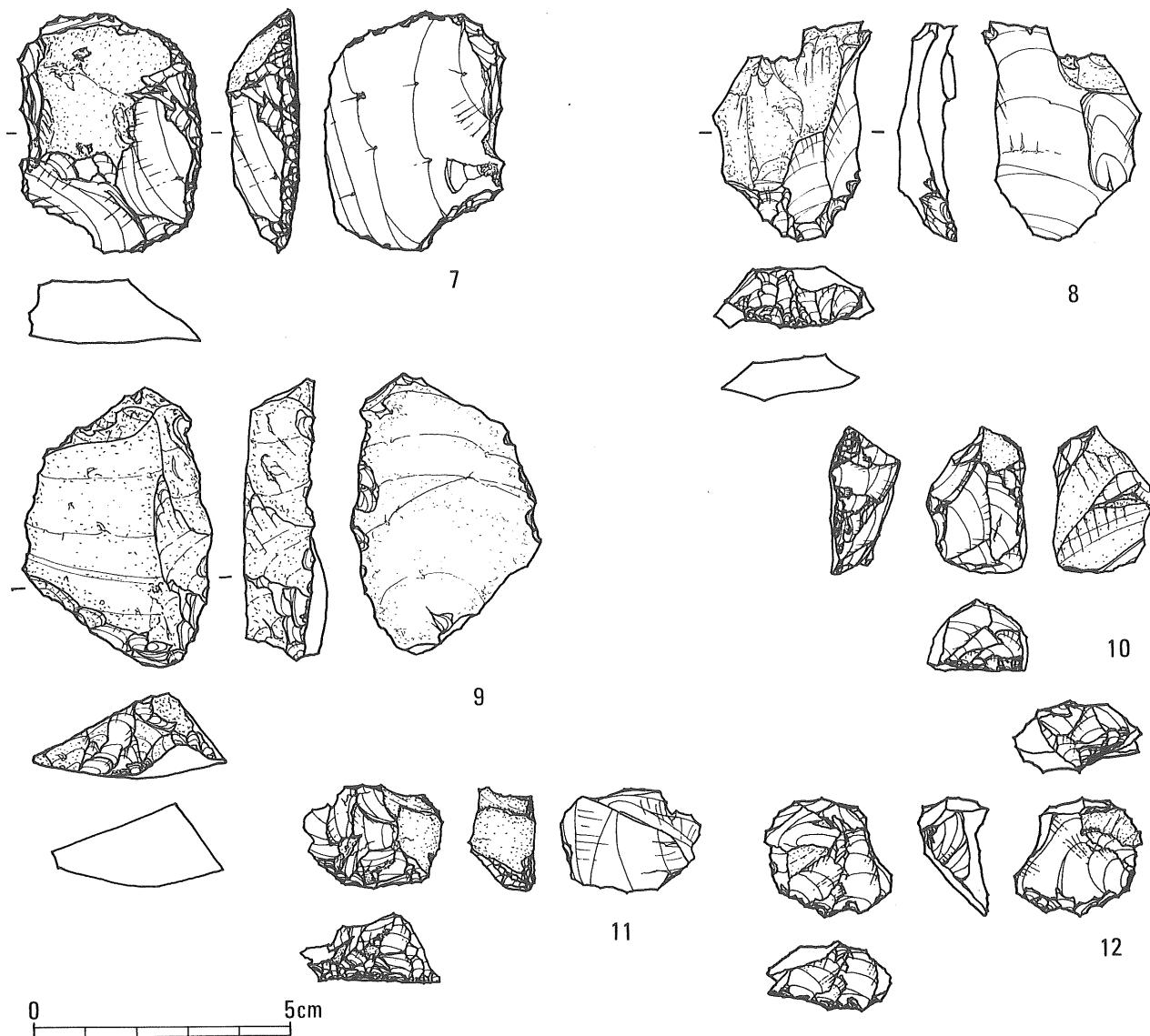
2～4は比較的薄手の縦長の剝片を素材とした中形の削器の一群である。2・3は素材の左側縁部に微細な刃部加工を施しており、特に3においては刃部加工によって2か所の抉入部が作り出されている。4は素材の右側縁部に微細な刃部加工を施している。2・4は石器の下半分を、3は石器の上半分をそれぞれ欠損している。

5は比較的薄手の板状の礫を素材としており、刃部加工は素材の一端に行われている。石器は上半分を欠損している。

6・7は分厚い縦長の剝片を素材としている。6では素材の右側縁部に、7では素材の左側縁部にそれぞれ刃部加工が行われている。素材となっ



第17図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の搔器 (1)



第18図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の搔器 (2)

た剥片が分厚いため、刃部加工は粗雑な鋸歯状剝離が主体となっており刃はそろっていない。

8は寸詰まりの剥片を素材としており、素材の末端部に鋸歯状剝離が行われている。

9は分厚い剥片を素材としており、素材の末端部に鋸歯状剝離が行われている。

10は分厚い板状の礫を素材としており、鋸歯状剝離を主体とした刃部加工を行い抉入部を作出している。

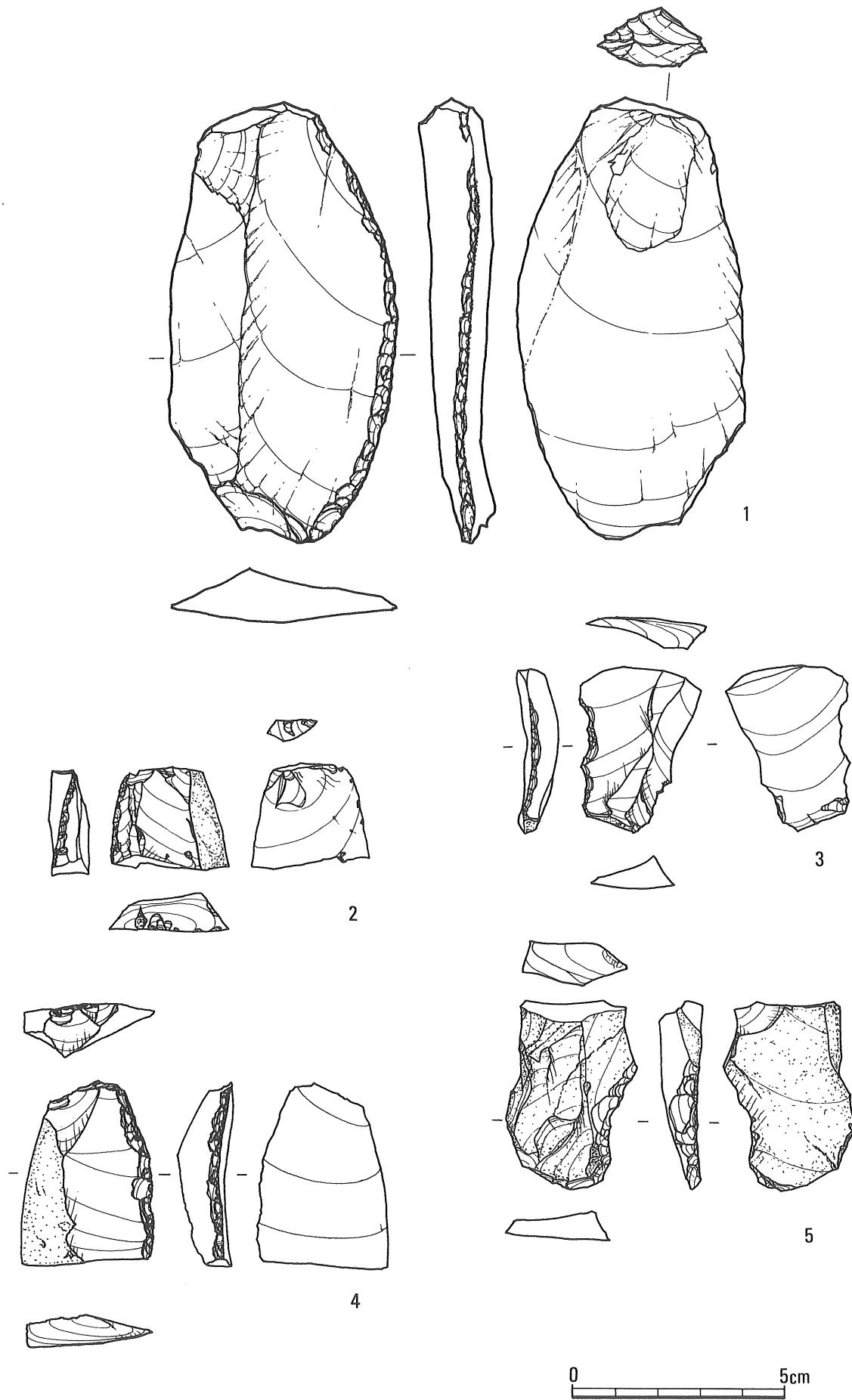
11は分厚い縦長剥片を素材としており、素材の左側側縁部に鋸歯状剝離を主体とした刃部加工を行い抉入部を作出している。

10・11はともに鋸歯状剝離を主体とした調整加

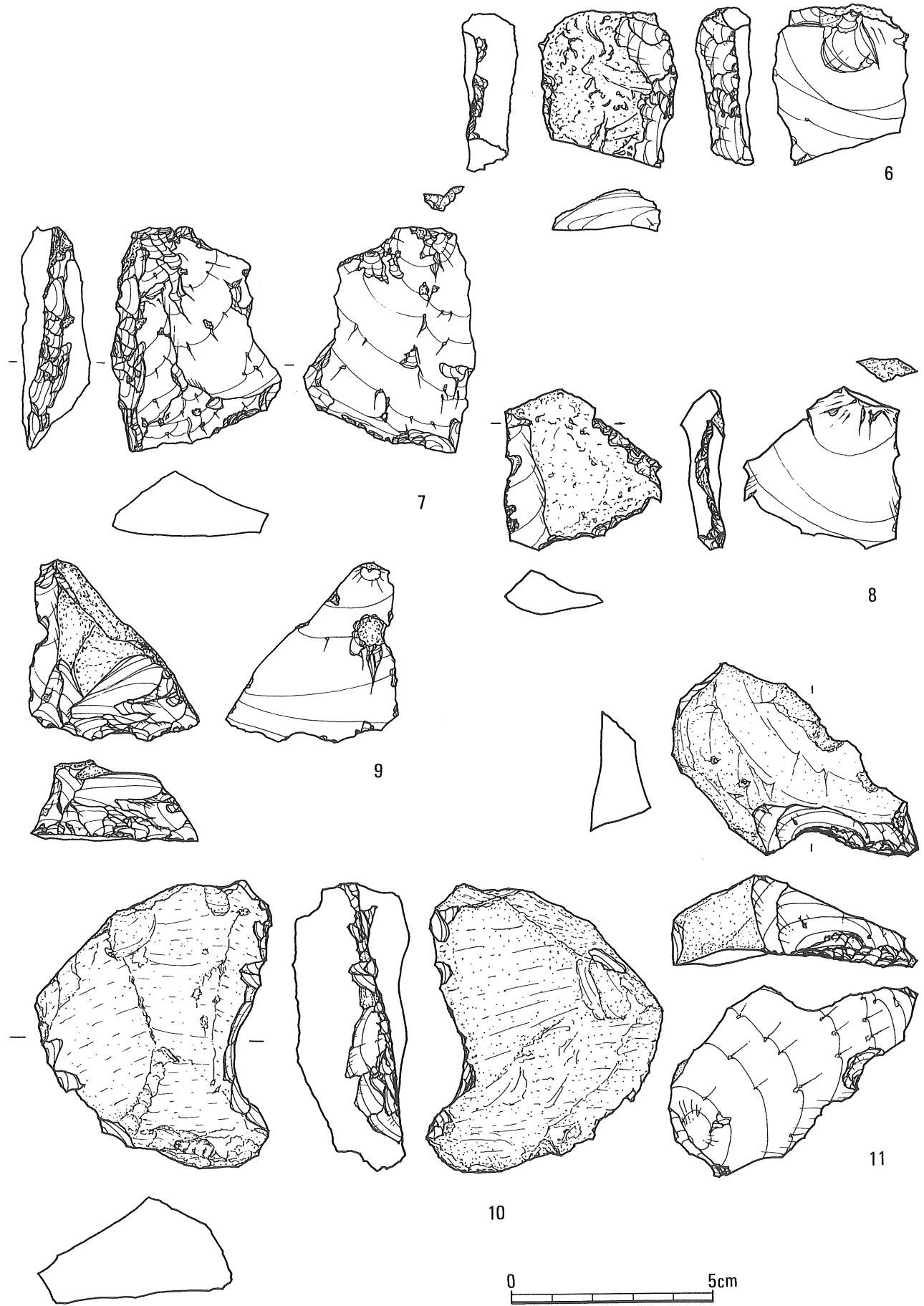
工によって抉入部を作出し、この抉入部に微細な調整剝離を行うことによって入念に抉入部の縁辺を整えている。このようにして作出された刃部の刃先の角度は鈍い。10・11のような石器はいわゆる抉入削器と呼ばれるものであろう。

彫器 (第21図1~4)

1は横長の剥片を素材とした周辺調整の槍先形尖頭器の未成品を彫器に転用した例である。樋状剝離によって、3条の彫刀面を石器の右肩に作出した後、これら3条の彫刀面に対向する樋状剝離を石器の左肩に行おうとして失敗し、欠損したものと見られる。



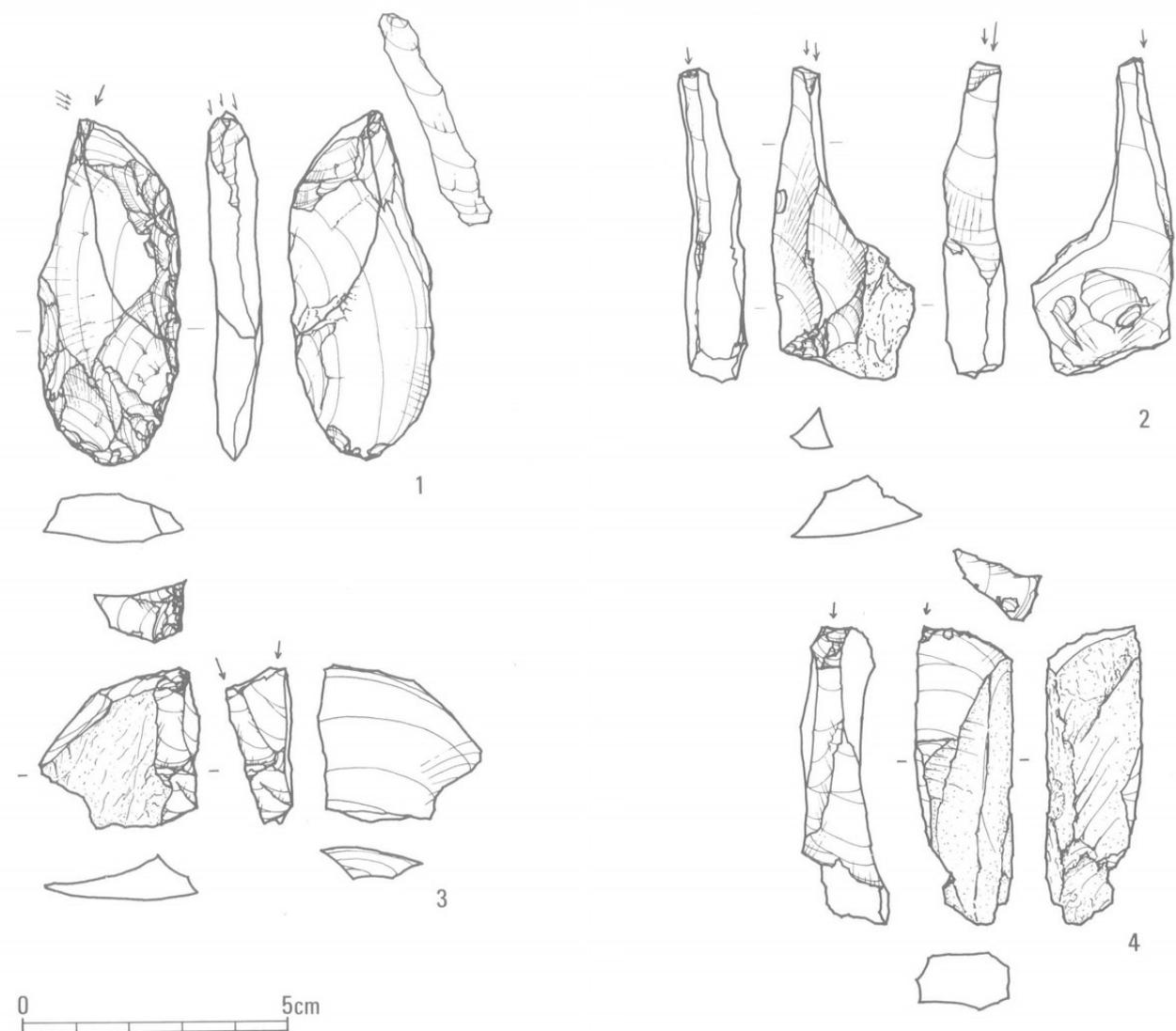
第19図 膁山Ⅰ遺跡S地点の削器 (1)



第20図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の削器 (2)



写真10 鷹山I遺跡S地点出土の搔器・削器



第21図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の彫器

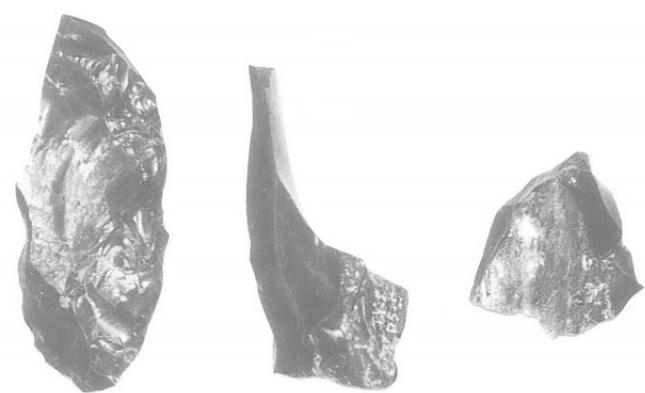
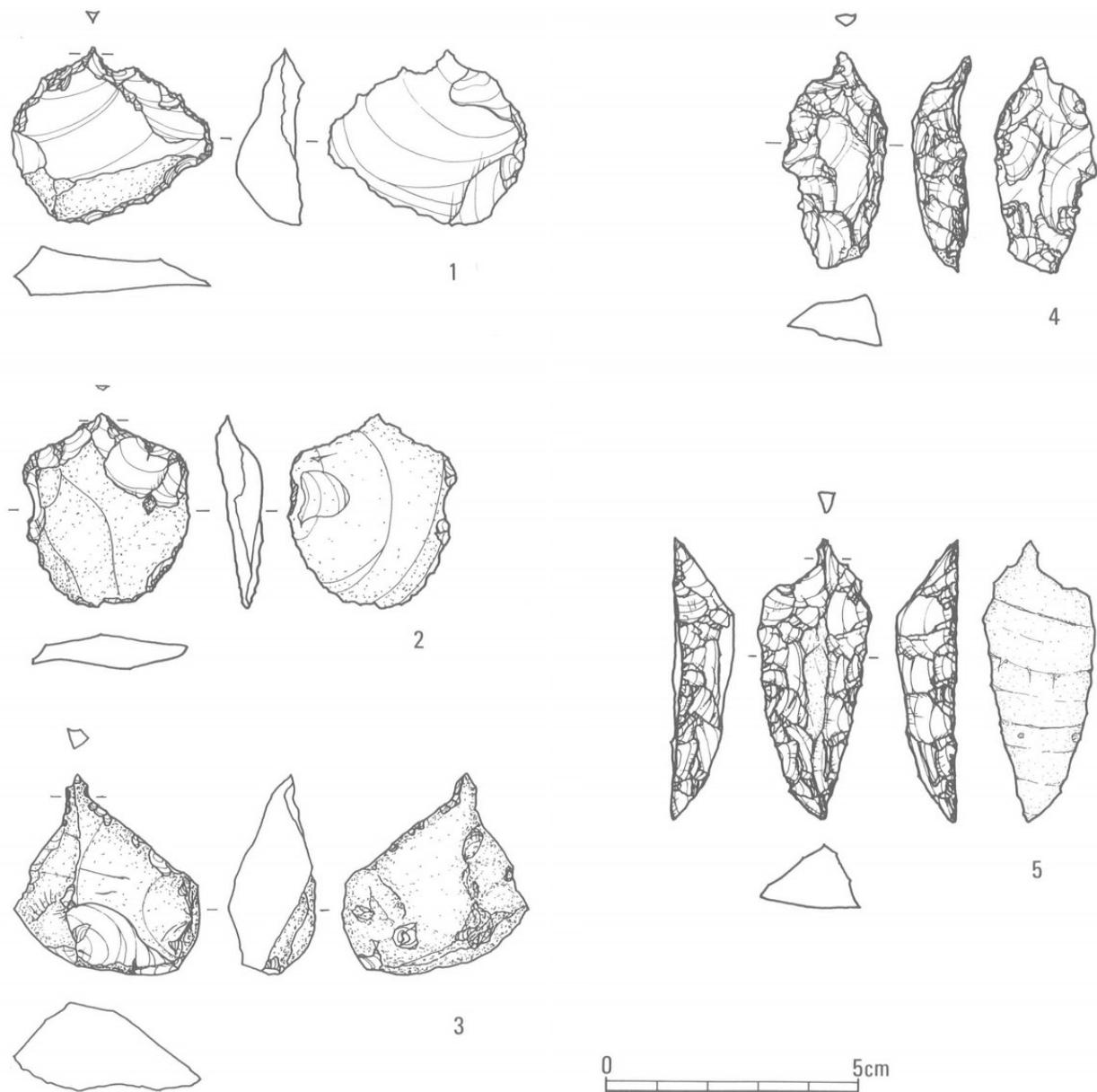


写真11 鷹山Ⅰ遺跡S地点出土の彫器



第22図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の揉錐器



写真12 鷹山Ⅰ遺跡S地点出土の揉錐器

2は縦長の剥片を素材としており、樋状剥離は素材の尾部から石器の右肩に2回、左肩に1回行っている。石器の右肩の彫刀面には擦痕が観察される。

3は素材となった剥片の尾部に互いに対向する樋状剥離を行っているものである。素材となっている剥片の頭部は欠損している。

4は棒状の角礫あるいは石核を素材としたもので、平坦剥離を行って加撃面を確保した後に数回の樋状剥離を行って彫刻刀としている。

1～4はいずれも黒耀石を石材としている。

揉錐器（第22図1～5）

1は比較的薄手の横長の剥片を素材としたものである。揉錐器の機能部の作出は素材となった剥片の頭部に行われ、それにともなって素材の打面は取り除かれている。

2・3はいずれも礫を素材としている。2は薄手の板状の礫を素材としている。3は小さな亜角礫を素材としており、礫の形状を活かした機能部の作出を行っている。

3 S地点における遺物の分布と遺跡の構成

遺物分布の構成

S地点の石器群は、前にも述べてきたように2万点を越す遺物が、尾根の部分や平坦面が比較的



写真13 鷹山Ⅰ遺跡S地点の遺物出土状況(1)

4・5はともに横断面D字状のずんぐりした槍先形尖頭器を揉錐器に転用した例である。4は分厚い剥片を素材とした両面調整の槍先形尖頭器、5は礫を素材とした片面調整のものをそれぞれ転用しており、4・5ともに機能部の作出は石器の基部に行っている。

そのほかの石器

そのほかにS地点においては二次加工痕のある剥片が118点出土しているが、これらの剥片にみられる二次加工痕は、いずれも不連続で規則性が観察されず、器種分類が不能であったため、ここでは紹介することは割愛する。

また、剥片の縁辺部に微細な剥離痕をもつ、いわゆる使用痕のある剥片もまた、相当数存在しているが、今回の調査においては分析を行っていない。

そのほかに石器の製作に関わったと考えられる敲石のような石器もS地点には多数あったものと考えられるが、検出することはできなかった。

安定している部分に遺物の分布数が多い傾向がうかがわれる。E・F・G-1・2・3グリッドや、C・D・E-3・4・5グリッドでは、遺物の分布する密度が濃いが、これらのグリッドでは遺物

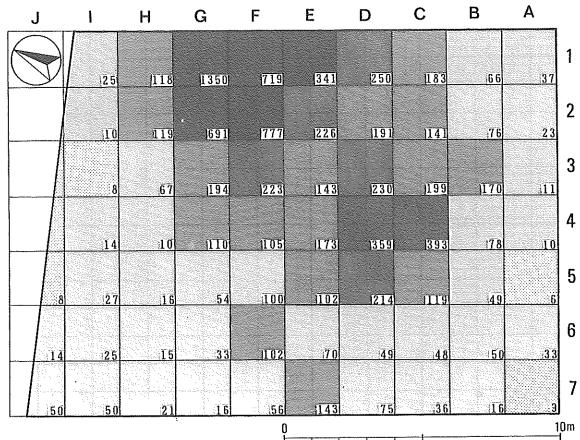


写真14 鷹山Ⅰ遺跡S地点の遺物出土状況(2)

分布の核となるような、遺物が特に密集する場所がいくつも点在している（第23・24図）。遺物分布の核となるような場所は、すでに発掘調査中からいくつか存在していることが指摘されていたが、このような場所はそのほかの場所と比較してどのような特徴をもち、どのような関係をもっているのであろうか。

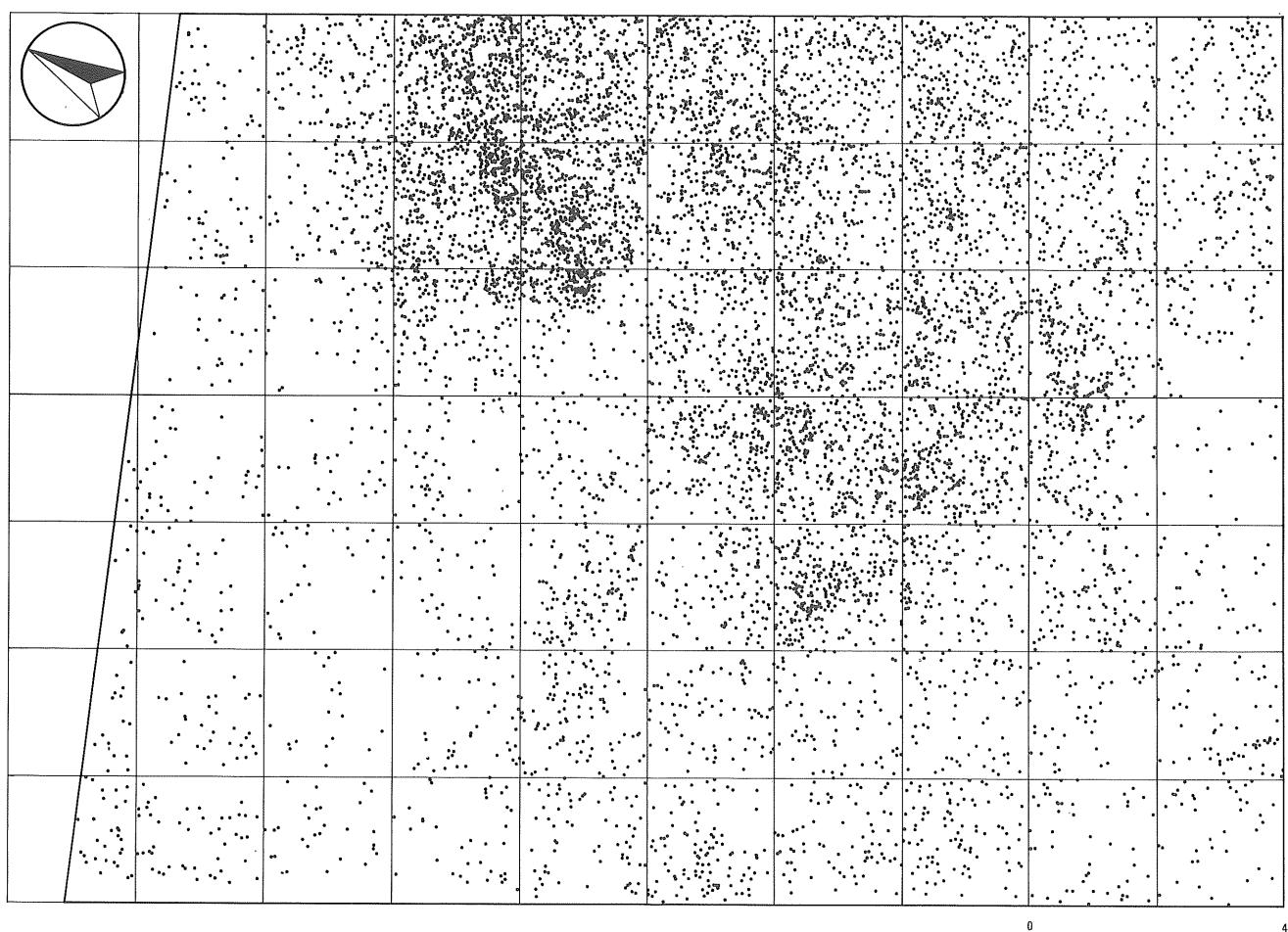
石核と原石 S地点においては、それぞれ684点と1569点の石核と原石が出土しているが、その膨大な量はそれだけでもS地点の石器群の特殊性を強く示している。第25図は、S地点発掘区における石核と原石の分布状態を示しているが、遺物の分布状態の傾向は、S地点の石器群の分布状況の全体の傾向とほぼ同様に、S地点における平坦部や尾根の部分に多い様子がうかがえる。

ところで、第25図中に8か所円で括られている場所があるが、これらの場所は石核や原石が多量

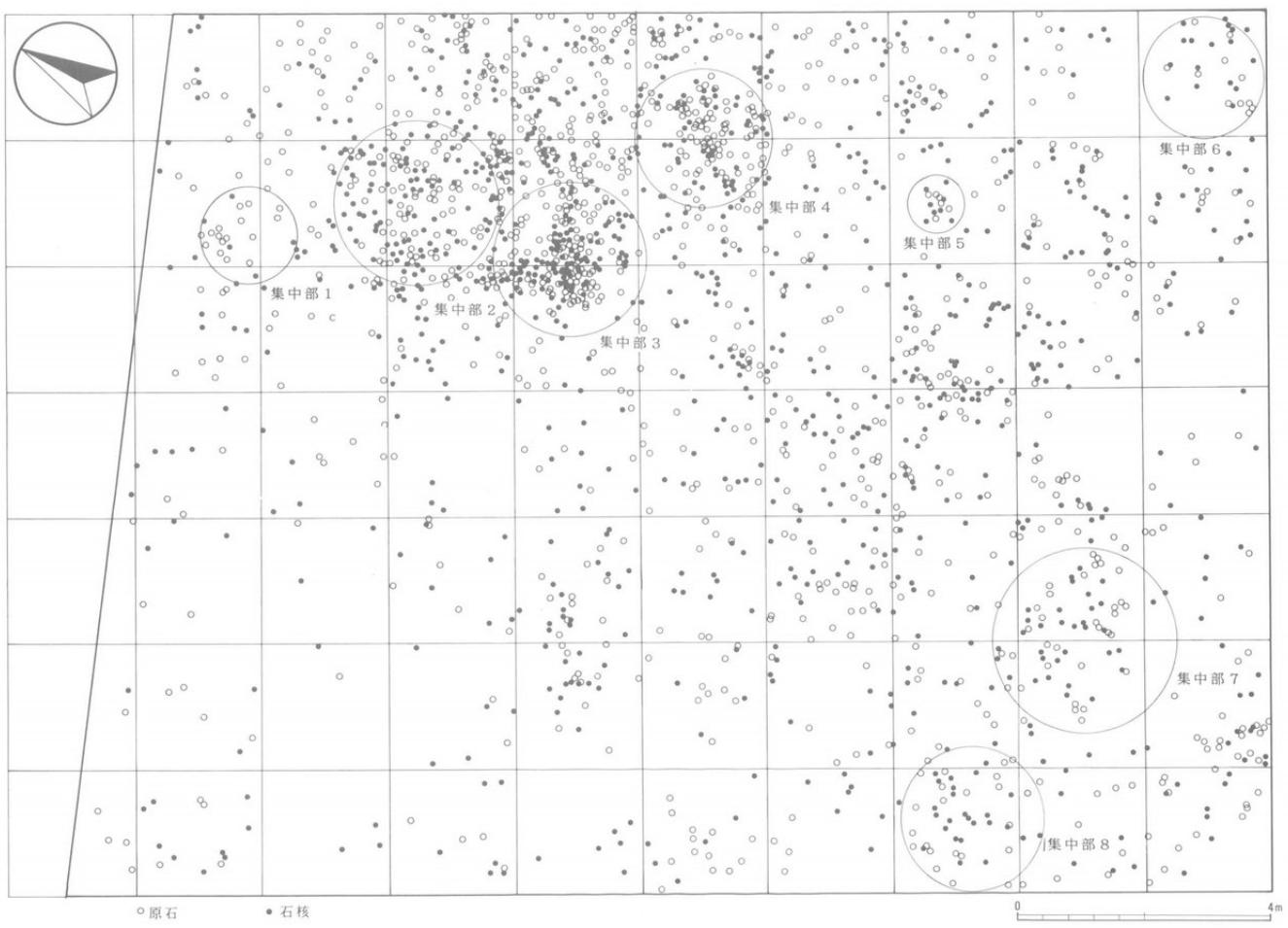


第24図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の碎片の分布
(グリッド別碎片出土頻度)

に、かつ平面的に、あたかも「集積された」ような状況で一括検出され、発掘調査中から注意されていたところである（写真15）。これらの場所は、S地点内の尾根部に散布している礫の分布図と重ね合わせてみると、礫の分布状態がまばらであったり、全くの空白であったりする部分に位置して



第23図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の遺物分布



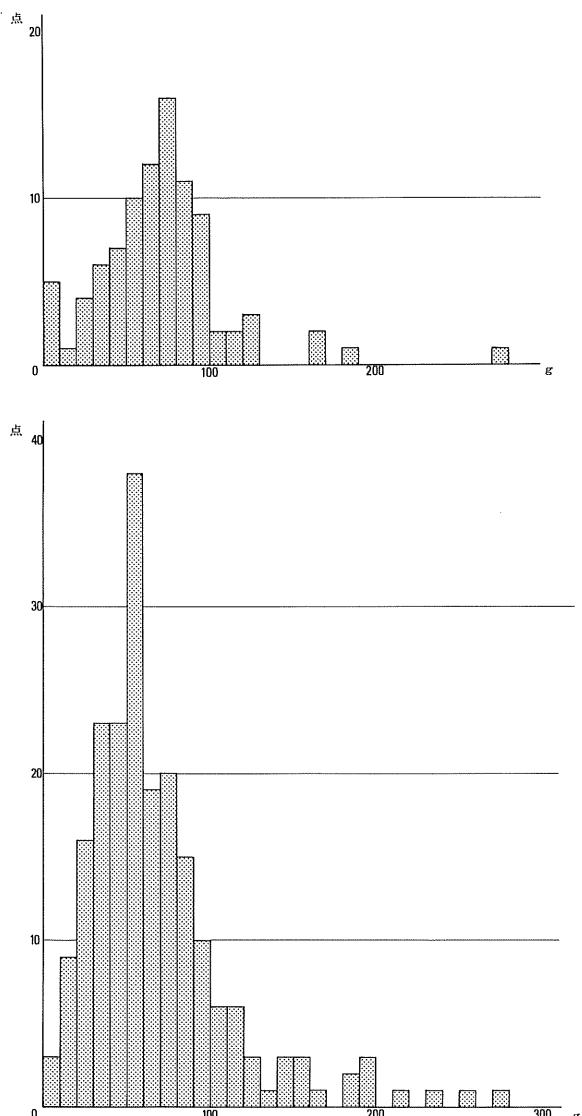
第25図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の原石と石核の分布



写真15 鷹山Ⅰ遺跡S地点の石核・原石集中部 2, 3, 4

いることがわかる（第8図参照）。以上のように石核や原石が集中する場所に「石核・原石集中部」の名前を与えることにした。石核・原石集中部のなかでも最も出土遺物数の多かった集中部3においては、100点以上の石核と原石があり重なるような状態で検出されている。また、集中部7においては、S地点における稀少石材である水晶を石材とする石核や原石が8点と、チャートを石材とする石核1点とがまとまって出土している。

以上のように、検出された状況や、遺物の集積的な出土、稀少石材のまとまりといった現象から、石核・原石集中部としたもの多くは、明らかに人為的に集積されたものであると考えてよいであ



第26図 膽山I遺跡S地点の原石（上）
と石核（下）の重量度数分布

ろう。

ところで、石核・原石集中部は第23・25図をみると、他にも何か所か指摘できそうであるが、これらはⅡ層上部からⅢa層下部まで層位にレベル差をもって出土しており、8か所の集中部とは異なった遺存の状態を示している、「みかけ」上の石核・原石集中部として評価できそうである。

第26図上は、石核・原石集中部のなかでも最も出土遺物数の多かった集中部3における原石の重量頻度を示すヒストグラムであるが、50～100gの重量をもつ原石が多く、70～80gにピークをもっていることがわかる。これらの原石は、そのほとんどが握り拳よりも一回り小さい程度の大きさをもつ角礫である。第26図下は、S地点出土の石核の重量頻度を示すヒストグラムであるが、30～80gのものが多く、50～60gに重量頻度のピークがあることがわかる。これによってS地点にはどのくらいの大きさの黒耀石原石が持ち込まれたり、石核として利用されたり、石核・原石集中部に集められたりしているかのひとつの目安はつくものと思われる。

個体別資料の分布 E3グリッドに位置している第3試掘坑を調査している途中で、赤褐色の縞模様の入った黒耀石を石材とし、板状の礫を素材としている槍先形尖頭器未成品の胴部破片と、その調整剝片と考えられる剝片が多数検出された。

この試掘の結果から、赤褐色の特徴的な縞模様をもった黒耀石の石器群が一定のまとまりをもって分布していることが予想され、また、分布範囲や石器群を分析することによって、槍先形尖頭器が集中的に製作された場所や、槍先形尖頭器の製作技術の一端を知る手掛かりとすることができますとの期待され、これら赤褐色の縞模様をもった黒耀石の石器群は特に注意して発掘されたのである。

第27図は赤褐色縞模様をもつ黒耀石を石材とする石器群の分布する状況を示したものであるが、これらの赤褐色の黒耀石の石器群は、すべてが単

一の個体別資料ではなく、複数の個体が混在している。石器群は2か所の遺物の密集している集中部と、1か所の比較的分布状態の散漫な集中部とからそれぞれ検出された。

集中部1および集中部2は、直径1~2m程の範囲に石器群が密集した状態で検出されている。石器群は、板状の礫を素材とした槍先形尖頭器の未成品と、その調整剝片とによって主に構成され、その石材も各集中部ごとに、それぞれある特定の石材を中心としているようである。集中部1・2ともに集中の中心となる核の場所に、槍先形尖頭器の胴部破片が数点まとまっていることは特に注意される。

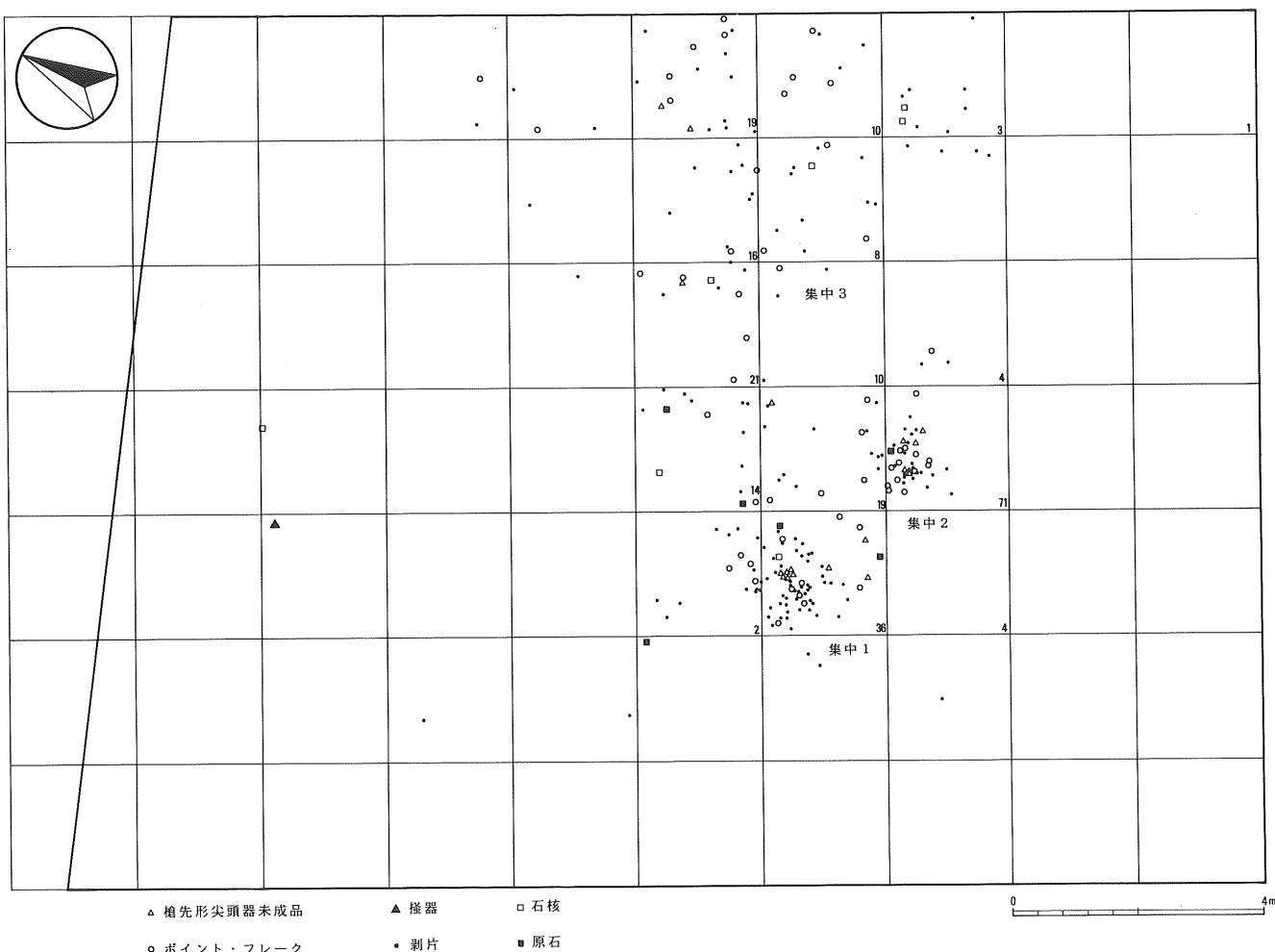
一方、集中部3では、直径8mほどの範囲に比較的分布状態の散漫な状態で検出されている。石器群は、槍先形尖頭器の未成品やその調整剝片が主であることは、集中部1および2と同様である

が、石材の構成が複数の個体が入り混じった状態であることに特徴をもっている。

以上のような個体別資料の分布が何を示しているのかは、いまのところ説明を十分にすることはできないが、S地点の石器群がこの様な特徴的な遺物集中の場をほかにも何か所かもって構成されていたであろう事は想像に難くない。しかしこうした特徴ある黒耀石以外の資料では、個体別、あるいは接合資料の検出はきわめて困難であった。

石器の分布 第28図は、S地点におけるいわゆる定形的な石器の分布を示している。こうした道具としての石器の分布の特徴は、ほかの遺物分布の特徴と同様に、遺跡の尾根の部分や平坦面に多く、谷の部分に少ない。これらはS地点の出土遺物全体の分布状態と一致するもので、特別に特徴としてあげることでもない。

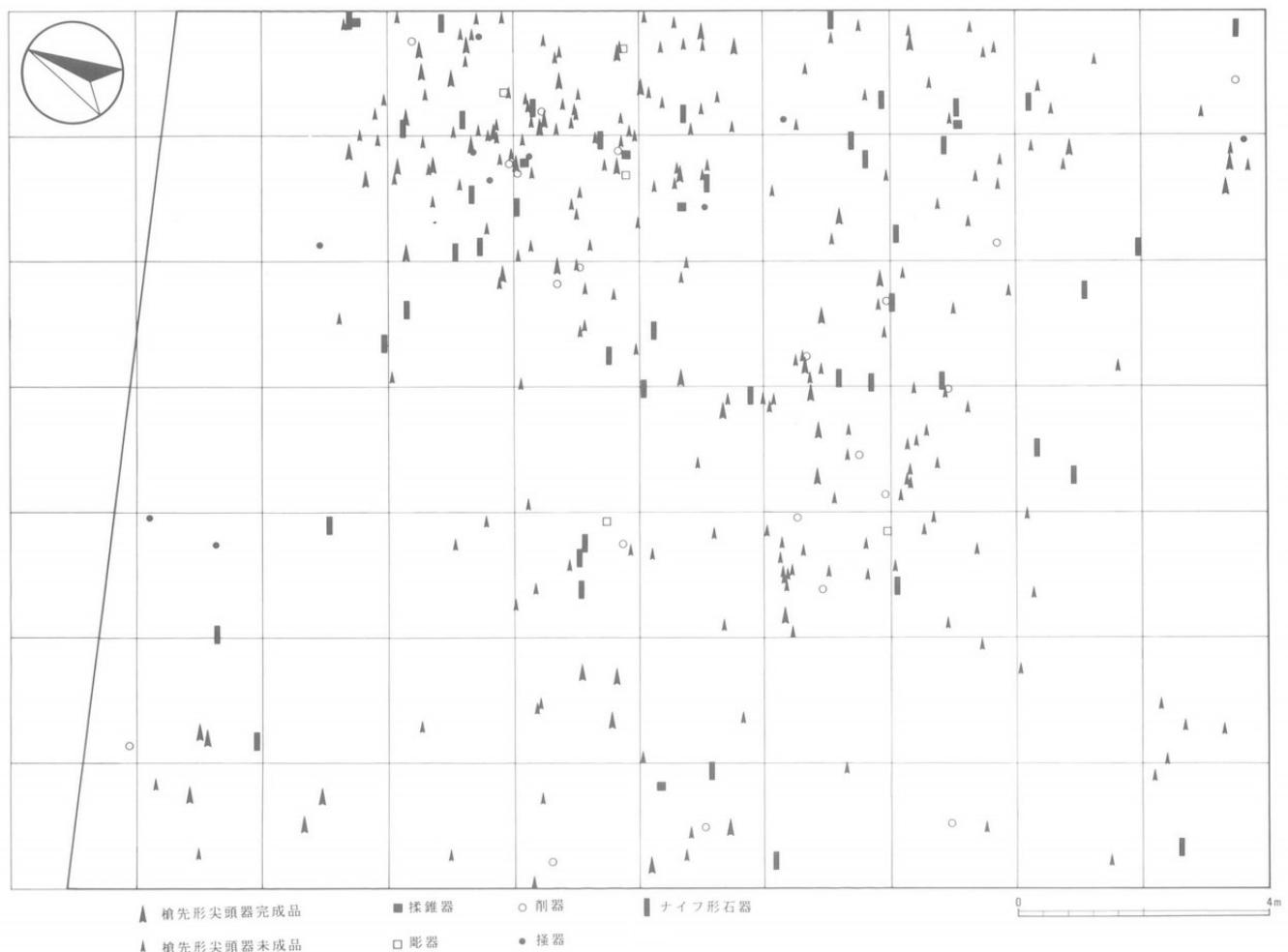
しかしながら、傾向として指摘できるのは、ナ



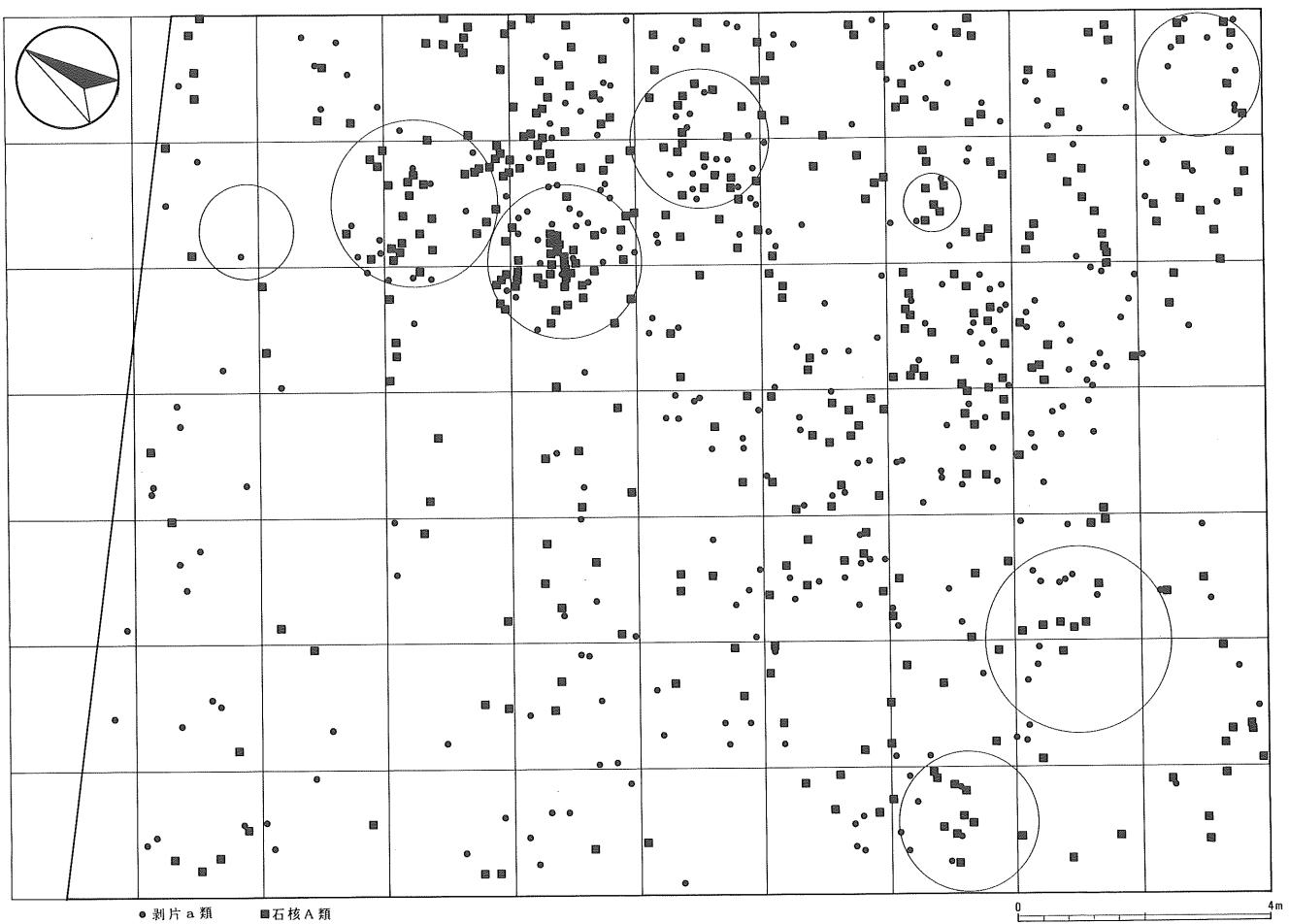
第27図 鷹山I遺跡S地点の槍先形尖頭器の製作状況を示す個体の分布（グリッド隅の数字は破片の数）



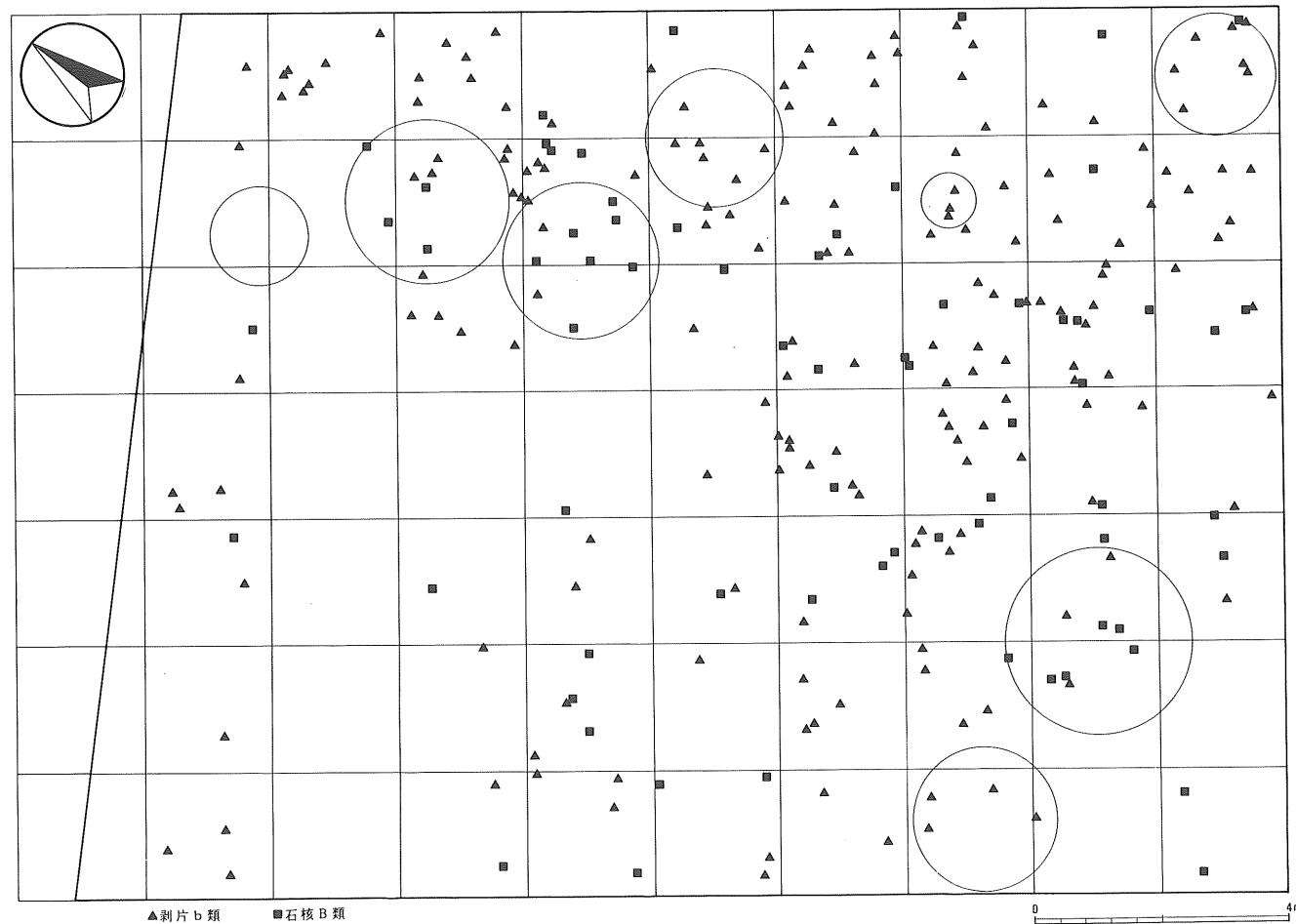
写真16 鷹山Ⅰ遺跡S地点の石核・原石集中部4



第28図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の石器の分布



●剥片a類 ■石核A類



△剥片b類 ■石核B類

第29・30図 鷹山I遺跡S地点の石核A類と剥片a類の分布（上），石核B類と剥片b類の分布（下）

イフ形石器や槍先形尖頭器完成品のように、道具として完成されているものは、遺物分布の密集している場所の周辺部に分布しており、そうではない、道具としては完成されていない槍先形尖頭器の未完成品などは、むしろ、遺物分布の中心部に分布しているということができよう。

石器の素材となる遺物の分布 第29図は、槍先形尖頭器の素材となりうる厚手の剥片（剥片a類）や、それらの剥片を剥ぎとったと考えられる石核（石核A類）の分布を示している。

そして、第30図はナイフ形石器の素材となりうる縦長剥片（剥片b類）と、それらの剥片を剥ぎ

とったものと考えられる石核（石核B類）の分布を示している。なお、2つの図中に示されている円は石核・原石の集中部である。

遺物の分布は両者ともに、そのほかの遺物と同様に遺跡の尾根の部分に集中し、谷の部分では少ない傾向がみられている。「石核・原石集中部3」のように石核・原石が特に密集している場所で、石核A類が密集している以外は、石核A・B、剥片a・b類ともに遺物が特に密集している「遺物分布の核」のような場所をもっておらず、遺跡の尾根部・平坦部にまんべんなく分布しているようである。

4 繩文時代以降の遺構

鷹山I遺跡S地点からは、縩文時代以降の遺構が2基確認され、それぞれ第1号土坑、第1号焼土跡と名付けられた。

第1号土坑（第31図、写真17）

第1号土坑は、第Ⅲ層上面で確認された土坑で、G6グリッド南西隅に位置しており、一部G7、

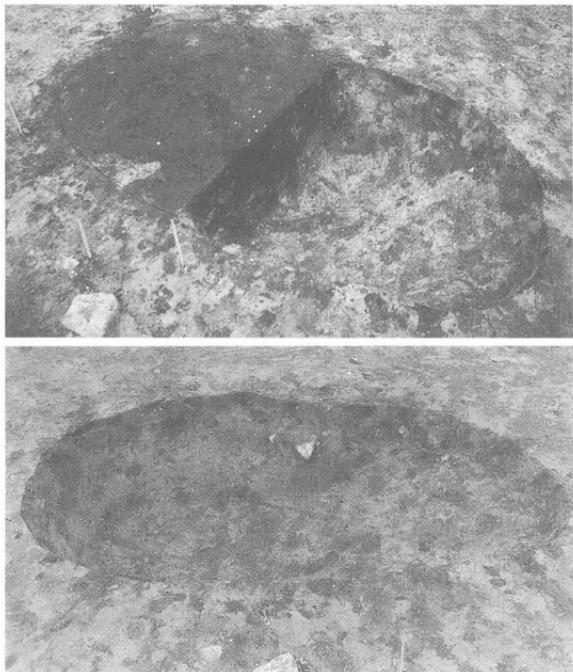


写真17 鷹山I遺跡S地点の土坑
(上：半截状態、下：完掘状態)

H6、H7の3つのグリッドにかかっている。

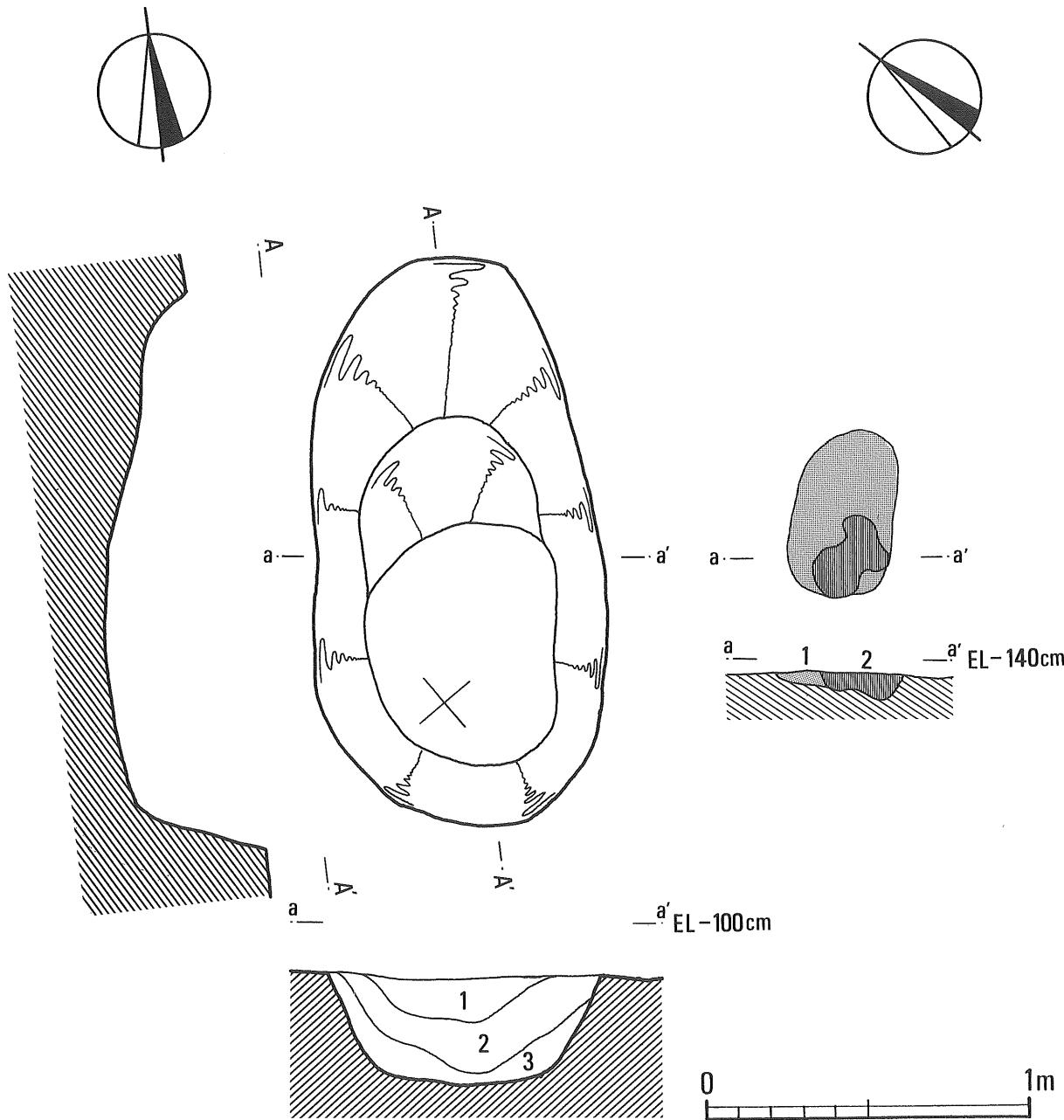
その規模は1.8×0.8mの楕円形を呈しており、長軸方向は南西方向から東北方向に向かっている。土坑は、東北部が浅く南西部が深くその最大の深度は、確認面から30cmを測る。

第1号土坑の覆土は、その色調から上から下へ1～3層に区分した。第1層は微量のローム粒子を含む暗褐色土で、第3層は多量のローム粒子を含む明褐色土で、第2層は第1層と第3層との漸移層である。

土坑が構築された時期は、覆土中よりの遺物の出土がなかったため不明であるが、その覆土の状



写真18 鷹山I遺跡S地点の焼土跡



第31図 鷺山Ⅰ遺跡S地点の縄文時代以降の遺構（左：土坑 右：焼土跡）

態からはⅡ層から掘り込まれたものと考えられ、縄文時代以降に構築されたものとみられる。

第1号焼土跡（第31図・写真18）

第1号焼土跡は、A 1グリッドのほぼ中央にⅡ層中部を発掘中に検出された遺構で、 $30 \times 50\text{ cm}$ の楕円形を呈する範囲に多量の焼土粒子と炭化物

（第2層）をともなった土の焼け込み（第1層）がみられた。焼け込みがおよんだ深さは3cm程度である。

この遺構が構築された時期もまた不明であるが、検出された層位から考えて第1号土坑と同様に、縄文時代以降に構築されたものと考えられる。

5 鷹山Ⅰ遺跡W地点の調査

W地点の位置と調査の目的

鷹山Ⅰ遺跡W地点は、台地の南東部の末端に位置しており、鷹山Ⅰ遺跡の載る台地の南側を画している小さな渓流に接している。その標高は海拔1370m前後でS地点と同じ標高に位置し、小渓流との比高差は1mに満たない（第32図・第3図参照）。

W地点の調査は、渡辺氏宅地内に新たに住宅を建設するのにともなうもので、宅地内および宅地周辺部における鷹山Ⅰ遺跡の広がる範囲の確認と遺跡の保存状態の把握を主な目的とした。

調査は、住宅の建設予定範囲を中心として、南北24.0×1.5m、東西20.0×1.5mの試掘トレンチをT字状に設定し、遺物の出土状況や土層の堆積状況の確認を行った。そして、その調査の所見をもとに建設予定範囲周辺に5か所の2.0×2.0mの試掘坑を設定し、発掘調査を行った。



写真19 鷹山Ⅰ遺跡W地点（遠景は蓼科山）

W地点の基本土層と地形

W地点の南を西から東へと流れる小さな渓流は、大笠山の山裾と鷹山Ⅰ遺跡の載っている台地とを明瞭に分断し、その南側と北側とではその地形の趣は大きく異なっている。山裾側では、急峻な崖が形成されているが、渓流の北側にあたるW地点では安定した平坦面が広がっている。

各試掘坑の調査によって明らかにされたW地点の基本的な層序は次の通りである。

第Ⅰ層 耕作土。削平された後に客土されたと考えられる土層で、しまりが悪く、粘性がほとんどみられない。

第Ⅱ層 褐色土。表土とローム層との漸移層であるが、実際の表土は削平されているため第Ⅰ層との境界は明瞭である。しまり、粘性ともに認められる。

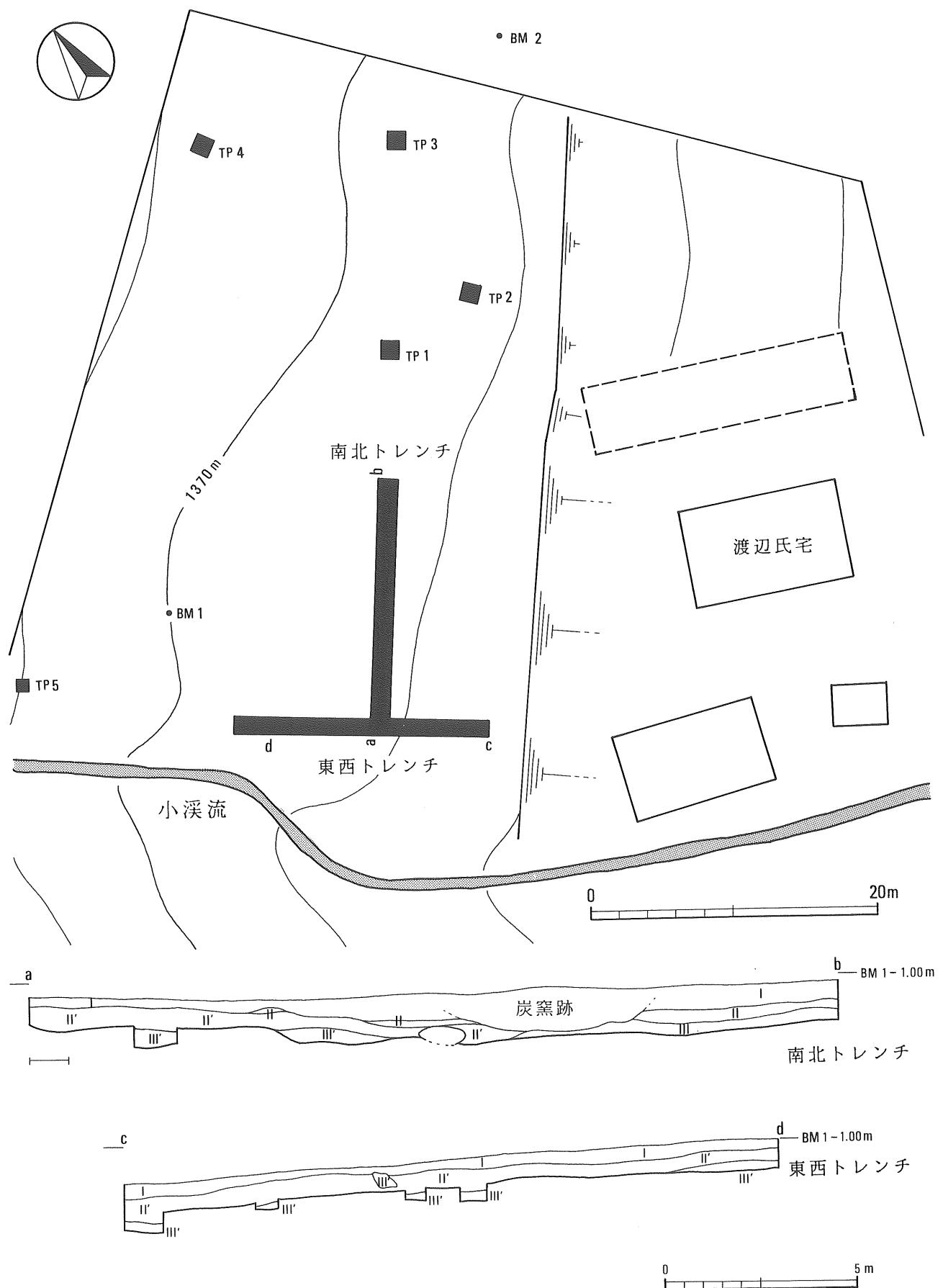
第Ⅲ層 黄褐色土。砂混じりのローム層で、NO.3、NO.4試掘坑では、その上面より10cm前後の深さより先土器時代の遺物が出土している。しまり、粘性がともに認められる。

第Ⅳ層 砂質橙褐色土。腐食した粗粒安山岩の礫が多量に含まれる。しまり良好で、粘性が認められる。この層は第3、第4試掘坑で確認されている。

ところで、東西トレンチの全体および南北トレンチの南部、第5試掘坑において、第Ⅱ層、第Ⅲ層という特殊な堆積状況を示している土層がみられる。それらは、それぞれS地点などの第Ⅱ層、第Ⅲ層とは層準としてはほぼ同一のものとみられるが、砂混じりで、しまりに乏しく、より渓流にそった場所にのみ確認されることから、渓流の旧



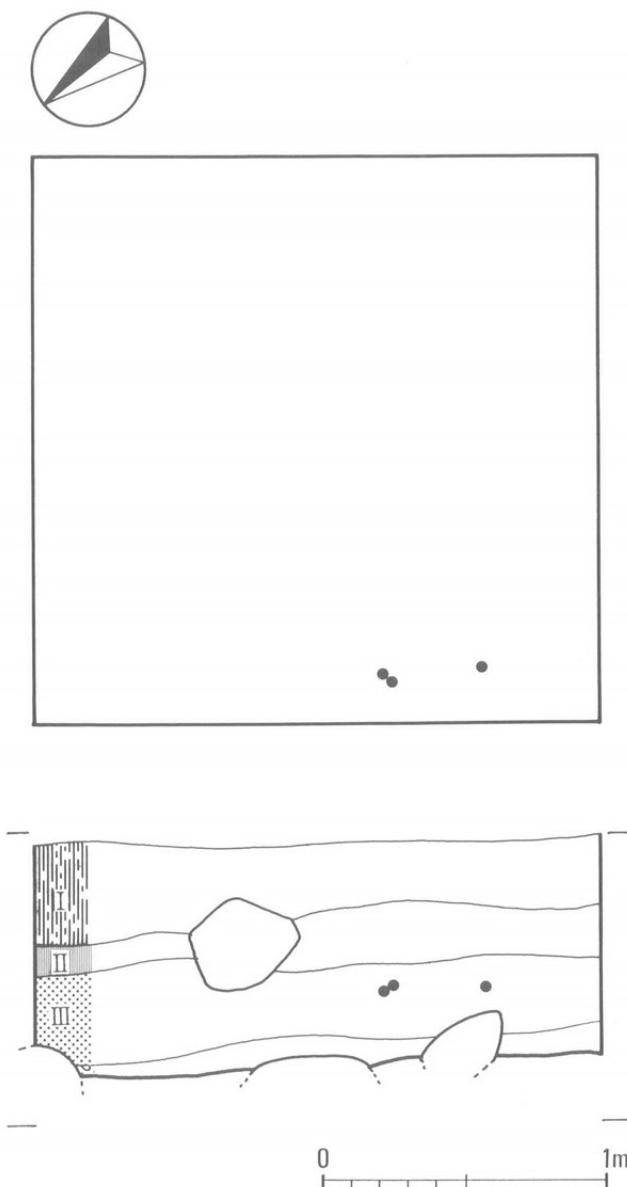
写真20 鷹山Ⅰ遺跡W地点の発掘調査



第32図 鷹山I遺跡W地点の発掘調査（発掘区と地層）

河道部または氾濫原に再堆積した層と考えられる。

したがって、W地点とその周辺の地形は、溪流の侵食と氾濫による再堆積によって形成されたも



第33図 鷹山Ⅰ遺跡W地点第3試掘坑の遺物出土状況

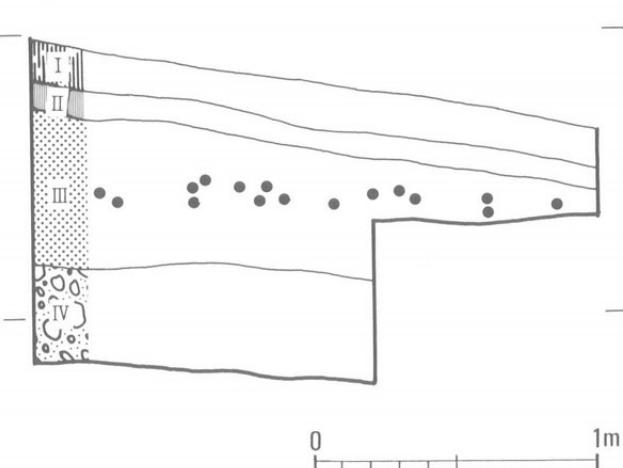
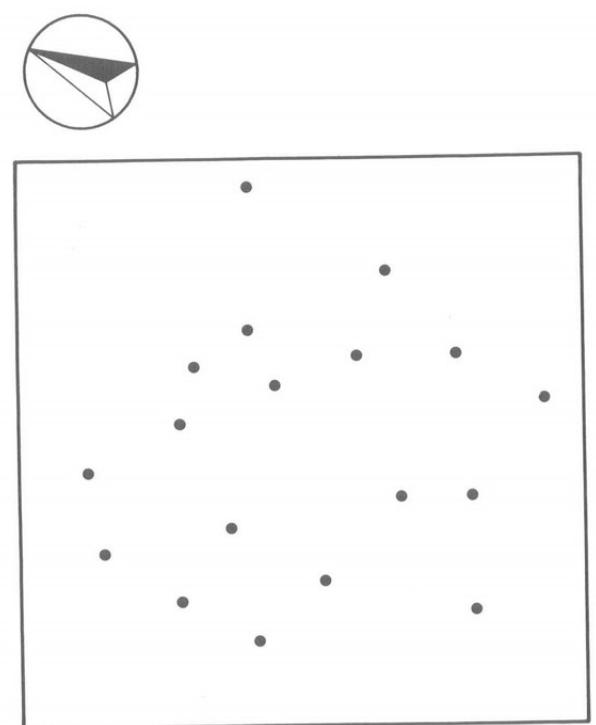


写真21 鷹山Ⅰ遺跡W地点第4試掘坑の遺物出土状況

のと考えられ、その影響は現在の河道の北側、S地点に向かって約20m付近までおよんでいるものと考えられるのである。つまり、鷹山Ⅰ遺跡南限をほぼその線で押えることができよう。

出土した遺物

W地点では、2か所の試掘トレンチと5か所の試掘坑を設定したが、先土器時代の遺物を包含していたのは、鷹山第Ⅰ遺跡の中心部により近い場所に設定された第3、第4試掘坑の2か所のみであった。



第34図 鷹山Ⅰ遺跡W地点第4試掘坑の遺物出土状況

第3試掘坑からは、2点の刃器状剝片と1点の石核が、第4試掘坑からは、ナイフ形石器1点、彫器1点、刃器状剝片1点、二次加工痕のある剝片1点、剝片・碎片15点の遺物がそれぞれ第Ⅲ層を中心にして出土している（第33～35図）。これらの石器を含めて両試掘坑から合計15点の遺物が出土した。すべて黒耀石を材料としている。

1は横長剝片を素材としたナイフ形石器で、左側先端部に調整加工を施している。石材は黒耀石である。

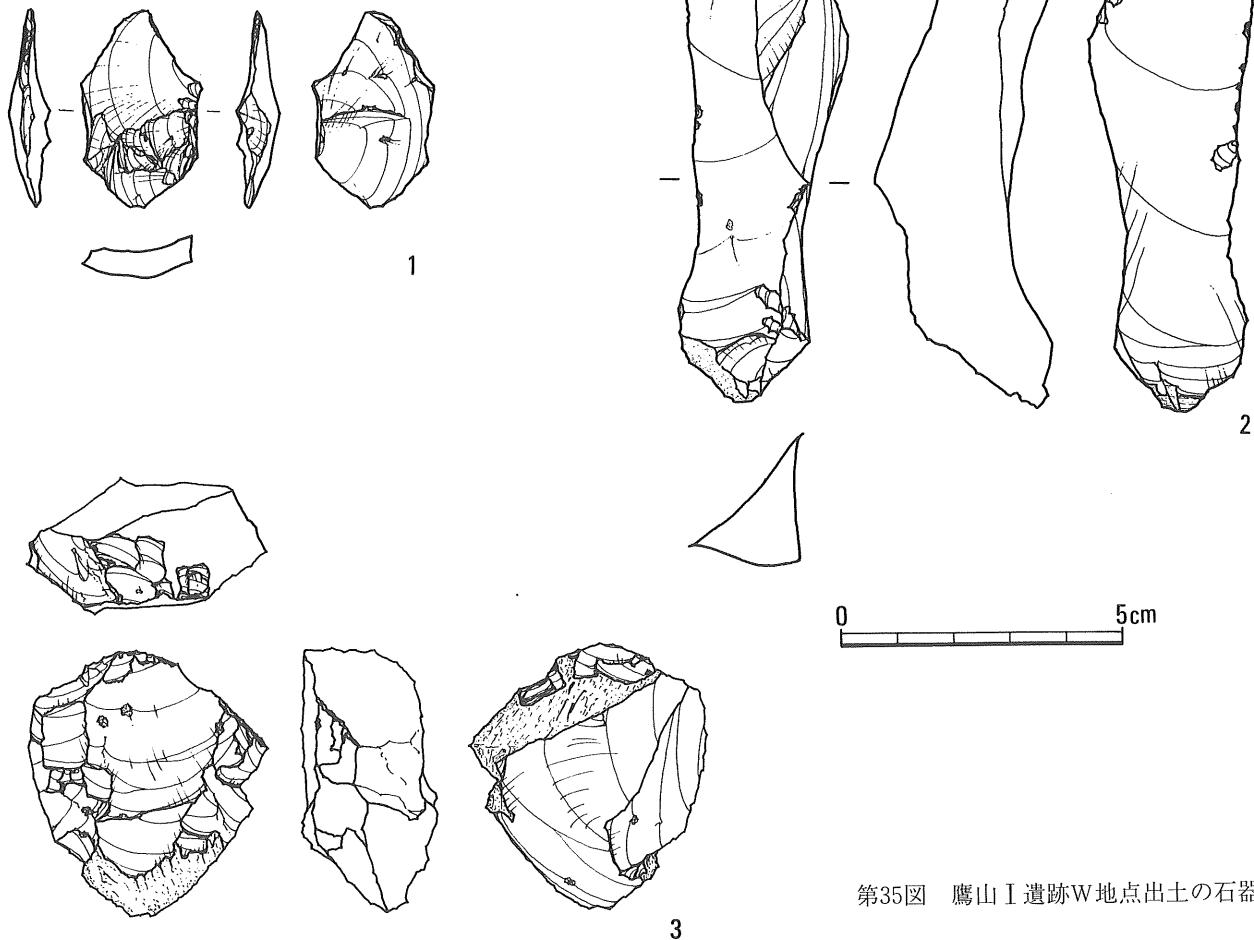
2は黒耀石の刃器状剝片を素材とした彫器である。彫刀面の作出は、素材となった剝片の打面を加撃面として、素材の裏面に行っている。

3は黒耀石を石材とする石核で、その形状は剝片の剥離によって扁平状になっている。

なお、1、2は第4試掘坑からの出土で、3は第3試掘坑からの出土である。

調査所見

W地点の調査により、渡辺氏邸建設予定地は、小溪流の旧河道部にあたることが明らかにされた。また、5か所の試掘坑の調査によって、鷹山I遺跡の広がる範囲が、遺跡の中心部により近い第3、第4試掘坑周辺までひろがっていたことが明らかにされW地点の南を流れる小溪流が、鷹山I遺跡のひろがる範囲を決定づける大きな地理的な要因となっていたものとして捉えることができ、それと同時に、この小溪流が当時の鷹山遺跡群の自然環境のなかで人々の生活の上で大きな役割りを果していたことも十分に考えられるのである。



第35図 鷹山I遺跡W地点出土の石器

III 鷹山Ⅰ遺跡S地点における石器製作技術

1 石器製作技術にかかる資料

原石とその特徴

原石の意味

「原石」とは一般に、石器に加工する前の岩石そのもの、または石器に加工する以前の状態を表す用語である。一方、石器の「素材」または「原材」などの用語が、「原石」と同義語として報告書や論文中においてよく用いられる。しかし、それはあくまで石器製作工程の復元や、一遺跡での石器組成に関連して用いられるべき用語であり、きわめて限定された意味を表現するものと考えられる。原産地遺跡の研究を一遺跡内での問題ではなく、先土器時代の人の動きと、より広い地域間の問題として追求するためには、その間の原石の消費、石器の製作とその消費と並んで、原石の獲得・補充（需給関係）といった行動の存在を軽視するわけにはいかない。

今回の鷹山遺跡群に代表される黒耀石原産地遺跡の問題もまた、遠隔地へと持ち運ばれて消費された石材・石器の動きを、S地点という一つの遺跡内での問題として片付けてしまうのではなく、遺跡群全体、そして周辺地域の黒耀石石器群との関連として捉えていくことが要求されてくるのである。そのため本文において「原石」という用語に対しては「人が日常生活に必要な道具である石器を補充・製作するための原料として、意図的に原産地から選択して遺跡内に持ち込んだ石材」という意味を改めて付与しておきたい。

黒耀石の産出状況

S地点のことを述べていく前に、ここで鷹山遺跡群における黒耀石の分布状況について簡単に触れておきたい。『鷹山遺跡群Ⅰ』の報文中に詳し

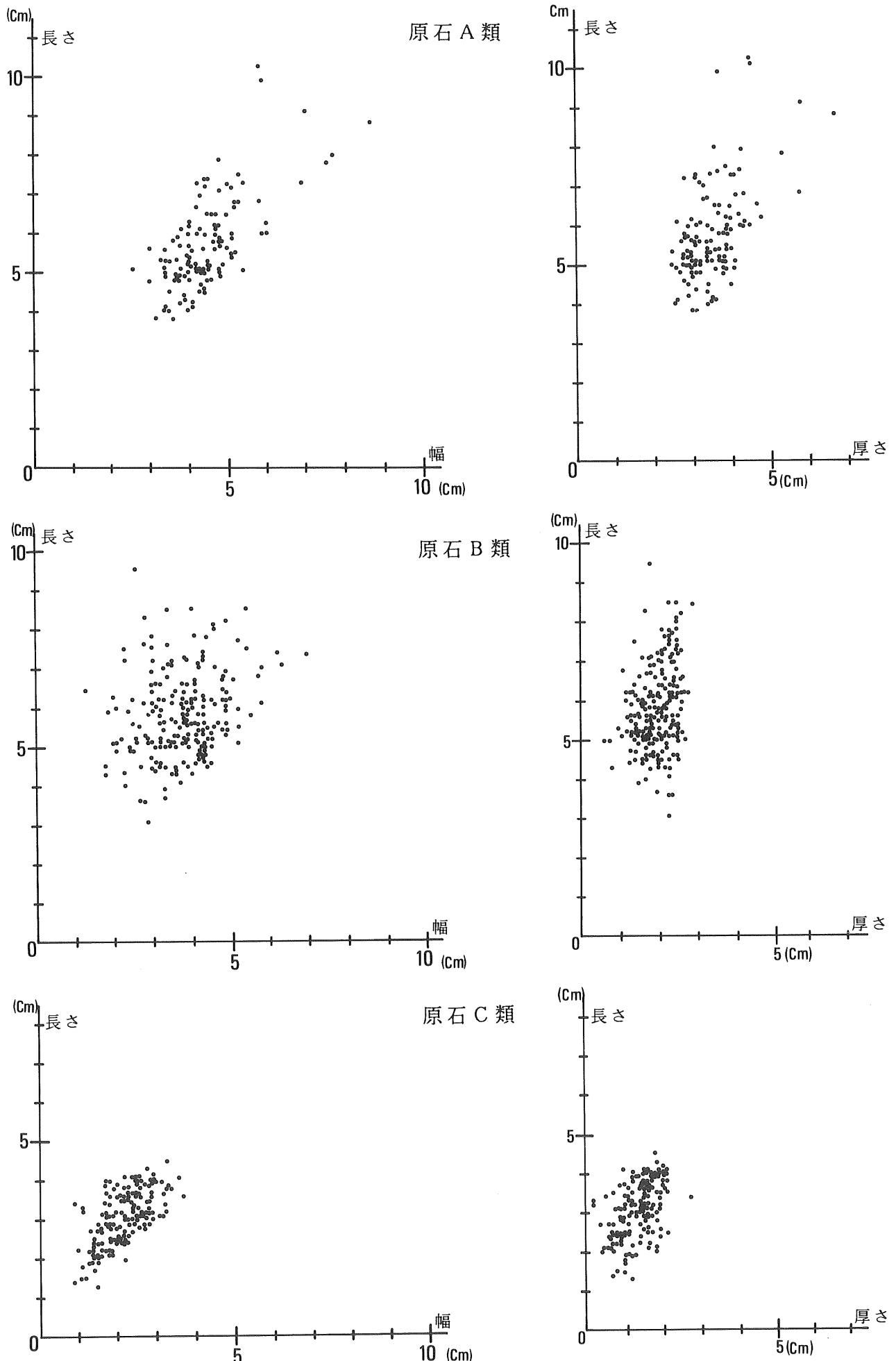
く述べられているが、鷹山遺跡群では星糞峠周辺に原鉱をもつであろうと推測される黒耀石を主に利用して石器製作が行われている。現在の時点では明確な黒耀石原鉱の露頭は確認されてはいないが、星糞峠直下の斜面から鷹山川北岸の湿地部分にかけて、「ズリ」と呼ばれている黒耀石の小礫が多量に土中に包含されて、その分布域にあたる鷹山川河床中の粘土層の中に、良質で大形の黒耀石礫塊が多く含まれていることが確認されている。

対照的に鷹山川の南岸に面した台地上及び大笠山の斜面の土中には、「ズリ」はほとんど存在していない。こうしたことから考えて、鷹山川南岸の台地上に位置するS地点では、自然堆積によって黒耀石が土中に包含されている可能性がきわめて低く、出土した黒耀石のすべてのものは人為的にもたらされたものであると捉えてよいであろう。

S地点の原石とその分類

S地点から出土している原石のほとんどは黒耀石で占められており、わずかに水晶が数点存在しているだけである。黒耀石の原石の数は1569点であり、これは出土全資料中の9%にのぼる。こうした量は出土点数、そして石器組成に占める割合からみても、先土器時代の一般的な遺跡から出土している量をはるかに上回るものである。こうした遺跡内における大量の原石の在り方は、原産地直下に位置している遺跡としては当然の在り方であると思われがちである。

しかし、同じ第Ⅰ遺跡内に立地している刃器製作址のM地点（1984年調査、『鷹山遺跡群Ⅰ』参照）には、遺物出土総数6272点中わずかに1点しか原石が出土していないことと比較した場合、際立った違いをみせている。また、遺跡内に持ち込



第36図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の原石の長・幅・厚グラフ

まれている原石の大きさを比較してみても、M地点から出土している原石の平均重量が1091gもあるのに対して、S地点から出土した最大重量のものが432gであり、M地点の平均重量の半分にも満たない大きさなのである。

同じ原産地遺跡群内でのこの違いは、明らかに原石が石器製作者によって、大きさや量をあらかじめ決めめたうえで、選択して遺跡内に持ち込まれたものであろうという予測を裏付けるものといえるだろう。

こうした1569点にのぼる原石を観察していくと、大きさや形に幾つかのまとまりがあることが明らかになった。以下、これらを原石A～C類の3つに分類して記述していく。

原石A類（第36図、写真22上段） 原石A類は、形状が角礫状及び円礫状を呈する一群である。S地点に持ち込まれた原石としては大形の部類に属するものであるとともに、持ち込まれた数についても最も多く、1024点を数える。

原石A類の計測に関しては、特に原石が集中していたC2、D2、E2、F2の各グリッドから出土した119点の原石を対象にしたものであるが、重量は30g～100g、のものが多く、平均重量は79gを測る。大きさは長径が4～8cm、短径が3～6cmであり、厚さは3cm前後のものが多く、平均では3.5cmである。

原石の表面は角礫状のものが粗いザラザラとした風化面をもち、円礫状のものは河原石のようにローリングを受けた風化面をもっており、それぞれの原石の供給源の違いを示しているようである。

原石B類（第36図、写真22中段） 原石B類は、形状が主に板状及び棒状を呈している一群である。出土点数は298点を数える。原石B類の大きさは長径が4～7cm、短径が3～6cmのものが多く、大きさでは原石A類とあまり変わらないが、厚さにおいては1～3cmのものが多く、平均厚は2.3cmを測り、原石A類と明確に分離される。

後述するが、石器製作における素材としての利

用のされ方からみても、原石A類と原石B類とは加工の目的が異なる傾向にある。原石の表面についても、原石B類は原鉱の露頭から板状に剥落した後の風化面によって構成されているものが多く見受けられる。

原石C類（第36図、写真22下段） 原石C類は、いわゆる「ズリ」と呼称されているものに似た小礫状的一群である。出土点数は247点である。原石C類の大きさをみると、長径1～5cm、短径1～4cmを測るが、多くのものが不定形であるために、一部のものが数値的にみて原石A類、原石B類に近似している。しかし厚さにおいては0.5～2cmに集中をみせ、平均厚は1.5cmとなっており、明らかに小形であることを示している。

また、重量においても大部分が20g以下であり、石器として加工される割合も原石A類、原石B類と比べると著しく低い。原石の表面は風化した割れ面や節理面で構成されているものが多く、その形状も不定形であるため、一部のものは遺跡内に持ち込まれた後に、原石A類の角礫状的一群から剥落したものである可能性もある。

石核の特徴と分類

S地点から出土した石核は684点である。これは出土全資料中の4%を占めている。まずこうした石核の全体に共通している大きな特徴を挙げておきたい。それはS地点の石核の原材として選択されている原石が、さきに原石A類として分類した角礫・円礫状的一群に限定されていることである。これはS地点の石器群を残した人々が、石材の選択の段階から原石の使用目的をある程度意識しており、効率良く目的とした剥片の生産を行っていたことを示唆している。剥離作業や作業面に残された剥離面の大きさ、形などから、S地点の石核は石核A類、石核B類の二つに大きく分類される。

石核A類（第37・38図、写真23） 石核A類としたものは、同一の剥片剥離作業面において一か



写真22 鷹山Ⅰ遺跡S地点の原石（上：原石A類，中：原石B類，下：原石C類）

ら数回の剥離作業を行い、打瘤の発達した幅広の剥離痕を残している一群である。613点が確認されている。主に平坦な礫面、または一枚の大きな剥離面を打面として用いるものが多く、打面調整を行っているものも、わずかではあるが存在している。剥片剥離作業面は一箇所に設定され、同じ打面から集中的に剥離作業を行っているものが多い。また、打面や作業面の転移を行っているものも一部に存在している。

こうした石核A類に残された剥片剥離作業面の在り方をみると、剥離作業の進行の方法に幾つかのバラエティーがみられる。以下、石核A—1類と石核A—2類の2つに分類してみていく。

石核A—1類は平坦な礫面を打面とし、一回の加撃による大きな剥離面を一枚、作業面上に残している石核である（第37図1～7）。これらの石核は原石の長軸を縦方向に設定する傾向が伺われる。また、側面から石核の形状をみると、素材となっている原石を対角線上で半割するように剥片が剥離されているもののが存在している。

石核A—2類は複数の剥離面が作業面上に残されている石核である（第38図8～14）。これらの石核は石核A—1類に比べると、素材となる原石の長軸を横方向に設定する傾向が伺われる。また、剥片剥離作業面の全体の大きさとしては、さきにあげた单一の剥離面で構成されている石核A—1類よりも横幅の広いものが多く、打面も礫打面のものより剥離面打面で構成されているものが多い。

この石核A—2類は剥離作業に伴う打点の移動の違いから2つに細分することが可能である。まず、一つには同一の作業面上において、打点を大きく左右にずらすように移動させながら作業面を後退させていくものである（11～14）。剥片剥離作業の終了した石核は一般に板状を呈しているものが多い。打面は単剥離打面のものが多いが、一方で打面に調整が顕著にみられるものは本類に限って存在している。

第二のものは最終剥離面が作業面の中央部に残

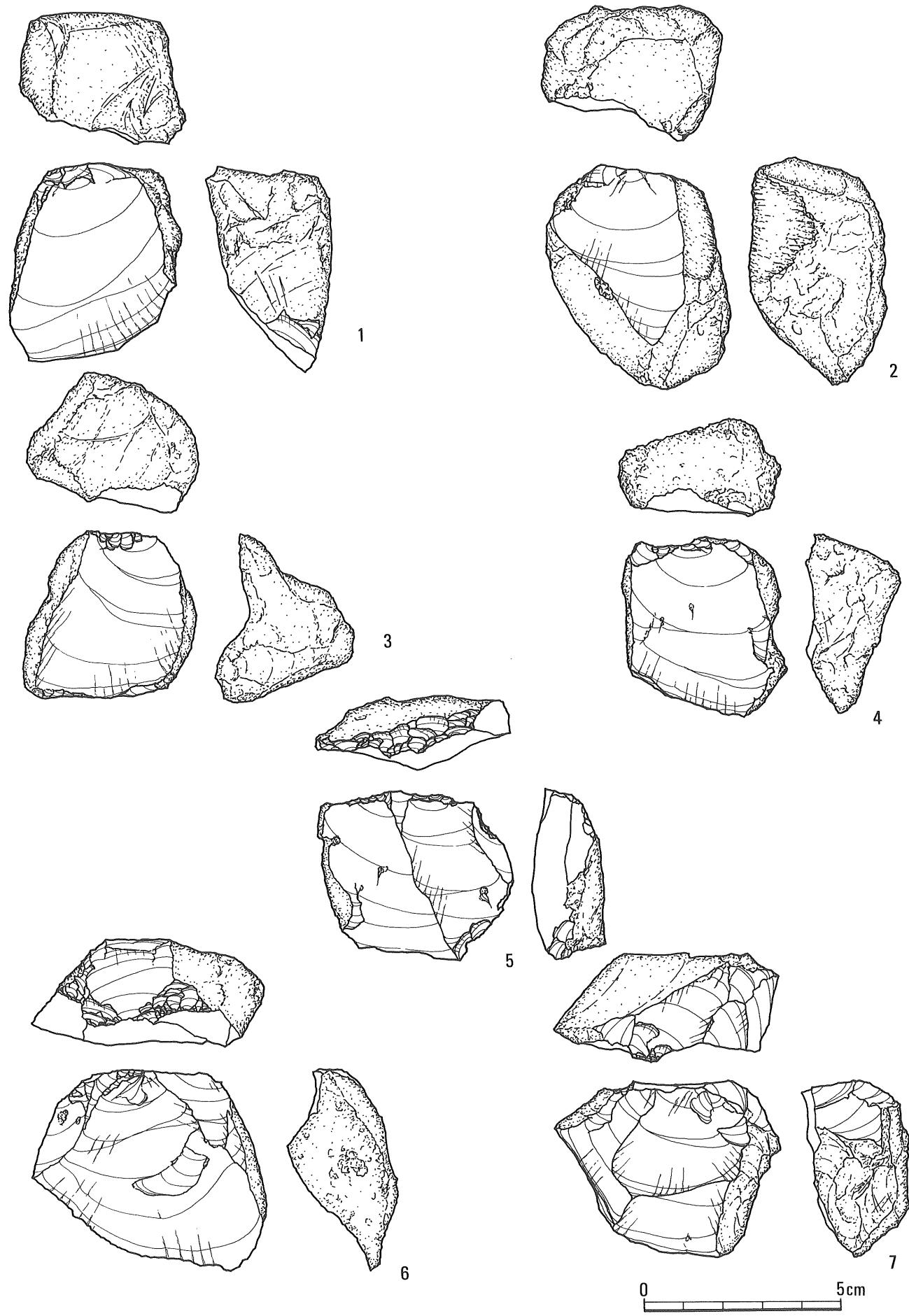
されている一群である（8～10）。本類の剥離作業の進め方は、まず左右に打点を大きくずらして剥離作業を行った後に、作業面の中央部に形成された稜を中心部分に持つ、幅広の剥片を剥離して剥離作業を終了している。石核の形状は石核A—1類のものに似て、石核の下部の厚さが薄くなっているものが多い。打面も単剥離打面や礫打面で構成されているものが多い。

これらの石核A—2類にみられる特徴としては、剥離作業の際に打点を大きくずらして作業面の幅を広く設定していることである。これは単に幅の広い剥片が得られるというだけではなく、剥離面の縁辺によって形成される稜の高まりを利用して、より厚手の剥片を生産しようとする意図がみられる。このため中には求心的な剥離を行うように剥離方向を90度ずらして石核の最も厚い部分から剥片を剥離しているものもみられる。

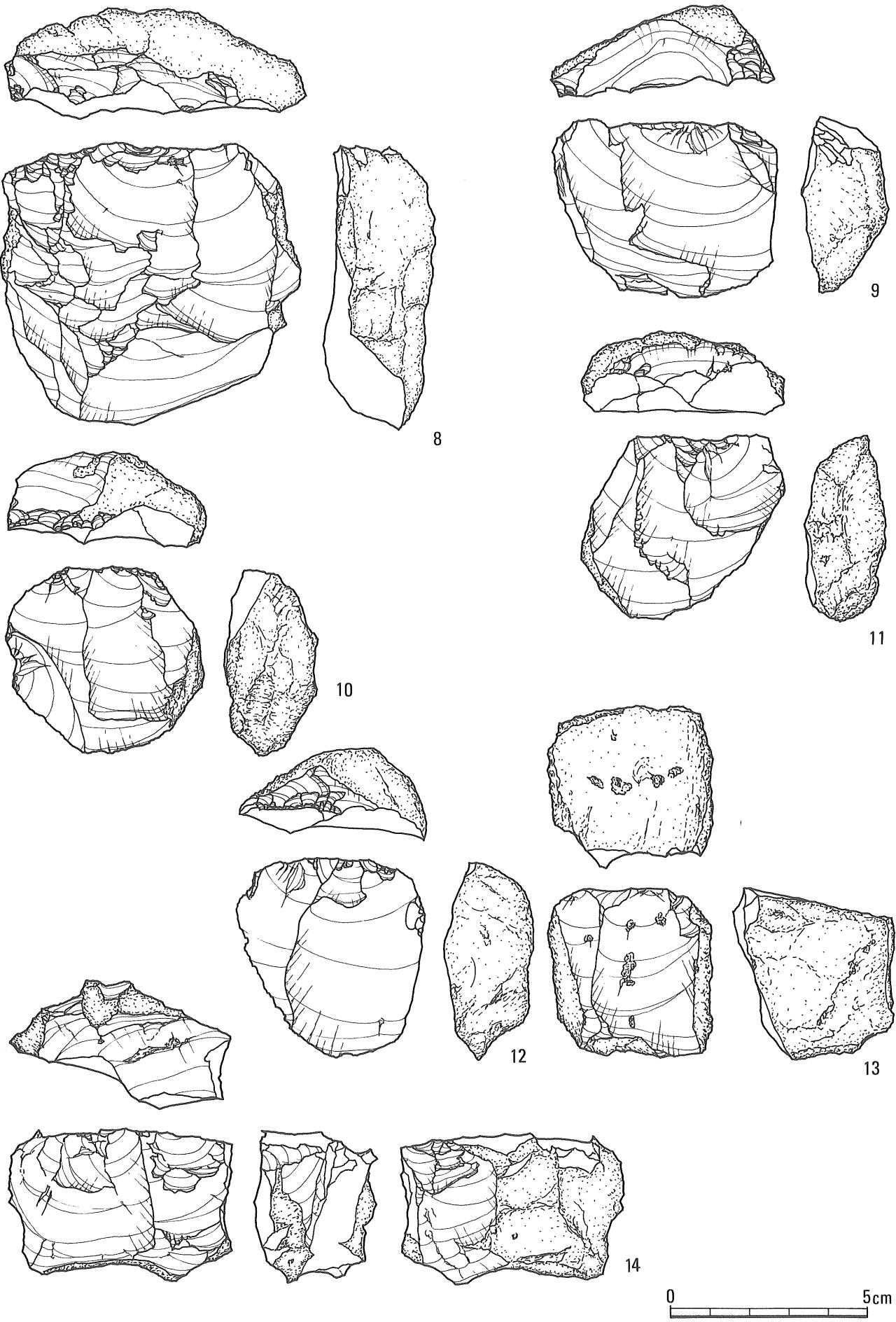
以上にあげたものの他に、少数ではあるが剥片剥離作業面を複数有しているものや、打面を複数有しているものが存在している。それらの多くのものは最初に利用した作業面を次に打面として利用して、90度の打面転移をしてから新たに剥片剥離作業を行っている。しかしこれらの一群も、残された剥離面の大きさや打面の形態、石核調整が行われないことなどを考えて、石核A類のバラエティーとして捉えられる。

石核B類（第39・40図、写真24） 石核B類は石核A類と比較して、細身の縦長剥片を連続的に剥離した痕を残している一群である。71点が確認されている。原材となっている原石の形状は復元可能なものをみるかぎり石核A類よりも小形の原石を用いているようである。打面の調整は石核A類に比べると全体的に顕著であり、一部のものは打面の再生も行われている。また、両設打面の石核が一部にみられるのも石核B類の特徴といえる。

石核B類も剥片剥離作業の進め方の違いからB—1類、B—2類の2つに分けて記述していく。



第37図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の石核A類 (1)



第38図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の石核A類 (2)

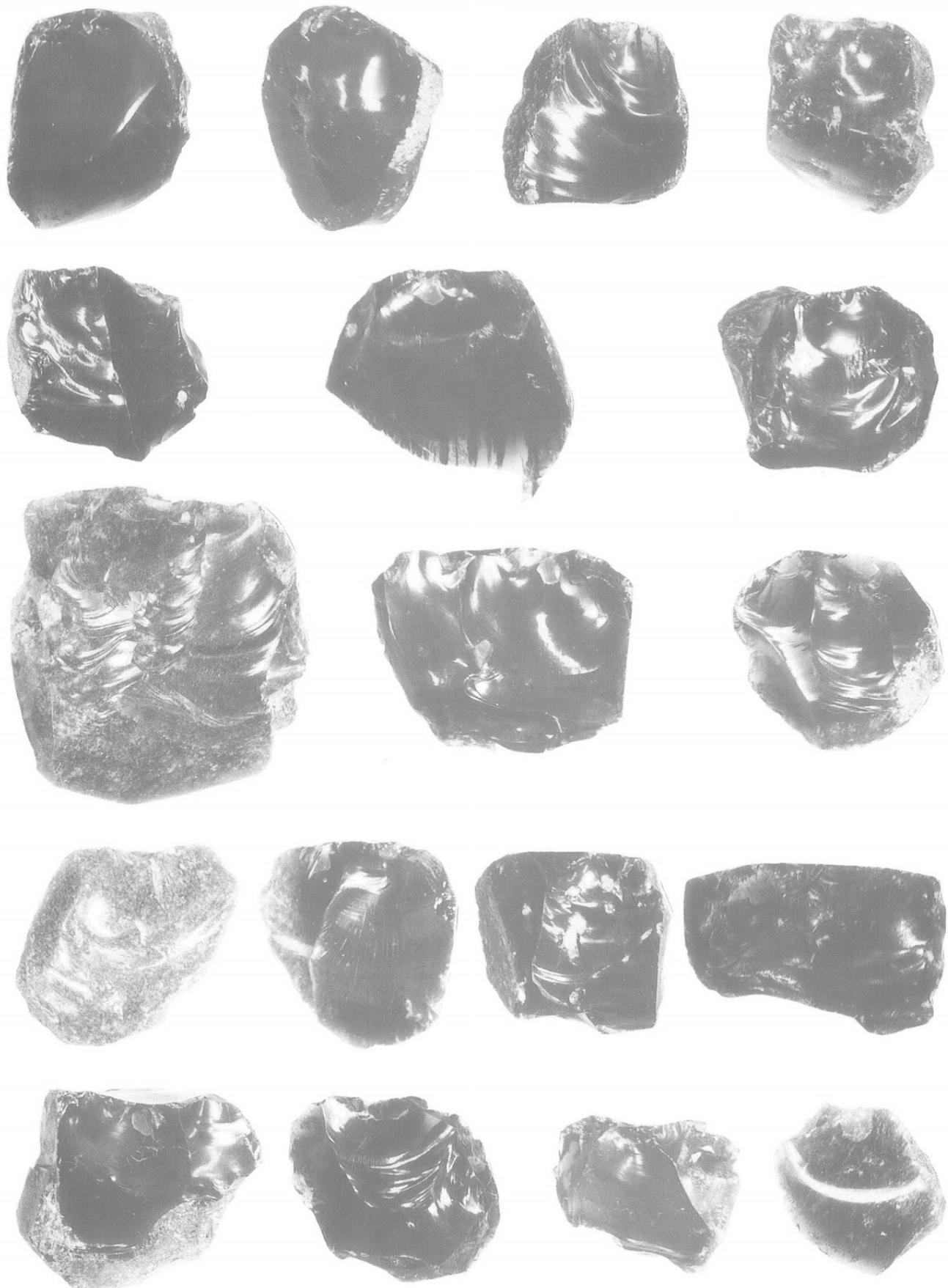
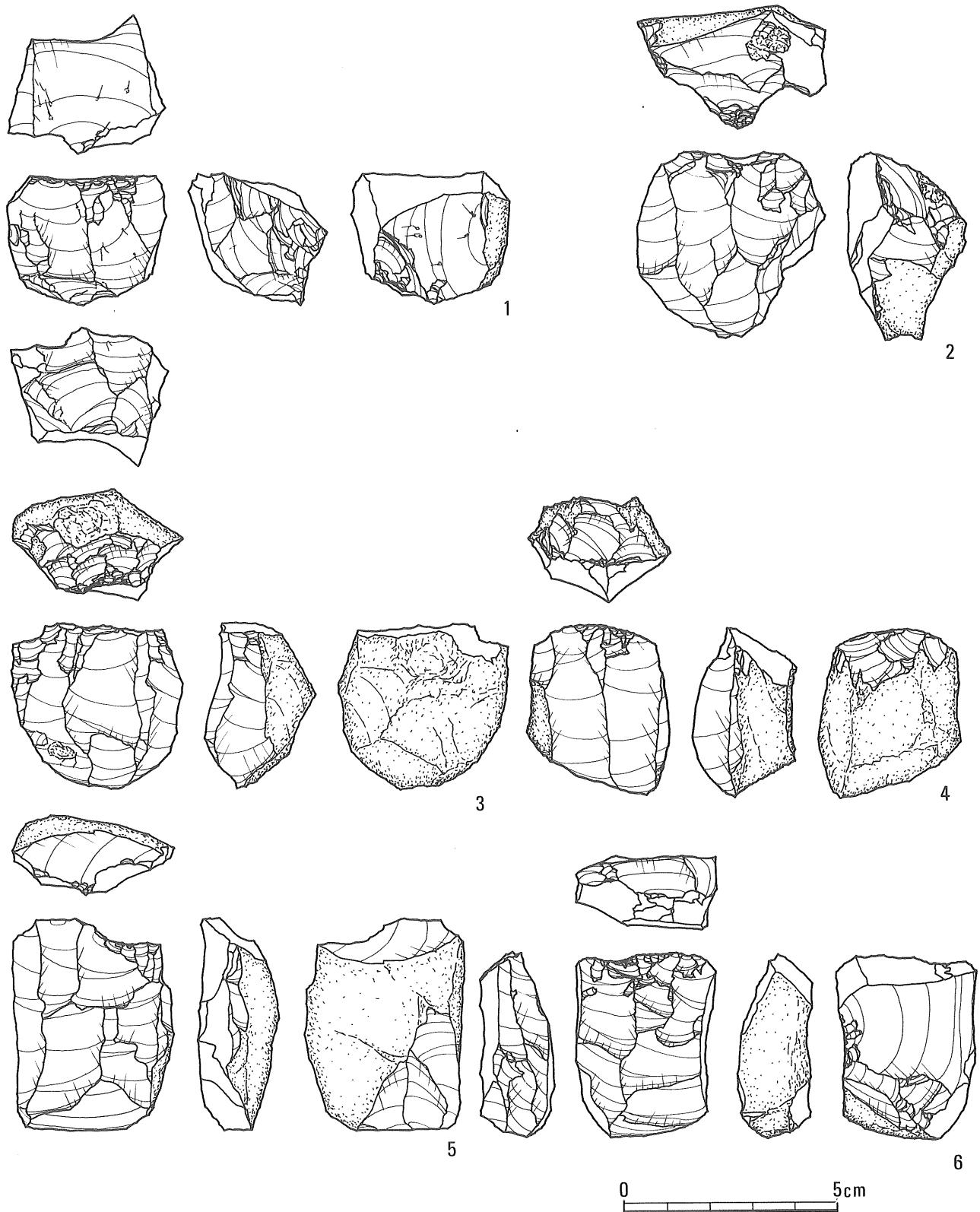


写真23 鷹山Ⅰ遺跡S地点の石核A類



第39図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の石核B類 (1)



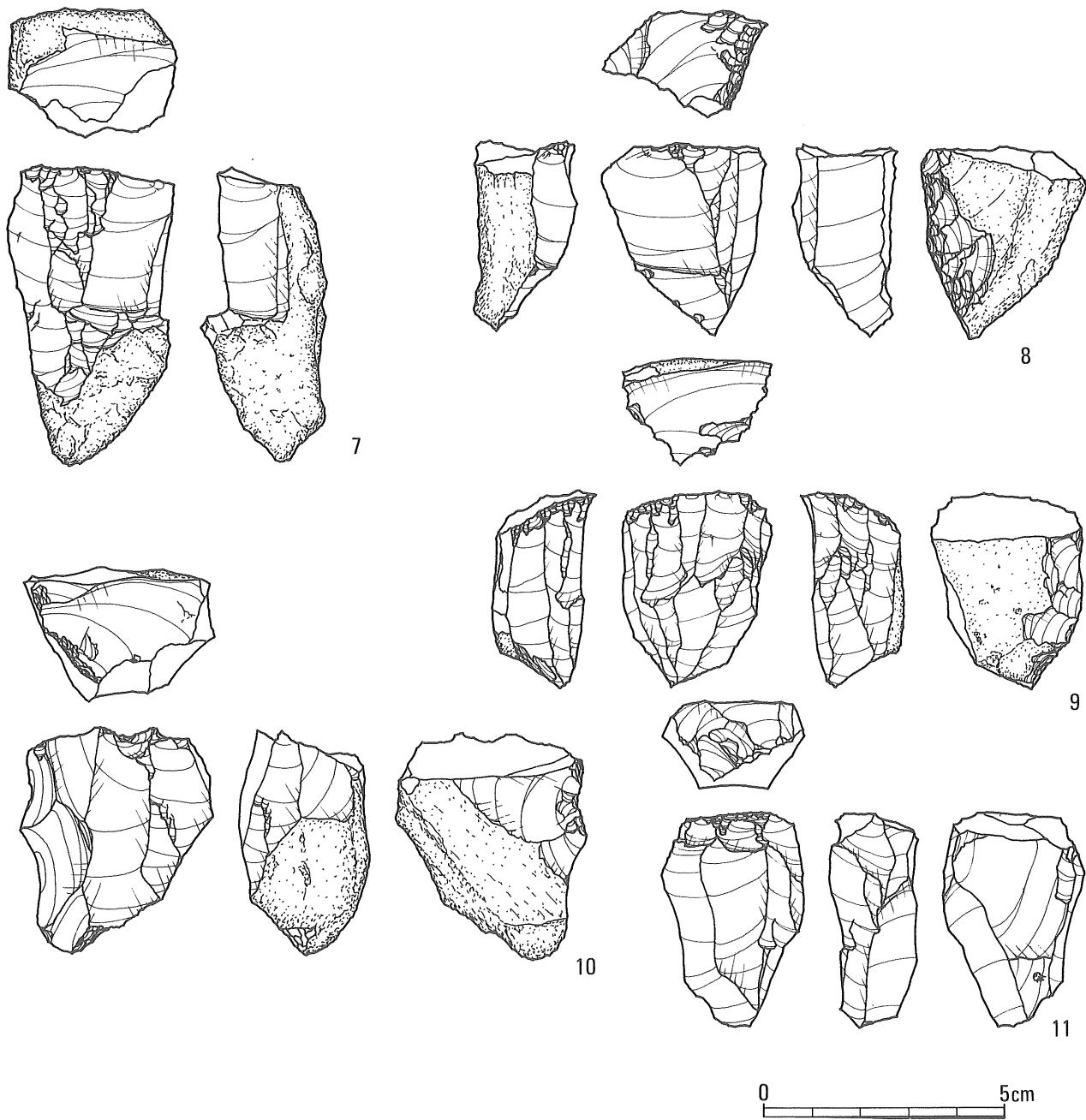
写真24 鷹山Ⅰ遺跡S地点の石核B類

石核B—1類は、剥片剥離作業面がフラットなままで後退していく一群である（1～6）。一般に剥片剥離作業面が一か所に固定されたまま横に広くなり、作業が終了した石核の形状は板状を呈している。单設打面のものが多いが、両設打面のものも小数ある。また、背面に石核調整が施されている例も存在している。

石核B—2類は石核B—1類と同じく、剥片剥離作業面は一か所に固定されているものが多いが、作業面が石核の側面部分にまで回り込んでいる一

群である（7～11）。そのために石核の形状が円柱、もしくは円錐形を呈しているものが多い。

石核調整は石核B—1類に比べると施されているものが多く、石核の側面に施されているものや背面に施されているもののが存在している。このように石核調整が顕著であることと、作業面が石核の側面にまで広がっていることなどから、礫面の残り方が少ないのが特徴である。しかし、作業面が打面の周りを一周している例はみられなかった。また本類では両設打面石核のものが多くみられる。



第40図 薙山Ⅰ遺跡S地点の石核B類 (2)

剥離面を残す原石 以上、説明してきた石核A類、B類の他に、調査中の遺物の取り上げ作業の際の器種の判別では、1029点のものが石核として記録されていた。しかし、それらの一群は整理作業における分析の過程で、石核としての器種認定に疑問を持たざるをえないものであった。それらは石核A類、B類と同様の原石A類を素材としているのだが、残された剥離面は一般に小さく、わずか一か所に原石の表面を薄く剝がすように剥離されているのみのものであった。こうした一群は剥離面の大きさや作業面の設定の仕方についてもまとまりが認められない。そのために、①実際に人が剝片の剝離を目的として打ち割ったものなのか、②石核の調整、打面調整の段階で作業を中止したものなのか、③原石の採掘の際に割れてしまったものなのか、④自然の状態で割れていたもののか、といった幾つかの可能性が考えられるが、最終的な判断ができるない資料である。そこで今回は、これら的一群を原石として取り扱っておくことにした。

剝片の特徴と分類

S地点から出土した剝片は4670点である。今回の剝片の分析に際しては、当初から大きく2つの種類の剝片が存在していることが予想されていた。それは利器としての石器の素材として利用された剝片（目的的剝片）と、S地点の石器群の中核を占めている槍先形尖頭器を製作する時にできた調整剝片（いわゆるポイント・フレーク）である。後者については槍先形尖頭器の製作技術に関する項で取り扱っていくことにしたい。また、碎片については分析の対象とはしていない。

素材剝片（目的的剝片）とされる剝片は、石核の剝片剝離作業面の観察から大きく2種類のものが作り出されていたと考えられる。それは石核A類から剝離された幅広の剝片の一群と、石核B類から剝離された細身の縦長剝片の一群である。両者は同じ原石A類を素材とした石核から剝離され

たものであるために、長さに関してはほとんど同じものといつてもよいが、剝片の幅、打面の形態や表面の構成を観察していくと、明確に分別されることが分かった。こうして抽出された2種類の剝片を、前者を剝片a類、後者を剝片b類として以下、その特徴を記述していきたい。

剝片a類（第41・42図、写真25） 剥片a類は長幅比1：1を中心として、2：1から1：2の間にかけて分布が認められる幅広の剝片の一群である（第43図）。出土数としては分析可能なものが327点確認されている。これらの剝片の特徴を長・幅・厚、そして打面の形態、剝離角、表面構成の検討をした結果、剝片a—1類と剝片a—2類の2つに分類した。

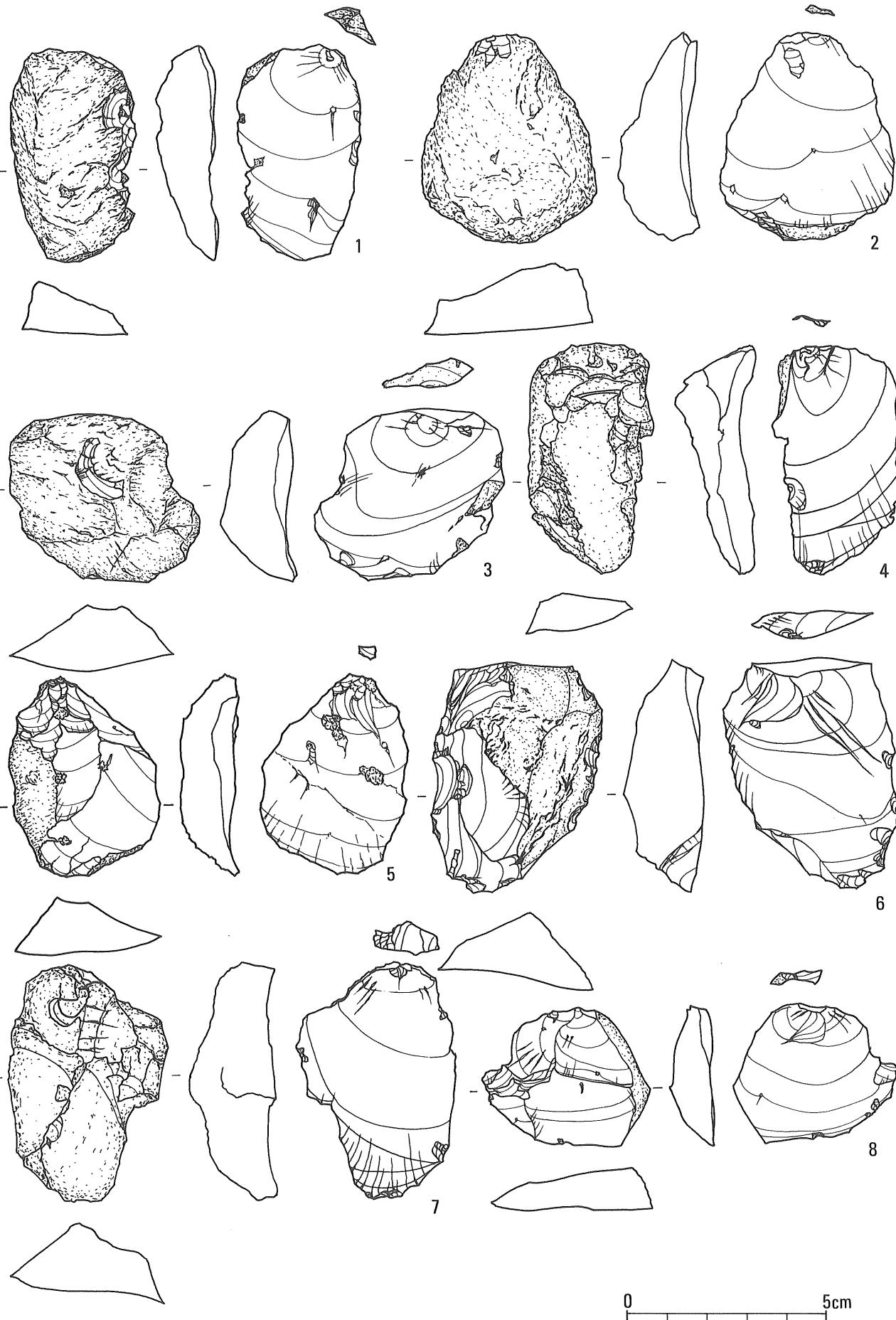
剝片a—1類は表面が完全に自然面だけのものである（1～4）。128点が存在している。長幅比でみると、剝片a—1類は1：1を境として若干ではあるが2：1の側に偏る傾向にある。平均値は長さが5.1cm、幅が4.2cmとなっている。

剝片a—2類は表面が自然面と剝離面から構成されているものである（5～14）。199点が存在している。長幅比をみると、剝片a—2類は1：1をはさんで、1：2から2：1の間に万遍なく分布する傾向がみられる。また、やや大形のものが剝片a—2類にはみられる。平均値でみると、長さが5.0cm、幅が4.3cmとなっている。

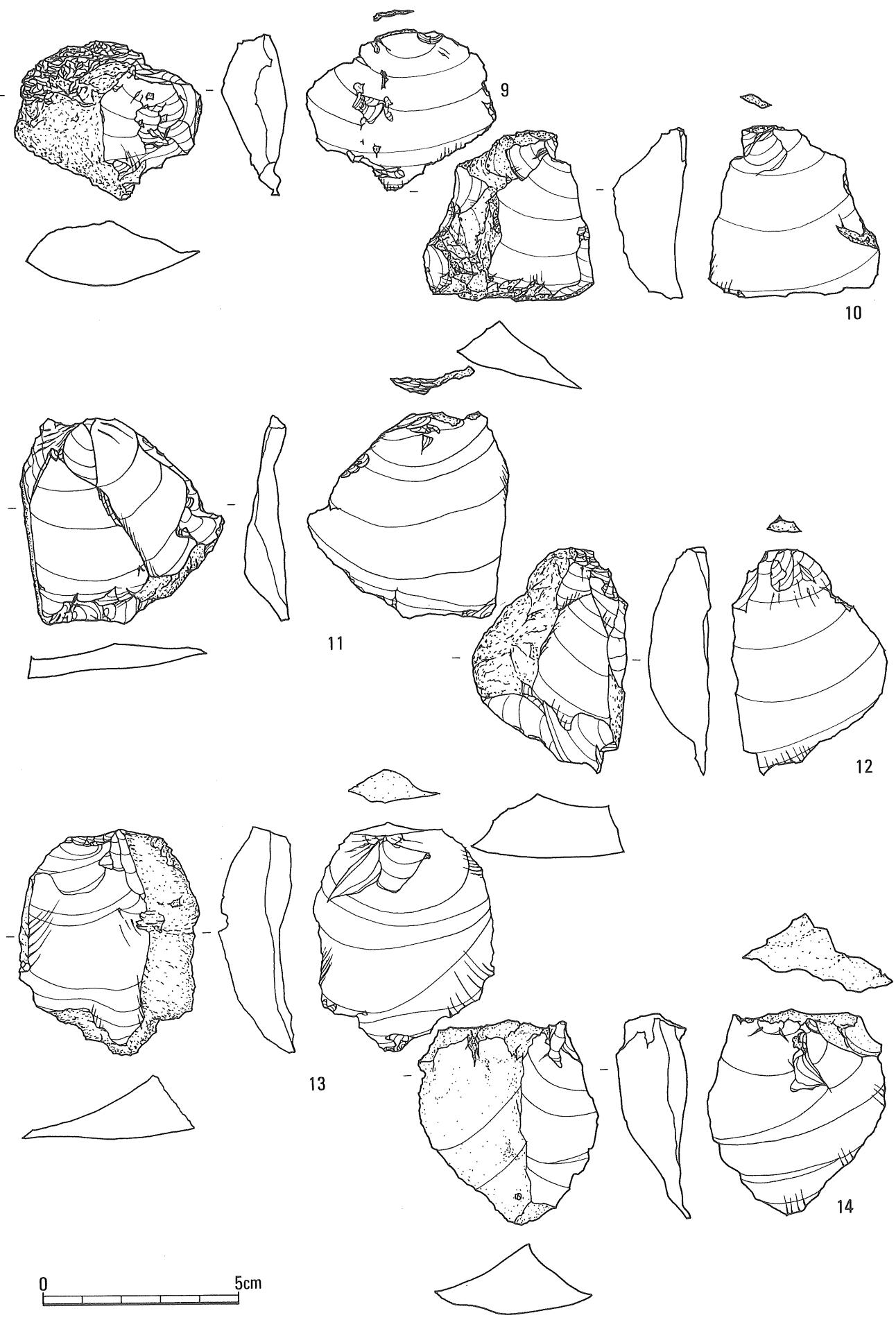
剝片の厚さについてはどうであろうか（第43図）。どちらも1～2cmの間にその多くが集中しているが、剝片a—2類のほうが若干厚手のものが多いようである。平均値ではともに1.7cmを測る。

これらの計測値をみていくと、剝片a—1類、剝片a—2類のどちらも一定の大きさと厚さを意識して、同じ目的で打ち剝がされた剝片である可能性が強いということがわかる。

次に剝片a類の打面の形態と剝離角についてみていきたい（第44図）。打面は礫打面のものが最も多く189点を数える。続いて单剥離打面のもの



第41図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の剥片a類 (1)



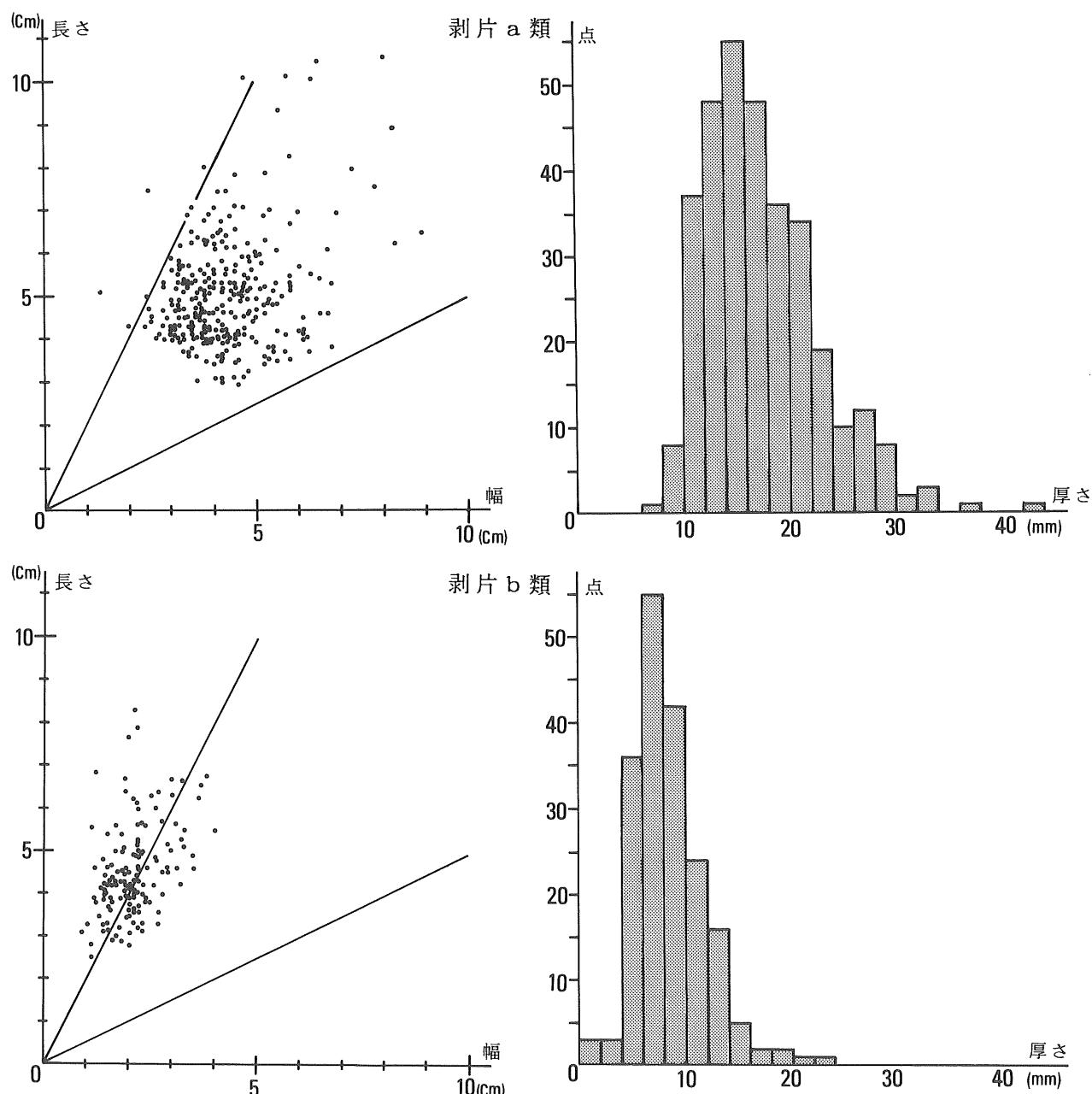
第42図 鷹山I遺跡S地点の剥片a類 (2)

が67点。そして複削離打面のものはわずかに31点となっている。傾向としてみていくと、剥片a—1類の打面は剥離面打面がわずかに24点しか存在せず、圧倒的に礫打面が多い。剥片a—2類の方は約3分の1強にあたる74点が剥離面打面であり、やや異なった趣をみせている。剥離角は最小値が86度で最大値は128度となっている。全体の平均値は約103度となっており、概して剥離角は大きく剥片a—1類、剥片a—2類ともに大きな違いは認められなかった。

最後に剥片の表面構成と剥片の形状についてみ

ていきたい。さきに剥片a—1類とした表面を自然面で覆われているものは128点存在している。これらに共通してみられる特徴としては、原石の稜や凸面を剥片の中心部分に合わせるようにして剥離されたものが多いようである。

剥片の裏面と同じ方向の剥離面を表面に残しているものは119点確認されている(9~14)。しかし、その中でも表面が剥離面のみで構成されているものはわずかに12点を数えるにすぎない。その他のものは概ね自然面が表面の横半分を占めているものが多く、剥離面と自然面によってできた稜



第43図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の剥片a, b類の長・幅・厚グラフ

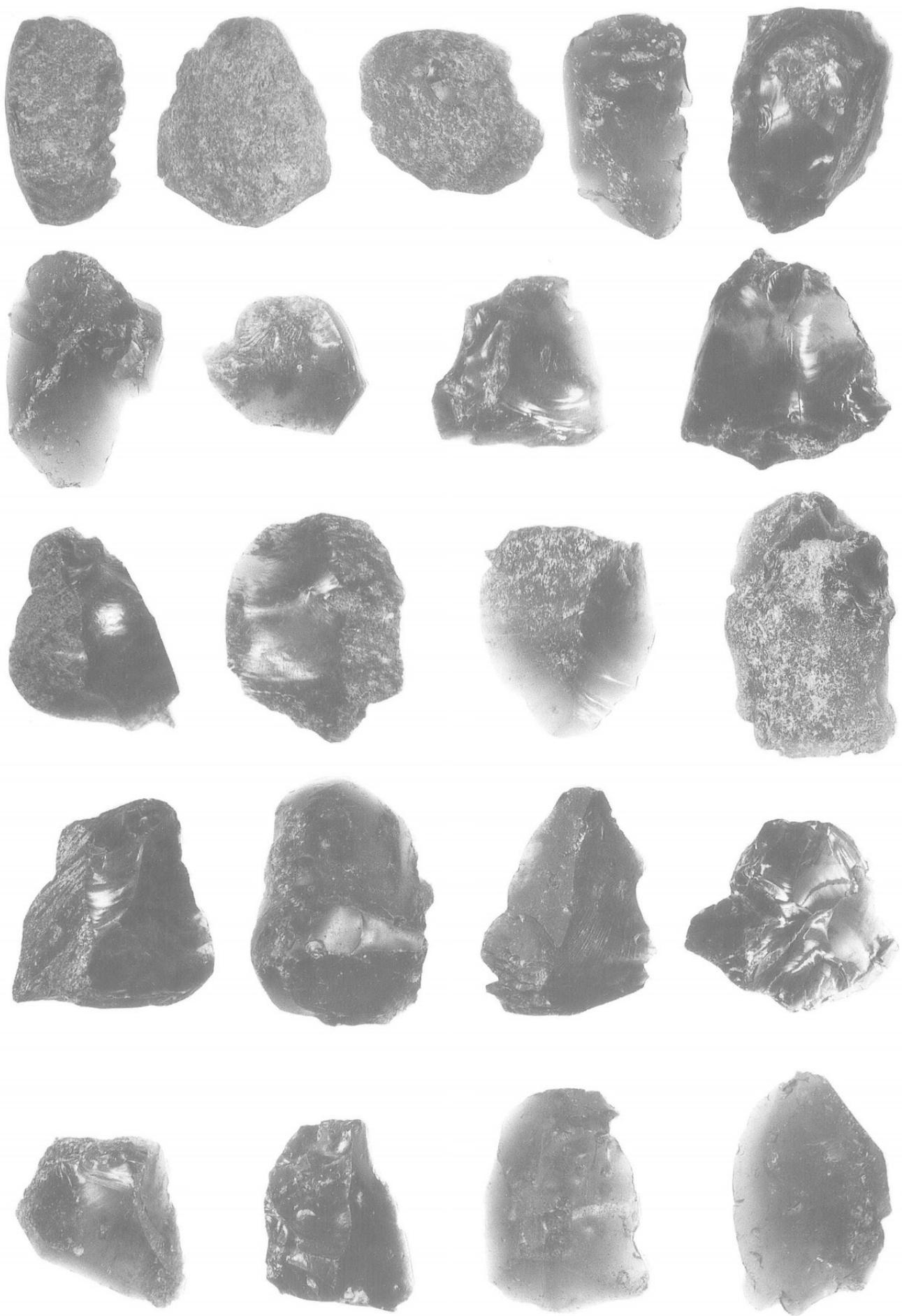


写真25 鷹山Ⅰ遺跡S地点の剥片a類

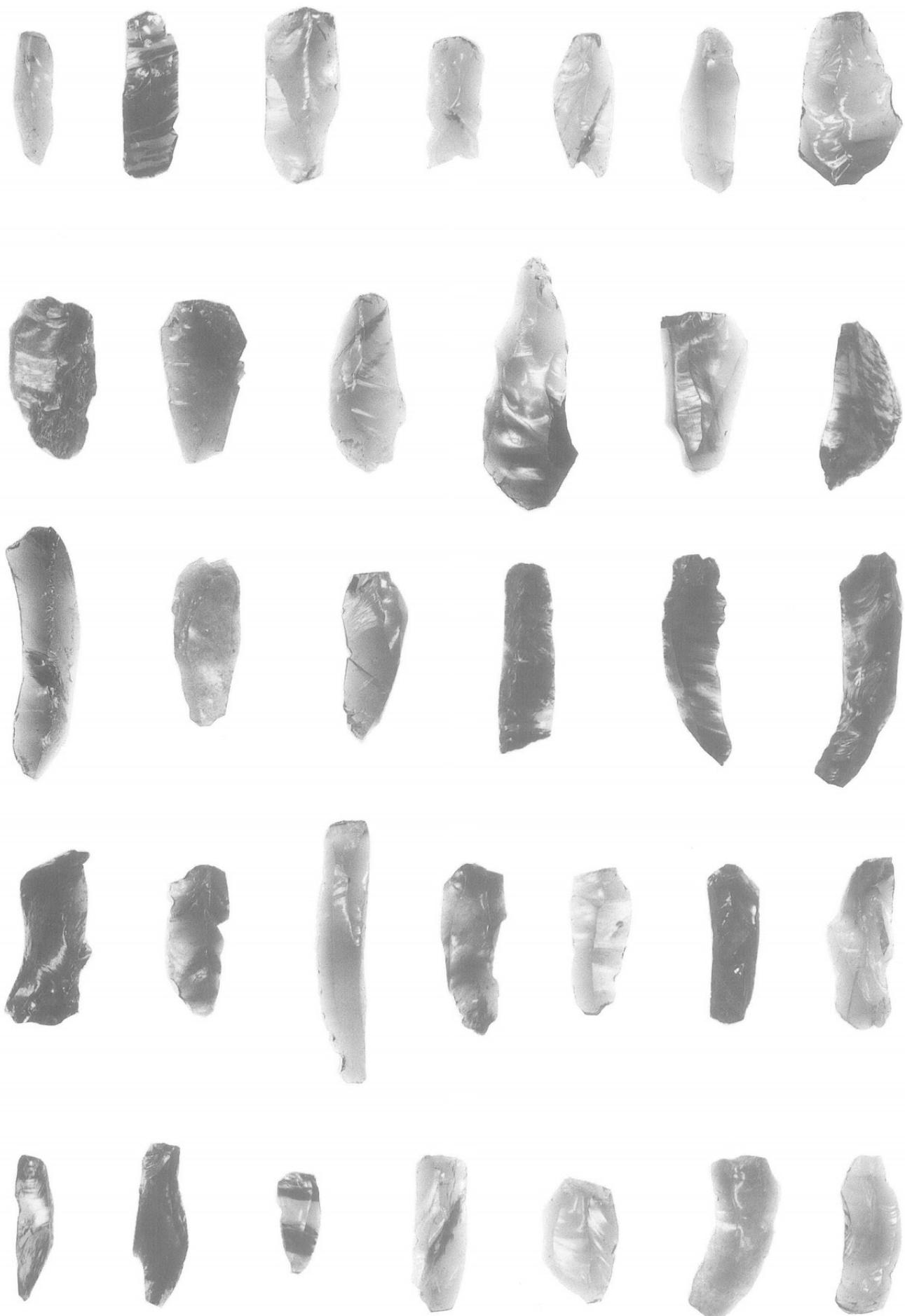


写真26 鷹山I遺跡S地点の剝片 b類

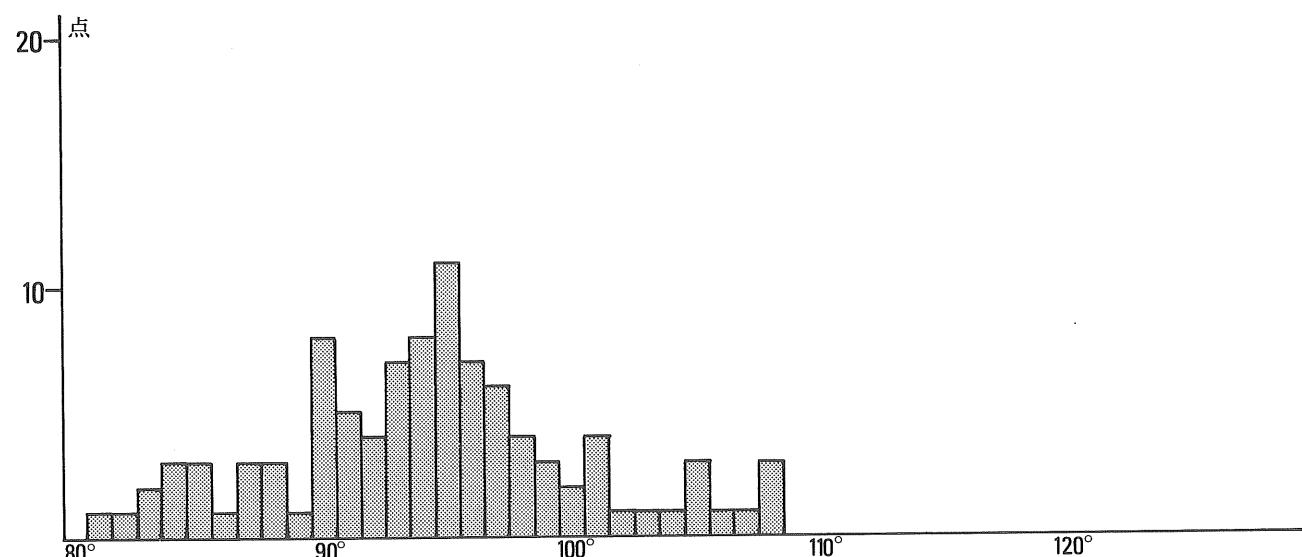
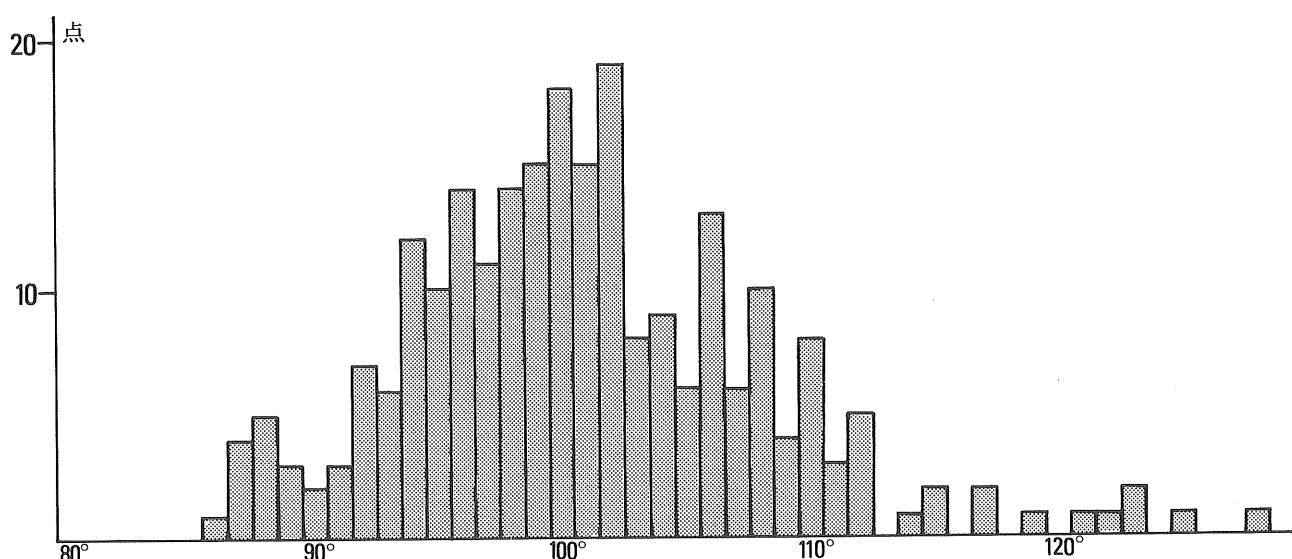
を中央部に持つという傾向が伺われる。

その他のものとしては、裏面の剥離方向と反対からの剥離面を表面に持つものが15点、横方向からの剥離面を表面に持つものが65点、それぞれ確認されている。しかしこれらの資料においても表面が剥離面のみで構成されているものはわずかに12点しか存在しておらず、一般に剥離面と自然面の作り出した稜を利用して剥片の剥離が剥片a—2類において行われている。

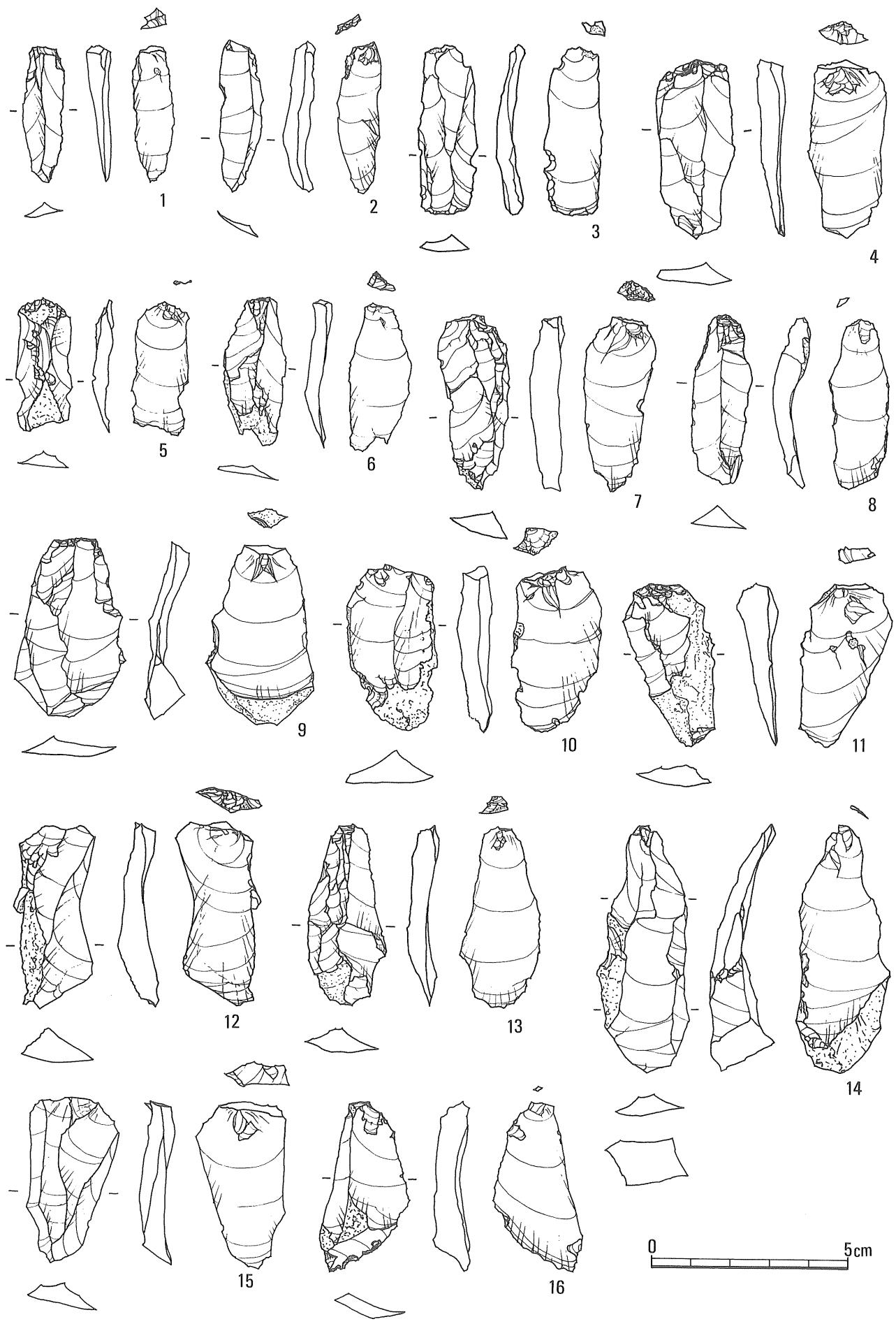
剥片b類（第45図、写真26） 剥片b類のうち完形のものは139点であり、頭部に欠損がみられ

るものが30点、尾部が欠損しているものは26点である。長さ、幅に関しては完形のものを対象とし、厚さについては測定可能なもののすべてを対象としている（第43図）。

長さは3cmから7cmに集中する傾向をみており、平均値は4.5cmを測る。幅は1cmから4cmに集中しており、約80%のものが2.5cm以下に分布する。平均値は2.1cmである。厚さは0.1cmから2.3cmにかけて分布がみられるが、1cm以下に全体の70%のものが集中しており、平均値は0.8cmである。こうしてみると剥片b類は剥



第44図 鷹山I遺跡S地点の剥片a類（上）、b類（下）の剥離角グラフ



第45図 膦山Ⅰ遺跡S地点の剝片b類

片a類と比べると、幅や厚さにおいて剝片a類の半分ほどの値であることがわかる。

次に打面部分の形態であるが、剝片b類にみられる最も多い打面は複剝離打面で104点を数える。二番目に多いのが礫打面で36点、単剝離打面は18点であった。その他に打面部分が狭小であり、点打面として記録したものが7点存在している。剝片b類における剝離面打面の割合は70%以上という高い数値を示しており、剝片a類と際立った違いをみせている。剝離角は最小値が81度で最大値が108度となっている。全体の平均値は約94度であり、剝片a類よりも剝離角は概ね小さい傾向にある（第44図）。

最後に剝片b類の表面の構成と剝片の形状についてみていく。ここでは表面に残された剝離角の方向から4つに分けていく。

①表面が自然面で覆われているもの。10点存在している。打面については剝片a—1類とは違い、複剝離打面で構成されているものが多いために分別される。

②裏面と同じ方向の剝離面が表面にみられるもの。146点が確認されている。剝片b類の表面構成のなかで最も多いものである。自然面を一部に

残すものと全面が剝離面のものが存在している。このとき表面に形成される稜は一本程度のものが最も多く、二本以上の稜で形成されているものが少ないために、剝片の断面の形は三角形になるものが多くなる。剝片の形状は打面部分から末端部分まで厚さがほぼ一定しているか、若干薄くなっているものが多く、末端がやや尖り気味のものである。しかし一部には、剝離された剝片の尾部が脹らんで、石核の一部を取り込んでいるものもみられる。

③裏面の剝離面の方向とは反対方向からの剝離面が残されているものである。18点が確認されている。この一群の特徴としては、表面に自然面を残すものが4点しかみられないことである。これはある程度剝片の剝離が進んだ後に、下部の打面から剝離が行われたことを示している。

④前述以外の方向からの剝離面が表面に残されているものである。17点が確認されている。③と同様に数量的には少ない傾向が伺われる。横方向からの剝離面は比較的に幅広のものが多く、それらの剝離面が裏面と同じ方向からの剝離面によって切られている場合が多い。これら横方向からの剝離痕は石核調整の際のものであると考えられる。

2 槍先形尖頭器の製作工程と技術的特徴

S地点から出土した全資料約25,000点のうち、およそ90%以上が石器の製作工程に関わるものであって、完成された石器はわずかに509点を数えるにすぎない。

その中で槍先形尖頭器は235点出土しており、石器組成の中心を占める。また、石核・剝片・未成品等の資料についてみても、槍先形尖頭器の製作に関わったとみられる資料が数多く出土している。

そのため本項ではS地点の槍先形尖頭器の製作工程とその技術的な特徴について、素材や加工方法を中心に記述していきたい。

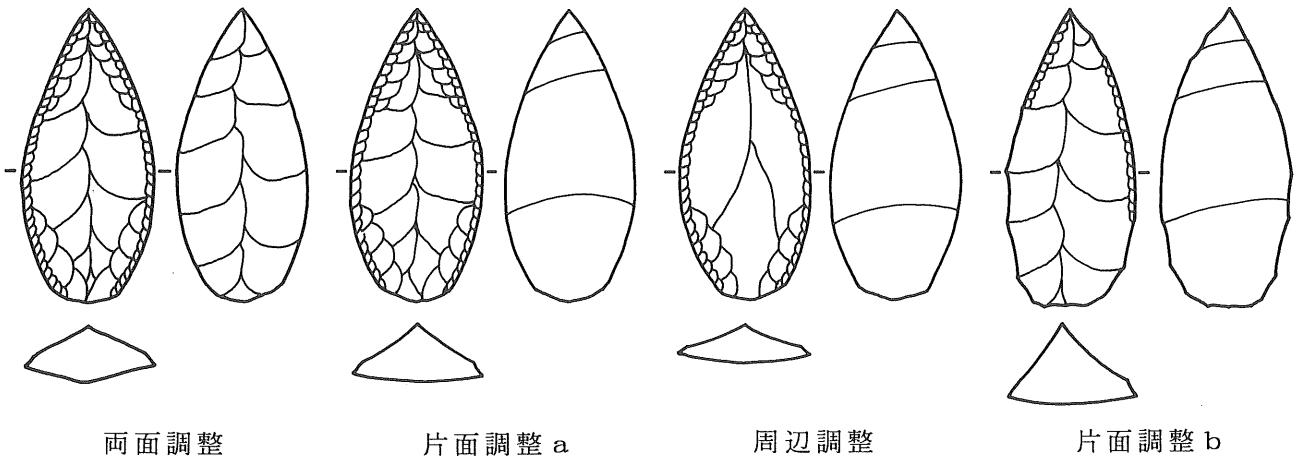
槍先形尖頭器の調整と素材

未成品と完成品 出土した槍先形尖頭器の完成品の形態的な特徴については第Ⅱ章において触れているので、ここでは調整加工の施され方と槍先形尖頭器の素材に絞ってみていく。

まず完成品を中心にみていくことにすると、その前に完成品と未成品の区別の仕方について基準を示しておきたい。

①調整加工が器体のほぼ全周にわたって施されているもの。

②先端部分が明確に作り出されているもの。



第46図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器調整方法模式図

③器体の正面形がほぼ左右対称に整えられているもの。

④側面からみて縁辺がほぼ直線的に整えられているもの。

以上の4点を、S地点の槍先形尖頭器を観察した結果、完成品として認定するための条件とした。こうした条件に照らし合わせていくと、S地点には46点の完成品と189点の未成品が存在していることになる。

3種類の調整加工 完成品とした槍先形尖頭器は、その調整加工の施され方の違いから大きく3つに分類される。それは両面調整、片面調整、周辺調整である。ここでそれぞれの調整の施され方の区別について基準を示しておきたい（第46図）。

まず両面調整のものと片面調整のものの区別についてであるが、S地点においては半両面調整によって作り出されている資料が幾つかみられる。こうした石器の帰属に関しては、裏面の調整加工が器体の半分以上に及んでいる場合は両面調整とし、そうでない場合は片面調整として取り扱うこととした。また片面調整のものと周辺調整のものの区別については、表面の調整加工が先端部及び基部を除いた部分において、器体の中央部にまで達しているものを片面調整とし、そうでないものを周辺調整として取り扱っていくことにした。

その他に片面調整のものに関しては、調整加工方法の違いから片面調整aと片面調整bに、それ

ぞれ分類しておいた。区別の仕方については、片面調整aのものが面的で平坦な調整加工を主体としたもので、器体の整形の仕方も全面にていねいに行われている一群である。一方の片面調整bのものは急斜度の調整加工を主体としているものであり、整形の仕方についても片面調整aに比べると片面調整bは粗雑な感があり、細部調整加工が一部分のみに留められている一群である。また左右が非対称形を呈しているものが多くみられるのも片面調整bの特徴である。

形と大きさ 次に、それぞれの槍先形尖頭器のプロポーションと大きさであるが、およそどの槍先形尖頭器も完成品は長幅比においては、3:1から2:1の間に分布しているものが多く、その他には2:1から1:1の間という、やや幅広のものが存在していることが伺われる（第47図）。

長さは両面調整のもの、片面調整a、片面調整bのものが、それぞれ4~7cmに多く分布している。また、その中でも傾向としては片面調整aがやや小さめで、片面調整bの方が大きめに分布が集中している。周辺調整のものは2~6cmに分布が集中しており、他の3種類のものに比べると一番小形であることがわかる。

こうした傾向は幅についてみても同じであり、周辺調整のものが1~3cmに分布が集中しているのに対して、その他の槍先形尖頭器は2~4cmとやや大きめに分布が集中している。

厚さにおいてはどうであろうか。ここでは片面調整 b のものが最も厚手のものが多く、1 cm 台の後半から 2 cm 前後に集中をみせており、その次に両面調整のものと片面調整 a のものが 1 cm 強に集中している。また周辺調整のものは最も薄手で、1 cm 以下に集中が認められる。

調整加工と素材 次に槍先形尖頭器の調整加工と素材の関係についてみていく。それぞれの調整加工による完成品・未完成品の素材が判別可能だったものの構成をまず示しておく。

①両面調整の槍先形尖頭器

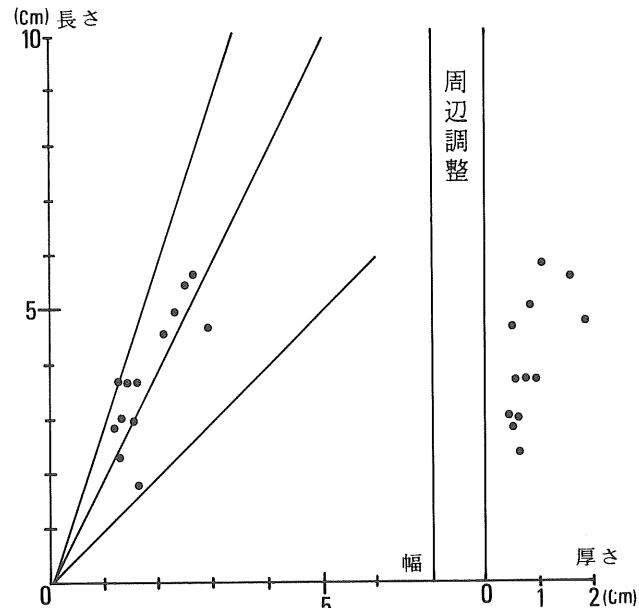
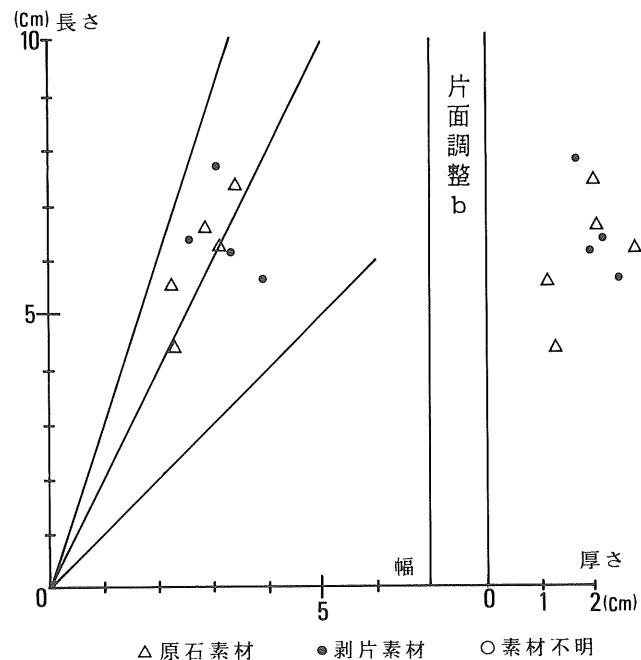
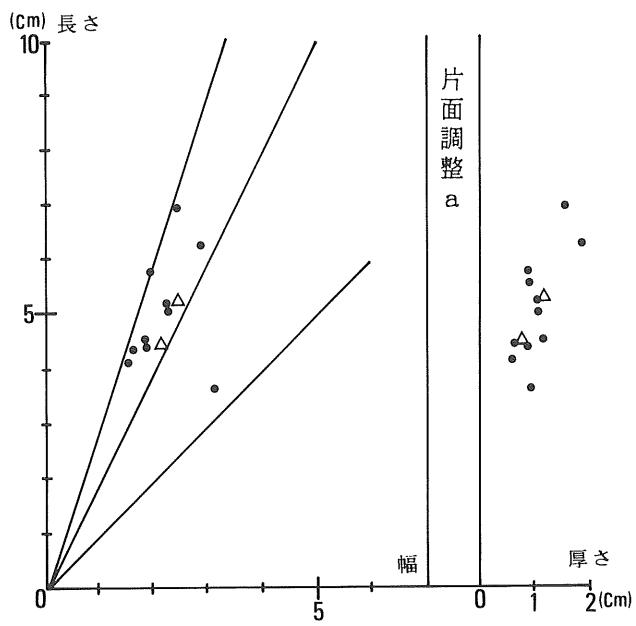
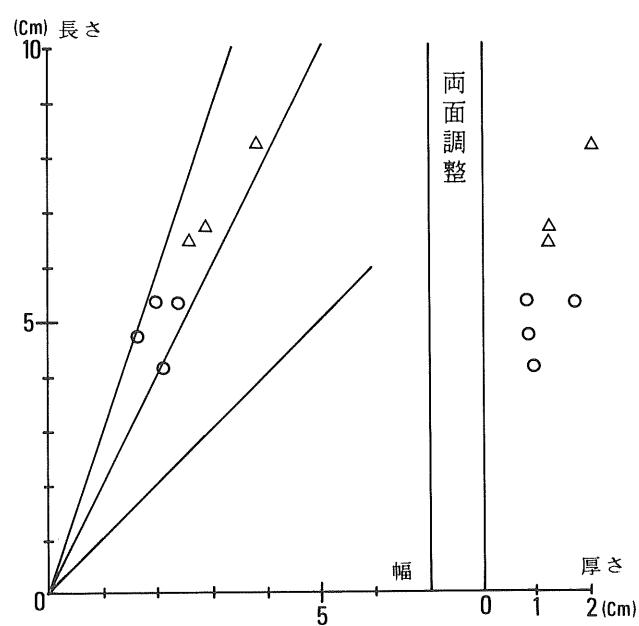
原石素材	52点
剥片素材	9 点
素材不明	26点

②片面調整 a の槍先形尖頭器

原石素材	28点
剥片素材	縦位51点 横位11点

③片面調整 b の槍先形尖頭器

原石素材	7 点
------	-----



△原石素材 ●剥片素材 ○素材不明

第47図 鷹山 I 遺跡 S 地点の槍先形尖頭器の大きさと素材との関係

剥片素材	縦位15点
	横位 3 点
④周辺調整の槍先形尖頭器	
剥片素材	縦位31点

横位 2 点

以上のような対応関係を示している。なお判断の基準としては、原石素材のものとしたものは表裏両面または裏面に自然面を残しているものとし、剥片素材の「縦位」、「横位」という表現は槍先形尖頭器の中心軸に対しての素材の剥片の裏面の剥離方向を表している。

こうしてみていくと、周辺調整のものは素材が剥片と強く結びついていることがわかる。また、他のものについては、両面調整のものの素材が原石と結びつく傾向にあり、片面調整 a と片面調整 b のものは剥片を主体としながらも、一部には原石を利用しているという状況が伺われる。

S 地点において石器製作のための原料として持ち込まれているものは、主に原石 A 類と原石 B 類が存在している。そして S 地点で生産され石器の素材となっている剥片は、原石 A 類から剥取されている剥片 a 類と剥片 b 類である。それぞれの石器素材の大きさはすでに触れているが、ここでもう一度それぞれの資料の平均値を示しておく。

原石 A 類

長径5.7 cm・短径4.5 cm・厚さ3.5 cm

原石 B 類

長径6.0 cm・短径3.8 cm・厚さ2.3 cm

剥片 a 類

長さ5.0 cm・幅 4.3 cm・厚さ1.7 cm

剥片 b 類

長さ4.5 cm・幅 2.1 cm・厚さ0.8 cm

これらの数値を参考にしながら個々の素材と加工方法の関係についてみていきたい。

まず両面調整のものは原石素材に偏る指摘を先にしておいた。一方、素材の方では原石 A 類、原石 B 類ともに平面的な大きさでは違いがみられない。そこで違いのみられる厚さに絞ってみていく

ことにする。

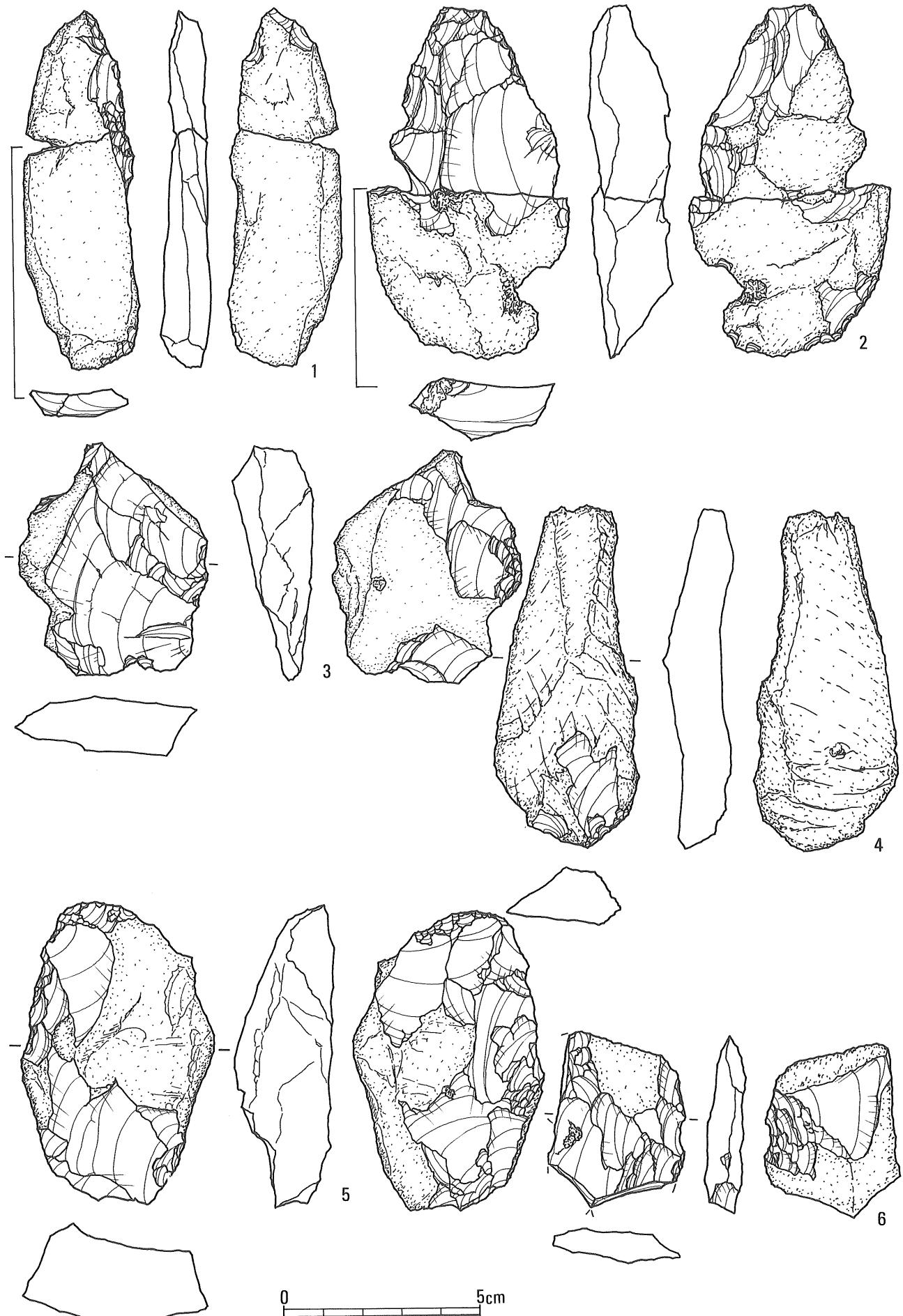
両面調整のものの完成品、またはそれに近い段階の石器の中で表裏両面に自然面が残されているものの厚さが約 1 ~ 2 cm 内外の大きさに集中している。それを原石と比べてみた場合、原石 B 類の平均的な厚さに近い数値であることが指摘できる。そのように考えていくと、S 地点に持ち込まれた原石 A 類が剥片生産のために石核の素材として利用され、原石 B 類が槍先形尖頭器の素材として直接利用されていた、という原石の種別の使い分けの図式が浮かび上がってくる。

片面調整のものの場合は、剥片の利用が主体であるといえるが、単純に長さ・幅・厚さの 3 つの観点からみると、剥片 a 類、剥片 b 類の両者が利用されていたように見える。しかし素材の変形度について考えると、片面調整のものの変形度は明らかに両面調整のものについて大きいものである。そのため完成品の石器の大きさと幅や厚さにおいて平均値が変わらない剥片 b 類は利用されている可能性が低いと考えられる。それは剥片 b 類が生産量的にも多いものではないということからみても明らかである。

片面調整が最も多くの槍先形尖頭器の完成品と未成品を作り出している状況をみると、その素材を、生産量の少ない剥片 b 類に供給を頼るという考えは成り立ち難いものである。以上のことからみて、片面調整のものには剥片 a 類が主体的に利用され、一部の原石を素材としているものには原石 B 類が利用されていたといえるだろう。

周辺調整のものの場合は、素材が剥片に限定されている。その大多数は長さ・幅・厚さのいずれについても剥片 b 類の範疇に位置しており、対応関係が考えられる。

しかし、その範疇に入らない大形の一群はどうか。これらに素材となった剥片の表面が残されており、素材から石器への厚さの変化が少ないとから考えると、剥片 a 類が利用されていた可能性が考えられる。こうしてみていくと周辺調整のも



第48図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器（両面調整未成品 第1の段階）

のには剥片a類、剥片b類の両者が利用されていたと考えられる。

S地点における槍先形尖頭器の調整方法と素材の対応関係には、それぞれの石器の長さ・幅・厚さ、それに素材の変形度に合わせた形で利用されている傾向が伺われる。またこれは素材の入手方法が比較的容易であるために、原石採取の段階から石器の製作方法をきわめて意識した上で素材の選択が行われていたと考えられる。

製作工程を示す資料

S地点の槍先形尖頭器はその素材や調整加工の違いによって4つに分類することができた。それでは、次にそれぞれの調整加工を施された槍先形尖頭器が、どのような製作工程を経て作り出されていったのかを考えていきたい。

本来、先土器時代の石器の製作工程を復元していく上において、個体別資料の分類とそれに伴う接合作業を中心とした研究方法が一般的にとられている。しかし、このS地点において出土した石器の石材が、単独の搬入品である水晶やチャート等の石材を除くと、すべて黒耀石で構成されている。そのために一部の特徴的な黒耀石の一群以外には、充分に個体の判別や接合作業を行うことができなかった。したがってここでは遺跡の中に残された槍先形尖頭器の未成品と、製作途上にできた槍先形尖頭器調整剝片を検討していくことによって、S地点における槍先形尖頭器の製作の実態を検討していきたい。

両面調整槍先形尖頭器の未成品

両面調整の槍先形尖頭器は、完成品が9点、未成品が78点出土している。ここでは調整加工の進展状況の違いから、未成品を大きく3つの加工段階に分けて記述しておきたい。

第1の段階の資料（第48図、写真27） 本段階に属している未成品は、やや粗めの大きな剝離面によって器体の表面が覆われている一群である。該当する資料としては35点が存在している。

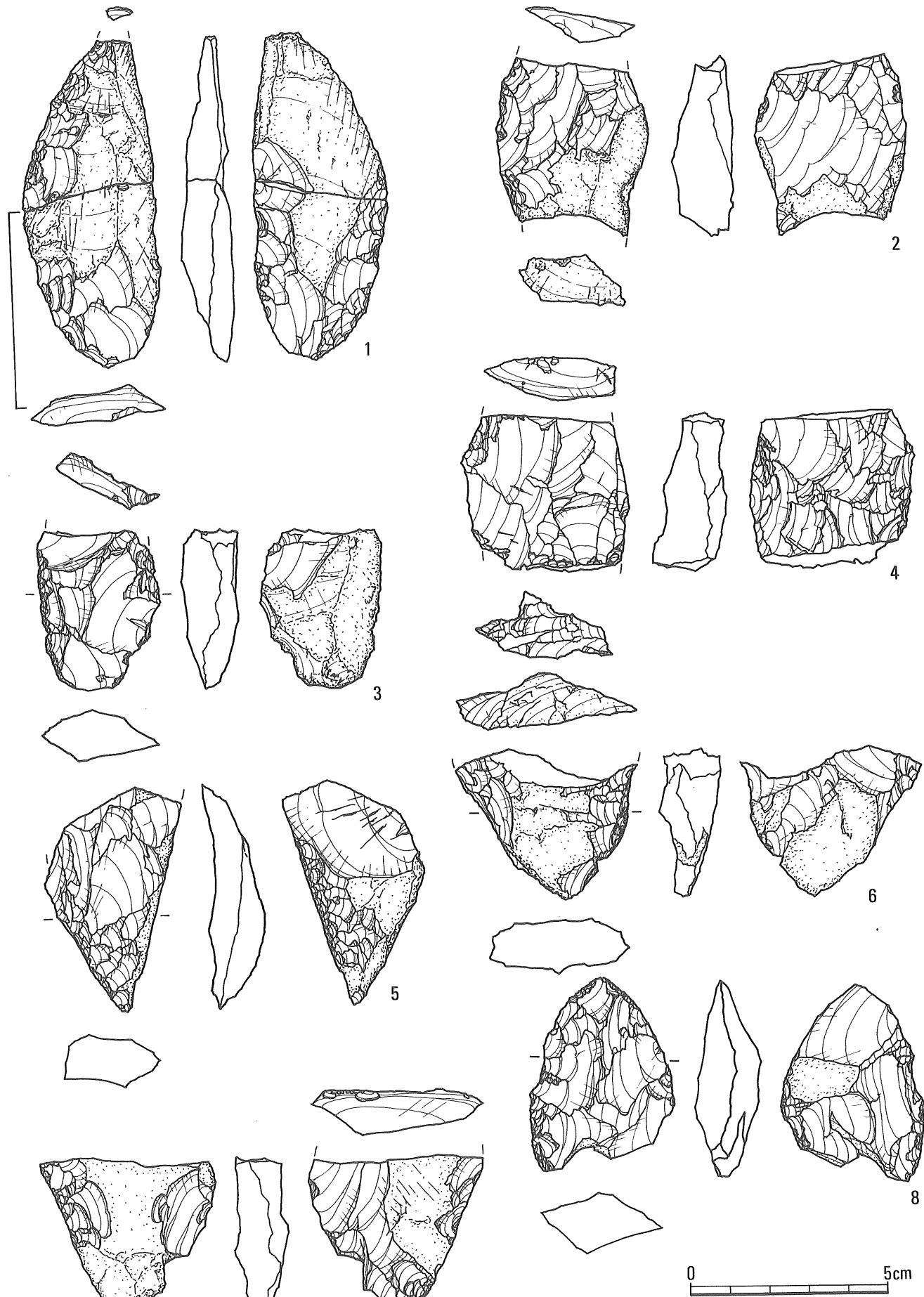
調整加工としては打面を素材の裏面に設定しているものと、側面の平坦な部分に設定しているものがあり、横方向から集中的に調整剝離を行っている。こうした資料の中には、片側の面において一方向から集中的に調整剝離を行っているものと（1、3）、両側の側縁部分から施しているもの（2、5、6）の両者がみられる。特に前者の場合には、調整による剝離面が器体の中央部を大きく越えて、反対側の側縁にまで達しているものが多くみられる。また調整剝離は器体の左右の側縁からだけではなく、一部には縦方向からも施されている例も存在している。第1段階のものは全体に加工の施され方が粗雑であるために正面形が整っておらず断面の形もやや平行四辺形を呈している。

第2の段階の資料（第49図、写真28） 本段階に属している未成品は調整加工が両面におよび、第1の段階より小さめの調整剝離によって器体を成形している一群である。該当する資料としては21点が存在している。

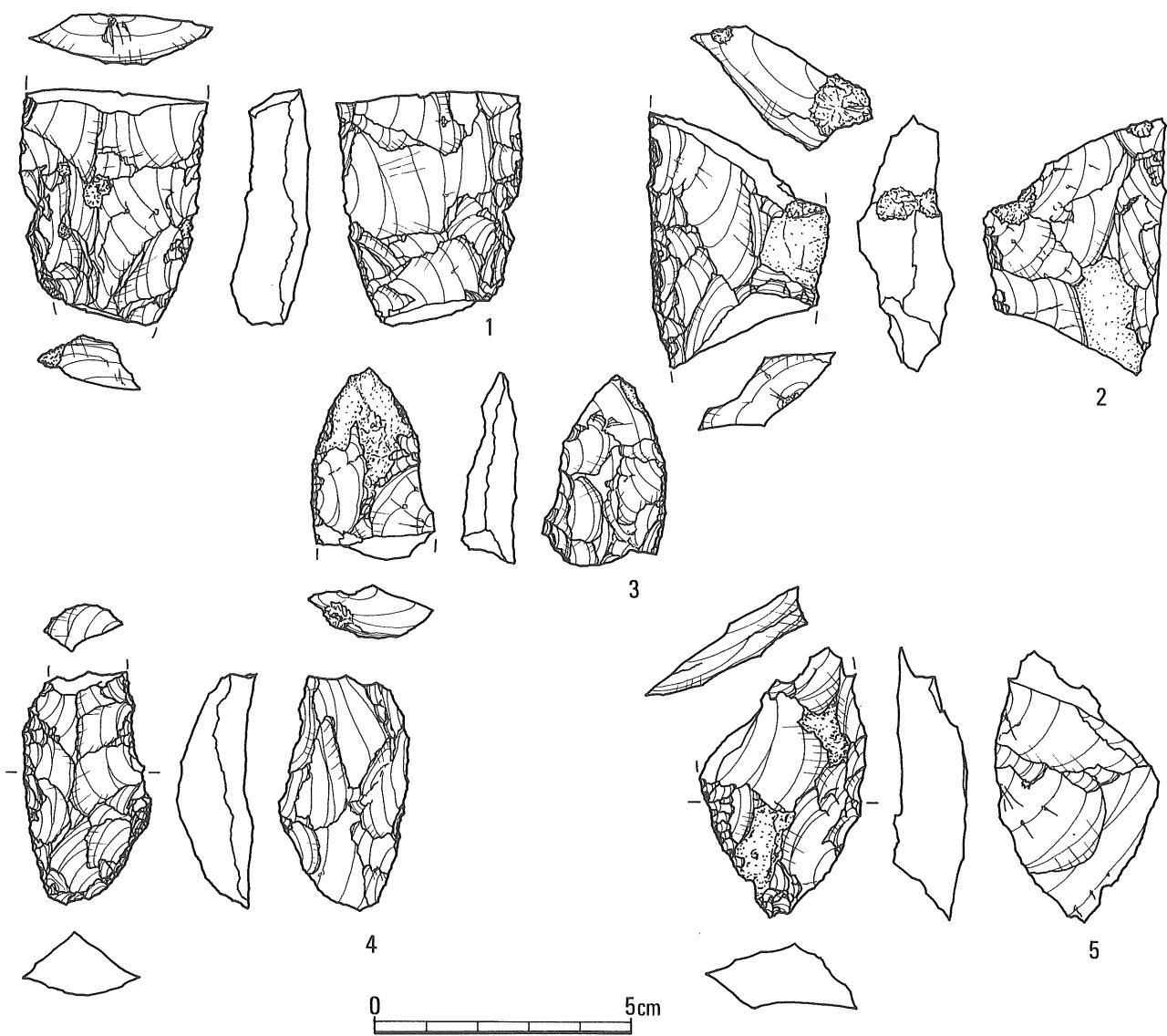
第1段階の未成品に比べると、器体の厚さが均一化されており、一方向のみで占められていることが多い器体表面の調整剝離も逆の側縁部分からの剝離面がみられるようになってくる（2～4）。その他にも第1段階で打面として用いられていた側縁部分の平坦な部分が失われており、断面の形も平行四辺形から菱形、レンズ状のものがみられるようになる（3～8）。また器体の自然面が残されている部分も少なくなってきた。しかしながら全体的な形状としては、先端部分と基部の明確な区別はつかない。

第3の段階の資料（第50図、写真29） 本段階は調整加工が全体におよんでおり、槍先形尖頭器としての形状がほぼ整えられている一群である。該当する資料としては22点が存在している。

器体表面の自然面はほぼ除去されて、凹凸が少なくなっている。また側縁部分の稜も第2段階のような波打ったものとは異なり、直線的なものが多い。縁辺には細かい細部調整加工が施されてい



第49図 鷹山I遺跡S地点の槍先形尖頭器（両面調整未成品 第2の段階）



第50図 膠山I遺跡S地点の槍先形尖頭器（両面調整未成品 第3の段階）

るものも存在している。

両面調整槍先形尖頭器の調整剝片

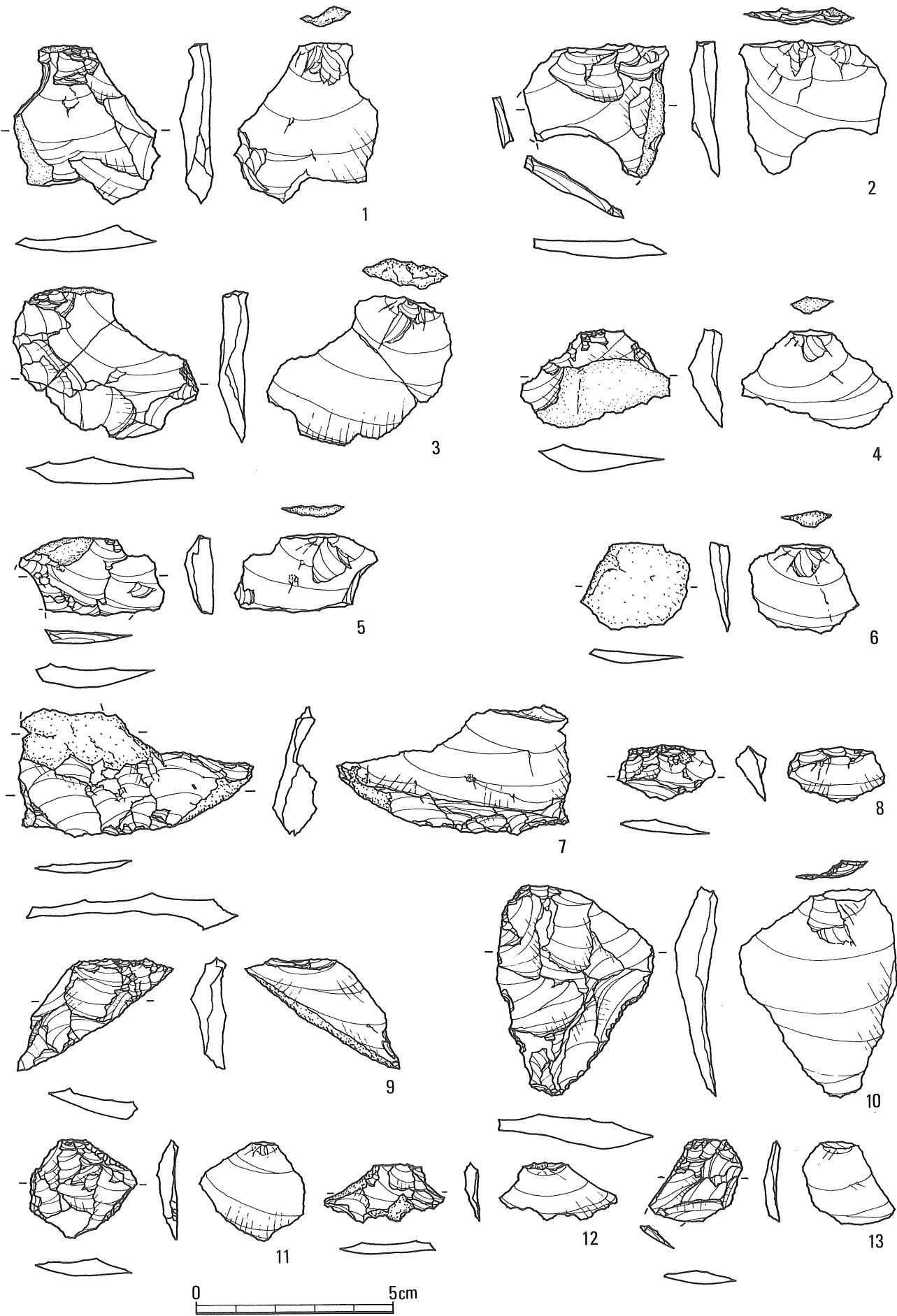
槍先形尖頭器の調整剝片は量的にもかなりの数が出土している。しかし、個体の識別や接合作業が困難な状況であるために、石器組成の中では目的的な剝片a類、b類以外の剝片として位置づけている。また碎片類の中にも多くの槍先形尖頭器調整剝片が含まれているとみられる。そのためここでは唯一個体別の識別が可能であった、赤褐色の黒耀石を用いている両面調整の槍先形尖頭器について、その製作工程に生じた剝片を2種類に分類して示しておきたい。

表面自然面の調整剝片（第51図1～6） 本類は表面が自然面または裏面と同じ方向からの剥離面

で構成されている一群である。打面は平坦な礫打面のものが多く、打瘤も発達している。多くの資料が表面に自然面を残しており、厚手のものが多い。剝片の正面形の形状は台形または逆三角形を呈するもので占められている。

表面に自然面の少ない調整剝片（第51図7～13）

本類は表面が多方向からの剥離面で構成されている一群である。表面に自然面を残しているものは少なく、裏面と反対方向からの剥離痕も多くなる。打面は前者に比べると小さくなり、剥離面打面のもので占められている。打瘤も表面自然面の調整剝片に比べると一般に小さい。剝片は薄手のものが多く、側面からみた形状は弧を描くようにカーブをもつものが多い。一部のものには剝片の尾部



第51図 膦山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器調整剝片

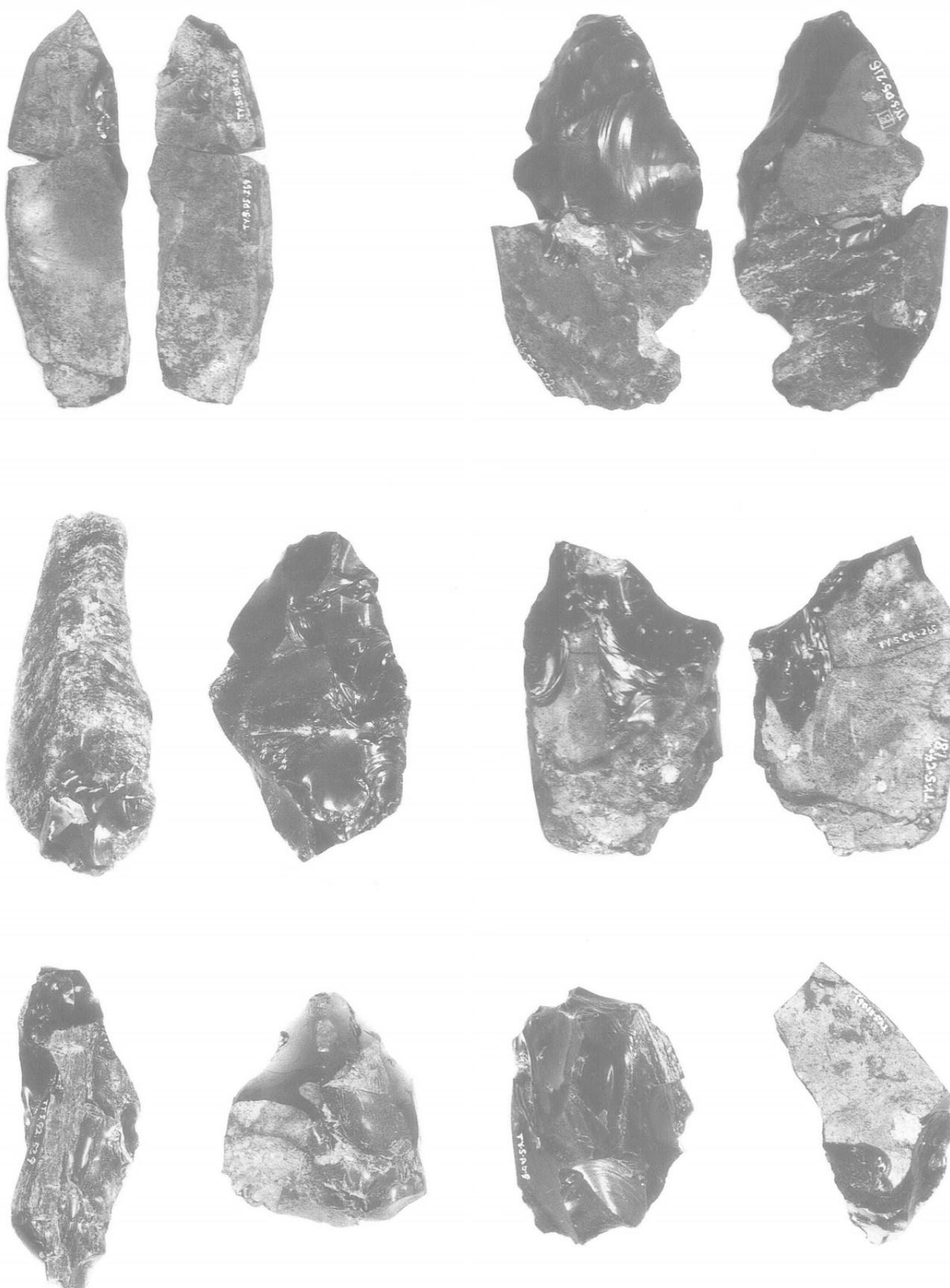


写真27 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器（両面調整未成品 第1の段階）

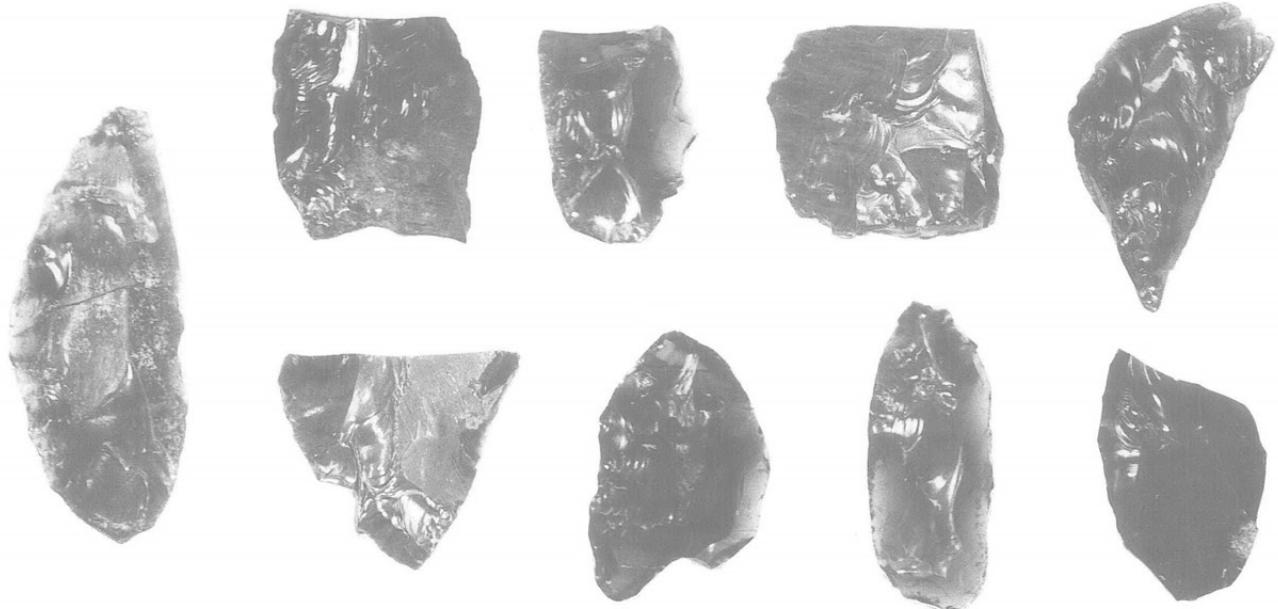


写真28 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器（両面調整未成品 第2の段階）

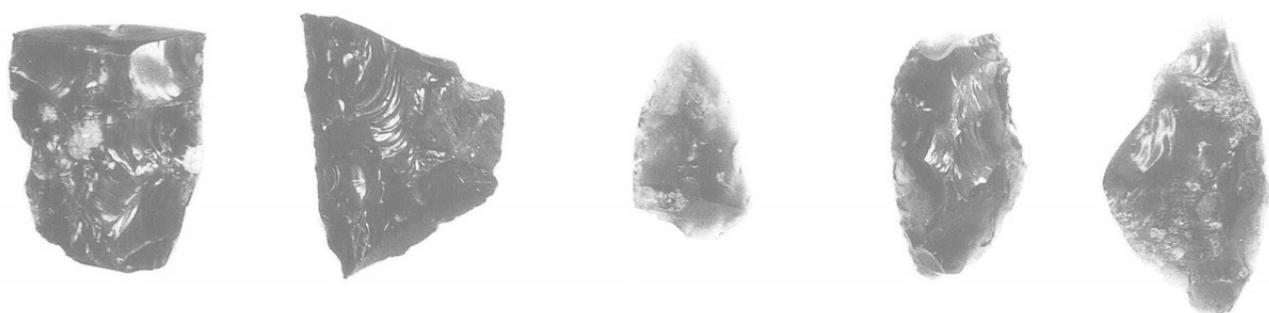


写真29 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器（両面調整未成品 第3の段階）

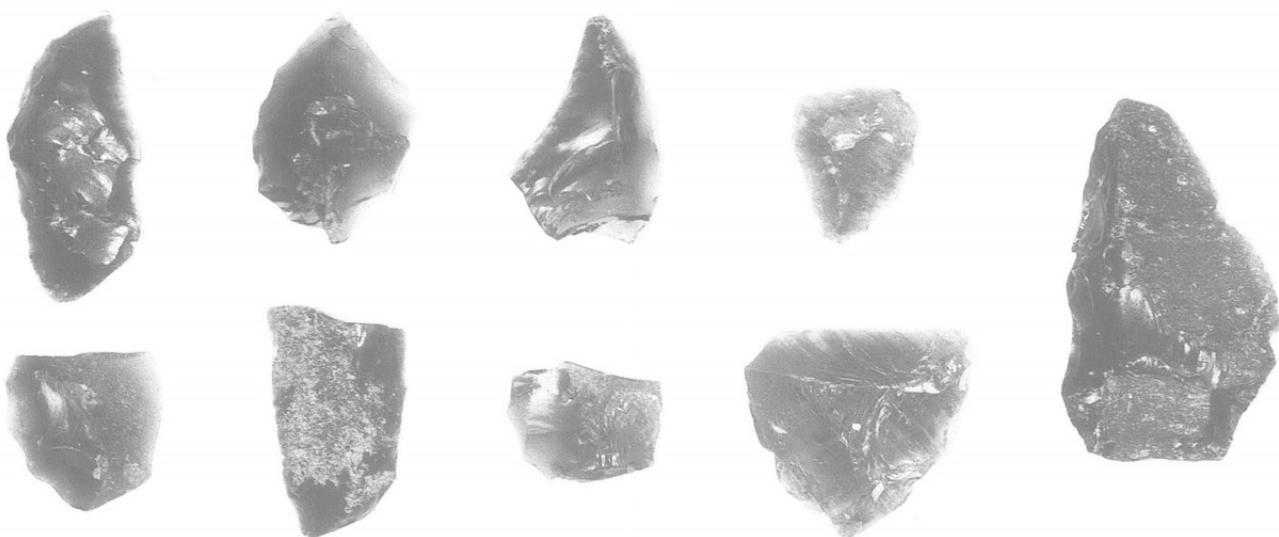
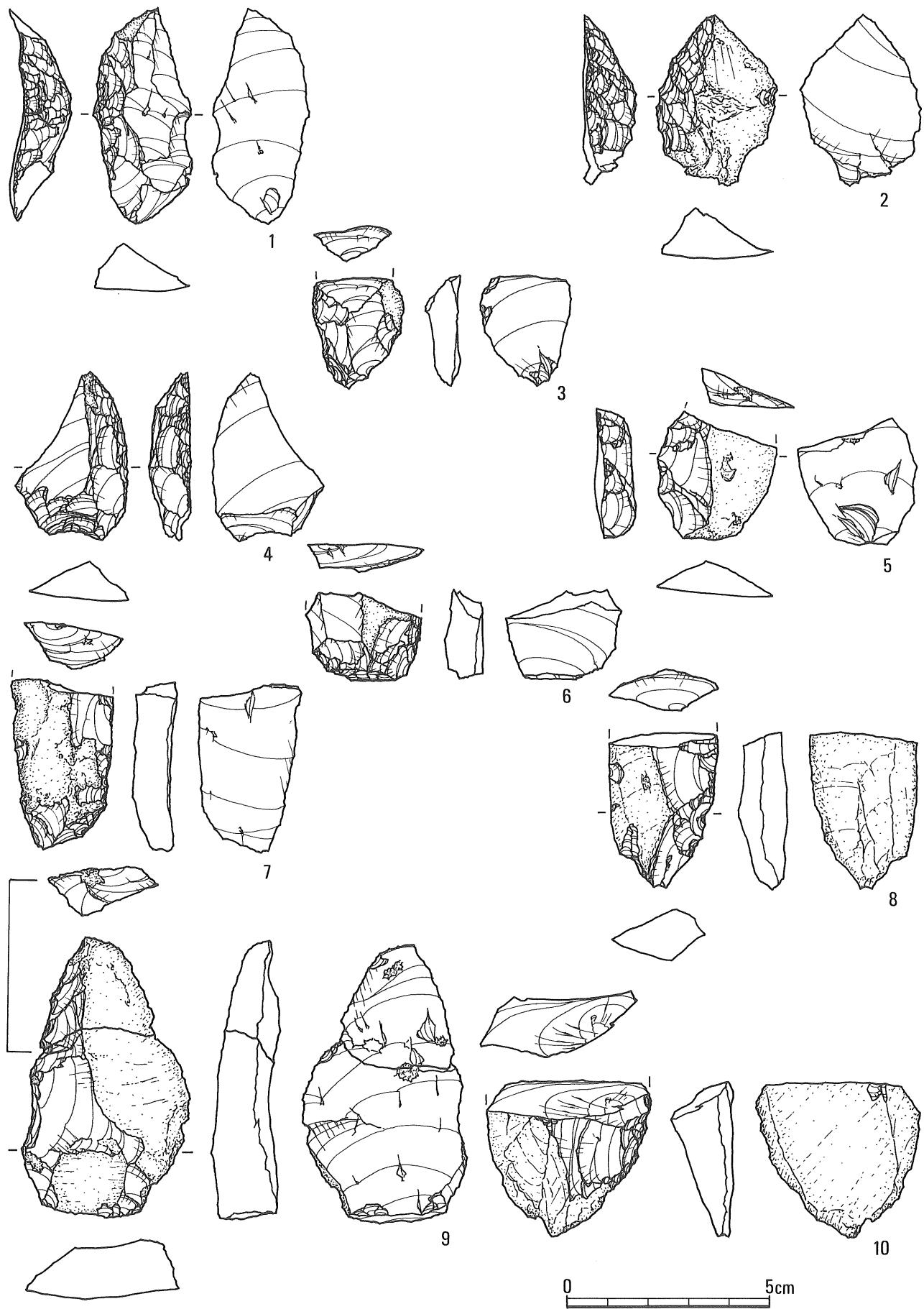
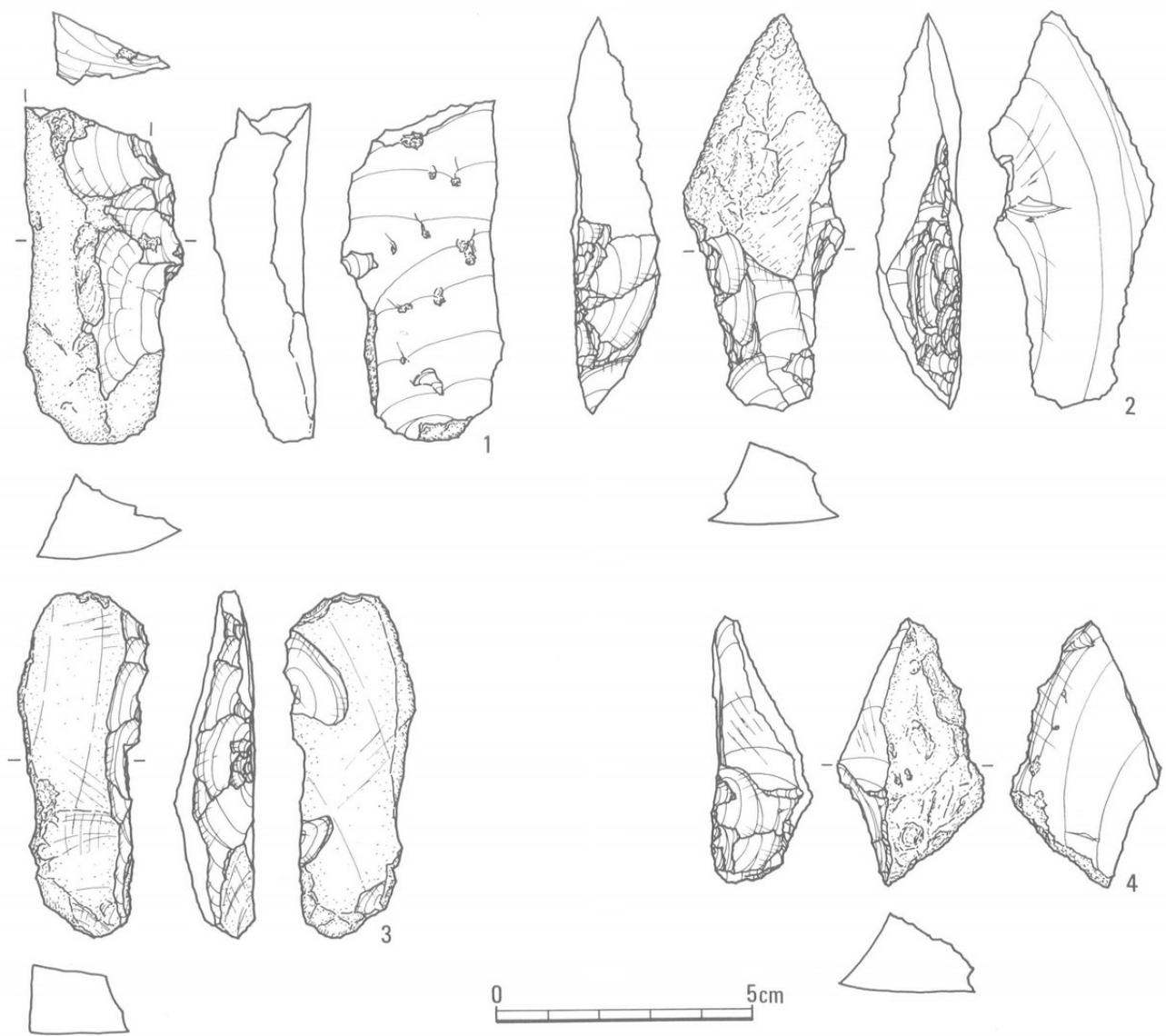


写真30 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器（片面調整a未成品 第1の段階）



第52図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器（片面調整 a 未成品 第1の段階）



第53図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器（片面調整b未成品 第1の段階）

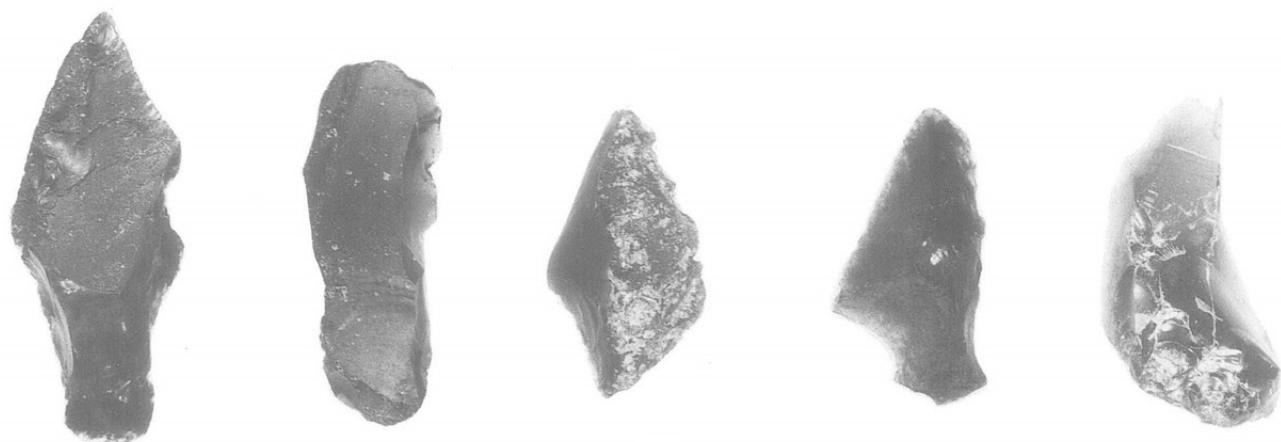
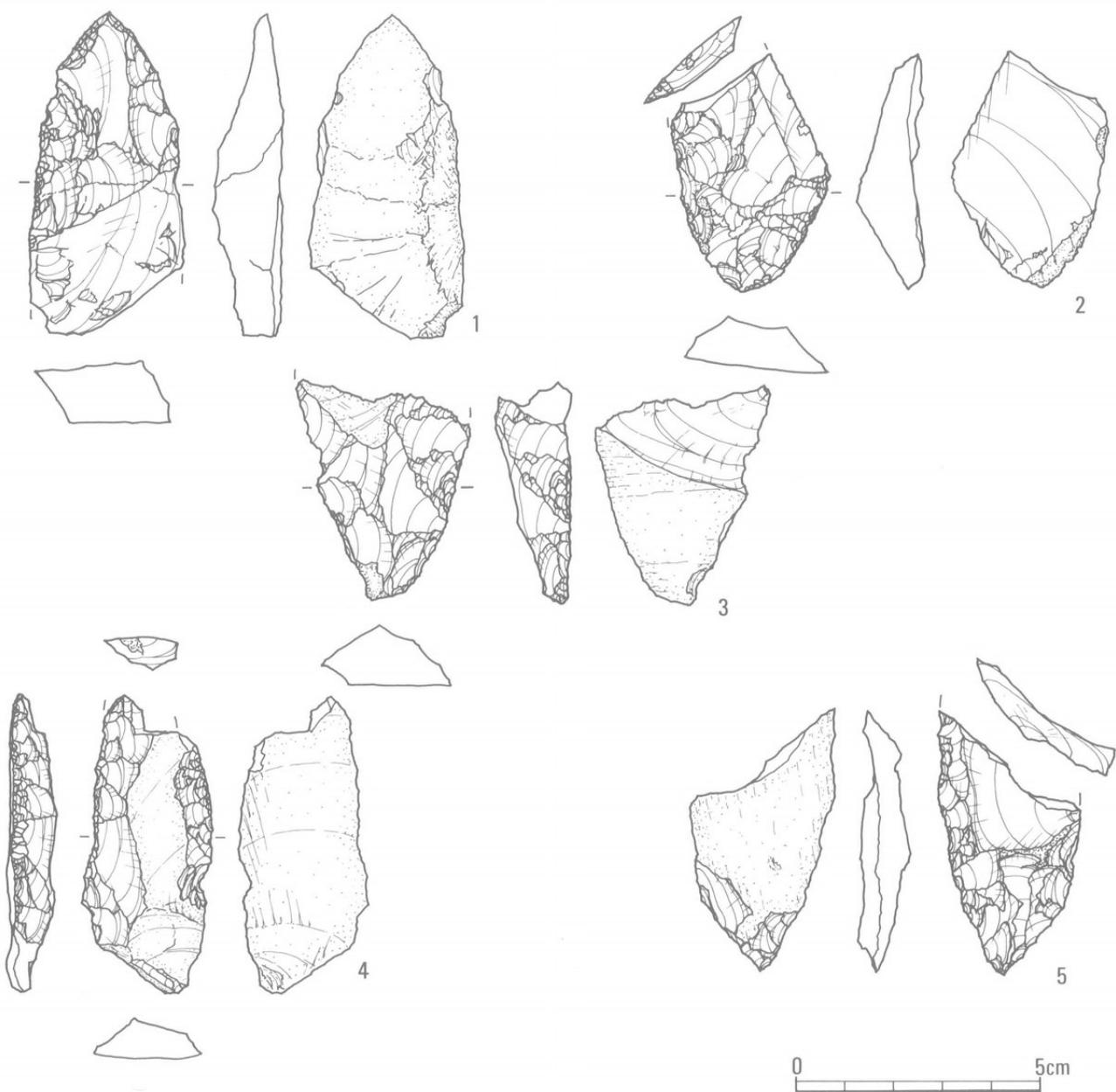


写真31 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器（片面調整b未成品 第1の段階）



第54図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器（片面調整a未成品 第2の段階）

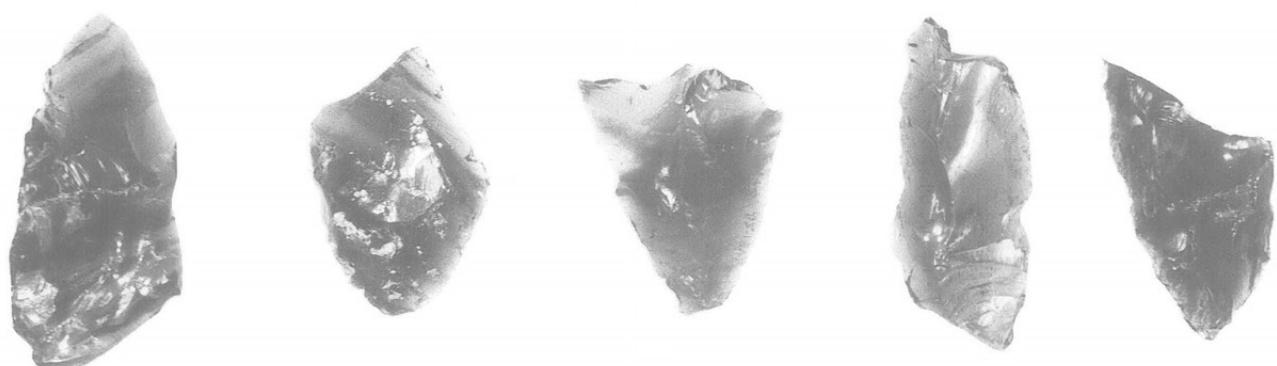
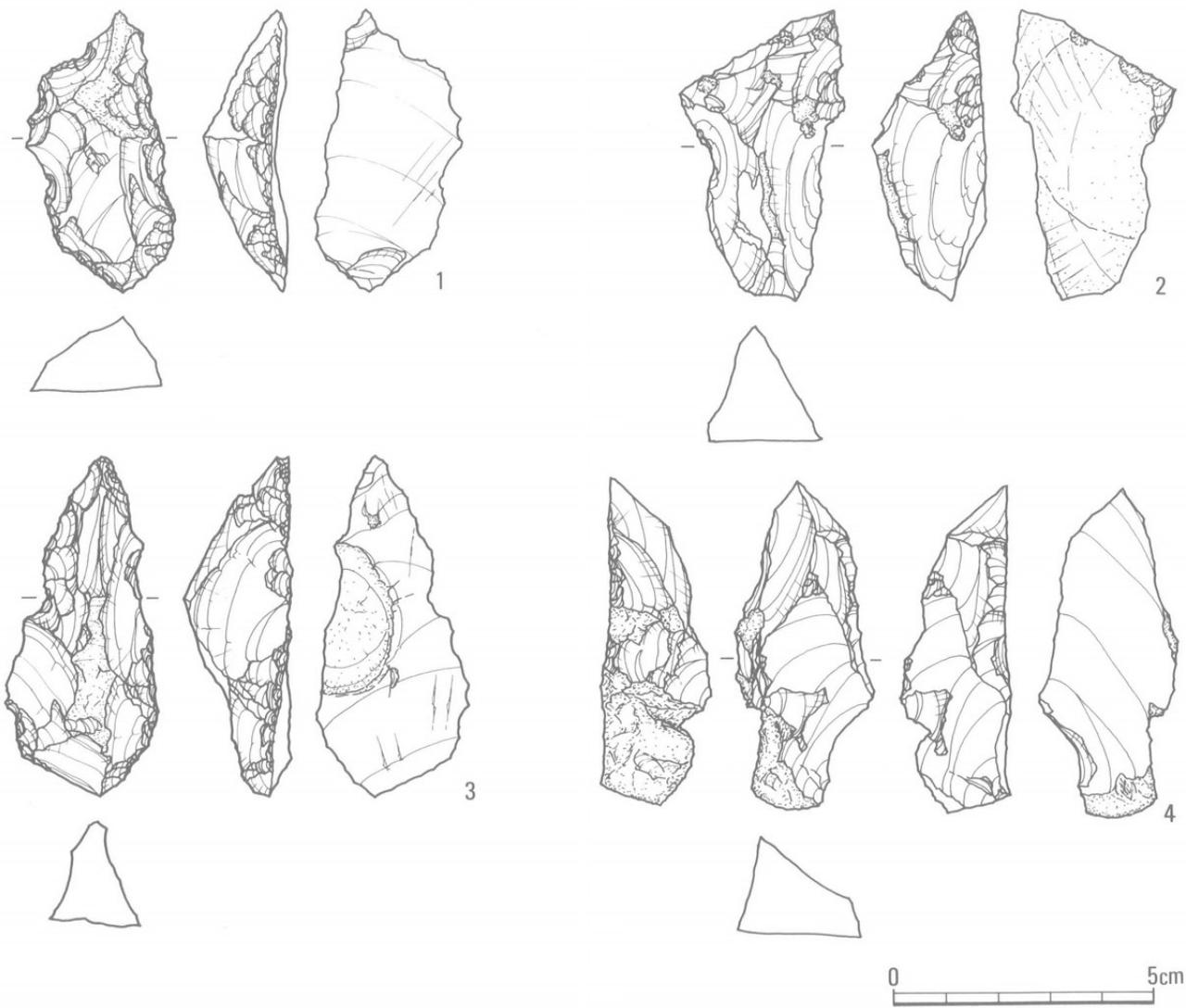


写真32 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器（片面調整a未成品 第2の段階）



第55図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器（片面調整b未成品 第2の段階）

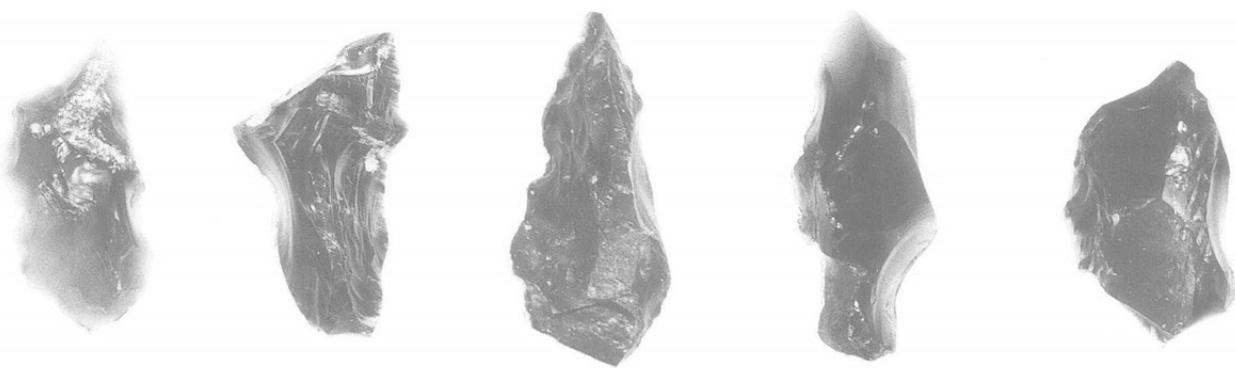


写真33 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器（片面調整b未成品 第2の段階）

に槍先形尖頭器の反対側の側縁の一部を取り込んでいるものもみられる。

また本類は大きさの上で2つのまとまりがみられる。それらは大きさがおよそ1cm以上的一群と、それ以下の小形の一群である。小形の一群は一般に碎片として捉えられている一群であるが、打面・表面構成等からみて本類の槍先形尖頭器調整剝片と同質のものであると判断した。

片面調整槍先形尖頭器の未成品

片面調整の資料としては、片面調整aの完成品が16点、未成品が74点、そして片面調整bの完成品が5点、未成品が20点、それぞれ出土している。

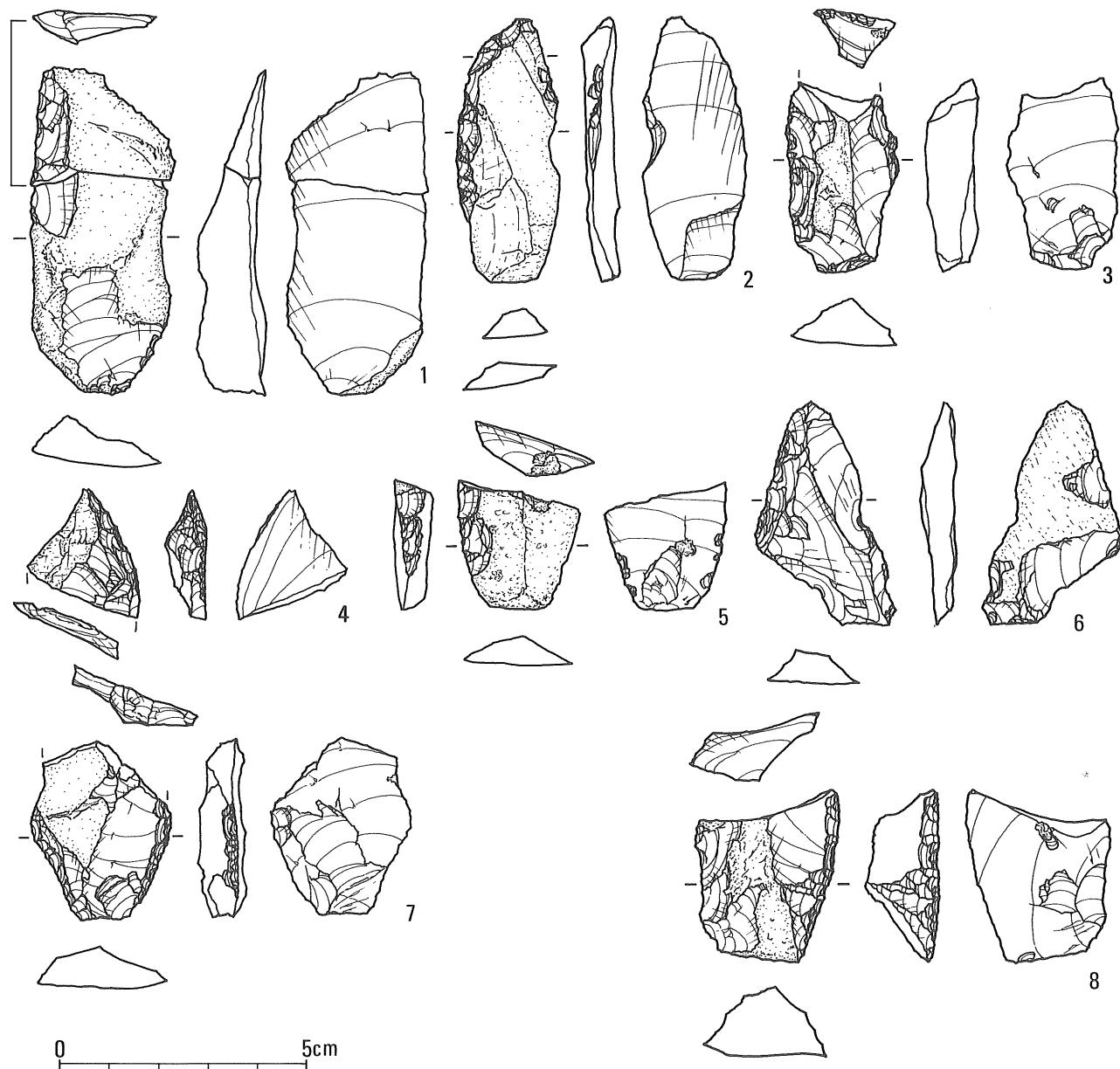
第1の段階の資料（第52・53図、写真30・31）

まだ石器の片側だけを中心に調整加工の施されている一群である。該当する資料としては片面調整aが24点、片面調整bが13点存在している。

素材となる剝片は石器の長軸と同じ縦方向に置かれるものが多い。調整加工が施されている部分は胴部が中心である。片面調整aでは側縁の大まかな調整加工を終えたあとに細部加工も施しているものも存在している。片面調整bでは側縁部分が鋸歯状を呈しているものが多いようである。

第2の段階の資料（第54・55図、写真32・33）

石器の両側の側縁部分に調整加工が施されている



第56図 鷹山I遺跡S地点の槍先形尖頭器（周辺調整未成品 第1・2の段階）

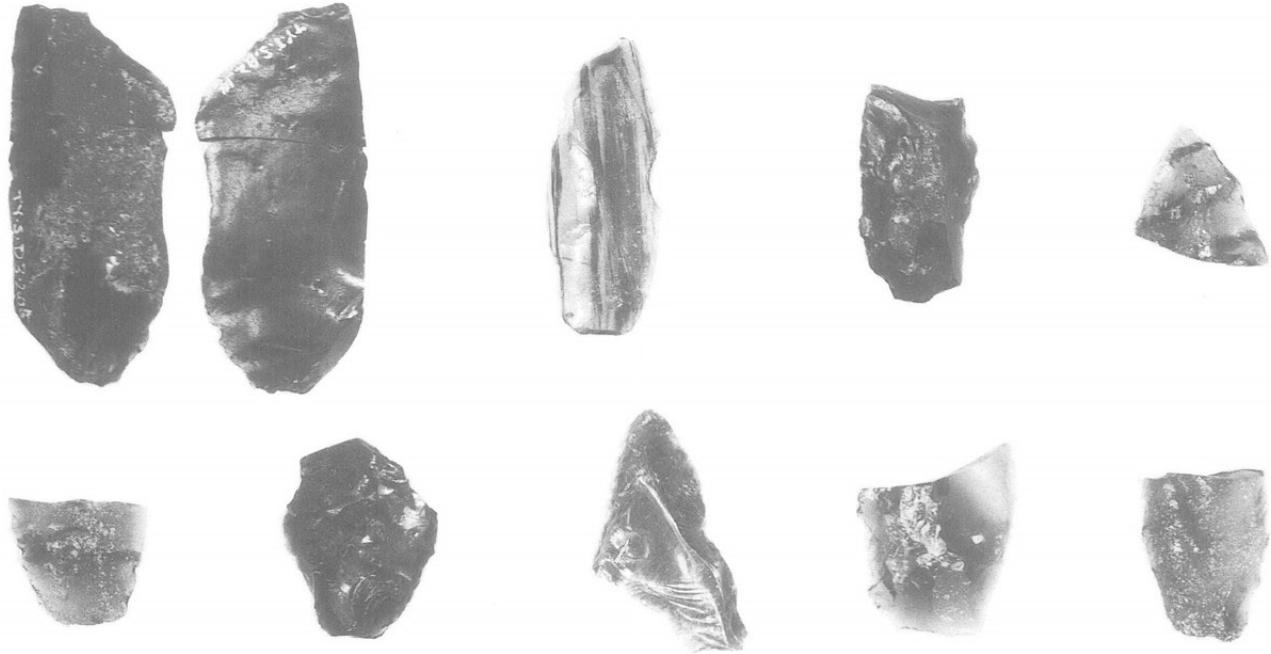


写真34 鷹山I遺跡S地点の槍先形尖頭器（周辺調整未成品 第1・2の段階）

一群である。該当する資料としては片面調整aが50点、片面調整bが7点存在している。

片面調整a 片面調整bともに調整加工を施す中心は胸部である。先端部分はおおまかに作り出されているが、基部の方は加工のよんでいないものが多い。片面調整aの一部の資料には、裏面にある素材の打瘤部分の除去のために平坦な調整加工を施しているものもある。

周辺調整槍先形尖頭器の未成品

周辺調整の資料としては完成品が16点、未完成品が17点出土している。

第1の段階の資料（第56図、写真34） 主に石

器の片側の側縁部分を中心として調整加工が施されている一群である。該当する資料としては5点が存在している。

素材となる剝片は主に石器の長軸と同じ縦方向に置かれている。調整加工は片面調整のものと同じように、やや面的な調整を施していくものと、ナイフ形石器に特徴的なブランディングに近い急斜度の調整によって素材を切り取っていくようなものの二種類がみられる。

第2の段階の資料（第56図、写真34） 石器の両側の側縁部分に調整加工が施されている一群である。該当する資料としては12点が存在している。

3 S地点の石器製作技術体系

S地点から出土した資料の大半が、石器の製作に関わって作出されたものである。それらの個々についての資料分析と記述は前節までで行ったが、ここではこれまでに分類を行ってきた資料を製作工程の流れに位置づけることによって、S地点の石器製作技術の特徴を明らかにしていきたい。

原石の採取

黒耀石原産地である星糞峰直下に位置するS地点には1569点にのぼる原石が持ち込まれている。これは他の地域にみられるような一般の遺跡に比べると桁違いに膨大な量であり、原石の採取地点からの供給状況が安定していたことが伺われる。

こうした状況とともにもう一つの大きな特徴は、S地点では幾つかの異なる大きさの原石を選択して持ち込んでいるということである。それは円

礫・角礫状の原石 A 類、板状・棒状の原石 B 類、その他に小形の原石 C 類の 3 つの種類の原石である。それらは、大きさとしてはおよそ握り拳よりやや小さめの原石である。これは同じ星糞峰を原石の供給源として、かつ同じ第 I 遺跡内で隣接している M 地点が、握り拳大から人頭大ほどの大形の原石を好んで持ち込んでいる状況を比べると明らかな差をみせている。

そして興味深いことには、S 地点においては、わざわざ持ち運んできた原石を多くはそのまま遺跡内に廃棄てしまっていることである。一般的な地域の遺跡ではいうまでもなく、M 地点においてはなんらかの形でそのほとんどを消費しているということを考えると大きな違いをみせている。

こうしたことから考えて、S 地点ではいったん持ち込んだ原石を、遺跡内で使用目的に合わせてもう一度選択を行っていることが考えられる。ここでは使用に耐えない小形の原石 C 類、そして原石 A 類、原石 B 類に関しては加工しやすいものから優先的に消費していったと推定される。

剥片剝離

S 地点からは大きくみて 2 種類の剥片剝離作業面をもつ石核が出土している。それらはいずれも同じ原石 A 類を多用しているが、剥片剝離作業の行い方や、作業面の形態の違いから 2 種類に分離されるものであった。一つは幅広の剥片を打ち剝がしている石核 A 類であり、もう一つは縦長細身の剥片を打ち剝がしている石核 B 類である。

第 I 型剝片剝離技術 石核 A 類は同一作業面から 1 ～ 数回の少ない剝離で、幅広の大きな剝離面をもつものである。まず打面は平坦な礫面、または原石の一端を打ち剝がしてできた剝離面を利用していている。剥片剝離作業面は主に打ち剝がした剝離面から横に打点をずらして、作業面の稜になっている部分を剝離軸の中心にもってくるようにして進められている。そのために打点をじぐざぐと大きく左右に移動させていき、残核は扁平な形に

なっている。その他、一部には原石を半割するような大きな 1 枚の剝離面を残しているものもみられる。石核 A 類は一般に打角が大きく、また打瘤の発達した作業面が残されている。

こうした石核 A 類から打ち剝がされたものが剥片 a 類である。大きさは 5 cm 前後、長幅比が 2 : 1 から 1 : 2 と幅広の剥片で、厚さも平均して 2 cm 前後とやや厚手のものである。これらの剥片は 9 割のものが礫打面か单剥離面打面で占められていることや、剥片の剝離角が平均 101.7 度と大きいことからも石核 A 類と対応すると考えられる。また表面に自然面を残すものが 96 % にのぼることからも剝離回数が少なく、打点を大きくずらしながら剥片剝離作業を進めている石核 A 類の作業過程が裏づけられる。このような剥片剝離工程を第 I 型の剥片剝離技術と仮称しておきたい。

第 II 型剝片剝離技術 もう一つの石核 B 類は石核 A 類に比べるとやや小形で細身の剝離面をもつものである。打面は单設打面のものと両設打面があり、打面調整も石核 A 類に比べると顕著である。また石核調整を施しているものも一部にみられる。石核 B 類の数は石核 A 類の 1 割程度しか存在しておらず、S 地点においては客体的な在り方を示している。

こうした石核 B 類から打ち剝がされたのが剥片 b 類である。長さは 4 ～ 5 cm と剥片 a 類と大きくは変わらないが長幅比は 2 : 1 から 4 : 1 とかなり細身である。また厚さも 1 cm 以下とかなり薄手のものである。打面は複剝離打面のものが主体であり、剝離角も平均して約 94 度と小さい。量的に少ない剥片 b 類は主にナイフ形石器の製作のために生産されていたものと考えられる。このような剥片剝離工程を第 II 型の剥片剝離技術と仮称しておきたい。

槍先形尖頭器の製作

槍先形尖頭器の製作工程は作り出される際の調整加工の施し方からみて大きく 2 つに分かれます。

両面調整槍先形尖頭器の製作工程

両面調整の槍先形尖頭器は完成品が9点、未成品が78点、それぞれ出土しているが、そのうち赤褐色を帯びた黒耀石を利用して製作を行っている一群が存在しており、一部は接合作業も行われている。ここではこれらの資料を中心として両面調整の槍先形尖頭器の製作について3つの工程分けて記述していきたい。

赤褐色を帯びた黒耀石は剥片・碎片にいたるまで合わせて502点が検出されている。その資料の種類は、原石1点、石核1点、槍先形尖頭器未成品19点（15個体）、剥片・碎片類483点となっている。そのうち原石と石核を除くと、剥片・碎片類のほとんどが槍先形尖頭器の製作に関わっていたことが遺跡における分布状況などから推定されている（第Ⅱ章参照）。

素材（第57図1～4） 赤褐色を帯びた黒耀石を用いた15点の槍先形尖頭器未成品のうち、器体の表裏ともに自然面を残し、原石が素材であると確認できた資料は13点が存在している。それらの素材の全体の形状などについては、破損によって充分うかがい知ることはできない。しかしそれらの自然面を残した未成品の厚さが最も薄いもので0.9cm、最も厚いものが2.8cm、平均の厚さが

1.8cmということから考えると、薄手で板状や棒状を呈している原石B類を素材としていたことが伺われる。またこうした原石B類の他に剥片を素材としているものも一部にみることができる（第58図）。それらには厚さが原石B類に近似している剥片a類が使用されている。

両面調整第I工程 用意された素材は、まず槍先形尖頭器の原型を作るために手頃な大きさに打ち割られていく。こうした作業工程をここでは第I工程とし、「素材成形工程」と位置づけておきたい。この工程に該当する資料は未成品第1の段階の資料であり、そのうち赤褐色を帯びたものは4点が存在している。

第I工程では原石を素材にした場合は石器の長軸に合わせた形で縦方向に置き、剥片を利用して加工する場合は横方向に置いて加工を行っている。これらには粗い大きな調整加工を施していくものが多くみられる。この時の調整加工では打面を側縁部分に設定しているものと裏側に設定しているものの2種類がみられる。

調整加工の行われ方は一方の面において、一方から集中的に行っているものと、両側の側縁から行っているものがある。この作業で打ち削がされているのが第1の段階の調整剥片であると考え

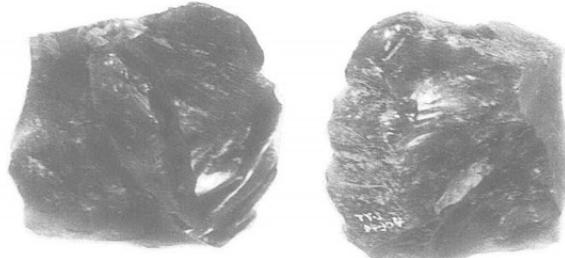
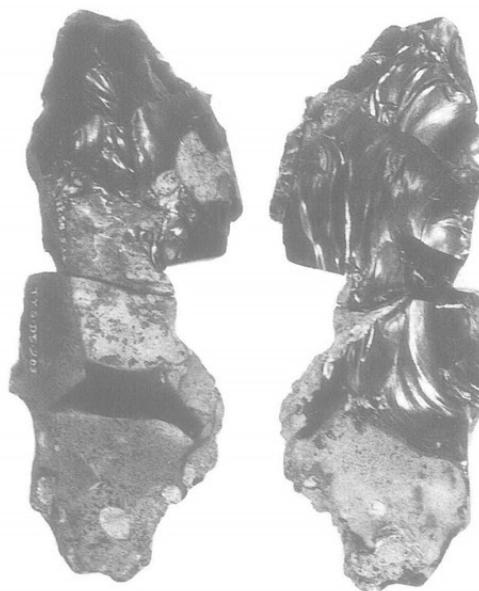
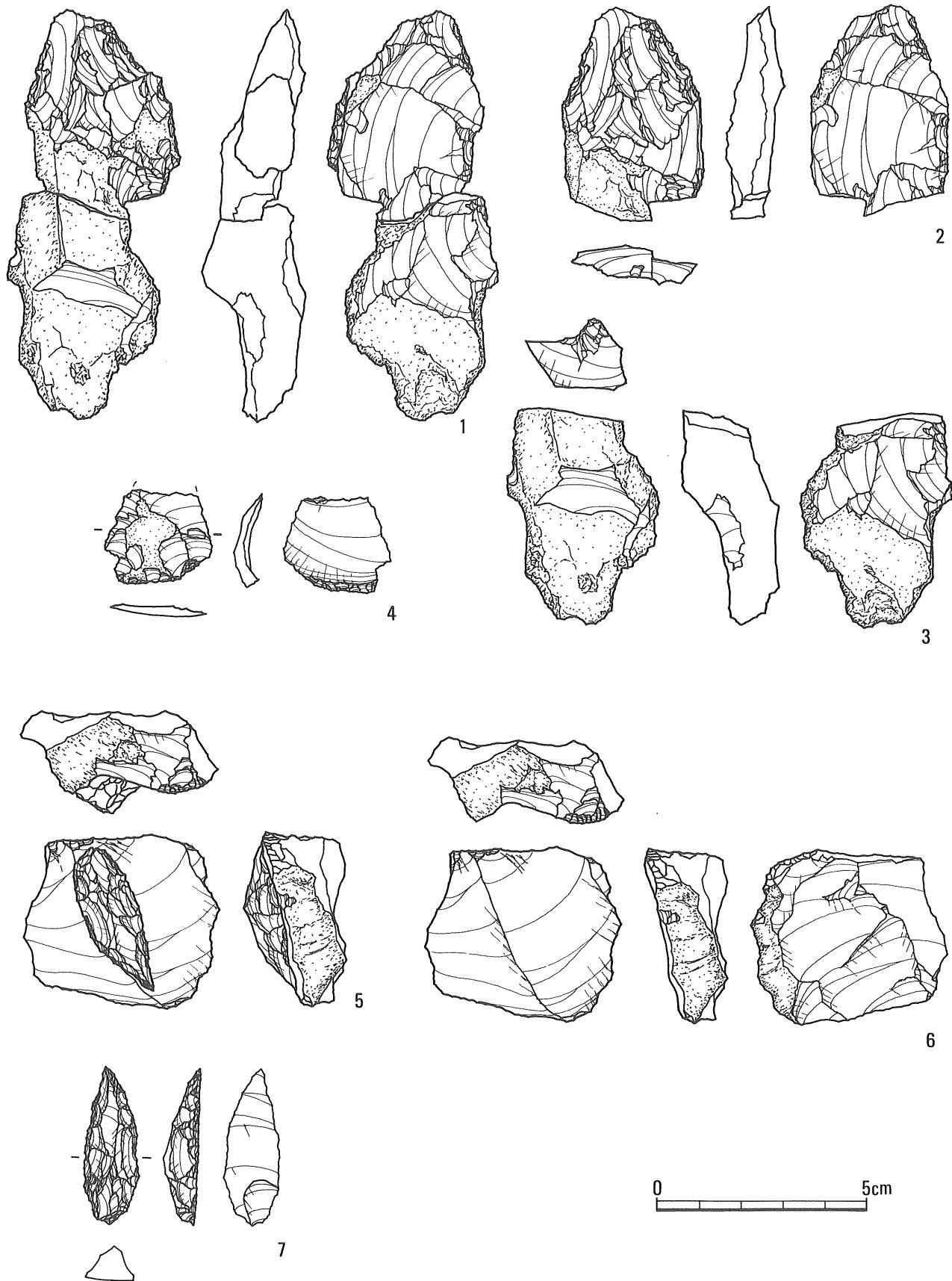


写真35 鷹山I遺跡S地点の接合資料



第57図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の接合資料

られる。

また、調整が行われる面も片側だけの場合と、両側の場合が存在している。これらの組み合わせた調整加工の進行によって片面および半両面調整で、断面の形がやや平行四辺形を呈した形状の未成品を作り出していく。

こうした第Ⅰ工程の調整加工の目的としては、①素材を適当な厚さまで減じることと、②素材表面の不要な凹凸を除去すること、③素材の自然面の除去という3つの大きな意味が存在していたと考えられる。原石B類、および剥片a類という一定の素材の選択によって、ある程度の素材の規格性は保たれるが、同じような形態の石器をより効率的に製作するために、上記の3つの条件を満たした片面調整、半両面調整の「槍先形尖頭器未成品」を作り出していたものと考えられる。

両面調整第Ⅱ工程 本工程は第1段階を経て作り出された第Ⅰ工程の槍先形尖頭器未成品に対して、さらに調整加工を進めて形状を整えていく工程である。これを第Ⅱ工程とし、「器体成形工程」と位置づけておきたい。この工程に該当する資料は第2の段階の未成品であり、そのうち赤褐色のものは6点が存在している。

適当な厚さと形にされた第Ⅰ工程の槍先形尖頭器は、前工程よりも丁寧な調整加工によって胴部を中心成形されていく。粗めの調整加工によってできた器体表面の凹凸は、両側縁からの調整加工によってならされ、表面に残る自然面も除去されていく。この時の調整加工で剥がされるのが第2の段階の調整剥片であると考えられる。

こうして石器の断面形も平行四辺形からレンズ状になり、槍先形尖頭器としての形状が整えられていくが、側縁部分の稜線は両面への加工のために大きく波打っており、また先端部と基部は明確には作り出されていない状態である。

第Ⅱ工程においては、特に胴部の調整加工が顕著であって、槍先形尖頭器としておおよその形状を整えることになる。調整加工の施され方として

は、全体の形状をバランスよく保ちながら行うわけではなく、片側の側縁ずつ集中的に加工し、それから反対側の側縁、そして裏面へ……、というように行われていく。そのために途中で破損した未成品をみると、片側の側縁はきれいに整えられているのに、もう一方の側縁部は自然面や第Ⅰ工程の剝離痕を残したままになっているアンバランスな形状の資料が存在している。

両面調整第Ⅲ工程 本段階は前工程で形状を整えられた石器に対して、先端部と基部を中心に調整加工を施すことによって石器を完成させる仕上げの工程である。これを「最終整形工程」と位置づけておきたい。本工程に該当する資料は第3の段階の未成品であり、赤褐色の黒耀石を用いたものでは2点が存在している。

この工程では先端部分の明確な作り出しを行うとともに、石器全体の形状の修正や器面の最終的な調整が行われている。基部は一部に自然面を残しているものがみられ、先端部分に比べると加工が丁寧には施されないようである。石器の表面には先端部分から胴部にかけて細部調整による剝離痕が顕著にみられ、側面からみられた器体の歪みも修正されてくる。また側縁の稜線も波打っていたものが直線的にそろえられてくる。

両面調整槍先形尖頭器の接合資料 こうした両面調整の槍先形尖頭器の製作工程を示す接合資料が赤褐色の個体にみられる（第57図1～4）。この接合資料は槍先形尖頭器未成品2点と調整剥片1点から構成されている。

素材は棒状の原石B類である。調整加工の行われ方としては、最初に側面の平坦部を打面として利用して裏面に集中的に加工を施している。その時の剝離痕が下半分の裏面に残されている。第Ⅰ工程「素材成形工程」の途中で石器が中央部分で折れ、下半分はそのまま放棄されている（3）。残った上半分（2）は、その後も槍先形尖頭器の製作が続けられており、素材の長さが半分になってしまったため、裏面に集中的に加工を施すこと

で素材の厚さを大幅に減じている。適当な厚さにまで素材を作り替えると、今度は表面への加工を施し、調整剝片（4）が剥離されている。

結局、完成には至らず第Ⅱ工程「器体成形工程」で放棄されてしまっているが、両面調整の槍先形尖頭器の製作の際に、いったん破損してしまった未成品を修正したうえで、再び加工を進めている興味深い資料といえるだろう。

片面調整・周辺調整槍先形尖頭器の製作工程

片面調整と周辺調整の槍先形尖頭器は、利用された素材が剝片を主体としていることや、未成品として残された資料の在り方等からみて、両者ともおよそ同じような製作工程を経て製品が作り出されていたものと考えられる。

素材 片面調整のものは片面調整a、bとともに剝片a類と原石B類が素材として利用されている。なかでも片面調整aがやや薄手のもの、そして片面調整bがやや厚手のものが素材として選択されている傾向が伺われる。

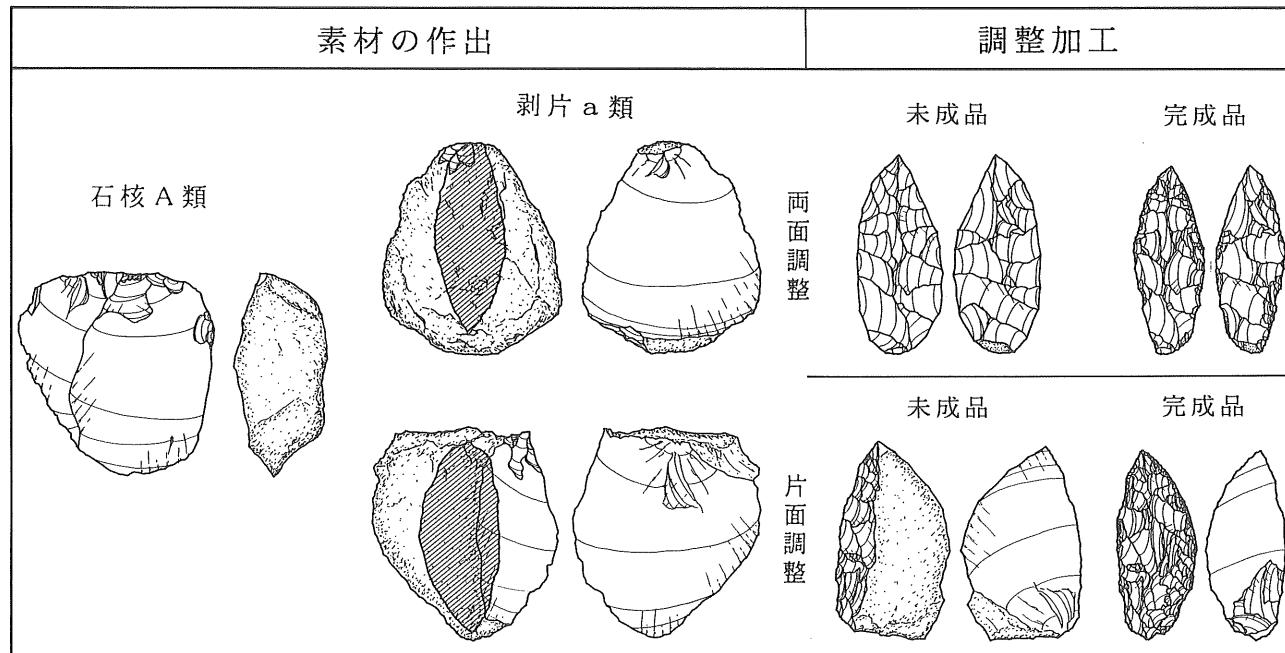
一方、周辺調整のものは剝片a類、剝片b類の両者が素材として利用されているようである。これらはやや幅広のものから細身のものまで利用されているようであるが、片面調整のものに

比べると全般に薄手である。

このように素材の選択においては、各々の調整方法で作り出された石器が素材の大きさとともに厚さを重視して選んでいる傾向が伺われる。これは両面調整の槍先形尖頭器が「素材成形工程」において、形状や厚さを調整して第1段階の槍先形尖頭器未成品を作出するのに対して、片面調整、周辺調整の槍先形尖頭器の両者は加工していく部位が表面に限定されており、両面調整の槍先形尖頭器のような素材の変形・修正が不可能なために、より丁寧な素材の選択を行っているものと考えられる。このため片面・周辺調整の槍先形尖頭器では、剝片剥離作業から素材の選択までが、両面調整のものの「素材成形工程」に該当するものとして捉えられるだろう。

片面・周辺調整の工程 剥片剥離作業を経て作り出された剝片、および適当な厚さと形状を兼ね備えた原石B類は、槍先形尖頭器としての調整加工を施していく。ここでは両面調整の槍先形尖頭器とは異なり、明確な工程の分離はできない。これは加工される部位が両側縁部分中心に限定されているためである。

素材となっている剝片については、片面調整、



第58図 鷹山I遺跡S地点の剝片素材両面調整・片面調整槍先形尖頭器製作工程

周辺調整とともに縦方向に置かれるものが多い。調整加工の施され方としてはともに、まず片側の側縁部分ごとに集中的に行われていく。これは片面調整、周辺調整の第1段階の未成品にあたる。次に残った側の側縁部分が調整されていく。それらの資料が第2段階の未成品である。しかし、先端部分また基部への調整は最終的に集中して行われるようである。

このような胴部にかけて中心的に調整が施されていくという方法は、両面調整の槍先形尖頭器の製作方法に共通している。また片面調整aでは裏面基部の一部にも平坦な調整加工が施されている例が数点存在している。これは素材となった剥片の打瘤部分の脹らみを除去するために行われているようである。一般に周辺調整の槍先形尖頭器にはプランティングによる調整が中心で、片面調整aは平坦な面的調整が、そして片面調整bには前二者の中間のような急斜度の粗い調整が施されている。

石器の両側縁部への調整加工で大まかな形状が整えられると、最後に先端部や基部を中心とした調整加工が行われて完成品へと仕上げられていく。片面調整aおよび周辺調整の槍先形尖頭器は基部に素材の一部を残しているものと、丁寧に調整が施されて尖り気味になるものの両者が存在しており、片面調整bは一般に基部への調整が顕著ではない。また仕上げの細部調整は片面調整a類が両側の側縁の施されているのに対して、片面調整bは先端部分の一部や片側の側縁にしか施されていないものが多い。周辺調整のものの中には調整加工が石器の全周におよばず、ナイフ形石器のように縁辺の一部分を残しているものもみられる。

片面調整a 槍先形尖頭器の接合資料 こうした主に剥片を素材とした槍先形尖頭器の製作工程を示す接合資料が1個体得られている（第57図5～7）。この接合資料は石核1点と槍先形尖頭器1点から構成されている。

石核は作業面が表裏両面に残されているもので

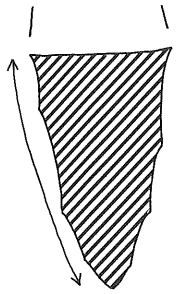
あり、石核B類としてはやや変則的なものである。裏面下方向から集中的に剥片剥離を行った後に、作業面を表面に移動させて、今度は上方向から集中的に打点を左右にずらしながら剥片剥離を行っている。接合した槍先形尖頭器の表面の構成からみて、表面では少なくとも4回の剥離作業が行われているようである。槍先形尖頭器は素材となった幅広の剥片a類を縦位に用いており、剥片の中央部を利用して製作されている。また基部に位置している素材の打瘤部分は調整加工によって除去されている。

槍先形尖頭器製作途上の破損について

鷹山I遺跡S地点の石器製作における中心は槍先形尖頭器であった。そこで多くは黒耀石の原石が持ち込まれ、原石の選択や剥片の生産を行いながら、調整技術とその工程の異なる槍先形尖頭器が集中的に製作されていた。こうした活動の結果として、遺跡内には大量の槍先形尖頭器の未成品が残されている。これらの資料は石器に加工される途上において、なんらかの事情で製作するのを止めて、そのまま遺跡内に残されたものである。こうした未成品の資料の数は、多くが遺跡の外に持ち出されてわずかに遺存したであろう完成品に比べると、量的にかなり多数であり製作址遺跡の石器群を特徴づけるものといえる。ここではこうした多くの槍先形尖頭器の未成品がどのような事情で遺跡に残ってしまったのかについて考えてみたい。

廃棄の原因 S地点から出土した槍先形尖頭器の未成品は189点が存在している。これらの資料を観察していくと、器体の一部が折れて破損しているものが79点も存在していた。これは未成品全体の約42%にあたる量であり、製作の途上で石器が折れてしまったために、そのまま廃棄されてしまった可能性が高いことを示している。

未成品の種類と破損の関係 槍先形尖頭器の未成品の廃棄の主要な原因の一つが製作途上における折れ（破損）に起因するものであるということが分



	上方向	下方向	横方向	ねじれ
折れ面				
点	3	1	3	3

第59図 鷹山Ⅰ遺跡S地点の片面調整槍先形尖頭器製作時の折れの方向

かったが、それでは未完成品が製作途上で折れるという状況が、どういった時に発生しているのかについてみていく。

S地点の槍先形尖頭器の製作方法は先にも示したように、両面調整のものでは素材成形工程、器体成形工程、整形工程の大きく3つの工程に分けて捉えられる。また片面・周辺調整のものは片側の側縁ずつ集中的に調整加工が施されていることを指摘しておいた。ここではそうした2つの製作方法ごとに折れとの関係をまとめてみた。

これをみると、両面調整の槍先形尖頭器では第2段階以降の未完成品に折れが多発していることがわかる。このように第Ⅰ工程において折れによる素材の廃棄が少ないということは、両面調整による石器製作の場合は素材の変形度が大きいために、初期の工程での折れはある程度修正したうえで石器製作の続行が可能であったものと考えられる。これは先に図示した接合資料（第57図）からも伺われる。

また片面調整aの場合には未完成品の約83%が折れによる破損を受けており、製作中止の大きな原因であったことが伺われる。

こうしてみていくと、3つの製作工程の中で、どれが破損の主原因であったかというと、当然のことながら、傾向としては製作過程において、素材から完成品への形状の修正が大きなものに折れが多発しているといえよう。

折れの発生原因 それでは次にどうして折れが発生したのであるかということについて考えていく

きたい。資料数の多い両面調整、片面調整aの折れ面の断面観察を行ってみると、折れの方向についてはどちらも表裏両面からの方向が存在しており、一定のまとめは指摘できなかった。しかし折れ面の断面に球顆を含んでいたり、節理面が存在していたものの割合は約30%にのぼっており、これまた当然ながら多くの石器が素材の弱い部分から折れてしまったことがわかる。

また折れ面の観察において興味深いのは片面調整aの資料である。片面調整の場合、加工の際の加撃方向が石器の裏面方向からのみに限定されているために、折れ面のリングの方向はまとめた在り方を示すものと考えていたが、予想に反して多様な在り方を示すことがわかった。

これらは特に同じ側縁部分を加工中に破損して、基部が残されているものを対象としたものであるが、①表側から折れているもの、②裏面から折れているもの、③ねじれて折れているもの大きく3種類の折れ方が存在している（第59図）。直接加撃を想定して折れる条件を以下に考えてみた。石器を手に持った状態、あるいは台石のようなものに胴部を押し付けた状態で調整加工を行った場合は表面方向からリングが入り、石器の端部を持って、もう一方の端部を台石等に固定して調整加工を行った場合は、下方向からリングが形成されると考えられる。こうした同一の石器の製作方法と折れの多様な在り方が個人的な製作上の癖となるかどうか、資料の蓄積や実験的な研究が今後望まれる。

鷹山Ⅰ遺跡S地点の石器群とその技術

ここまで分類した資料の位置づけを通じて石器製作工程の特徴についてみてきたが、最後に鷹山遺跡群第Ⅰ遺跡S地点の、槍先形尖頭器以外の石器を含めた石器群全体の製作技術体系をまとめておきたい（第60図）。

S地点の中で行われている作業は大きく3つの過程に分けて捉えられる。それは、①素材の選択と準備、②石器の調整加工、③完成した石器の他への搬出および遺跡での使用である。③については別に論ずることにして以下、①、②の過程を中心記述していきたい。

素材の選択と準備 石材の採取地点から石器製作のための手頃な大きさの原石が運び込まれると、遺跡の中で製作する石器に合わせた原石の選択が行われる。この時点で、明らかに製作にたえない小形の原石（原石C類、いわゆる「ズリ」状のもの）や、不純物を多く含んでいたり、形が適当でないものが廃棄されていたと考えられる。S地点の中に原石が利用されないまま多く残されている事実は、こうした原石の選択行為が、おそらく原石採取地でまず行われた後、再び遺跡内で行われていたということを表していると考えられる。

その次に角礫状や円礫状の原石（原石A類）を利用して剥片剝離作業が行われていく。ここでは第Ⅰ型の剥片剝離技術によって幅広の剥片a類が作出され、一部で第Ⅱ型の剥片剝離技術によって縦長細身の剥片b類が製作されている。この時点で消費され残核となった石核A類と石核B類、そしてその後の石器の素材に利用されなかった剥片が廃棄されていく。

このような過程を経て、S地点で石器の素材として利用された板状・棒状の原石（原石B類）、剥片a類、剥片b類が用意されることになる。

石器の調整加工 用意された3種類の素材はこの過程で利器としての石器に加工されていく。ここには大きく3つの製作工程が存在している。

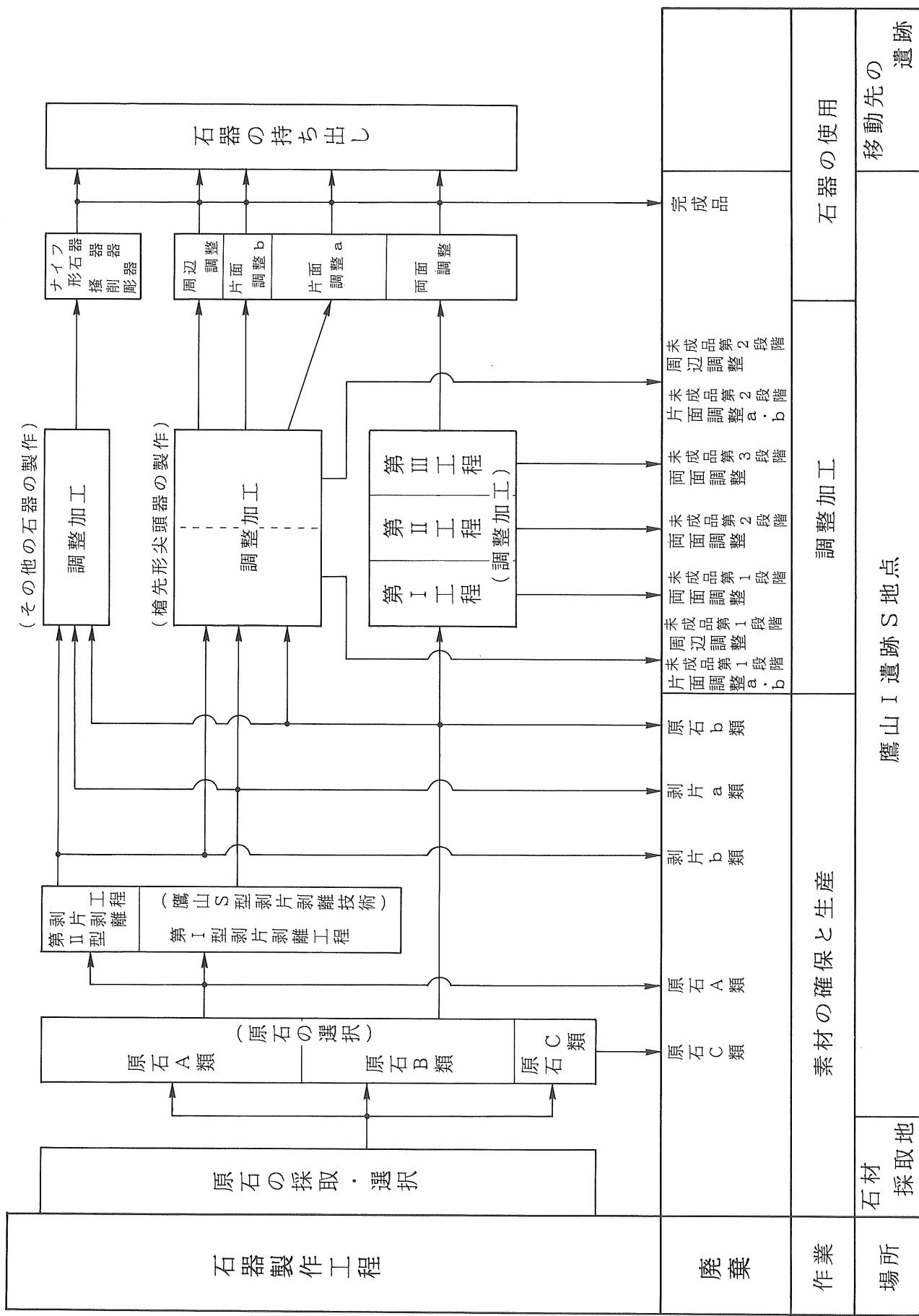
まず一つめには両面調整によって作られる槍先

形尖頭器の製作工程である。ここでは原石B類と剥片a類が素材として利用されている。両面調整の槍先形尖頭器の製作工程は前述したように、「素材成形工程」、「器体成形工程」、「最終整形工程」という、3つの工程に分かれており、それぞれの工程で破損したものが第1～3段階の両面調整槍先形尖頭器未成品として遺跡の中に廃棄されることになる。このような工程を経て完成した石器は、大きさとしては中から大で、形状としては木葉形を呈する槍先形尖頭器（第Ⅱ章参照）として捉えることができる。

二つめには片面調整、周辺調整によって作られる槍先形尖頭器の製作工程である。ここでは片面調整のものに原石B類と剥片a類が、周辺調整のものに剥片a類と剥片b類が、それぞれ素材として利用されている。これらの石器製作工程では両面調整の槍先形尖頭器の製作工程とは異なり、製作の進行状態が明確に段階として捉えることができない。しかし片面調整、周辺調整の槍先形尖頭器はともに片側の側縁ずつ集中的に調整加工を施していくという方法によって製作が行われている。このことから製作中のやや初期に第1段階の未成品が、そしてやや完成に近い時期に第2段階の未成品が、それぞれ残されたものと考えられる。このような工程を経て完成した石器は多様な形態の槍先形尖頭器が生産されている。形状としては木葉形のもので占められているが、大きさとしては周辺調整の槍先形尖頭器は小から中のものが多く、片面調整aとしたものでは、大きさは小から大にかけて幅広く存在しており、すべての形態が存在している。片面調整bは大きいものが多い。

三つめにはその他の石器の製作である。定型的な石器は槍先形尖頭器に比べると出土数は多くないが、ナイフ形石器は剥片b類を多用しており、スクレイパー類は剥片a類を利用して製作しているようである。

「鷹山S型剝片剝離技法」　このようにしてみると、鷹山遺跡群第Ⅰ遺跡S地点の石器群は槍



第60図 鷹山I遺跡S地點の石器の製作技術体系

先形尖頭器の石器組成に占める割合が高いといった量的なことだけではなく、槍先形尖頭器を製作していくために幾つもの種類の素材（原石、剥片）を得るための作業過程が確立されているということと、多様な素材から複数の調整方法により、大きさの違う3つの形態の槍先形尖頭器が製作されていることが指摘できるだろう。特に613点もの数の石核が出土して、剥片の生産の中心となっ

ている第Ⅰ型の剥片剥離技術は、重要なS地点の素材の供給の方法として位置づけることができる。こうした槍先形尖頭器製作の中核となっている第Ⅰ型の剥片剥離技術を「鷹山S型剥片剥離技法」と呼称しておきたい。そして、先に報告したM地点における刃器の製作を目的にした技法、「鷹山M型刃器技法」に対して、その相違を明らかにしておきたい。

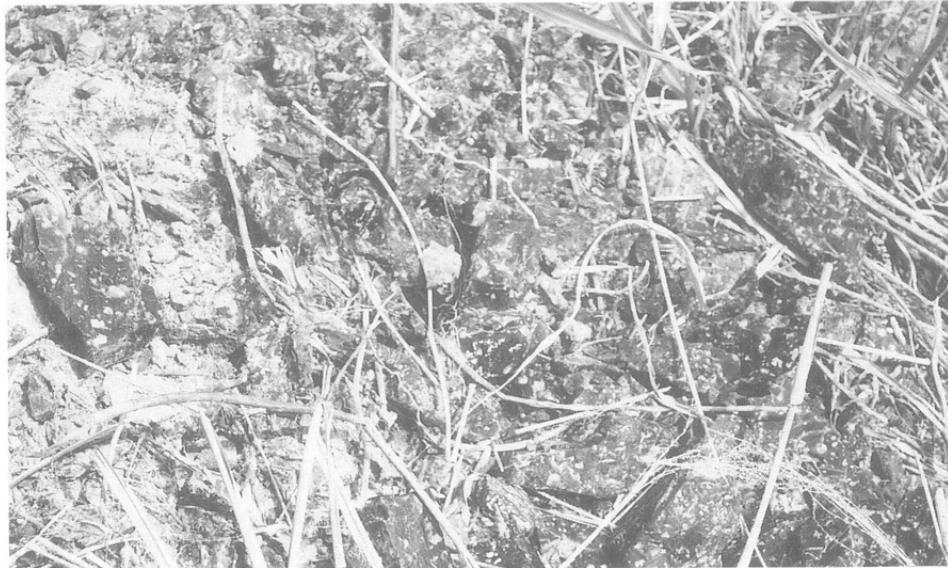


写真36 岩脈から崩落した状態の黒耀石礫・男女倉（全長15 cm前後）



写真37 山砂の中に転石となって入っていた黒耀石礫・男女倉（人頭大）

IV 鷹山遺跡群における 黒耀石製石器の生産とその背景

1 鷹山Ⅰ遺跡M地点とS地点の石器生産

小菅 将夫

相異なる2つの石器製作址

鷹山遺跡群は中部高地地帯、とりわけ八ヶ岳・霧ヶ峰山地の豊富な黒耀石産出地帯に所在する、いわゆる黒耀石原産地遺跡の代表的な遺跡の一つである。

1986・87年におこなった鷹山遺跡群全域にわたる分布調査によって、合計11か所の遺跡の存在が確認され、黒耀石の産状についても一定の調査成果がおさめられた（『鷹山遺跡群Ⅰ』）。11か所にのぼる各遺跡からは、それぞれ多量の黒耀石製石器や原石・石片が発見されたが、そのいくつかの遺跡については、そこが石器製作址である可能性が予測されるとともに、遺跡によって採集される石器の器種などに違いが認められること、つまり石器生産のあり方が遺跡により差のあることも予想されていた。

こうした鷹山遺跡群の中で、質・量ともに中心的な存在である第Ⅰ遺跡（本報告書では鷹山遺跡群第Ⅰ遺跡という正式な名称を「鷹山Ⅰ遺跡」と略称）において、私たちは2つの地点をかなり大規模に発掘調査する機会をもった。その一つは1984年に発掘した鷹山Ⅰ遺跡M地点（『鷹山遺跡群Ⅰ』参照。なおその報告書では「第1ブロック」の名称で記述したが、本報告書では「M地点」に改めた）である。M地点では刃器の製作にかかる6000点をこす大量の資料群が検出された。刃器と共に伴した代表的な石器は少数のナイフ形石器であった。

このM地点から東へ100m足らずはなれた同じ台地上で1989年に発掘したのが、今回報告する鷹山Ⅰ遺跡S地点である。ここでも約300m²の発掘区から、総数18000点に近い数（表土からの出土品は除いて）の、実におびただしい量の資料が出土した。それらはM地点のものと同様に、ほとんどすべてが黒耀石を原料とする石器群であるが、それらはM地点の石器群とは著しく性格の異なるものであった。

その詳細は前の第Ⅲ章までの各章で報告されている通りであるが、それらS地点の資料群はその大半が槍先形尖頭器の製作にかかるものであって、刃器（ナイフ形石器）製作を目的としたM地点の資料群との違いは一目瞭然たるものがある。

このように同一の遺跡の、それもあまり離れていない2つの地点で、全く性格の異なる石器製作址の実態を知ったことは、正直いって驚きであったし、それ以上に黒耀石原産地遺跡における石器製作技術の研究の重要性を認識していた私たちにとっては、2つの石器製作技術の違いを研究できるという点で、きわめて幸運なことであったといわなければならない。

そこで、先に報告したM地点の石器製作技術の特徴を改めて整理して紹介し、今回報告されたS地点のそれと対比して、両者の違いを明らかにするとともに、その意義についてもふれてみたい。

M地点の石器製作技術の特徴

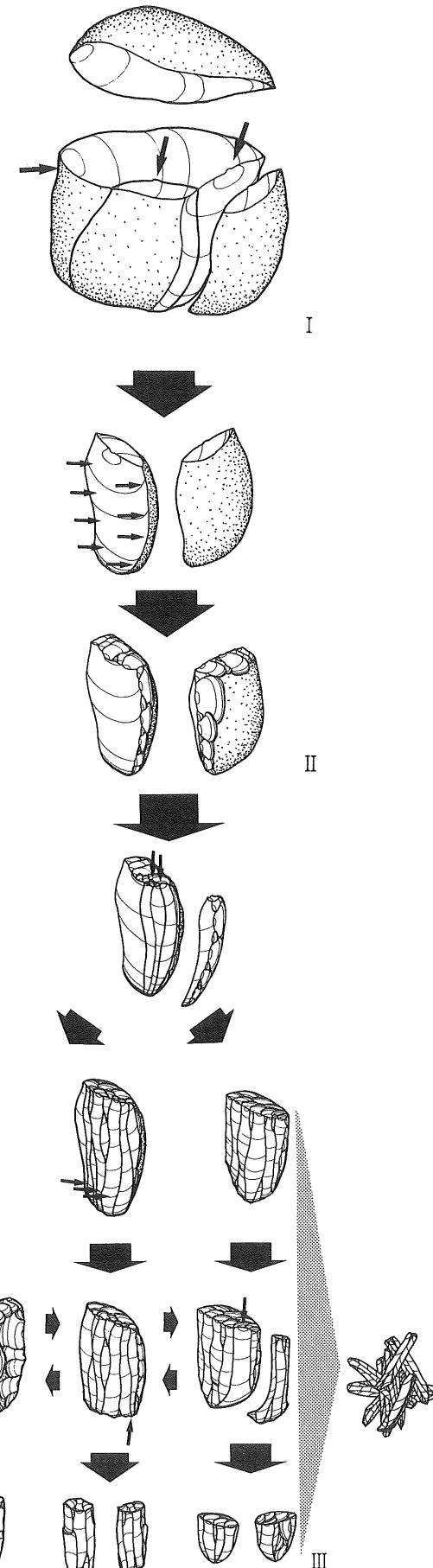
鷹山Ⅰ遺跡M地点は刃器の大量生産をおこなった場所であった。そこで発掘された6000点余の資料の中で顕著なものは、336点の刃器と107点の石核である。それらの豊富な刃器と石核、そしてさらに多くの剥片・石片などの資料を分析して、M地点における刃器製作の技術的工程を復元し、先の報告書では「鷹山Ⅰ型刃器技法」と仮称してその技術の特徴を説明した。

今回、遺跡地点名をM地点と改称したことにもなって、「鷹山Ⅰ型刃器技法」の仮称を、「鷹山M型刃器技法」と改めて記述を進めることにする。

「鷹山M型刃器技法」の工程と特徴は次のように要約される。

まず、全長20 cm をこえるような大形の黒耀石の礫を荒割りして、いくつかに分割して石核の原材とする。こうした原材を用いた石核はM地点出土の石核の60%以上を占め、残りが角礫に近い原石をそのまま原材としたものと、原材が全く不明なものである。つまりM地点の石核は全長10 cm ほどの大きさに分割された原材（部厚い剥片）を用いているものが量的に主体を占め、そのことが「鷹山M型刃器技法」の第一の特徴である。

次に、分割された石核の原材には、石核の形を整えるための石核調整剝離が加えられる。打面には多くは分割の際の剝離面があてられるが、部分的な打面調整が行われる。側面調整には特徴がある、それは石核正面（主な剝離作業面）の両側の縁の部分を、それぞれ正面から向かって裏面（自然の礫面の場合が多い）へ、さらに時には裏面から正面に向けて、かなり入念な剝離を施して、あたかもその縁に稜を立てるような石核調整を加えていることである。その目的は石核に予め稜を立てることによって、最初の刃器の剝離（first-flakingなどの呼び方もされる）を行い、刃器石核にふさわしい剝離作業面を作り出すためだと推定される。



第61図 鷹山M型刃器技法の工程模式図

前回の報告書では、そうして最初の段階で剥離された剝片を「縦長剝片 a 類」として分類し、M 地点の剝片の中でそれが非常に顕著に存在することを指摘した上で、その一連の作業過程を「石核稜の形成工程」としてとらえ、「鷹山 M 型刃器技法」(旧称では「鷹山 I 型刃器技法」) の大きな特徴であるとした。

以上のようにして用意された石核から次々に刃器剥離が行われるわけであるが、その過程で打面調整・打面再生・打面転位(上下の両設打面が大部分)、さらに側面調整(主として自然面の削除)などが繰り返されながら剝離作業が進行していくのは、刃器剥離技術一般の工程である。

こうしたやや特殊な技法によるものを主とし、原石を原材とする石核による剝離作業をも加えて、鷹山 I 遺跡 M 地点で生産された刃器は、平均値で全長 5.9 cm、幅 2.2 cm、両側縁が平行し、稜が直線的に走る精良なものがそろっている。しかし石核等の数にくらべて、こうした刃器が遺跡に残された数は多くはない。そのことに刃器の大量生産と搬出(供給)といった鷹山 I 遺跡 M 地点の、黒耀石原産地遺跡の中での刃器製作址としての性格を見出すことができる。「鷹山 M 型刃器技法」はそのような遺跡の特徴を表徵する技術基盤なのである。

S 地点の石器製作技術の特徴

今回報告した鷹山 I 遺跡 S 地点は、槍先形尖頭器を大量生産した石器製作址である。その製作技術については第 III 章と第 IV 章 2 その他の節でも詳しく記述されているので、ここではごくその概要をとらえておきたい。

S 地点で槍先形尖頭器を製作していく技術工程には、2 つの方法があったことがわかった。その一つは、適当な大きさの板状の黒耀石の礫(岩脈から節理面にそって剥落したような状態の礫)を素材として、主として両面調整の槍先形尖頭器を作り出している。報告書では第 I 型の製作工程と

して分類した。

他の一つは、全長 5 cm くらい、幅広でわりに部厚い剝片を素材とし、主として片面調整の槍先形尖頭器を作り出す工程で、第 II 型の製作工程とした。この第 II 型に属する槍先形尖頭器は、周辺調整の槍先形尖頭器も合わせて、S 地点出土槍先形尖頭器の約 70% を占め、量的には主体をなす。

なお、第 II 型の製作工程において、原石から素材となる剝片を剝離する過程の技術に、今まで他の遺跡では具体的に明らかにされなかった特殊性が認められたので、その剝片剝離技術について「鷹山 S 型剝片剝離技法」の名を与えて、その特徴が分析された。

それは、拳大程度の黒耀石原石を、ほとんど石核として調整・整形することなくうち割って、1 枚ないしは数枚の部厚い剝片をとるというものである。S 地点に残されていた数百個にのぼる「石核」として分類された資料は、俗に「一発コア」とか「単剝離石核」などと称したように、数少ない剝離痕をもつ「原石」といってもよいようなものである。

以上のような“技法”というのもおこがましいような「鷹山 S 型剝片剝離技法」は、しかし豊富な黒耀石原石を手近かに得られる、黒耀石原産地遺跡における槍先形尖頭器の大量生産のための技術として、鷹山 I 遺跡 S 地点の性格を雄弁に物語るものといってよい。

M 地点と S 地点の技術の比較

この両者を比較する上で、まずその時間的な関係を検討しておかねばならない。両地点で主体をなすような石器群が、層位的に重複してとらえられたような事例は、鷹山遺跡群ではない。

しかし M 地点の石器群の層位的出土状態は、主として III b 層上部と記録されており、それに対して S 地点は礫群の層位なども傍証として、III a 層の下部に生活面があったものとされる。

こうした状況の把握があったとしても、同じ鷹

山Ⅰ遺跡で、両地点の両石器群を層位的に正確に区分することは今後も困難であろう。

いまは先土器時代石器群の型式学的・編年学的観点からみても、刃器＝ナイフ形石器を主体とするM地点が、槍先形尖頭器を主体とするS地点の石器群に先行するものと一般的にとらえておきたい。そして同時にナイフ形石器と槍先形尖頭器の製作技術の間には、技術的な系譜として直接的なつながりが少ないとする観方や、両者の間には技術的基盤にかかわる構造的な変化が大きいというのが、研究者一般の意見であるという点も、ここでは大筋として認めておきたい。

それならば鷹山遺跡群に眼を返して、同じ第Ⅰ遺跡で、さほどの距離をおかず、また年代的にそれほど大きなへだたりのないM地点とS地点の石器製作技術の差は、一体何を意味し、どんな背景で生じたものなのだろうか。

黒耀石原石の産状の変化

M地点とS地点では、その石器製作技術の上で相違する部分が多く、またその原材としての黒耀石原礫の形状も大きく違っていた。M地点で用いられた礫は長さ20cm、幅15cmをこえるような大形の礫であるのに対し、S地点では、小形の板状の礫、または直径8cmほどの礫が用いられていた。

こうした事実は、時期的に先行したM地点で石器製作がなされた頃は、星糞峰付近の黒耀石の露頭や、その下方向に位置する沢で、大形の礫が採取できたが、S地点で石器製作がなされる頃になると、それ程の大きさの原礫の採取が困難になつたと考えることも可能である。

そしてこの原材の大きさと形状の変化に適応するように、石器製作技術も変化したと考えることができる。

星糞峰では、いまだに良好な黒耀石の露頭が発見されておらず、その探索と実態の解明も今後の問題となる。また、星糞峰からの沢筋と鷹山の低湿地に存在する黒耀石（ズリ）の産状の詳しい調

査も重要となろう。

しかし、ナイフ形石器から槍先形尖頭器への変遷、そしてそれに対応する技術上の変化は、鷹山遺跡群内だけで理解のできることではなく、少なくとも、中部・関東地方を視野にいれた広い視点のなかで考えられるべき問題であろう。ここでは、星糞峰と鷹山の黒耀石が時期によって産状の変化と、先土器時代人による採取条件の差があった可能性と、それに適応するかのような技術によって石器製作がなされていると考えられることを指摘しておきたい。

石器製作の生産性

一定の大きさ・量をもった石材から、どれだけの石器素材が得られるかという、いわば石器製作の生産性の上で、M地点とS地点を比較してみよう。

1つの原礫を幾つかに分割し、それを石核に調整して石器の素材となる刃器を剥離するM地点の石器製作と、1つの原礫=1石核であり、そこから数枚の素材を剥離して槍先形尖頭器を製作するS地点の石器製作では、明らかにM地点の石器製作の方が多くの石器の生産が期待でき、その生産性は時期の古いM地点のほうが良い。また、1石核からの素材の生産数もM地点のほうが多いと考えられる。となれば、石器の生産性の向上という簡単な発展として考えることもできない。

このように原産地での石器製作の相違は、遺跡単位で考えるべきではなく、また、単純な発展論的な解釈では解決されそうにはない。より広く、かつ構造的な解釈と視点によって解決されるべき問題であると考えられる。そのためには、これまで述べてきた原産地での石器の過剰ともいえる石器製作と対照的な、ごく一般的な生活址としての多くの遺跡（一般遺跡）との両者の対比とその関係を明らかにすることが必要であろう。その場合これまで述べてきた技術の特徴とその比較、遺跡での石器製作のあり方、原産地遺跡と一般遺跡での相違と、その相互の関係について考えなければ

ならないであろう。それによって当時の社会の仕組みやあり方を明らかにすることができるのではないだろうか。こうした先土器時代社会のあり方の中から、鷹山遺跡における両地点の相違が明確となるのではないだろうか。

石器生産遺跡における技術的特性

まず、技術上の関係を考えておきたい。「鷹山M型刀器技法」は、関東平野の台地などの一般遺跡で、これと同様な剥片剝離技術を見出すことは困難なようである。そこには、M地点のようなまとまった資料が少ないこともさることながら、M地点での石器製作のあり方、刃器の製作状況が一般遺跡にくらべ、特殊な状況を呈しているからでもある。それは、恵まれた黒耀石原石の存在に裏打ちされた鷹山遺跡群ならではの、特殊な技術的昇華がなされているとさえ考えられる。また、多くの原材から集中して多量の刃器を製作するという遺跡の性格にもよると考えられよう。

こうしたあり方は、S地点ではどうであろうか。S地点の槍先形尖頭器の製作の方法は、必ずしも特殊とはいえないかもしれない。しかし、原材としての黒耀石原礫の形状、剥片剝離のあり方などは、全体を通してのまとまりを有している。この意味では、槍先形尖頭器の製作工程全体を通して技術的な特殊性を指摘できないとしても、技術の基盤となる素材の剥片の剝離工程の段階で、「鷹山S型剥片剝離技法」と称するような特殊性を見出すことができる。この技法もまた豊富な黒耀石礫をもつ、原産地遺跡ならではのことであろう。

これら2地点にみられた技術上の特殊性は、その技術の編年的な位置を明確にすることも重要である。しかし、原産地遺跡と一般遺跡との間に技術の相違が存在することが指摘できるのも事実である。技術的な研究は、単に編年型式学的な位置付けを明らかにする手段ではなく、このような遺跡の性格の相違を視野にいれた研究も必要とされてこよう。

ナイフ形石器と素材としての刃器

鷹山I遺跡M地点は、ナイフ形石器の素材となる良質の刃器を多量に生産した遺跡である。ところで、ナイフ形石器の製作工程は、素材を得るための石核調整、素材を取る剥片（刃器）剝離、石器として整形する調整加工という製作段階を経ており、各段階がバランスよく構成されている。石器としてのナイフ形石器には、調整加工で基部や先端の形状の修正がなされるが、その機能する刃部は、素材の剥片の鋭い縁辺であり、器体の表裏面にも素材のそれが広く残されている。このことは、素材の剥片のもつ石器のある部位としての有用性を利用しているものといえる。そのような素材を得るためにには、素材となる剥片を剝離する前に、石核に調整を加え、剥片剝離を一定に行えるように条件を整えることが重要である。ナイフ形石器の製作においては、これら3つの製作段階が「相互補完」の関係にある（安蒜 1986）。

さて、ナイフ形石器を主体として用いている時期の一般遺跡を観察すると、そこでは多くの場合、各遺跡に石核が存在し、そこで剥片が剝離され、ナイフ形石器が製作され（使用され）た状況で残されている。回帰的な移動生活を営んでいたと考えられる彼等の生活においては、完成された石器のみを携えて移動していたのではなく、石核、剥片、石器という製作工程の各段階を占める石器類を携えて移動していたと考えられる。そして、その遺跡での生業活動に伴う生活に必要となる石器を必要に応じてその場で製作し、また次の遺跡で石器を製作するための石核や剥片を準備していたと考えられる。

その意味で、3つの段階がバランス良く保たれるナイフ形石器の製作技術は、このような臨機な石器製作を行う移動生活に適したものであるともいえる。

こう考えたとき、鷹山I遺跡M地点で製作された刃器は、上記のナイフ形石器を主体とする時期

の臨機な石器製作に対応する石器の素材として、関東地方など広く各地に搬出されていったと考えられよう。もちろん、鷹山遺跡群からは、石核や完成された石器（ナイフ形石器）として持ち出されることもあったであろう。しかし原石のままの黒耀石が持ち出されることとは、きわめて稀ではなかったかと推測される。

槍先形尖頭器の製作と搬出

M地点に対して、S地点は槍先形尖頭器の多量生産遺跡と性格づけられる。槍先形尖頭器の製作は、石核から素材の剥片剥離、調整加工を経て完成された石器へという一連の石器製作工程の中で、特に調整加工が重要な位置を占めている。このことは、器体が広く調整加工痕で覆われていることからも明らかであろう。つまり素材への調整加工の段階のみが、槍先形尖頭器としての石器を意味づけているとさえ考えられる。

そう考えると、槍先形尖頭器は必ずしも各遺跡でその製作を行っているのではなく、ある遺跡で集中して製作される傾向のあることもうなづける。事実、関東地方南部の多くの遺跡では、そこで製作されたと考えられない槍先形尖頭器が出土することが多い。こう考えると、臨機に石器を製作していたナイフ形石器を主体とする段階とはちがって、槍先形尖頭器をもつ段階での一般遺跡の石器製作技術の体系は、ナイフ形石器の技術を強く継承しつつも、槍先形尖頭器を受け入れ、また、その技術の存在を意識（あるいは模倣）したという、ルーズな二重構造的なものであったと考える。

鷹山Ⅰ遺跡S地点では、槍先形尖頭器を盛んに製作していた。そして、ほぼ完成された石器として、この遺跡から搬出されたと考えられる。もちろん一般遺跡のなかには、多くの槍先形尖頭器が製作された遺跡もあり、必ずしも原産地の生産遺跡のみで石器の製作がなされたわけではない。しかし、槍先形尖頭器のあらわれる段階では、石器の製作が遺跡ごとにかなり偏っている傾向がある

ようであり、この時期には、石器の製作の場とそれが実際に使われた場とが分離し始めていると考えることができる。

これまで、M地点を代表とするナイフ形石器と、S地点を代表する槍先形尖頭器の石器製作技術の特徴、M地点とS地点という原産地遺跡での両時期の生産遺跡と一般遺跡での具体的な違い、生産遺跡と一般遺跡の関係について考えてきた。

そしてナイフ形石器の素材としての刃器を多量に生産したM地点と、おそらくそれらの供給を受けたと思われる一般遺跡に対して、槍先形尖頭器を多産し、これまたその供給を受けたと想定される一般遺跡という2組の遺跡の間には、時間的な変化も合わせて、かなり大きな性格の差があることが予測できた。

次にはその差のもつ意味をさらに具体的に知るために、こうした変化を、次の時代の縄文時代の石器生産と比較してみよう。

例えば、縄文時代の磨製石斧の生産遺跡では、神奈川県尾崎遺跡、富山県境A遺跡等が知られている。これらの遺跡は、原石の産地付近に位置し、次のような過程を経て磨製石斧が生産されている。まず原石から素材を剥離、素材を剥離加工によって成形、敲打によって整形し、研磨によって最終的に仕上げられる。これらの生産遺跡では、その各段階の未成品や調整剝片などと共に、各段階の成形や整形、研磨に用いた敲石や砥石等が揃った状況で出土している。

これに対し、縄文時代の一般的な遺跡では、未成品や調整剝片は出土せず、完成された単体の石器として遺跡内に存在している。こうした生産遺跡と一般遺跡での石器のあり方は、石棒や玉類などにも当てはまるようである。このことは、縄文時代には既に、ある特定の石器の製作全体を1遺跡で行う生産体制があり、それを交易品や交換品として他の遺跡へもたらせるような社会組織が存在していたと考えることができる。

いまあげた遺跡の例はいずれも縄文時代中・後

期に属し、先土器時代の鷹山Ⅰ遺跡M・S地点の事象と直接結びつけることは無理があるが、その両地点にみられる石器生産、および他の一般遺跡との需給関係の差は、縄文時代以後に発達する石器生産にかかわる一種の「社会的分業」への道筋の中で位置づけることができるものだといえるかもしれない。

そうした縄文時代との関連はおくとしても、鷹山Ⅰ遺跡のM・S両地点の石器製作技術、およびそこからの製品の搬出、それらを受容した一般遺跡での石器群のあり方の差は、先土器時代社会の微妙な歴史的变化を読みとることができるものである。



写真38 鷹山Ⅰ遺跡で表採する黒耀石原産地遺跡研究会メンバー
(新築中の家屋がS地点, 遠景は星糞峠)



写真39 鷹山Ⅰ遺跡W地点の試掘区 (遺跡範囲の東南限)

2 鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器石器群の位置

氏家 敏之

はじめに

槍先形尖頭器は先土器時代後半に出現する代表的な石器の一つであり、特に関東・中部地方においては石器組成中に占める割合が高い。

鷹山Ⅰ遺跡S地点においては、235点にのぼる数の槍先形尖頭器が出土しているが、それらは幾つか異なる製作方法で作られており、また形態的にもバラエティーをもつことが明らかにされた。こうした結果をもとに、ここでは関東・中部地方を中心とした槍先形尖頭器石器群のなかでの、S地点の石器群の位置づけについて考えていく。

S地点の槍先形尖頭器石器群の特徴

S地点が槍先形尖頭器を主体とする石器製作址であることは、これまで繰り返し述べてきたが、ここでもう一度その石器製作の実態について整理しておきたい。

S地点で槍先形尖頭器の素材として利用されているのは、板状・棒状の原石B類と「鷹山S型剝片剝離技法」によって生産された幅広・厚手の剝片a類である。こうした素材生産の在り方は、ナイフ形石器の素材の生産とは別の体系として確立されている。

集中的に製作されたS地点の槍先形尖頭器は、第Ⅲ章2に詳述したように、石器製作に用いられた素材の特徴と調整加工の施され方からみて、4種類の類別が可能であった。それらを整理して記述すると次の通りである。

①両面調整によって仕上げられた槍先形尖頭器で、素材として剝片a類と原石B類が使用されている。なお、形状の特徴としては、最大幅が石器の胴部中央にあり、基部は丸味をもつものが多い。

記述の便宜上、両面調整尖頭器群と総称する。

②片面調整の槍先形尖頭器である。素材と調整剝離の相違から2種に分けられる。すなわち、素材に主として剝片a類、わずかに薄手の原石B類を用い、平坦で面的な調整剝離のみられるもの(片面調整a尖頭器群)、および素材は原石B類が主で、他に剝片a類を用い、調整が急斜度の粗い剝離で行われ、そのため形状も左右非対称のものなどがある(片面調整b尖頭器群)。

③周辺調整の尖頭器で、素材はいずれもa・b類の剝片である(周辺調整尖頭器群)。

これらの4つの槍先形尖頭器群のうち、中心的なものは両面調整尖頭器群と片面調整a尖頭器群である。どちらも大きさは中形のものが多く、木葉形を呈しており、基部がやや丸味をもつものがS地点に共通する特徴といえるだろう。

槍先形尖頭器製作の技術的変化

中部高地には鷹山遺跡群以外にも、槍先形尖頭器を主体とした遺跡が顕著に存在している。それらの中で特に男女倉遺跡群(B・J地点)、八島遺跡の槍先形尖頭器の形態と製作技術についてみたい(第62図)。

各遺跡に存在している槍先形尖頭器の形態をみ

	第Ⅰ形態	第Ⅱ形態	第Ⅲ形態	第Ⅳ形態
男女倉B地点	◎	—	—	—
男女倉J地点	◎	○	—	—
八島	○	◎	○	○
鷹山S地点	○	◎	○	○

第62図 中部高地の槍先形尖頭器出土遺跡における形態の組合せ(表の第Ⅰ形態は両面調整尖頭群、第Ⅱ形態と第Ⅲ形態は片面調整a・b尖頭器群、第Ⅳ形態は周辺尖頭器群に相当)

ていくと、男女倉遺跡B地点においてはほぼ両面調整尖頭器群のみで占められている。特に男女倉遺跡B地点の槍先形尖頭器群は、楕状剝離を有する「男女倉型有楕尖頭器」の顕在によって特徴づけられている。これに対して八島遺跡や鷹山Ⅰ遺跡S地点においては形態組成が多様である。八島遺跡では両面調整尖頭器群と並んで片面調整a・b尖頭器群などが主体的に存在している。また男女倉遺跡J地点においては資料数が少ないために容易な判断は避けたいが、両面調整と並んで片面調整a尖頭器群が少量ではあるが存在しており、男女倉遺跡B地点と八島遺跡・鷹山Ⅰ遺跡S地点の中間的な組成をしていることが伺われる。

では各遺跡の槍先形尖頭器の製作技術はどうであろうか。ここでは特に槍先形尖頭器の素材の獲得の在り方を中心にみていきたい。

男女倉遺跡B地点において遺跡内に持ち込まれる原石は人頭大から拳大の角礫状のものである。こうした大形の原石から刃器の生産を行うとともに、原石を分割または剝離することによって作りだした厚手の剝片を利用して、槍先形尖頭器の製作を行っている。このような槍先形尖頭器の素材の製作技術を「男女倉B型」と仮にしておきたい。

男女倉遺跡J地点ではB地点と様相が異なってくる。素材となった原石は「……B地点の様に生活している付近に露頭するものを使ってなく、他から運び込んだものである。非常に良質の6~8cmの転石を好んで用いており……」(報文中から引用) というように握り拳程度の大きさの原石を利用していることが伺われる。こうした素材から生産される剝片は、ナイフ形石器に利用された刃器の他に幅広・厚手の剝片が存在しており、槍先形尖頭器の素材として利用されている。また見逃せないことには、石器の素材として板状の原石や、「ズリ」と呼ばれる小形の原石の利用が行われていることである。こうした多様な槍先形尖頭器の素材の利用の在り方は、八島遺跡、鷹山Ⅰ遺跡S地点と共に通していると考えられる。これらの3つ

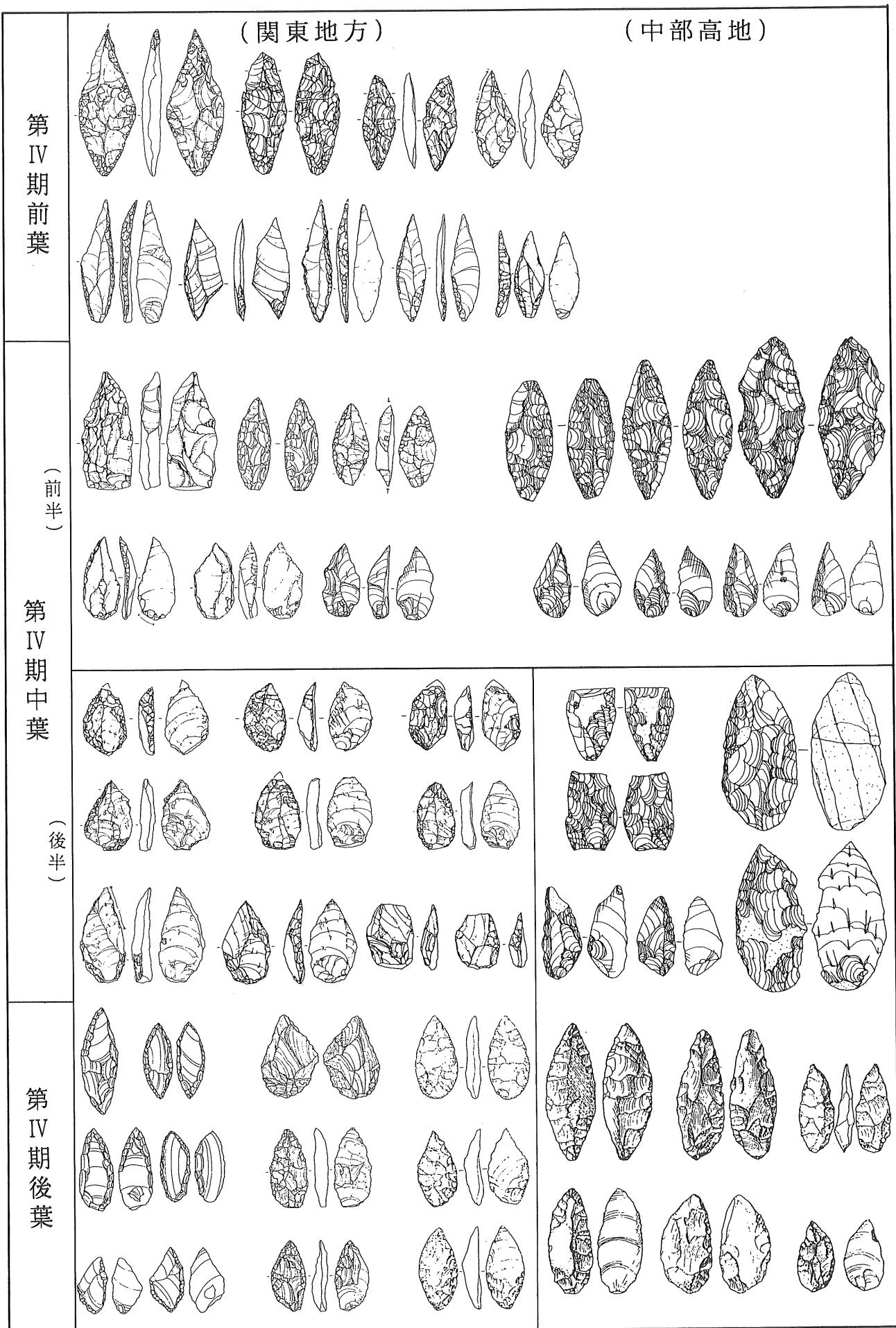
の遺跡においては、①原石を直接加工しているもの、②「鷹山S型剝片剝離技法」及びそれに類する剝片剝離技術によって生産した幅広・厚手の剝片を素材とするもの、③薄手で板状の原石を直接加工するもの、という3つのタイプの素材供給の在り方が存在しているといえる。こうした素材の用い方をする製作技術を仮に「鷹山S型」としておきたい。

このようにしてみてきた4つの遺跡は、いずれもナイフ形石器と槍先形尖頭器の両者を製作している遺跡であるが、「男女倉B型」では大形の原石を利用してナイフ形石器の素材となる刃器の生産と槍先形尖頭器の製作を行い、「鷹山S型」では小形の原石を素材として、刃器の生産とは別に槍先形尖頭器の素材となる幅広・厚手の剝片の生産を行っている。またその他には手頃な厚さの板状の原石も持ち込まれており、槍先形尖頭器生産に対応する素材獲得の傾向を強めている。こうした「男女倉B型」と「鷹山S型」の関係は、「男女倉型有楕尖頭器」に代表される両面調整槍先形尖頭器群とナイフ形石器を中心とした組成の石器群から、両面調整尖頭器群と片面調整a尖頭器群からなる槍先形尖頭器を狩猟具の中心とした石器群への時間的な流れと捉えられよう。それは言い換えるならば刃器主体の剝片生産の基盤から槍先形尖頭器の素材剝片の生産の基盤への転換と位置づけられるものである。そしてそのことは、かつて稻田孝司が指摘した、先土器時代末における石器製作の技術的基盤の構造変化と対応するものであろう(稻田 1969)。

関東地方における槍先形尖頭器の変遷

前項で述べたような中部高地における槍先形尖頭器群の変遷の過程で、関東地方ではどのような変化が認められるであろうか。相模野第Ⅳ期とされるこの時期のナイフ形石器と槍先形尖頭器の関係について考えていきたい(第63図)。

相模野第Ⅳ期のナイフ形石器の変遷については、



第63図 関東・中部地方における槍先形尖頭器とナイフ形石器の組合せの変遷

これまで多くの研究者によって語られており、ここにおいてはそれらの考えを基本的に踏襲した形で進めていく（矢島・鈴木 1978、諏訪間 1988、1989、須藤 1989等）。この時期のナイフ形石器は大きくみて3つの段階的な変遷を辿っている。

第Ⅳ期前葉に存在するのは砂川型刃器技法を特徴とする茂呂型ナイフ形石器の一群である。切断技術が顕著にみられ、基部が入念に整形されて尖り気味のナイフ形石器が中心となっている。この時期に共伴する槍先形尖頭器は「男女倉型有樋尖頭器」を中心とした両面調整尖頭器群が主体的である。

第Ⅳ期中葉に存在するのは素材の打面部分を基部に残し、幅広の縦長剥片を利用した二側縁加工のナイフ形石器の一群である。ナイフ形石器には切断技法がみられなくなり、基部を丸くしているものが多い。また幾何形の小形のナイフ形石器や台形を呈するナイフ形石器もこの時期から多くみられるようになる。この時期に伴う槍先形尖頭器としては、多聞寺前遺跡Ⅳ上層や城山遺跡、そして相模野台地の下九沢山谷遺跡第Ⅱ文化層などには「男女倉型有樋尖頭器」が存在しており、その他の遺跡においては両面調整・片面調整a・周辺調整尖頭器群がみられるが、特に片面調整a・周辺調整尖頭器群の小形のものが主体的である。こうした共伴する槍先形尖頭器の形態の違いは、多聞寺前遺跡や城山遺跡、下九沢山谷遺跡が中葉前半、そしてそれ以外の遺跡が中葉後半というように、ある程度時間的な差をもって捉えられている。

第Ⅳ期後葉に存在するのは台形石器や幾何形のナイフ形石器の一群である。武藏野台地では仙川遺跡、相模野台地では寺尾遺跡第Ⅲ文化層や月見野第ⅣA遺跡が代表例としてあげられるだろう。この時期に伴う槍先形尖頭器は両面調整・片面調整a・周辺調整尖頭器群に属する多様な形態がみられる。

関東地方における槍先形尖頭器の素材

それでは関東地方における槍先形尖頭器の素材は、中部高地の例と比較した場合どのようにして得られたのであろうか。

まず第Ⅳ期前葉から中葉前半にかけては、関東地方の槍先形尖頭器は「男女倉型有樋尖頭器」を主体とした両面調整尖頭器群が組成の中心である。これらの槍先形尖頭器は黒耀石製のものが多く、遺跡内に単独の形で持ち込まれているため、ナイフ形石器を中心とした石器製作基盤からみた場合は「構造外」の石器として捉えられている。また在地系の石材で作られているものも、大形の剥片類を素材として製作が行われている。このような在り方は中部高地における「男女倉B型」の素材製作方法と共通したものといえるだろう。

第Ⅳ期中葉後半になると、片面調整a・周辺調整尖頭器群が主体的に組成に加わる。この時期の槍先形尖頭器は、ナイフ形石器と同一の個体から、同じ幅広・縦長の剥片を素材とし、手頃な大きさに折断した後に調整加工を施して製作されていることが指摘されている（樫田 1983、1987）。このようなナイフ形石器の製作基盤の上に立脚して槍先形尖頭器の素材となる剥片の生産が行われるようになっていくようである。このような素材製作方法は「男女倉B型」や「鷹山S型」とは異なる素材の利用の方法であり、「深見諏訪山型」の素材製作技術として捉えておきたい。

第Ⅳ期後葉になるとナイフ形石器を製作するための素材の規格的な生産は行われなくなり、かわって槍先形尖頭器の素材を中心とした剥片の生産が行われるようになる。この時期の仙川遺跡では幅広・厚手の剥片を生産して、両面調整・片面調整a尖頭器群や搔器の製作を行っており、中部高地における「鷹山S型」と極めて類似した素材獲得の在り方を示す。ここでは「仙川型」の素材製作方法として捉えておきたい。

また群馬県武井遺跡第Ⅱ文化層においては、板

状の原石や大形刃器を素材として両面調整尖頭器群の製作を行い、小形で幅広の剥片を素材として片面調整a・周辺調整尖頭器群をそれぞれ製作している。武井遺跡においても槍先形尖頭器の素材剥片の生産を中心としたものであり、「鷹山S型」の製作技術に近いものであるが、素材となる剥片の製作方法が異なっているので、ここでは「武井II型」の製作技術として捉えておきたい。

鷹山I遺跡の石器群の編年的位置

以上のようにみると、関東・中部地方の相模野第IV期における槍先形尖頭器の製作技術、特に素材供給の在り方には、「男女倉B型」、「鷹山S型」、「深見諏訪山型」、「仙川型」、「武井II型」の5つの類型が存在している。ここで各々の製作技術の変遷についてもう一度整理しておきたい。

第IV期前葉から中葉前半にかけて、関東・中部地方において製作される槍先形尖頭器は「男女倉型有樋尖頭器」を中心とした両面調整尖頭器群であり、それらは「男女倉B型」に類型化される素材製作方法によって成り立っている。男女倉遺跡B地点はナイフ形石器の形態からみて第IV期中葉前半に位置づけられると考えられる。

第IV期中葉後半になると関東地方では「深見諏訪山型」の素材製作方法が中心となり、規格的な剥片を素材として、ナイフ形石器と槍先形尖頭器両者の製作が行われるようになる。一方、中部地方では男女倉遺跡J地点にみられるように、板状の原石や幅広・厚手の剥片が素材として用いられるようになり、「鷹山S型」の素材製作方法への転換の徵候が現れている。

第IV期後葉になると関東地方でも槍先形尖頭器を主体とした石器群が成立してくるが、その素材製作方法は「鷹山S型」に類似した「仙川型」、大形の刃器を素材とする「武井II型」、月見野IVA遺跡にみられる「深見諏訪山型」といったように多様な在り方を示すようになる。一方の中部地方では「鷹山S型」の製作技術による槍先形尖頭

器の製作が行われているのである。

こうしてみると関東・中部地方の槍先形尖頭器の変遷は、素材の製作あるいは獲得・利用の方向についてみれば、第IV期前葉から中葉前半までは連動している。しかしそれ以降、関東地方においてはナイフ形石器と槍先形尖頭器の素材の利用が相互に互換性を持つようになり、次第に槍先形尖頭器中心の石器製作が行われていくようになる。特に関東地方の第IV期後葉には「深見諏訪山型」、「武井II型」、「仙川型」といった各地域によって多様な素材製作の方法がみられるようになってくる。

一方の中部高地においては、現時点では関東地方のようなナイフ形石器と槍先形尖頭器が素材の互換性をみせる資料は検出されていない。その代わり、関東地方ではみられない板状の原石を素材として槍先形尖頭器の製作が盛んに行われるようになる。このことは、今回調査した鷹山I遺跡S地点を典型とするような、いわゆる「黒耀石原産地遺跡」の特性であるとともに、関東地方と中部高地の「石槍文化」の発展の過程で、両地方の地域差を生み出す原因にもなったと理解される。

それとともにいえることは、鷹山I遺跡S地点や、古くは発生期の尖頭器石器群と理解されていた八島遺跡の石器群など、片面調整あるいは半両面調整や階段状剥離の技術で作られた、一見「古相」を帯びた槍先形尖頭器群は、その製作技術の多様化、特に素材製作方法の変化の中で生まれたものであろう。

そういった点からみて、鷹山I遺跡S地点の石器群は、中部地方では「石槍文化」のやや発達した段階に位置づけるべきであろう。

3 鷹山Ⅰ遺跡S地点の石器群と槍先形尖頭器の発生をめぐって

矢島 国雄

はじめに

鷹山Ⅰ遺跡S地点の調査時に、両面調整尖頭器群のなかで左右非対称形の肩の張った槍先形尖頭器が注目され、それが渋川Ⅱ遺跡のものに類似するところから、槍先形尖頭器の発生に関する問題に、この調査を通じて迫ることができるのでないかとの見方があった。結果的には、鷹山Ⅰ遺跡S地点の石器群では、そうした槍先形尖頭器は全体から見ると極めて少数であり、中心的なものではないことが明らかとなつたし、組成の全体や技術の特徴などから見ると、尖頭器石器群の中ではやや後出の石器群であることが明らかとなって、発生期の槍先形尖頭器石器群というより、むしろより発達した段階の槍先形尖頭器石器群として認識されることになった。

だが、近年、ふたたび活発となった槍先形尖頭器の発生にかかる論議には、中部高地を槍先形尖頭器の発生地とし、その要素の一つとして豊富な黒耀石を供給する原産地に立地する遺跡群が注目されるところとなっている。中部高地における槍先形尖頭器石器群の具体的変遷を論じ、鷹山Ⅰ遺跡S地点を位置付けるうえでも槍先形尖頭器の発生に関する論議に触れないわけにはいかないであろう。

以下、槍先形尖頭器の発生論を簡単に整理し、若干の私見を述べたい。

槍先形尖頭器の発生をめぐる研究史

槍先形尖頭器の発生をめぐる論議は、次のようにまとめることができる。

ナイフ形石器から槍先形尖頭器が発生したとする考え方とは、研究の初期の段階から提示されているもので、芹沢長介はナイフ形石器と槍先形尖頭

器は切出形石器を介して発生過程を跡づけられるとしているし（芹沢 1954）、杉原莊介もまたナイフ形石器から槍先形尖頭器の発生を武井遺跡のナイフ状の槍先形尖頭器などの片面調整のものを介して理解できるとした（杉原 1953）。

戸沢充則は、芹沢の仮説を踏まえて、槍先形尖頭器の発生過程の具体的な姿を示すものとして、長野県渋川Ⅱ遺跡の肩の張った左右非対称の槍先形尖頭器に注目し、切出形ナイフ形石器の形態との類似を指摘して、槍先形尖頭器は切出形ナイフ形石器を介して発生するとした（戸沢 1965）。

この戸沢の主張は、稻田孝司によって、形態変化が器種レベルの変化を生み出したものとして、そのメカニズムが石器製作技術論的に明快に意味づけられることになる（稻田 1969）。

また、安蒜政雄は、ナイフ形石器と共に要素をもった槍先形尖頭器に注目し、形状の共通するもの、刃部をもつもの、素材を共通とするものがあり、それぞれはこの順序で発生するとして、渋川Ⅱ遺跡の肩の張った槍先形尖頭器を発生期の槍先形尖頭器として位置付けた（安蒜 1988）。

この戸沢、安蒜の仮説、つまり、渋川Ⅱ遺跡の槍先形尖頭器を、ナイフ形石器から槍先形尖頭器が発生する過程を示すものであるとする理解については、その後、須藤隆司によって、極めて明快な形態・型式論的、技術論的な検討が提示されている（須藤 1989）。

槍先形尖頭器の発生に関して、ナイフ形石器からの連続性を強く見るこれらの考え方とは、内在的な技術変化による発生論といえる仮説であり、その発生地域を中部高地と考えているものである。

これらの考え方とはやや異なって、角錐状石器（尖頭器様石器）から槍先形尖頭器が発生したとする考え方方が、白石浩之によって提示されている

(白石 1974・1989)。角錐状石器と槍先形尖頭器とは、「素材の用い方や調整加工などに多くの共通性」があり、前者は後者の「遡源形態」の可能性が高いとするものである。

このほか、その具体的な内容は提示されていないが、比田井民子は槍先形尖頭器の発生は北方よりの伝播によるものではないかという意見を示している(比田井 1990)。

筆者は、列島規模での槍先形尖頭器の発生について論じたことはないが、かつて、相模野での槍先形尖頭器の出現をめぐって論じたことがある。そこでは、相模野を含む南関東での、当初の槍先形尖頭器のあり方が、ナイフ形石器を中心とする石器群に、いわば「客体的」に加わったような姿を示していること、そして、それが形態的には両面調整木葉形の完成されたものであることなどから、この地域において、先行する石器群の特定の器種から内在的な変化を遂げて出現したものとは受け取りにくいとして、外在的な要因を考えた(宮塚・矢島・鈴木 1974、鈴木・矢島 1976、矢島・鈴木 1979)。しかしこれは、列島規模での槍先形尖頭器の発生論ではなく、相模野あるいは南関東においての槍先形尖頭器の出現に関する理解として提示したものであり、具体的に槍先形尖頭器の発生については論じていない。

槍先形尖頭器の発生と 尖頭器文化についての理解

1989年の白石の『旧石器時代の石槍』と長野県考古学会の『シンポジウム・中部高地の尖頭器文化』は、ふたたび槍先形尖頭器の発生論議に火をつけた感がある。筆者も、このシンポジウムを契機として各地の槍先形尖頭器出現期の石器群を再検討してみた。

尖頭器文化と呼べるもののが汎列島的に成立したものであるかどうかという点に関しては、近年の膨大な調査例からみると、かつてのように、どこでも、単純明快にナイフ形石器と細石器文化との

間に尖頭器文化があるとは言い難いであろう。地域によって、ナイフ形石器文化の終末の様相にはかなりの違いがあり、その石器組成の中で、槍先形尖頭器がどのような現われ方をしているのかを細かく検討しなければならない。

北海道における槍先形尖頭器は、極めて発達したものがあるが、これはほとんど常に細石器と組み合わさっており、尖頭器文化というより、細石器文化と呼ぶにふさわしい。細石器の共伴が認められないものもあるが、これらの槍先形尖頭器は、むしろより後出のものであるとする理解が一般的であり、筆者もその評価に異議はない。

九州から中国・近畿にかけての地域では、古くから指摘されているように、本格的な槍先形尖頭器を含む石器群は極めて少ない。多久三年山遺跡の石器群などが九州における尖頭器文化の石器群であるとする杉原・戸沢・安蒜の主張(杉原・戸沢・安蒜 1983)があるが、この石器群は多久茶園原遺跡の石器群とともに、土器始現期、あるいはそれに近接した時期の石器群として理解するほうが妥当ではなかろうか。とすれば、ナイフ形石器文化に直接後続する槍先形尖頭器を含む石器群とみなされるものはほとんど無いということになろう。

これに対して、中部から東北にかけての本州北半部では、ナイフ形石器に後続する槍先形尖頭器を含む、あるいはそれが主体的な石器群の存在は明らかである。

このようにしてみると、槍先形尖頭器が濃密に分布する広がりは中部日本から北海道にかけてであり、それはシベリアの石器群へとつながる分布とみることができる。比田井による北方起源の考え方方が生まれる理由であろう。ただ、この場合、各地の最古期とされる槍先形尖頭器石器群の成立に関して、北方よりの槍先形尖頭器の伝播についての技術的、型式学的分析が提示される必要がある。また、これまで、北海道で発見されている槍先形尖頭器の年代的位置付けについての検討も重

要であろう。現状での北海道の細石器石器群の年代的位置付けでは、本州中部の槍先形尖頭器群との年代的な傾斜はむしろ逆であり、比田井の仮説は説明されにくいのではないかろうか。

最古の槍先形尖頭器とその評価

これまで発見されている槍先形尖頭器を含む石器群で、最も古いものは何かが重要であることはいうまでもない。層位的な情報が明らかなものでは神奈川県下九沢山谷遺跡第Ⅳ文化層（中村 1987）、東京都西之台遺跡B地点Ⅳ層中部（小田 1980）の石器群であろうか。いずれも、切出形ナイフ形石器、角錐状石器（尖頭器様石器）が盛行する石器群と同期、同層位であり、この地域において槍先形尖頭器が盛行する時期からみるとかなり先行する。これらの槍先形尖頭器は、いずれも先端を欠失しているが、両面調整の木葉形のものである。

この槍先形尖頭器の出現の過程を、南関東の石器群の中に求めようとしても、有効な説明が見いだせないと筆者は考えている。少なくとも、南関東の切出形ナイフ形石器、角錐状石器（尖頭器様石器）との技術的距離は大きく、いずれの器種からの直接的な形態変化の過程も考えにくいと思われるからである。

関東地方の槍先形尖頭器が、他地区からの石器と技術の伝播によるものであるとすれば、最もあり得べきそれは、一つは中部高地における尖頭器石器群に求められるのではないか。中部高地における槍先形尖頭器石器群の編年は、良好な層位的条件に乏しく、石器の型式的編年に主として依拠しなければならないため、現実にはいくつかの異なった考え方方が提示されている。そのうちでも、最も有力な考え方である、渋川Ⅱ遺跡の槍先形尖頭器をその発生過程を示すものとして認めるならば、この石器群を最古として、次いで中部高地における槍先形尖頭器の本格的な成立は、おそらく男女倉遺跡B地点の石器群ということになろ

うかと思われる。

このような中部高地での槍先形尖頭器の発生とその技術的進化の過程で、その南関東への第1次的な伝播の起きるのが、およそ切出形ナイフ形石器、角錐状石器（尖頭器様石器）の盛行する時期と並行期であって、その現われが、上記の石器群なのではなかろうか。有効な槍先としての槍先形尖頭器の受容が、石器群の構造の改変を促し、地域的な環境に最も適応した道具立てとして、槍先形尖頭器と石刃を素材とする画一的なナイフ形石器の石器群を現出させたと考えることになろう。とすれば、中部高地の石器群における石刃素材のナイフ形石器の発達の相対的な弱さは、両者の環境の相違による、環境に適応した道具立ての違いとして現われていると考えることができよう。

槍先形尖頭器発生に関する西の系譜

いま一つ考えなくてはならないのは、九州における三稜尖頭器と切出形ナイフ形石器、角錐状石器（尖頭器様石器）を含む石器群の問題であろう。大分県岩戸遺跡（芹沢 1978、坂田 1980、清水・高橋・柳田 1986）の石器群は、前述の下九沢山谷遺跡第Ⅳ文化層、あるいは西之台遺跡B地点Ⅳ層中部の石器群に、やや先行する可能性がある。この石器群には、極めて整った三稜尖頭器が組成している。この三稜尖頭器を槍先形尖頭器の発生過程を示す一つの姿として評価すれば、また別の理解もありうる。

九州におけるこの時期の石器群の展開は、岩戸遺跡における三稜尖頭器、角錐状石器（尖頭器様石器）、ナイフ形石器の組み合わせから熊本県下城遺跡（田中・緒方 1979、古森 1980）の面的な調整をもつ角錐状石器（尖頭器様石器）とナイフ形石器の組み合わせへという発展の経過をみることができよう。

この三稜尖頭器、角錐状石器（尖頭器様石器）は、器種としては「尖頭器」と評価すべきものであるが、いわゆる槍先形尖頭器とは技術的にも、

型式学的にも異なるものである。しかし、この九州における「尖頭器」の技術的变化の姿は、槍先形尖頭器の発生を考える上で重要な示唆を与えて いる。すなわち、ナイフ形石器などと共にした調整加工の在り方に加えて、面的な平坦剝離による調整加工の技術が、分厚い、比較的粗大な剥片を素材として、ある程度の重量、長さ、幅、厚さをもった「尖頭器」を作出する石器製作技術として、極めて有効であることを物語っている。事実、九州においては、この面的な平坦剝離の技術は、角錐状石器（尖頭器様石器）の全面を覆うような調整加工を現出している。そして、この調整加工技術は、また、大形の台形石器の一群の裏面の調整加工を中心として他器種にまで及んでいる様子を見ることが可能である。

九州においては、中部日本におけるような槍先形尖頭器を生み出すことにはならなかったが、伝統的な角錐状石器（尖頭器様石器）とナイフ形石器の石器群の中で、その型式的な改良という形で、いわゆる槍先形尖頭器と同機能の石器を発達させてきたものとみることができるのでなかろうか。これが九州における「尖頭器石器群」の在り方であり、中部～東北日本の槍先形尖頭器石器群とは異なった内容をもったものとして成立、展開していると考えるのが妥当であろう。

しかし、この「九州尖頭器石器群」の成立の中心をなす三稜尖頭器にみられる形態とその特徴の一つである面的な平坦剝離による石器製作技術が、中部高地における槍先形尖頭器の発生と無関係であると、にわかに断定できるだろうか。層位的な位置が明らかな南関東の最初期の槍先形尖頭器を含む石器群と比べて、岩戸遺跡のほうがやや先行するようであり、この角錐状石器（尖頭器様石器）と切出形ナイフ形石器を含む石器群の広がりは山形県越中山遺跡K地点にまで及んでいることを考えると、三稜尖頭器にみられる石器製作技術が中部日本にまで及ぶことは無かったとは断言できないであろう。仮にこうした面的な調整技術の

伝播があったとすれば、中部高地における槍先形尖頭器の成立に関与している可能性はある。そこにおける器種の改良としての形態変化は、三稜尖頭器を製作する方向に向かうのではなく、石器群の構造的な組み立てを大きく変化させて、両面調整による槍先形尖頭器とナイフ形石器の組み合わせという姿を現出させることになったとみることになろうか。

鷹山Ⅰ遺跡S地点の評価

現状では、槍先形尖頭器の発生については判断をなお保留しておきたいが、この問題を考えるに当たって、極めて重要な視点は、須藤のいうように、各地域での槍先形尖頭器の出現は、「地域的な生態条件に適応した伝統的な製作技術体系の改変を基に成立した形態」として捉えることを基本とし、「槍先形尖頭器という新たな形態を製作することによって生じた地域的な枠組が持つ歴史性の変化」を的確に評価すること（須藤 1991）にあるといえよう。

その意味で、鷹山Ⅰ遺跡S地点の発掘調査と、その膨大な出土資料の分析を通じて、黒耀石原産地遺跡での槍先形尖頭器の製作技術の実態を、ある程度具体的な姿で明らかにすることができたのは、重要な成果であったと考えられる。すなわち、そこには豊富で多様な形状の黒耀石原石を用いた、槍先形尖頭器製作技術の「地域的な特殊性」もあるし、また槍先形尖頭器の多量生産をめざした「歴史性の変化」の中でとらえるべき普遍性もみられる。

実は槍先形尖頭器の発生も、「石槍文化」の変遷も、完成された石器の型式学的比較だけではなく、製作技術を含めた構造変化としてとらえることによって、有効なこれから的研究を進めることができるであろう。鷹山Ⅰ遺跡S地点の成果は、そのことを示唆している。

4 黒耀石原産地の遺跡群の性格

安蒜 政雄

南関東地方の遺跡と石器の製作

人びとの移動と石器の製作

日本有数の先土器時代遺跡密集地として知られる、南関東地方の平野部。立川ローム中から発見される、それらの遺跡の石器群は、武藏野台地の層序区分にてらして、5つに区分されるような時期の移り変わりをみせる。古い方から順に、第Ⅰ期（第X～VII層）、第Ⅱ期（第VI層）、第Ⅲ期（第V・IV層）、第Ⅳ期（第IV・III層）、第Ⅴ期（第III層）の5時期である。その間、ナイフ形石器は第Ⅰ期から第Ⅴ期の前半まで継続し、ついで槍先形尖頭器は第Ⅳ期に姿をみせ、第Ⅴ期になって細石器が本格的に登場する。

こうした南関東地方平野部の遺跡に残された石器群には、珪岩など在地産の石材に加え、遠隔地産の特定の石材がみとめられる。その代表が、黒耀石である。

ところで、先土器時代の遺跡の一つ一つは、当時の人びとの移動生活によってもたらされたものであり、その移動の先々で、石器が製作された。これにともない遺跡には、普通、残核・剝片・碎片類といった原料の残滓とともに、原料から製品化された、素材や石器が残されている。その反面、未使用の状態の原料が遺跡にそのまま遺棄されている例となると、ごく稀である。こうした意味で、原料は遺跡において、そのすべてが製品化されているかにみえる。そうだろうか。原料を原石の個体ごとに、つまり個体別資料をとおして観察してみよう。

遺跡に遺存する一連の個体別資料は、石器製作にともなう作業内容のちがいにもとづいて、3つに分別される。類型A：残核・剝片・碎片類をもつ一群、類型B：剝片・碎片類をもつ一群、類型

C：残核・剝片・碎片類をもたない一群、の3者である。こうした類型的な差が生まれた原因は、埼玉県砂川遺跡の分析をとおして、はっきりととらえられている。すなわち、類型A：移動元からの石核の持ち込み、類型B：移動先への石核の運び出し、類型C：移動元からの石器と素材の持ち込み。

この3類型を原料という観点からとらえなおすと、類型Aは持ち込まれた消費途上にある原料の完全消費、類型Bは持ち込まれた原料の部分的な消費と消費半ばにある原料の運び出しを、それぞれ意味することになる。したがって、消費途上の石核の状態で持ち込まれた、類型Aの原料を旧原料、逆に消費半ばの石核の状態で運び出された、類型Bの原料を新原料と呼ぶこともできる。つまり、遺跡の石器製作は、旧原料と新原料という、2群の原料のもとで開始され、旧原料を使い切り新原料を半ば消費して終了しているのである。なお、いうまでもなく製品として持ち込まれた類型Cは、かつて消費された原料の存在を示してはいるが、それ自身は原料ではない。

すなわち、どの遺跡でおこなわれた石器の製作も、絶えず移動先へと繰り越される一群が用意されているように、その場その場で、保有している原料のすべてを使い切ることのない配慮が払われていたのである。それは、移動が繰り返されるたびに、その先々で消滅した旧原料に見合う相当量の新原料が、移動のいずれかの過程で入手・補給されていたことを示している。

となると、南関東地方の平野部には産出しない黒耀石が、多くの遺跡から発見される事実は、何を物語ることになるのだろうか。果して、黒耀石は、移動の生活とどのような係わりをもったのか。また、黒耀石の原産地に、それをひもとく何らか

の手掛けりがとどめられているのだろうか。

黒耀石と石材構成

そこでまず、南関東地方平野部の石器群について、その石材構成のなかで、一体、黒耀石がどんな位置を占めていたのかを観察してみると、決して一様ではない。そこには、3つの遺跡に代表される、互いに異なった在り方がみとめられる。

砂川遺跡と在地産主体の石材構成 第一は、第Ⅲ期後半の砂川遺跡の石材構成である。砂川遺跡から発見されたナイフ形石器46点をもつ総計769点の石器群中、ナイフ形石器1点をふくむ計11点が黒耀石製である（表1）。

この石器群は、類型A：12個体・類型B：18個体・類型C：36個体の、合わせて66の個体別資料に区分されている。すなわち、砂川遺跡では、都合30個体の原料を用いた石器の製作がおこなわれたのである。その原料を石材別にみると、27個体の在地産の石材と3個体の黒耀石に分かれる。在地の石材を主な原料として、石器の製作がすすめられたことは明らかである。

また、原料を新旧別にみると、旧原料では12個体中の1個体、新原料では18個体中の2個体が、それぞれ黒耀石である。つまり、砂川遺跡にいたる移動の過程で、黒耀石が大量に入手された気配

表1 砂川遺跡・寺尾VI遺跡・月見野II遺跡の石器群と個体別資料

		個体数	点 数	残 核	刃 器	剥 片	碎 片	ナイフ 形石器	槍先形 尖頭器	彫 器	搔 器	削 器	揉錐器	二次加 工のあ る剥片	使用痕 が残る 剥 片	磨 石
砂川遺跡	石器群	66 (6)	769 (11)	12 (1)	106 (4)	261 (3)	314 (1)	46 (1)		2				14 (1)	14 (1)	
	類型A	12 (1)	315 (1)	12 (1)	26	111	142	7						8	7	
	類型B	18 (2)	395 (7)		60	125 (3)	172 (3)	27		1				4 (1)	6 (1)	
	類型C	36 (3)	59 (3)		20	25		10 (1)		1				2 (1)	1 (1)	
寺尾VI遺跡	石器群		1,898 (1,778)	16 (15)	129 (120)	589 (539)	951 (904)	163 (158)		1	3	6	3	26 (25)	11 (9)	4
	類型A	8 (7)	560 (547)	8 (7)	65 (62)	236 (228)	183 (183)	52 (51)		1	3	1	1	7 (7)	4 (4)	
	類型B	7 (6)	229 (221)		18 (18)	85 (81)	64 (63)	52 (50)		1	1	1	1	5 (5)	2 (2)	
	類型C	20 (7)	95 (48)		13 (8)	69 (35)		3 (2)				1		3 (2)	2 (2)	4
月見野II遺跡	石器群		996 (625)	9 (4)	105 (54)	309 (137)	440 (342)	74 (59)	7	4	4	17		11 (6)	16 (8)	
	類型A	9 (4)	107 (84)	9 (4)	19 (14)	31 (21)	10 (9)	27 (25)		2	4			3 (3)	2 (2)	
	類型B	74 (25)	520 (276)		46 (29)	222 (75)	204 (137)	25 (20)	2	2		8		6 (2)	5 (5)	
	類型C	56 (8)	71 (14)		32 (5)			16 (8)	5	2	2	5		6	3	

() 内は黒耀石

はみられない。なお、砂川遺跡の黒耀石は、箱根産であると分析されている (Suzuki 1974)。

寺尾VI遺跡と黒耀石主体の石材構成 第二是、第二期の神奈川県寺尾VI遺跡の石材構成である。ナイフ形石器163点をもつ総計1898点の石器群中、ナイフ形石器158点をふくむ計1829点が黒耀石製である。

いま、確実に個体別資料化することができる884点を類型別にみると、類型A：8個体・類型B：7個体・類型C：20個体となる(表1)。すなわち、寺尾VI遺跡では、15個体以上の原料を用いて石器が製作された。その原料を石材別にみると、黒耀石が13個体を占め、黒耀石以外の石材はわずかに2個体である。このように、寺尾VI遺跡では、砂川遺跡とはまったく対照的に、石器の製作は、黒耀石を主な原料としてすすめられている。

また、原料を新旧別に検討すると、旧原料では8個体中の7個体、新原料では7個体中の6個体までもが黒耀石である。これは、寺尾VI遺跡にいたる移動の途次で、大量な黒耀石が入手・補給されたことを物語っている。しかも、その黒耀石は、箱根産とくらべればはるかに遠距離にある、信州産である。

月見野II遺跡と黒耀石併用の石材構成 第三是、ナイフ形石器と槍先形尖頭器の双方をもつ、第四期の神奈川県月見野II遺跡の石材構成である。ナイフ形石器73点と両面調整品を中心とする槍先形尖頭器7点をもつ総計996点の石器群中、ナイフ形石器53点をふくむ計542点が黒耀石製である。

そのうち個体別に分類することができる696点は、類型A：9個体・類型B：74個体・類型C：56個体に分かれる(表1)。

すなわち、月見野II遺跡では、83個体以上の原料を用いた石器の製作がすすめられた。石材別にみると、黒耀石29個体に対し、その他の石材54個体となる。このように、月見野II遺跡では、砂川遺跡や寺尾VI遺跡とは異なり、黒耀石とそれ以外の石材を併用しながら石器が製作されている。

また、原料を新旧別に検討すると、旧原料では9個体中の4個体、新原料では74個体中の25個体が、それぞれ黒耀石である。つまり、月見野II遺跡にいたる移動の途中で、信州産と分析されるかなりの量の黒耀石が入手・補給されている。

ところで、月見野II遺跡の黒耀石の在り方は、極めて特徴的である。それは、月見野II遺跡で製品化された53点のナイフ形石器中、黒耀石製が45点もの多くを占めている点である。全体の3分の1にみたない原料から、ナイフ形石器の大部分が作り出されたことになる。ここから、ナイフ形石器の製作と黒耀石が密接な関係をもっていたことがわかる。

一方で、月見野II遺跡で製作された2点、移動元で製品化され持ち込まれた5点という内訳の、槍先形尖頭器7点は、いずれも黒耀石製ではない。ナイフ形石器とは逆に、黒耀石は、槍先形尖頭器の製作とは一切の係わりをもっていないのである。黒耀石は、あたかもナイフ形石器専用の原料・石材とされていたかのようである。

石材構成の変化

さて、南関東地方平野部の遺跡に、黒耀石が加わる石材構成をもつ石器群が登場するのは、第一期にさかのぼる。しかし、黒耀石は、それ以降の各時期とも、いつも同じような状態にあったのではなく、第二期と第四期に特に多用されている。また、その原産地も一定ではなく、第二期と第四期が信州産を中心としているのに対して、第三期では箱根産が主となる。

そのようななか、在地産主体・黒耀石主体・黒耀石併用という、3つの石材構成がとられている。互いにどのような関係にあったのか。いま、この3者がそれぞれ移動にともない、黒耀石の原料が順次消費されていく、その経緯を示していると仮定してみよう。

その場合、まず、多量に入手された黒耀石をもつ、黒耀石主体の石材構成にはじまる。ついで、移動にともなう石器製作がおこなわれ、黒耀石の

原料は漸次消費され、それと見合う原料を在地の石材で補給する、黒耀石併用の石材構成となる。やがて、さらに減少した黒耀石の原料は、より多くの在地の石材でまかなわれ、ついに在地産主体の石材構成をとるにいたる。

確かに、そのような黒耀石の入手と消費の周期を想定することも可能である。しかし、3者の石材構成は、すでに述べたように、第Ⅱ期の黒耀石主体から第Ⅲ期の在地産主体へ、さらに第Ⅳ期の黒耀石併用へと、明らかに推移している。各時期の石材構成を、なお観察してみよう。

黒耀石主体の石材構成と対原産地間移動 第Ⅱ期 の寺尾Ⅵ遺跡にみられる黒耀石主体の石材構成が、移動につれ黒耀石の減少分を在地の石材で補い、それがさらにすすんで在地産主体の石材構成へと転じたとは、到底予測しがたい。というのも、寺尾Ⅵ遺跡同様、当該時期の各遺跡では、新原料ばかりか旧原料の大半も黒耀石で占められているからである。絶えず、多量な黒耀石が入手・補給されていたと考えざるをえない。

となると、この時期の黒耀石は信州産であり、人びとは、頻繁に黒耀石の原産地、中部高地へとおもむいていたのだろうか。この時期の遺跡数が、つぎの第Ⅲ期とくらべて少ないことは、あるいは移動が、中部高地の黒耀石原産地と往復するかたちでおこなわれていたことを反映しているのかもしれない（安藤 1990）。

すなわち、南関東地方平野部と黒耀石原産地を直接結ぶかたちの、往復移動がおこなわれていた可能性が大きい。だが果して、人びとは、南関東地方平野部と同様、移動先である原産地に一定期間居住したのだろうか。

在地産主体の石材構成と遺跡群 これに対し、南関東地方平野部で、石器原料の在地化がすすむ第Ⅲ期となるとどうか。多くの遺跡は、砂川遺跡と相似で、在地産主体の石材構成をとり、どの遺跡にも多量に黒耀石が存在するということはない。黒耀石の入手先も箱根へと移り、直接原産地にお

もむいたとしても、移動の領域は、第Ⅱ期にくらべ、著しく縮小したとみてよい。よりせまい範囲の、地区周回移動へと移行したものとみられる。こうして、より定着性をおびた移動が、南関東地方平野部に遺跡群を形成しはじめることとなる。そして、その移動の過程には、先に述べた、黒耀石消費の周期もみとめられる。

黒耀石併用の石材構成とその規則性 つづく第Ⅳ期、南関東地方平野部の各遺跡には、月見野Ⅱ遺跡のように、再び信州産を中心とする黒耀石が、多量にみとめられるようになる。だからといって、移動も再度、中部高地へおよんだのかとなると、その可能性は小さい。なぜならば、第Ⅲ期にもまして隨所に遺跡群が形成され、移動はよりいっそう定着性をつよめたと考えられるからである。

すでにみたとおり、月見野Ⅱ遺跡では、あたかも黒耀石がナイフ形石器専用の原料・石材であったかのようである。しかし、そうとばかりはいえない。なぜならば、月見野Ⅱ遺跡同様、ナイフ形石器と両面調整の槍先形尖頭器が共存する、月見野Ⅰ遺跡をはじめとする多くの遺跡では、まったく逆の現象が生じており、黒耀石が槍先形尖頭器のいわば専用原料・石材となっているからである。

すなわち、この時期、ナイフ形石器と槍先形尖頭器（両面調整）が共存する遺跡の相互では、器種と石材との間に、そのどちらか一方が黒耀石となる、つよい規則性がうかがえる。こうした規則性が生まれるためにには、絶えず一定量の黒耀石がつねに安定したかたちでもたらされる必要があり、より組織的に黒耀石が入手されていたことを暗示させる。

一方、当該時期の黒耀石が槍先形尖頭器わけても両面調整品の石材となるとき、そこにもう一つの注目すべき現象を指摘できる。ナイフ形石器が石核一剝片一石器という原料にはじまる製品化の工程をみせるのに対し、槍先形尖頭器にはそうした痕跡がとどめられていないのである。

槍先形尖頭器の素材が、すべて剝片ではなかっ

たという点を考慮に入れても、槍先形尖頭器製作の初期の工程を欠いており、最終的な仕上げの段階で生じる調整剝片のみが遺跡に残されている。これは黒耀石が原料ではなく、未成品としてもたらされたことをつよく示唆している。

こうして、黒耀石主体・在地産石材主体・黒耀石併用という、3つの石材構成の背景には、それぞれに異なった、移動の様式と黒耀石の入手形態があったと推定されてくる。では、こうした南関東地方平野部に生じた出来事と対応する何らかの事象を、黒耀石原産地に見い出すことができるだろうか。目を、中部高地の黒耀石原産地へと転じてみたい。

黒耀石原産地と遺跡群の構成

黒耀石原産地の遺跡と遺跡群

南関東地方平野部の遺跡へは、主に、第Ⅱ期では信州産、第Ⅲ期は箱根産、そして第Ⅳ期では再び信州産の黒耀石がもたらされた。その間、石器群の石材構成は、黒耀石主体から在地産石材主体、さらに黒耀石併用へと、段階的に推移した。このように、中部高地からは2期にわたり、しかも膨大な量の黒耀石が、南関東地方平野部へと流入した。その中部高地の黒耀石原産地の中心に、長野県和田峠と霧ヶ峰がある。

では、その和田峠および霧ヶ峰の一帯に、どんな遺跡があるのかを概観してみよう。当該地区も南関東地方平野部に匹敵する、遺跡の密集地となっており、河川の流域や湖沼・湿地周辺に、男女倉遺跡群、鷹山遺跡群、和田峠遺跡群、八島遺跡群それに池ノ平遺跡群さらには渋川遺跡群など、数多くの遺跡群が残されている。

そうした黒耀石原産地の遺跡群は、一体いつ形成され、どんな性格をおびていたのか。またそこに、南関東地方平野部とのつながりを求めることができるだろうか。

まず、黒耀石原産地直下の遺跡群として著名であり、また原産地遺跡群としては、これまでに唯

一分布調査が完了している、鷹山遺跡群の様相をさぐってみたい。

鷹山遺跡群は、鷹山川の流域、旧湿地をとりかこむ11遺跡と5散布地から構成されている。この流域に遺跡が群集する状況は、南関東地方平野部の遺跡群と比較して、景観上、何ら異ったところはみられない。では、こうした遺跡群を構成する、個々の遺跡の構造についてはどうか。

南関東地方平野部の遺跡では、普通、3つ前後のブロックが、原料と製品を共有する一つのまとまりをみせる。そのユニットと呼ばれるブロック群の背後には、移動生活上で原料と製品を融通し合った、当時の人びとの最とも小さい集団の存在が想定されてもいる。

さて、鷹山遺跡群の中心的な位置を占めるのが、鷹山I遺跡である。すでにM地点とS地点が発掘され、それぞれからブロックの検出をみている。また同遺跡には、尖石考古館調査第1地点および第2地点それに試掘区hなど、さらに別のブロックが残されている可能性もつよい。この一遺跡にいくつものブロックが分布する状況も、外見上、南関東地方の平野部の様相と共通している。となると、鷹山I遺跡のブロックもまた、その一つ一つが、南関東地方平野部と同じ性格をもっているのだろうか。

鷹山I遺跡と石器の製作

鷹山I遺跡M地点とS地点のブロックには、互いに共通し、だが南関東地方平野部のブロックとは異なる、大きな特徴がある。それは、個々のブロックの広がりの巨大さであり、加えて、出土する石器群の量の膨大さである。ちなみに、砂川遺跡のなかで最大のブロック、長径6m・短径4mのF2ブロックには、都合211点の石器群が残されている（表2）。

これに対して、鷹山I遺跡M地点のブロックは、長径19m・短径10mに広がり、合計6272点の石器群をもつ。一方、遺物の密集が径15mをこえる、S地点のブロックからは、合わせて17520点の石

表2 砂川遺跡・鷹山I遺跡の石器群と組成

	砂川遺跡		鷹山I遺跡	
	F2ブロック	ユニットA	M地点	S地点
原石			1	1,569
残核	3	6	107	684
刃器	17	82	336	522
剝片	117	69	2,422	4,148
碎片	47	173	3,399	10,162
ナイフ形石器	17	23	2	44
槍先形尖頭器				235
彫器		1		4
搔器				11
削器			1	18
揉錐器			1	5
二次加工のある剝片	6			118
使用痕がある剝片	4	5	(未調)	(未調)
敲石			1	
磨石			2	
計	211	359	6,272	17,520

器群が出土した。砂川遺跡のF2ブロックと比較するとき、石器群の総点数で、M地点のブロックはほぼ30倍、またS地点のブロックは80倍以上にも達する。

このように、鷹山I遺跡M・S両地点のブロックでは、南関東地方平野部のブロックからは想像もつかないほどの、大掛かりな石器の製作がおこなわれたのである。明らかに、両地点のブロックは、石器の生産址であった。

鷹山M型石器生産ブロック ところで、砂川遺跡のA地点には、A1・A2・A3の3つのブロックからなる、ユニットAがある。このユニットからは、残核6、打面調整剝片25、刃器状剝片82、他の剝片44、碎片173、ナイフ形石器23、彫器1、使用痕のある剝片5の、計359点が発見された（表2）。

ユニットにとどめられている石器群、それはすなわち集団が残した石器群である。したがって、

その石器群の総量から、集団が移動先でおこなった石器製作の規模を知る一応の目安がえられる。いいかえれば、それは居住に不可欠な石器を製作する作業によって生じた石器群であり、いわば移動生活上の必要石器群であった。果して、そうした集団の必要石器群は、鷹山I遺跡の各ブロックでどんな在り方を示しているのだろうか。

M地点のブロックに残された総計6272点の石器群の内訳は、原石1、残核107、刃器336、剝片2422、碎片3399、ナイフ形石器2、揉錐器1、削器1、敲石1、磨石2である（表2）。S地点のブロックと比較するとき、原石とナイフ形石器の少なさに目をうばわれる。

ところで、砂川遺跡にユニットAを残した集団は、およそ石器総点数のうえで、15点に1点の割合で、ナイフ形石器を作り出している。寺尾VI遺跡からも、類似した比率がえられる。その比率を鷹山I遺跡M地点のブロックにあてはめてみると、500点以上のナイフ形石器が残されていてもよい。だが、わずか2点しかない。

こうして、M地点のブロックには、本来、多くの原石が集積され、500点以上もの多量なナイフ形石器が製作されていたと考えることができる。しかし、原石とナイフ形石器の大部分が残存しない。そのうえ、石器の製作に係わった集団が居住に必要としたとみられる、一群の必要石器群すらもみあたらない。あたかも、集団が一挙にナイフ形石器を量産し、その大部分を集積した数多くの原石とともに、ブロック外に運び出したかのようである。

こうした様相をみせる、M地点のブロックを、ここで仮に鷹山M型石器生産ブロックとする。

鷹山S型石器生産ブロック 一方、S地点のブロックに残された総計17520点の石器群の内訳は、原石1569、残核684、刃器状剝片522、他の剝片4148、碎片10162、槍先形尖頭器235、ナイフ形石器44、搔器11、削器18、彫器4、揉錐器5、二次加工のある剝片118である（表2）。

このS地点のブロックには、多数の槍先形尖頭器がある。その槍先形尖頭器の素材は、原石と剝片の2者に分かれる。そして槍先形尖頭器の直接の素材となった原石B類298点と、槍先形尖頭器用の素材を剝離した残核A類613点が残されている。少くとも、残されている残核の数に数倍する槍先形尖頭器が製作されていたことになる。

さて、S地点で製作された槍先形尖頭器は、235点中の189点がそうであるように、未成品を中心としている。この槍先形尖頭器未成品の製作に関連して、赤味をおび他の黒耀石からは区分される、原石1、残核1、槍先形尖頭器未成品15、剝片・碎片463点からなる一連の資料がある。これによると、およそ剝片・碎片30点に対し1点の割合で、両面調整の槍先形尖頭器未成品が製作されている。

仮に、この割合を、S地点の剝片と碎片の総点数にあてはめると、約500点の両面調整の槍先形尖頭器があってもよい。しかし実際には、そのように多量な槍先形尖頭器未成品は残されていない。

このように、S地点のブロックには、槍先形尖頭器それも未成品を量産した痕跡がとどめられている。一方、S地点には、槍先形尖頭器の他に、44点のナイフ形石器がある。だが、M地点のような、ナイフ形石器を量産した形跡はなく、それは主にS地点で槍先形尖頭器の製作をおこなった集団が、居住に必要とした石器群であったと思われる。

すなわち、S地点のブロックでは、M地点とは異なり、ナイフ形石器を携え一定期間居住した集団が、原石を集め、槍先形尖頭器の未成品を大量に製作した。そして、未成品の多くがブロック外へ運び出されたと考えられる。これを、鷹山S型石器生産ブロックとする。

鷹山X型石器生産ブロックの想定 以上のように、鷹山I遺跡には、互いに様相を異にする、2つの石器生産ブロックがみとめられるのである。では、同遺跡の、尖石考古館発掘第1・2地点と試掘区

hにその存在が予測される、それぞれのブロックについてはどうだろうか。

尖石考古館発掘第1・2地点からは、槍先形尖頭器とナイフ形石器が数多く発見されており、そこにも鷹山S型石器生産ブロックと類似した性格のブロックがあったとみられる。これに対して、試掘区hからは、ナイフ形石器のみが検出されている。試掘区hのナイフ形石器は、S地点と共に通した製作技術上の特徴をもち、そこに大きな型式の差を指摘することはできない。

いま、鷹山S型石器生産ブロックは、ナイフ形石器を携えた集団が槍先形尖頭器を量産した地点であると考えるとき、逆に、槍先形尖頭器を携えた集団がナイフ形石器を量産した地点があったとしよう。それはS地点のナイフ形石器と槍先形尖頭器を入れ替えたような、石器生産ブロックではなかったか。そこで、試掘区hに、こうしたナイフ形石器を量産した地点があったと予測し、それを鷹山X型石器生産ブロックと仮称・想定しておきたい。

原産地の遺跡群の成り立ち

鷹山I遺跡の構造と鷹山遺跡群の構成 鷹山I遺跡には、したがって、鷹山M型・S型という、2つの石器生産ブロックがあり、さらに鷹山X型石器生産ブロックの存在も予測される。これら3つの石器生産ブロックのうち、S・X型は同じ時期のブロックであるが、M型との間には出土層位上の差がみられる。すなわち、鷹山I遺跡のブロックは、より古いM地点とより新しいS地点の、前後2つの時期に分かれる。

より新しい時期の鷹山S型石器生産ブロックには、居住に必要であったと想定される石器群があり、集団が、ここに一定の期間居住して、石器を量産していた形跡をとどめている。このブロックに、礫群や礫による床面の整備など、一連の居住の施設や設備がともなうこと、それを裏づける。おそらく、鷹山X型石器生産ブロックも同様であったと考えられる。こうしてみると、この時期、

鷹山Ⅰ遺跡は、鷹山S型石器生産ブロックと鷹山X型石器生産ブロックを組み合わせとする、一つの構造性をおびていたと考えることもできる。

これに対して、より古い鷹山M型石器生産ブロックには、集団が一定期間居住し、石器を製作した痕跡に乏しい。同じ石器生産ブロックとはいっても、時期が異なると随分と様子が違う。

さて、鷹山遺跡群を構成する11遺跡のうち、第Ⅰ遺跡をはじめとして、第Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅹ遺跡から、ナイフ形石器と槍先形尖頭器が発見されている。また、第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅶ・Ⅸ遺跡には、ナイフ形石器か槍先形尖頭器のいずれかがみられる。つまり、鷹山遺跡群には、鷹山Ⅰ遺跡のより新しい時期と同様、鷹山S型石器生産ブロックと鷹山X型石器生産ブロックが対になる構造をもつ多くの遺跡が集まっていたと想定することも不可能ではない。そのように考えるとき、鷹山遺跡群は、ナイフ形石器と槍先形尖頭器の、一大石器生産遺跡群としての性格をおびてくる。

石器生産ブロックと南関東地方の石材構成 では、鷹山石器生産遺跡群において、大量に集積された原石と量産された製品は、どの時期どんな方法で南関東地方平野部へともたらされたのか。これまでの考察をふんで、鷹山M型石器生産ブロックが南関東地方平野部第Ⅱ期の黒耀石主体の石材構成、鷹山S・X型両石器生産ブロックが同Ⅳ期の黒耀石併用の石材構成と、それぞれ対応する関係にあったと考えておきたい。

すなわち、第Ⅱ期、南関東地方平野部と黒耀石原産地を直接に結ぶ移動があり、黒耀石原産地で原石が採取され、ナイフ形石器が量産された。黒耀石原産地に一定期間居住した形跡を残さない、その集団の移動が、現地にM型石器生産ブロックを残し、南関東地方平野部に絶えず多量な黒耀石をもつ黒耀石主体の石材構成をもたらした。

だが、現在までのところ、鷹山M型石器生産ブロックが、鷹山Ⅰ遺跡以外のどことどこの遺跡にあったのかは不明である。これまでの調査と研究

の成果にしたがうかぎり、当該時期の石器群が、鷹山遺跡群に点々と残された可能性は小さい。そうした意味で、この時期に鷹山遺跡群がすでに形成されていたとは考えがたい。

これに対し、それまでのナイフ形石器に新たに槍先形尖頭器が加わる、いいかえれば槍先形尖頭器の出現以降、鷹山は遺跡の群集状況を呈した。そうしたなか、ナイフ形石器を携えた集団が槍先形尖頭器を量産したS型石器生産ブロックと、逆に槍先形尖頭器を携えた集団がナイフ形石器を量産したと推定されるX型石器生産ブロックが登場する。この両ブロックから運び出された、原石とナイフ形石器それに未成品を中心とする槍先形尖頭器が、第Ⅳ期の南関東地方平野部へと大量にもたらされた。それは、南関東地方平野部で、ナイフ形石器と槍先形尖頭器という2つの器種で黒耀石を使いわける法則性が生まれるほど、多量であった。

では、南関東地方平野部において、こうした黒耀石が在地の石材と匹敵するような安定した位置を占めつづけることができた背景は何か。この時期、南関東地方平野部では隨所に遺跡群が形成され、一方、鷹山にもまた同時期の遺跡が群集する。果して、この双方の遺跡群は、黒耀石の流通と、一体どのように係わっていたのだろうか。

黒耀石原産地遺跡群の性格 鷹山遺跡群の周辺には、それぞれ和田峠や霧ヶ峰をはじめとする特定の黒耀石産出地に直結したとみられる、男女倉遺跡群・和田峠遺跡群・八島遺跡群・池の平遺跡群・渋川遺跡群などが点々と位置する。こうした遺跡群を構成する個々の遺跡からは、ナイフ形石器や槍先形尖頭器が発見されており、その型式学的な特徴からみて、ほぼ鷹山遺跡群と同時期に形成された可能性は大きい。いずれも、槍先形尖頭器の発生を契機とするようにして形成された遺跡群である。しかも、鷹山遺跡群と同様、その多くもまた石器生産遺跡群でもある。

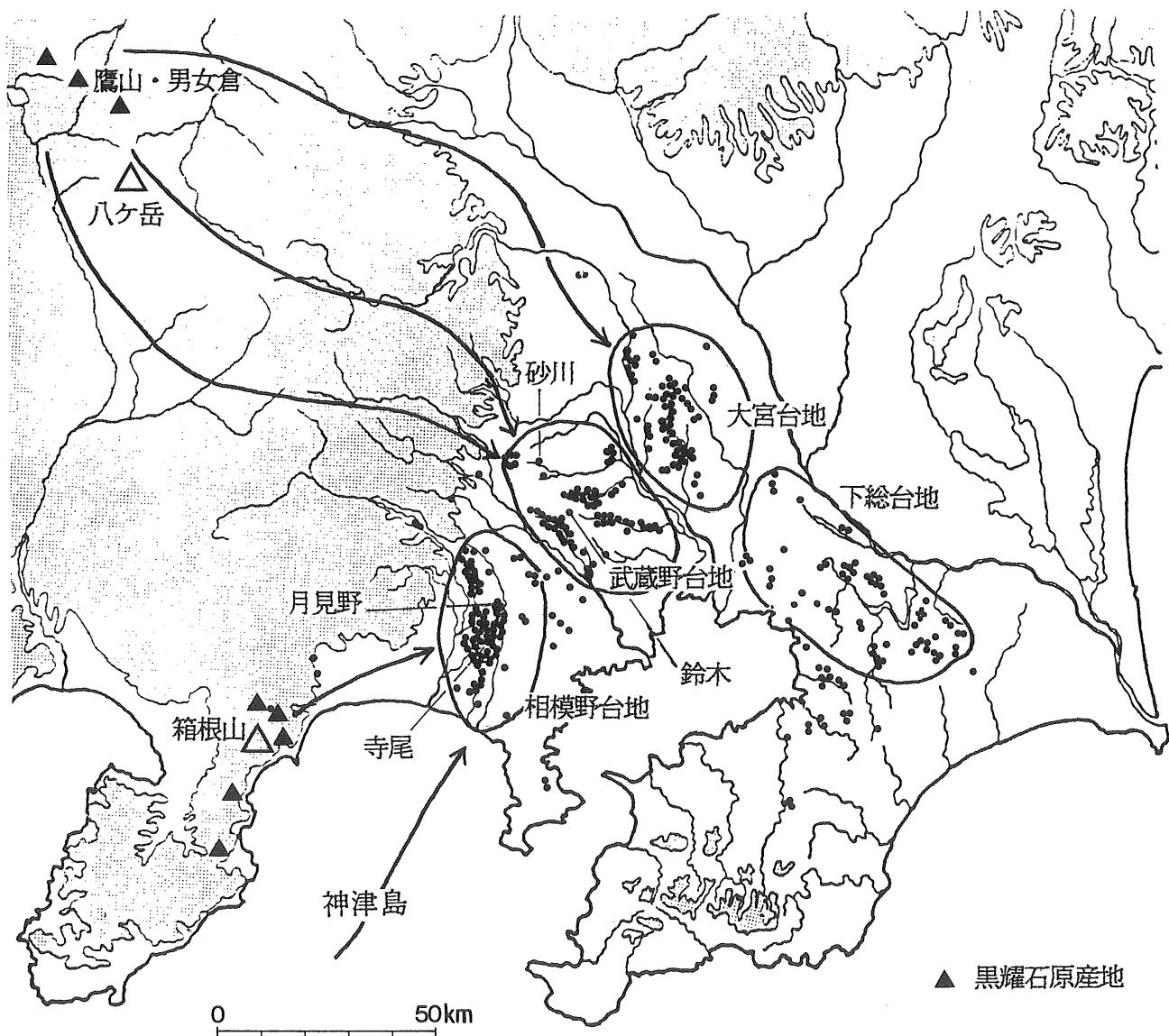
この一連の遺跡群では、では、それが特定

の黒耀石産出地とかたく結びつき、互いに固有の原料を使用した石器の生産がおこなわれていたのだろうか。そうではない。和田岬直下の男女倉遺跡群に霧ヶ峰産の黒耀石がみとめられるほか、池の平遺跡群と渋川遺跡群には和田岬産と霧ヶ峰産の黒耀石が共存する (Suzuki 1974)。これは、集団が枠をこえて相互の遺跡群に立ち入るかたちで、石器を量産していたことを物語っている。

つまり、黒耀石産出地のもとに集積された原料をはじめ、量産されたナイフ形石器や槍先形尖頭器は、こうした遺跡群を経由する集団の移動を仲立ちとして、原産地から周辺地域へと運ばれた可能性が大きい。その連鎖の輪がさらに拡大し、ようやく遠隔の地へともたらされたのではなかったか。

南関東地方平野部の遺跡群が、さらにこれとリンクし、個々の遺跡へと黒耀石が運び込まれたとみられるのである。

こうしてみると、中部高地と南関東地方平野部との間には、遺跡群を網の目のように結ぶ、黒耀石の物流組織がはりめぐらされていたにちがいない。それを背景に、黒耀石の供給元としての遺跡群と、その受け入れ先としての遺跡群が、それぞれ存在していたことになる。いいかえれば、原産地遺跡群の出現は、石器生産遺跡群として登場し、その登場はただちに黒耀石の流通体系の確立を意味する。すなわち、黒耀石原産地の遺跡群はまさに、石器生産遺跡群としての性格をおびていたのである。



第64図 黒耀石原産地と南関東地方の遺跡（ルートは推定）

5 鷹山遺跡群とその周辺をめぐる課題

戸沢 充則

黒耀石原産地遺跡への関心

1984年の秋、長門町営のスキー場「ブランシュたかやま」開設工事に伴う発掘調査のため、私たちとしてははじめて鷹山遺跡群に直接かかわった。しかし以前から、八ヶ岳・霧ヶ峰一帯にひろがる黒耀石原産地には強い関心をいだいていた。

いまは亡き藤森栄一先生は、信濃の土地を「縄文の王国」と称え、その「王国」を育て支え、またそのすぐれた縄文文化を四圍にひろげる「みち」に想いを寄せ、その「みち」は黒耀石を運ぶ「ストーンロード」に他ならないと考えて、“かもしかみち”のロマンを追い求めた。

信濃史学の巨峰を築いた故一志茂樹先生は、信濃を代表する自然と歴史の宝として、黒耀石原産地の調査と保護の必要を、機会あるごとに若い考古学研究者に訴えつづけていた。

こうした先学たちの夢と提言を、いまこそ実現すべき時がきたと私たちは感ずる。1990年秋、野辺山高原で開催されたシンポジウム「中部高地の尖頭器文化」では、討論のための「定点」として、信濃が槍先形尖頭器の発生地になりうるか、そして「石槍文化」発達の中核の土地であったかどうかが、多くの研究者によって多角的に論じられた。その中で槍先形尖頭器と黒耀石の関連に注目がよせられ、黒耀石原産地の組織的で徹底した調査が、槍先形尖頭器の技術や生産と流通、ひいては「石槍文化」の発生と展開についての重要な鍵を与えるものであろうという認識が、シンポジウム参加者の共通の関心となつたのである。

こうしたなかで、私たちは1984年に鷹山I遺跡M地点の発掘の機会を持ち、そこでは多量の刃器を集中的に生産したことにかかわる豊富な資料を得た（『鷹山遺跡群I』1989年刊）。そして、ひき

つづき2年間にわたって鷹山遺跡群の分布調査を実施し、黒耀石原産地遺跡としての遺跡群全体の概要を把握し、併せて黒耀石の産出状態を調査した。その中で星糞峠の直下を流れる鷹山川の流域の深い地層中に、人頭大をこすような大形のものを含む、良質な黒耀石の礫が多量に包含されている事実をつかんだことは印象的な成果であった。

ついで1989年夏、住宅建設に伴う事前調査という偶然の機会からではあるが、再び鷹山I遺跡のうち、M地点から100m弱の距離をおくS地点を発掘し、M地点とはちがって今度は槍先形尖頭器を集中的に生産した遺跡とその石器群に逢着することになった。今回報告する鷹山I遺跡S地点である。

こうしてM地点とS地点の発掘、そして分布調査の体験を重ねてみると、これまで関東地方などで、日常的な生活の場として残された多くの先土器時代遺跡、ここでは「一般遺跡」というあまりなじまない仮称で記述したそれらの遺跡での、私たちの調査や研究の経験とは、かなり異なつたりいろいろな発見があったように思う。

そうしたはなはだ経験的な実感としても、原産地遺跡の調査や研究は、先土器時代の研究を、たんに石器群の型式や編年の問題から、文化や社会の構造の解明の道を、ひとつ方向づける重要な要素を秘めていることを改めて認識した。

昨年発表した報告書『鷹山遺跡群I』と、今回の『鷹山遺跡群II』では、まだけっして十分とはいえないながら、上記のような問題意識の下で、黒耀石原産地遺跡の実態をできるだけ詳細に明らかにしようと試みたのである。

石器生産体系の復元

一連の鷹山遺跡群の調査を通じて、その調査の

動機はさまざまであったが、私たちが研究の目標においたことは、黒耀石原産地遺跡における「石器生産体系の復元」ということである。

そのことは、当該遺跡の石器群の石器製作技術の特徴を個々に摘出したり、そこでの石器製作工程を復元するといったことにとどまらず、原石の獲得から、石器の生産にいたる過程を、調査の成果にもとづいて明らかにした上で、さらにそこで作られた製品の流通の実態に迫ること、つまり石器の生産と流通の関係を広い視野で一つの流れとして復元することである。

鷹山Ⅰ遺跡で私たちは、石器群もその製作技術も全く異なる、2つの石器製作址を発掘する機会をもった。刃器を多量に生産したM地点にしろ、槍先形尖頭器を多産したS地点にしても、遺跡に残存した多数の石核や、生産工程で生じた不用な剝片・碎片などの膨大な量にくらべて、製品の残存数はきわめて少ない点が特徴である。

鷹山Ⅰ遺跡以外の鷹山遺跡群の他の諸遺跡は、まだほとんど未調査（未発掘）の状況であるが、それらの遺跡も多くは石器製作址の存在を予測させるように、剝片・碎片や原石・石核などの量が多い。つまり鷹山Ⅰ遺跡で生産された石器が、鷹山遺跡群内の他の諸遺跡に分配されて、そこで生活の用をみたしただけとは思われない。もし一部そうしたことがあったとしても、鷹山遺跡群全体での需要量をはるかにこす石器が、鷹山Ⅰ遺跡のM・S両地点、そしておそらく他の諸遺跡でも多量に生産されていたであろうことはまちがいない。

要するに、鷹山遺跡群で多量生産された石器群は、その大部分がそこから搬出されたとみるのが妥当であろうというのが、私たちの見解である。

一方、その点に関連して、関東地方の先土器時代人の代表的な活動の舞台となった武藏野台地で、遠隔地の石材、その代表的な黒耀石が、河川流域に形成されいくつかの遺跡群を包括するような中核的遺跡（例えば東京都鈴木遺跡）に集中的に

存在し、そこから他の中小遺跡に分散分布した状態がみられることが明らかにされている。黒耀石のようなすぐれた石器原料は、先土器時代という古い時代においても、かなり組織的な流通機構の中で、黒耀石を運ぶ人たちによって各地に動いた可能性は高い。

黒耀石の原産地と関東・中部地方を中心とする黒耀石製石器分布地域との間の流通ルートも、また流通のネットワークもまだ私たちはなんらつかんでいない。しかしいままでのように、黒耀石を供給され受容した側だけからルートを追うのではなく、黒耀石原産地から石器の動きを追うきっかけを、鷹山遺跡群の調査によってつかむことができたと確信している。改めていうならば、それは石器生産体系の復元という研究の目標を設定できる点においてである。

石器の技術と文化の構造

石器（主としてナイフ形石器）を製作したのではなく、その素材となる刃器を多量に作って、それを流通ルートに乗せたと推定される鷹山Ⅰ遺跡M地点タイプの石器生産体系と、槍先形尖頭器の製品を多量に作って、それを搬出したと想定されるS地点タイプの石器生産体系の2つを、いままでの鷹山遺跡群の調査を通じて私たちは明らかにできた。

本報告書の第Ⅳ章1で小菅将夫が、M・S両地点の石器製作技術の特徴と相違を対比して解説し、素材の形で黒耀石を受け入れてナイフ形石器を主に作った時期の人々の生活（居住形態）と、完成了槍先形尖頭器を受け入れた人々の生活の違いという点にまで踏み込んで、黒耀石原産地遺跡で分析した技術的システムの差の背景を論じた。

また同じく第Ⅳ章2では氏家敏之が、第Ⅲ章での鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器製作の技術上の分析をふまえて、関東地方の槍先形尖頭器の製作技術工程（ないしはもっと包括的な意味でシステムというべきか）と、黒耀石原産地遺跡を主と

する中部高地地方のそれとは、それぞれの技術的特徴も、また技術の時間的变化・展開の仕方も異なっていることを指摘した。そしてその上で、両地域の諸遺跡におけるナイフ形石器と槍先形尖頭器の関係を、技術や組成の面からとらえて、関東地方と中部地方のそれぞれの槍先形尖頭器をもつ石器文化は、その性格（様相）を異にするものであろうと論じた。

その他、槍先形尖頭器石器群の編年や、槍先形尖頭器出現の問題などについて試論を述べているが、それ自身はまだ確証された結果とはいせず、また他の研究者がいままで全く触れなかった見解でもない。しかし、鷹山Ⅰ遺跡S地点の槍先形尖頭器の製作にかかわる多量の資料の分析の結果は、槍先形尖頭器を主体とする石器文化、「石槍文化」をめぐって、多くの研究者がかかえているいくつかの課題、たとえば石器文化の構造変化の実態を把握するといったような重要な研究の目標に対して、ある一つの新しい視点を与えるにちがいないと考える。

黒耀石原産地遺跡の周辺

黒耀石原産地遺跡を調査・研究することの、考古学上の意義と重要性は、まだ不十分な成果にすぎないとはいえ、1984年以来の鷹山遺跡群の集中的な調査・研究によって、多少でも明らかにすることことができた。

こうして、原産地遺跡一般についての学界の強い関心が向けられる中で、しかいま、中部山岳地帯にひろがる黒耀石原産地、そして原産地にかかわって存在する遺跡群の周辺は、リゾート開発の嵐の前にある。

黒耀石原産地が多く知られる北八ヶ岳（冷山や麦草峠などを含む）や霧ヶ峰（和田峠などを含む）一帯は、有数な山岳・高原の観光地である。今まで幸いに黒耀石原産地の多くは、国有林や時には一部国定公園あるいは動植物の保護区などで開発から免れていたが、いまや通称「リゾート

法」による開発は、そうした自然の聖域にまで入り込む勢いとなった。

鷹山遺跡群とは尾根一つへだてて隣り合う和田村男女倉遺跡群は、黒耀石原産地遺跡として鷹山遺跡群と並ぶ、あるいはそれ以上に学界ではよく知られた代表的な遺跡群である。そこでは1990年度から「長野県原産地遺跡調査指導特別委員会」の指導の下に、原石としての黒耀石の産状と遺跡群の分布・現状把握のための調査が着手された。

そしてこの鷹山遺跡群についても、今までの調査で確認された鷹山の部落周辺の耕作地以外の、現在ほとんどが山林になっている広大な面積の区域と、星糞峠を中心として黒耀石の露頭などの存在が予想される区域に対して、男女倉遺跡群と同じように、県の特別委員会の指導で1991年度から調査が開始されることになった。

男女倉・鷹山以外の八ヶ岳・霧ヶ峰一帯にある黒耀石原産地およびそれに近接する遺跡群についても、早晚、調査の必要性が生ずると予測される。

こうしていまはじめられている調査は、「開発計画に先行する学術的な確認調査」と位置づけられている。関係者・諸機関が上のような前提に立って、全国に他に例のない黒耀石原産地と原産地遺跡群の全容を明らかにする真摯な努力を、末永く続けられることを祈って止まない。そのためには私たちもできる限り協力することを決意したい。

こうしたすべての前提として、すでに分布調査をほぼ終了し、かつ部分的な発掘調査によって、黒耀石原産地遺跡としての重要性を指摘することができた鷹山遺跡群について、長門町当局が計画したように、「鷹山遺跡群の保存・活用を第一義とした、町の活性化のための鷹山地区の地域づくり」の構想が、一日も早く実践に移されることを願いたい。

最後に再び、「黒耀石の原産地は信濃の自然と歴史の宝である」という先学の言葉の意味をかみしめて味わいつつ、この報告書『鷹山遺跡群Ⅱ』の結びとする。

引用・参考文献

- 1953年 杉原莊介「日本における石器文化の階梯について」『考古学雑誌』第39巻第2号
- 1954年 芹沢長介「関東及び中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生に関する予察」『駿台史学』第4号
- 1958年 戸沢充則「長野県八島遺跡における石器群の研究」『駿台史学』第8号
- 1961年 児玉司農武「信濃・大門峠鷹山遺跡の無土器文化略報」『信州ローム』第7号
- 1962年 藤森栄一・戸沢充則「茶臼山石器文化」『考古学集刊』第1巻第4号
- 1964年 児玉司農武・宮坂虎次「鷹山遺跡発掘調査略報」『長野県考古学会連絡誌』第11号
- 1965年 戸沢充則「尖頭器文化」『日本の考古学』I 先土器時代 河出書房
- 1966年 宮坂英夫・宮坂虎次『蓼科』尖石考古館
- 1968年 戸沢充則「砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』第4巻第1号
- 1969年 稲田孝司「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」『考古学研究』第15巻第3号
- △ 明治大学月見野遺跡群調査団『概報 月見野遺跡群』
- 1970年 宮坂英夫・宮坂虎次「長野県小県郡鷹山遺跡（第1次）」『日本考古学年報』18
- 1971年 宮坂英夫・宮坂虎次「長野県小県郡鷹山遺跡（第2次）」『日本考古学年報』19
- 1972年 信州ローム研究会『男女倉—黒耀石原産地地帯における先土器時代石器群』
- 1974年 戸沢充則・安蒜政雄・鈴木次郎・矢島国雄『砂川先土器時代遺跡—埼玉県所沢市砂川遺跡の第2次調査—』所沢市教育委員会
- △ 白石浩之「尖頭器出現過程における内容と評価」『信濃』第26巻第1号
- △ 宮塚義人・矢島国雄・鈴木次郎「神奈川県本蓼川遺跡の石器群について」『史館』第3号
- △ Masao Suzuki : Chronology of Prehistoric Human Activity in Kanto, Japan. Journal of the Faculty of Science, the University of Tokyo. Sec, V, Vol. IV.
- 1975年 森島稔・川上元・森山公一『男女倉』長野県道路公社・和田村教育委員会
- 1976年 矢島国雄・鈴木次郎「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』第1号
- 1977年 杉原莊介『群馬県武井遺跡における二つの石器文化』明治大学文学部研究報告 考古学7
- 1978年 芹沢長介『岩戸』東北大学文学部考古学研究会考古学資料集2
- △ 中村龍雄『黒耀石 下巻 霧ヶ峰・鷹山』
- 1979年 鈴木次郎・矢島国雄「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』1 有斐閣
- △ 田中寿夫・緒方勉『下城遺跡Ⅰ』熊本県教育委員会
- 1980年 古森政次『下城遺跡Ⅱ』熊本県教育委員会
- △ 小田静夫「小金井市西之台遺跡B地点」『東京都埋蔵文化財調査報告』2 東京都教育委員会
- △ 坂田邦洋『大分県岩戸遺跡』
- △ 明治大学考古学研究室『報告・野辺山シンポジウム1979』
- 1981年 明治大学考古学研究室『報告・野辺山シンポジウム1980』
- 1982年 明治大学考古学研究室『報告・野辺山シンポジウム1981』
- △ 宮坂虎次「鷹山遺跡・割橋遺跡」『考古資料編全1巻(2)』長野県史刊行会
- 1983年 杉原莊介・戸沢充則・安蒜政雄『佐賀県多久三年山における石器時代の遺跡』明治大学文学部研究報告考古学9
- △ 堤 隆・樫田 誠・諏訪間順『深見諏訪山遺跡』大和市教育委員会
- 1984年 中村喜代重「下鶴間長堀遺跡第Ⅱ文化層」『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅲ』大和市教育委員会
- △ 戸沢充則・鶴丸俊明編『多聞寺前遺跡Ⅱ』多聞寺前遺跡調査会
- △ 森山公一「ある彫刻器の削片小考—鷹山・星糞峠採集の資料の中から」『中部高地の考古学』Ⅲ長野県考古学会
- 1985年 安蒜政雄「先土器時代における遺跡の群集的な成り立ちと遺跡群の構造」『日本原史』吉川弘文館
- 1986年 清水宗昭・高橋信武・柳田俊雄『岩戸遺跡』清川村教育委員会
- △ 安蒜政雄「先土器時代の石器と地域」『岩波講座日本考古学』5 岩波書店
- △ 栗島義明「槍先形尖頭器石器群の研究序説—中部日本における地域的様相の把握」『考古学研究』第32巻第4号

- 1987年 中村喜代重「神奈川県相模原市下九沢山谷遺跡の石器群」『神奈川考古』第7号
〃 横田 誠「深見諏訪山遺跡第Ⅲ文化層の石器群について」『大和市史研究』第13号 大和市役所管理部庶務課編
〃 伊藤恒彦『中村遺跡』中村遺跡調査団
〃 織笠 昭「相模野尖頭器文化の成立と展開」『大和市史研究』第13号
- 1988年 安蒜政雄「和泉校地遺跡の性格」『明治大学和泉校地遺跡発掘調査報告』
〃 堤 隆「樋状剥離を有する石器の再確認（上）」『信濃』第40巻第4号
〃 堤 隆「樋状剥離を有する石器の再確認（下）」『信濃』第41巻第5号
〃 諏訪間順「相模野台地における石器群の変遷について—層位的出土例の検討による石器群の段階的把握—」『神奈川考古』第24号
- 1989年 須藤隆司「中部槍先形尖頭器文化の成立」『長野県考古学会誌』第59・60号
〃 白石浩之『旧石器時代の石槍』東京大学出版会
〃 鷹山遺跡群調査団『鷹山遺跡群Ⅰ』長門町教育委員会
〃 長野県考古学会旧石器部会編『中部高地の尖頭器文化』長野県考古学会
〃 鈴木次郎「相模野台地における槍先形尖頭器石器群」『神奈川考古』第25号
〃 伊藤 健「樋状剥離を有する尖頭器の技術と形態」『東京考古』第7号
〃 藤野次史「日本列島における槍先形尖頭器の出現と展開」『周陽考古学研究所報』第4集
- 1990年 比田井民子「角錐状石器の地域的動態と編年的予察」『古代』第90号
〃 安蒜政雄「先土器時代人の生活空間—先土器時代のムラ—」『日本村落史講座』2 雄山閣
- 1991年 須藤隆司「ナイフ形石器の型式論(1)」『旧石器考古学』第42号
〃 小池 聰『長堀北遺跡』大和市教育委員会

NAGANO, TAKAYAMA SITES II

Mitunori Tozawa, Masao Anbil

Tool Manufacturing Sites with Obsidian Sources

During the Preceramic (late Paleolithic) age in Japan, one of the most widely used materials from which the finest quality stone tools were made was obsidian. On the main island of Honshu, the chief sources of abundant, good-quality obsidian were in the volcanic Central Highlands around Yatsugatake and Kirigamine Mountains. Preceramic age sites are dotted all over these areas. Here large quantities of obsidian tools were fashioned, then widely disseminated over the present-day Kanto and Chubu regions.

The group of sites at Takayama, Chiiagata-gun, Naqato-machi, Nagano Prefecture, contains typical examples of such Central Highland sites which had their own sources of obsidian. There, between 1984 and 1990, the Takayama Sites Research Group of the Meiji University Archaeological Institute conducted a comprehensive surface distribution survey and excavation, with the following results.

Overview of the Takayama Sites

The Takayama sites grew up along the stream called the Takayama River in a small basin (1.5 km east to west, 0.8 km north to south) encircled by mountains. In the past the center of this was a fairly broad marsh.

Between 1986 and 1987, a surface survey confirmed the presence of eleven sites and five localities with surface artifacts. Stone implements found exposed on the surface during this survey were collected and are shown by quantity in the following table.

	Knives	Spear-head	Small-cores	Gravers	Drills	Scrapers	Triangular-tools?	Blades	Flakes	Chips	Cores	Total
Site I	9	6	1	1	0	5	2	67	350	206	14	661
Site II	7	0	0	0	0	3	0	42	166	320	11	549
Site III	0	1	0	0	0	3	5	39	255	136	40	479
Site IV	0	2	0	0	0	1	5	73	336	327	24	768
Site V	2	4	0	0	0	4	2	29	128	86	11	266
Site VI	4	6	0	0	0	2	12	115	883	795	88	1905
Site VII	3	0	0	0	1	3	0	43	86	80	8	224
Site VIII	2	2	0	0	0	1	0	45	95	147	3	295
Site IX	0	3	0	0	0	3	0	56	147	118	24	351
Site X	3	14	0	0	0	5	0	45	61	72	11	211
Site XI	0	0	0	0	0	6	0	53	93	70	10	232
Locality ①	0	0	0	0	0	0	0	1	25	6	0	32
Locality ②	0	0	0	0	0	0	0	0	12	6	0	18
Locality ③	0	0	0	0	0	0	0	0	11	13	0	24
Locality ④	0	0	0	0	0	0	0	6	7	2	0	15
Locality ⑤	0	0	0	0	0	0	0	3	10	10	1	24
Total	30	38	1	1	1	36	26	616	2665	2394	245	6054

On the mountainside north of the Takayama sites there is thought to be an obsidian deposit (exposed type), but this has become covered in soil and has not yet been found. However, in and around Sites III, IV, V,

VI, and VII, located at the base of this slope, lie innumerable obsidian fragments that have broken loose from this deposit. In addition, the layer of clay beneath the bed of the Takayama River contains many large chunks of fine, tool-quality obsidian still in its natural, unworked state. It was under such conditions that tool-manufacturing sites like those at Takayama arose near these natural deposits at various times during the Preceramic age.

Excavation of Tool-Manufacturing Sites

In 1984 we excavated Location M at Takayama Site I, and again in 1990 we excavated Location S of the same site. These are adjacent spots separated by no more than 100 meters. At Location M the abundant stone tool industry clearly revealed it to have been a large-scale bladed-tool manufacturing site. Materials recovered include 2 knife blades, 1 scraper, 1 graver, 336 blades, 2422 flakes, 3399 chips, and 107 cores.

At Location S, by contrast, a wealth of materials related to the production of spearhead-type points was unearthed. These included 235 points, 44 knife blades, 11 end scrapers, 18 scrapers, 4 graters, 5 drills, 4,670 flakes, 684 cores, 1,569 chunks of unworked obsidian, and 10,162 chips.

As shown, Location M specialized in the manufacture of blades such as those for knives and Location S in points. M is a slightly earlier site. In addition, their methods of manufacture were somewhat different, with Location M producing roughly finished tools which were then distributed to many locations, while Location S completed all stages of manufacture and sent out finished tools.

Importance of Sites with Obsidian Sources

For at least 20,000 years during Japan's Preceramic age, both unworked obsidian and obsidian tools originating in Central Highland sites like Takayama, which had their own obsidian sources, are known to have been transported to places in the Kanto region and elsewhere over 200 kilometers away. From this we can conjecture not only routes of distribution among source sites and distant sites but also a type of distribution system among the Preceramic-age groups involved. Clarifying this system will undoubtedly contribute to our understanding of the structure of Preceramic age society.

Up to now research has focussed on data from sites that were recipients of obsidian. Hereafter it will be important to study sites which did the supplying, the place of origin of obsidian. We must explain the whole process from the mining of raw material, its subsequent on-the-spot processing into partly or wholly finished tools, the distribution of these to other locales, and their use in daily life.

Thus at the Takayama sites we are pursuing a thorough analysis of stone-tool manufacturing techniques and have had a certain amount of success at elucidating these for sites of this type. In addition to the present report, details of this research are also presented in the previously issued *Nagano, Takayama Sites I*.

(Translated by Takeshi Ueki)

鷹山遺跡群 II

執筆分担

第Ⅰ章	安蒜政雄
第Ⅱ章	萩谷千明・高倉 純
第Ⅲ章	氏家敏之・島田和高
第Ⅳ章 1	小菅将夫
〃 2	氏家敏之
〃 3	矢島国雄
〃 4	安蒜政雄
〃 5	戸沢充則

編集担当

戸沢充則・安蒜政雄

報告書制作協力

矢島国雄 氏家敏之 萩谷千明 佐藤 啓 相川陽子
田中 総 太田賢一 小口達志 諸星良一 折茂克哉
島田和高 杉原敏之 高倉 純 浜野 秀 秋山栄子
浅沼仁子 植竹君江 上野さだ子 大竹弘子 菊池慶子
高橋弥栄子 早川美佐

1991年7月30日

発行者 長門町教育委員会

〒386-06 長野県小県郡長門町長久保455
(TEL 0268-68-2127)

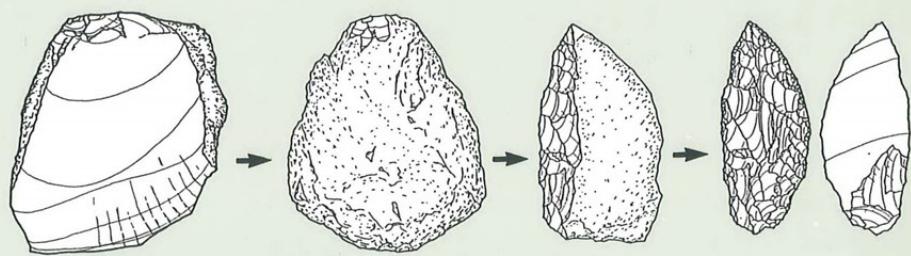
編集者 鷹山遺跡群調査団

〒101東京都千代田区神田駿河台1-1

明治大学考古学研究室内

Nagano, Takayama Sites Ⅱ

Sources of Obsidian in the Preceramic Age



The Takayama Sites Research Group